

# 鶴の木館跡

発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第150集



2006

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



う　き　た　て　あ　と  
鶴の木館跡

発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第150集



平成18年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





# 序

本書は財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した鶴の木館跡の調査成果をまとめたものです。

鶴の木館跡は山形県の南部、置賜盆地の北東部に位置する南陽市に所在します。南陽市はぶどう・さくらんぼ・ラフランスなどの果樹栽培が盛んで、県内でも有数の「果樹栽培のまち」として知られています。

遺跡周辺には昭和 55 年に国指定史跡となった稻荷森古墳や縄文時代前期の良好な集落跡が確認された押出遺跡などがあります。

この度、一般国道 113 号線赤湯バイパス建設工事に伴い、工事に先立って鶴の木館跡の発掘調査を実施しました。調査では古代の建物跡や溝・土壙、中世から近世にかけての屋敷跡や堀跡を検出しました。また、須恵器や土師器、陶磁器類が出土しました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産と言えます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成 18 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤 敏彦

本書は、一般国道 113 号赤湯バイパス建設事業に係る「鵜の木館跡」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物、調査記録類は報告書作成後、山形県教育委員会に移管する。

## 調査要項

遺跡名	鵜の木館跡
遺跡番号	山形県中世城館遺跡調査報告書 213-033
所在地	山形県南陽市大字鍋田字鵜之木ほか
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
理事長	佐藤 敏彦
受託期間	平成 16 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日
現地調査	平成 16 年 5 月 10 日～平成 16 年 11 月 20 日
調査担当者	調査第三課長 渋谷 孝雄 主任調査研究員 氏家 信行（国土交通省関連事業担当） 主任調査研究員 渡辺 淳一 主任調査研究員 黒沼 昭夫 主任調査研究員 石井 浩幸（調査主任） 主任調査研究員 鈴木 広偉 調査研究員 齋藤 健 調査員 渋谷 純子
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室
調査協力	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所 山形県教育庁埋蔵文化財課 南陽市教育委員会

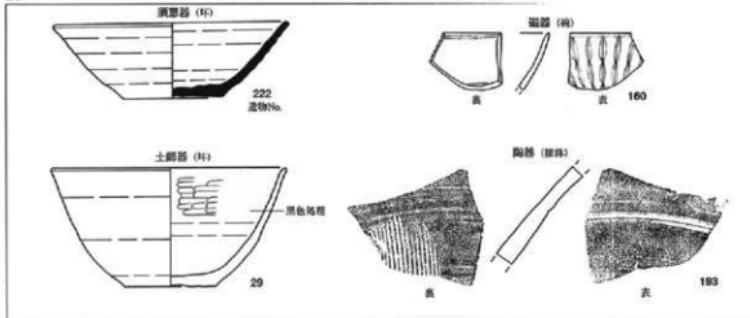
## 凡　例

- 本書の作成は石井浩幸・鈴木広偉が当たり、本文執筆はI-3を鈴木広偉が担当しその他の石井浩幸が担当した。
- 遺構図に付す座標値は平面直角座標系第X系（日本測地成果2000）により、高さは海拔高で表す。また、方位は座標北を表す。
- 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SB …掘立柱建物	SE …井戸	SK …土壤	SP …小穴
SD …溝	SG …河川	SX …性格不明遺構	EP …遺構内ピット
EB …建物掘り方	P …土器	S …礫	W …木
RP …登録土器土製品	RW …登録木製品	RQ …登録石製品	RM …登録金属製品

- 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。
- 調査区は地点を勘案して6地点に分けている。西側の農道を挟んで北側を西区、南側を南西区、水路に囲まれた中央部分を中央北区・中央南区、水路の東側を東区、南の端の小範囲の部分を南区とする。
- 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
  - 遺構実測図は1/200 1/80 1/40 1/20の縮図他で採録し、各拡図にスケールを付した。
  - 遺物実測図・拓影図は1/2 1/3 1/4その他で採録し、其々スケールを付した。遺物図版については任意としたが、重要なものについてはスケールを入れている。なお、遺物断面を黒く塗りつぶしたものには須恵器をスクリートーンを入れたものは黒色処理をされた土器を表している。
- 墨書き土器は解説した文字を「」で示している。
- 本文中の遺物番号は遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通の番号とした。写真図版中遺物番号のないものは出土地点を示す。

例



- (5) 土器の拓影の内、表裏を表したものについては、表面→裏面→断面形として図を作成した。
- (6) 遺物観察表中の( )内数値は、実物の計測値、図上復元による推定値、または残存値を表している。
- (7) 遺構覆土の色調記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

7 発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。(順不同敬称略)

川崎利夫 北畠教爾 伊藤清郎 佐々木浩一 北野博司 須崎寛二 吉野一郎  
菊地政信 竹田純子 坂本 彰

8 委託業務は下記のとおりである。

基準点測量委託業務	株式会社 ケンコン
遺構写真解析・測量	株式会社 セピアス
地形・遺構撮影業務	日本特殊撮影株式会社
遺構遺物図版編集委託業務	株式会社 セピアス
木製品保存処理委託業務	株式会社 吉田生物研究所
理化学分析委託業務	株式会社 パリノ・サーベイ

## 目 次

I	調査の経緯	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経緯	2
II	遺跡の概観	5
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	7
3	調査の方法	12
4	基本土層	14
5	遺構遺物の分布	17
III	検出した遺構と遺物	29
1	掘立柱建物跡・柱列跡	29
2	柱列跡	38
3	土 壤	75
4	井 戸 跡	78
5	堀 跡	79
6	溝 跡	80
7	遺構外の出土遺物	90
IV	自然科学分析	159
1	試 料	159
2	分析方法	160
3	結 果	163
4	考 察	174
5	鶴の木館跡出土木製品の樹種調査	183
V	ま と め	186
1	古墳時代の遺構と遺物について	186
2	平安時代の遺構と遺物について	188
3	中世から近世にかけての建物跡について	195
4	鶴の木館と内城館の復元	198
	報告書抄録	卷末

# 表

第 1 表 調査工程表	3	第 14 表 磐・石製品観察表	157
第 2 表 周辺の遺跡一覧	9	第 15 表 放射性炭素年代測定結果	164
第 3 表 築の木船跡遺構別遺物出土数 (1)	27	第 16 表 年代校正結果	164
第 4 表 築の木船跡遺構別出土数 (2)	28	第 17 表 環藻分析結果 (1)	166
第 5 表 築の木船跡検出の建物跡一覧	40	第 18 表 環藻分析結果 (2)	167
第 6 表 槽跡出土の遺物总数	88	第 19 表 花粉分析結果	169
第 7 表 土器・陶磁器・土製品観察表 (1)	151	第 20 表 植物珪酸体分析結果	171
第 8 表 土器・陶磁器・土製品観察表 (2)	152	第 21 表 種実分析・微細物分析結果	171
第 9 表 土器・陶磁器・土製品観察表 (3)	153	第 22 表 植種同定結果	172
第 10 表 土器・陶磁器・土製品観察表 (4)	154	第 23 表 土壤理化分析結果	173
第 11 表 土器・陶磁器・土製品観察表 (5)	155	第 24 表 リン酸・カルシウム・腐植分析結果	173
第 12 表 土器・陶磁器・土製品観察表 (6)	156	第 25 表 邑邑等にみる中世後期の村々	203
第 13 表 土器・陶磁器・土製品観察表 (7)	157		

# 図版

第 1 図 国道 113 号赤湯バイパス位置図	1	第 24 図 S B 900 建物跡	48
第 2 図 赤湯周辺の中世～近世鉢跡分布図	4	第 25 図 S B 940 建物跡	49
第 3 図 周辺の地形・地質	6	第 26 図 S B 1450・S A 1455 建物跡 (1)	50
第 4 図 周辺の遺跡	8	第 27 図 S B 1450・S A 1455 建物跡 (2)	51
第 5 図 築の木船跡周辺遺跡位置図	11	第 28 図 S B 1460 建物跡	52
第 6 図 築の木船跡調査区位置図	13	第 29 図 S B 980 建物跡 (1)	53
第 7 図 基本土層	16	第 30 図 S B 980 建物跡 (2)	54
第 8 図 遺構全体図	18	第 31 図 S B 960 建物跡	55
第 9 図 遺構平面図 (分割 1)	19	第 32 図 S B 1470 建物跡 (1)	56
第 10 図 遺構平面図 (分割 2)	20	第 33 図 S B 1470 建物跡 (2)	57
第 11 図 遺構平面図 (分割 3)	21	第 34 図 S B 1480 建物跡	58
第 12 図 遺構平面図 (分割 4)	22	第 35 図 S B 1488 建物跡	59
第 13 図 遺構平面図 (分割 5)	23	第 36 図 S B 1500 建物跡 (1)	60
第 14 図 遺構平面図 (分割 6)	24	第 37 図 S B 1500 建物跡 (2)	61
第 15 図 遺物構成グラフ	25	第 38 図 S B 1505 建物跡	62
第 16 図 包含層内グリッド別遺物出土数分布図	26	第 39 図 S B 1515 建物跡 (1)	63
第 17 図 S B 224 建物跡 (1)	41	第 40 図 S B 1515 建物跡 (2)	64
第 18 図 S B 224 建物跡 (2)	42	第 41 図 S B 1540 建物跡	65
第 19 図 S B 820 建物跡 (1)	43	第 42 図 S B 1600 建物跡	66
第 20 図 S B 820 建物跡 (2)	44	第 43 図 S B 1601・S B 1603 建物跡 (1)	67
第 21 図 S B 840 建物跡 (1)	45	第 44 図 S B 1602 建物跡	68
第 22 図 S B 840 建物跡 (2)	46	第 45 図 西区建物配置図	69
第 23 図 S B 860 建物跡	47	第 46 図 西区建物柱穴 (1)	70

第 47 図 西区建物跡柱穴 (2) .....	71	第 88 図 S D 633 (2)、S D 1046 (1) .....	121
第 48 図 西区建物跡柱穴 (3) .....	72	第 89 図 S D 1046 (2) .....	122
第 49 図 西区建物跡柱穴 (4) .....	73	第 90 図 S D 1046 (3) .....	123
第 50 図 西区建物跡柱穴 (5) .....	74	第 91 図 S D 1175 (1) .....	124
第 51 図 S D 168 溝跡遺物分布図 .....	82	第 92 図 S D 1175 (2) .....	125
第 52 図 S D 633 溝跡遺物分布図 .....	83	第 93 図 S D 1175 (3)、S D 82・86・177 .....	126
第 53 図 S D 1046 溝跡遺物分布図 .....	86	第 94 図 S D 350・353・373 .....	127
第 54 図 S D 1175 溝跡遺物分布図 .....	87	第 95 図 S D 729・880 .....	128
第 55 図 溝跡出土の遺物総数 .....	88	第 96 図 S D 880 .....	129
第 56 図 溝跡出土土器の構成比率 .....	88	第 97 図 S D 929・930 .....	130
第 57 図 S D 1046・1175 溝跡出土埋の計測グラフ .....	89	第 98 図 S D 955・972・1033・1067 .....	131
第 58 図 土壇 (1) .....	91	第 99 図 S D 1090・1358・1425・1559、S X 958 (1) .....	132
第 59 図 土壇 (2) .....	92		132
第 60 図 土壇 (3) .....	93	第 100 図 S X 958 (2)、S X 1032、S K 174・230・235・	
第 61 図 井戸跡 (1) .....	94	244 .....	133
第 62 図 井戸跡 (2) .....	95	第 101 図 S K 256・501・875・937・1091・1134、S P	
第 63 図 S D 880 番跡 (1) .....	96	709・1267 .....	134
第 64 図 S D 880 番跡 (2) .....	97	第 102 図 S E 1047・1556、包含層・グリッド内 (1) .....	135
第 65 図 S D 880 番跡断面図 .....	98	103 図 包含層・グリッド内 (2) .....	136
第 66 図 S D 86 番跡 .....	99	第 104 図 包含層・グリッド内 (3)、中央北区包含層 (1)	
第 67 図 溝跡 (1) .....	100		137
第 68 図 溝跡 (2) .....	101	第 105 図 中央北区包含層 (2) .....	138
第 69 図 溝跡 (3) .....	102	第 106 国 中央北区包含層 (3) .....	139
第 70 国 溝跡 (4) .....	103	第 107 国 中央北包含層 (4)、西区包含層 .....	140
第 71 国 溝跡 (5) .....	104	第 108 国 東区・南区包含層 .....	141
第 72 国 溝跡 (6) .....	105	第 109 国 石器・石製品 (1) .....	142
第 73 国 溝跡 (7) .....	106	第 110 国 石器・石製品 (2) .....	143
第 74 国 溝跡 (8) .....	107	第 111 国 石器・石製品 (3) .....	144
第 75 国 溝跡 (9) .....	108	第 112 国 石器・石製品 (4) .....	145
第 76 国 溝跡 (10) .....	109	第 113 国 石器・石製品 (5) .....	146
第 77 国 溝跡 (11) .....	110	第 114 国 石器・石製品 (6) .....	147
第 78 国 溝跡 (12) .....	111	第 115 国 石器・石製品 (7) .....	148
第 79 国 溝跡断面図 (1) .....	112	第 116 国 石器・石製品 (8) .....	149
第 80 国 溝跡断面図 (2) .....	113	第 117 国 石器・石製品 (9) .....	150
第 81 国 溝跡断面図 (3) .....	114	第 118 国 主要珪藻化石群集の層位分布 .....	165
第 82 国 溝跡断面図 (4) .....	115	第 119 国 花粉化石群集の層位分布 .....	168
第 83 国 S D 168 (1) .....	116	第 120 国 植物珪藻体群集と珪化組織片の産状 .....	170
第 84 国 S D 168 (2) .....	117	第 121 国 硅藻化石 .....	178
第 85 国 S D 168 (3) .....	118	第 122 国 花粉化石 .....	179
第 86 国 S D 168 (4) .....	119	第 123 国 植物珪酸体 .....	180
第 87 国 S D 633 (1) .....	120	第 124 国 木材・炭化物 (1) .....	181

第 125 図 木材・炭化物 (2) .....	182	第 132 図 平安時代の遺構配置 .....	194
第 126 図 木材顕微鏡写真 (1) .....	184	第 133 図 中世～近世の陶器・土器 .....	196
第 127 図 木材顕微鏡写真 (2) .....	185	第 134 図 中世～近世の建物跡の分類 .....	197
第 128 図 古墳時代の出土遺物 (土師器) .....	187	第 135 図 中世～近世の遺構配置 .....	198
第 129 図 平安時代の出土遺物 1 (須恵器) .....	189	第 135 図 黒井堀船図 (鍋田周辺) .....	199
第 130 図 平安時代の出土遺物 2 (土師器) .....	190	第 136 図 字切図 (内城・萬の木・中丸・前田) .....	200
第 131 図 古代の建物跡の分類 .....	193	第 137 図 字切図による溝跡復元図 .....	202

## 写 真 図 版

写真図版 1 航空写真 (昭和 37 年)

写真図版 2 調査区全景 1

写真図版 3 調査区全景 2

写真図版 4 調査状況

写真図版 5 SB1500 周辺全景

写真図版 6 SB1505 周辺全景

写真図版 7 SB840 1600 周辺全景

写真図版 8 SB820 周辺全景

写真図版 9 SB1540 周辺全景

写真図版 10 SB224 建物跡

写真図版 11 SB820 建物跡

写真図版 12 SB820 建物跡

写真図版 13 SB840 建物跡

写真図版 14 SB860 900 建物跡

写真図版 15 SB980 建物跡

写真図版 16 SB1450 建物跡

写真図版 17 SB1480 建物跡

写真図版 18 SB1505 建物跡

写真図版 19 SB1515 建物跡

写真図版 20 SB1500 建物跡

写真図版 21 SB1500 建物柱穴

写真図版 22 SB1540 1600 建物跡

写真図版 23 SD168 353 他溝跡

写真図版 24 SD633 1046 溝跡

写真図版 25 SD972 1175 溝跡

写真図版 26 SD880 堀跡

写真図版 27 SD86 堀跡

写真図版 28 東区調査状況

写真図版 29 西区調査状況

写真図版 30 土壌等完掘状況

写真図版 31 SE1556 井戸跡

写真図版 32 地蔵碑・黒井堰絵図

写真図版 33 SD168 溝跡出土の遺物

写真図版 34 SD168 溝跡出土の遺物

写真図版 35 SD168 633 溝跡出土の遺物

写真図版 36 SD633 溝跡出土の遺物

写真図版 37 SD1046 溝跡出土の遺物

写真図版 38 SD1046 溝跡出土の遺物

写真図版 39 SD1046 1175 溝跡出土の遺物

写真図版 40 SD1175 溝跡出土の遺物

写真図版 41 SD82 86 177 溝跡出土の遺物

写真図版 42 SD635 729 溝跡 SD880 堀跡出土の遺物

写真図版 43 SD929 溝跡 SD880 堀跡出土の遺物

写真図版 44 SD929 930 955 溝跡出土の遺物

写真図版 45 SD1087 1090 溝跡 SX958 出土の遺物

写真図版 46 SX958 出土の遺物

写真図版 47 SE1047・1556 墓出土の遺物

写真図版 48 グリッド出土の遺物

写真図版 49 中央北区出土の遺物

写真図版 50 中央北区出土の遺物

写真図版 51 中央北 中央南西 南区出土の遺物

写真図版 52 溝跡出土の石製品 1

写真図版 53 溝跡出土の石製品 2

写真図版 54 曲物 鋼鉄筒連遺物

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯

鶴の木館跡の周辺は「内城」など館関連地名が存在することもあり、また城跡らしいものが近年まで存在していたことで、大きな屋敷があったことは知られていた。昭和63年以降に実施された県内の中世城館遺跡分布調査によって、地籍図などの調査からその存在が明らかにされ、報告書において鶴の木館・内城館として登録された。

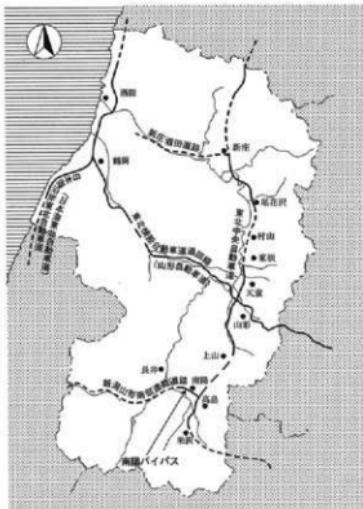
平成6年に高畠から南陽市街地を通りている国道113号線のバイパス建設の計画が立ち上がり、その予定路線内の埋蔵文化財の所在確認と分布調査が必要となった。県教育委員会では平成7~8年に計画路線内に沿って埋蔵文化財の有無を調べる分布調査を行った。その結果、中世城館跡として登録されている鶴の木館や内城館を始め、路線内と周辺に9遺跡が存在することが明らかになった。その後、平成13年に東畑A遺跡の試掘調査が行われ、翌14年度には発掘調査が、平成15年には鶴の木館跡、百刈田遺跡、西中上遺跡、大塚遺跡の試掘調査が行われた。試掘の成果をもとに県教育委員会と国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所との協議の結果、これらの遺跡については(財)山形県埋蔵文化財センターが委託を受けて記録保存のための緊急発掘調査を行うことになった。

以上のような経緯をもって、財團法人山形県埋蔵文化財センターでは国土交通省東北地方整

南陽バイパスの位置

試掘調査

記録による保存



第1図 国道113号赤湯バイパス位置図

備局山形河川国道事務所との間で平成16年4月1日付けで緊急発掘調査についての委託契約を締結した。

橋の木館跡の範囲は、東西100m、南北200mにおよび、果樹地や畑地・宅地の範囲に広がり、このうち発掘調査はバイパス建設にかかる区域の約9,500m<sup>2</sup>にわたって実施することとなった。

## 2 調査の経緯

### 現地調査

橋の木館跡の調査は、国土交通省山形河川国道事務所や南陽市等関係機関との打ち合せの後、5月10日から開始した。路線予定地内の調査区の設定後、11日から表土削除を始め、表土削除作業は、6月上旬まで行われた。途中、西側にも遺構が伸びていることがわかり、拡張することになった。西区とし広げた区域も含めると、約9,500m<sup>2</sup>の範囲を表土除去した。

5月下旬から中央区の北側と西区の遺構検出及び精査を開始する。6月初めには基準点の設置（委託業務）をして、5mの方形単位のグリッドを設定する。

6月中旬、西区の調査が終了し、中央区の調査に重点を移す。調査区の南側は削平や開墾による土地の変更が著しく遺構の破壊や消滅している区域が存在した。梅雨の時期に入ると調査区内が冠水する状況が続いた。常時排水するようポンプを設置しての調査が続いた。

### 猛暑と冠水

7月になると猛暑が続いたが、溝跡や土壤等の掘り下げを精力的に進め、中央区北側の遺構精査はほぼ終了した。

8月18日から残土置場として残っていた中央部の道路部分の表土除去を行い、8月22日から中央区北側の残っている遺構精査と並行して、中央区南側の遺構検出を始める。

8月から9月にかけては台風や長雨の影響を受けて冠水することもたびたびあり、排水ポンプ等による排水作業を随時行なながら調査を展開した。また、館の堀跡の掘り下げを行った。

9月上旬からは中央区南側の面削りと遺構確認を行い、北側から続く溝跡とともに多数の柱穴を検出した。複数の建物が存在することがわかり、包含層を徐々に掘り下げ、建物跡のプラン把握に努めた。

10月から中央区南側の遺構精査と並行して東区の精査も入り、南に続くと思われる堀跡の検出と遺構精査を実施した。中央区南側で検出した平安時代の溝跡から多くの遺物が出土するとともに複数の建物跡の配置が確かめられた。古代から中世の遺構が重複しているため、切り合いや遺物の出土位置を慎重に記録していく。

### 調査説明会

10月23日 調査説明会を開催し、約100名の参加者があった。10月後半からは悪天候が続いた。調査が遅れ気味になった。

10月25日 八戸市教育委員会の佐々木浩一さんに来訪していただき、建物遺構の調査方法について御指導をいただいた。

11月10日 委託業者による航空撮影・測量を行った。

11月中旬には遺跡全体の平面図作成と写真撮影を実施し、11月20日に発掘器材の撤収を行い、現地における調査の全工程を終了した。

現地調査は5月10日から11月20日までの延べ132日間、その後に記録・出土遺物等の整理を行って平成17年度に報告書を刊行するものである。

第1表 調査工程表

月 作業内容	5月					6月					7月					8月				
	1週	2週	3週	4週	5週	1週	2週	3週	4週	5週	1週	2週	3週	4週	5週	1週	2週	3週	4週	5週
表土除去																				
グリッド設定																				
面整理・遺構検出																				
遺構精査																				
記録・撮影																				
航空撮影																				
調査説明会																				
その他																				
月 作業内容	9月					10月					11月									
	1週	2週	3週	4週	5週	1週	2週	3週	4週	5週	1週	2週	3週	4週	5週					
表土除去																				
グリッド設定																				
面整理・遺構検出																				
遺構精査																				
記録・撮影																				
航空撮影																				
調査説明会																				
その他																				



平板による記録作業



遺構検出作業

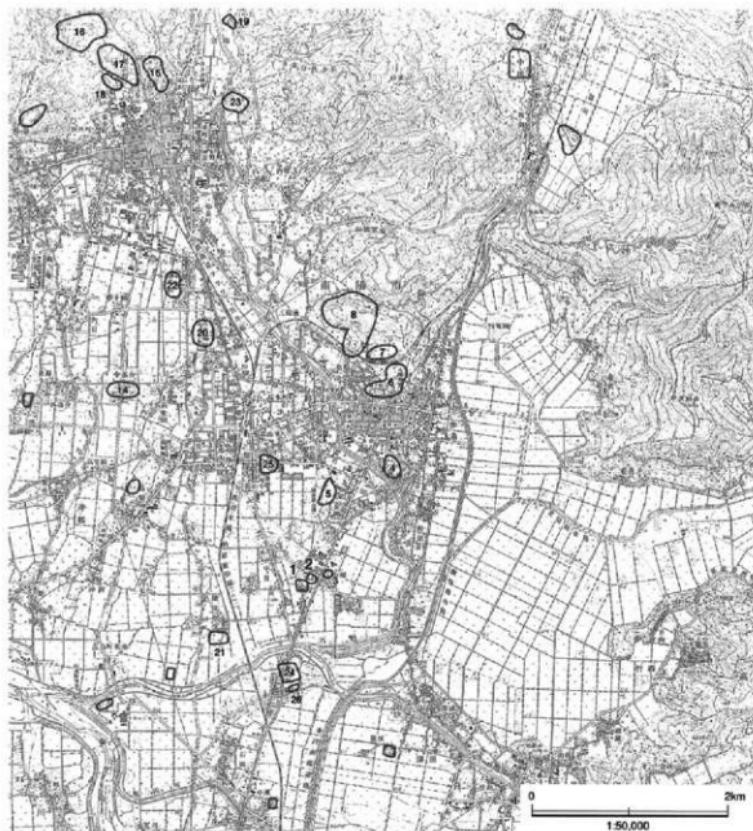


SD880 堀跡の調査



調査区の排水作業

I 調査の経緯



No.	遺跡番号	名	所在地	占地状況	遺跡の状況	No.	遺跡番号	名	所在地	占地状況	遺跡の状況
1	213-033	橋の本館	南陽市綿田	平地		14	213-020	中落合橋	南陽市中落合	平地	曲輪、水堀、道路
2	213-034	内城館	南陽市綿田	平地		15	213-021	藍島山古墳	南陽市宮内	山頂	曲輪
3	213-035	城の前	南陽市綿田	平地		16	213-022	北前	南陽市宮内	山頂	曲輪、虎口跡、河川、道路
4	213-036	前軍館	南陽市門澤	山腹	曲輪、土塁、虎口、道路	17	213-023	宮内南前	南陽市宮内	平地	曲輪、土塁、空堀、虎口、土壁、道路
5	213-037	莫開館	南陽市長岡	山腹	曲輪	18	213-024	宮内南前	南陽市宮内	山腹	
6	213-038	上野山前	南陽市赤井	山腹、城壁、谷	曲輪	19	213-025	宇越	南陽市金山	平地	
7	213-039	中野山前	南陽市二色根	山腹		20	213-026	若狭村前	南陽市若狭村	平地	水堀
8	213-040	二色根	南陽市二色根	山腹及びその周辺	高、土塁、空堀、谷口、虎口、石垣、窓、竪穴、骨室、舟戸	21	213-027	鏡ヶ木前	南陽市綿田	平地	
9	213-041	小武藏	南陽市小丸	山腹附近	曲輪、土塁、木塁、空堀、虎口、地形、遺跡	22	213-028	鏡ヶ木前	南陽市蘆生町	平地	曲輪、土塁、木塁
10	213-042	小白舟前	南陽市小丸	山腹	曲輪、土塁、空堀、虎口、地形、遺跡	23	213-029	若山前	南陽市宮内	山頂	曲輪、土塁、木塁、虎口、地形、土塁、東側、道路
11	213-043	安延	南陽市小丸	山腹及びその周辺	曲輪、土塁、空堀、虎口、地形、遺跡	24	213-030	大曾根	南陽市大曾根	平地	水堀、横台
12	213-044	新羅	南陽市小丸	山腹	曲輪、土塁、空堀、地形	25	213-031	大の日出	南陽市雲山	平地	遺跡、土塁、木塁、虎口
13	213-045	葛屋山物見	南陽市萩原	山腹	曲輪、道路	26	213-032	御前	南陽市大曾根	平地	水堀、稻穀

第2図 赤湯周辺の中世～近世城跡分布図  
(山形県教育委員会 1999『山形県中世城館分布調査報告書 第1集』より作図)

## II 遺跡の概観

### 1 地理的環境

鶴の木館跡は山形県置賜地方の北部、南陽市に位置し、その中心部赤湯より1.5km南の鍋田地区に所在している。周囲は山々に囲まれ、東に奥羽山脈、南西に飯豊連邦、北西に朝日山地、南に吾妻連邦などの峰々がめぐる。置賜地方の気候は内陸性気候を示し、冬は寒冷で積雪が多く、山間部では数mに及ぶ事も多い。春は雪解け水により河川が増水するが、治水工事が進んでいる現在、被害はほとんどない。梅雨時は太平洋側と比較すれば好天の日が多く、降水量もあり多くない。夏は高温多湿であるが雷雲の発生も多い。秋は盆地霧が多く発生し、時として視界がたいへん悪くなり、昼頃まで晴れないときもある。

置賜盆地の北半は、北から吉野川・織機川、東から屋代川、南は米沢方面から最上川が流れ、葉脈状に盆地に入り、長井方面に北進している。これらの河川により盆地内は周辺の山地から運ばれた堆積物に広く厚く覆われ、なだらかな沖積平野及び扇状地となっている。

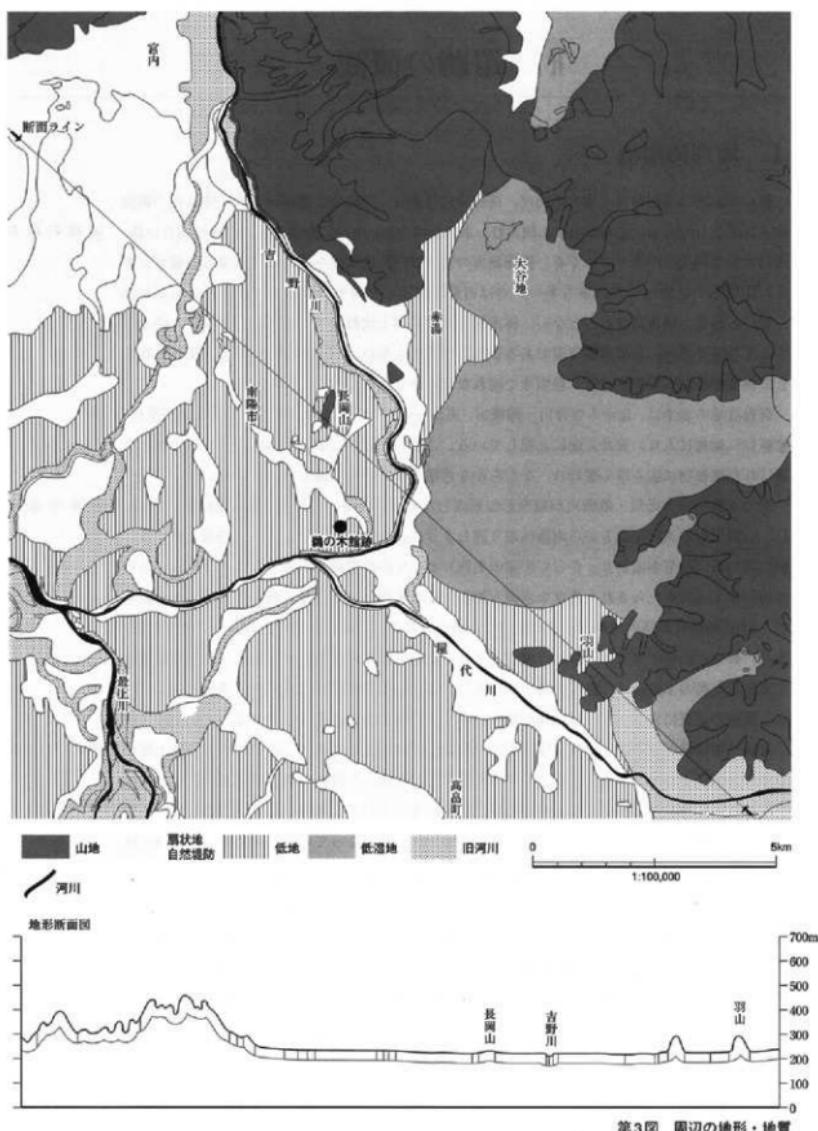
鶴の木館跡は吉野川・織機川が複合して形成した宮内扇状地の外縁部（標高214m）に位置し、吉野川が本遺跡を東方から南西へ取り囲むように流れている。付近は、大谷地と呼ばれる泥炭質の湿地帯が広がり、かつての湖の名残りとしての白竜湖がある。この地域は、これらの河川によってもたらされた豊富な水源と肥沃な土壤を利用した稻作・畑作・果樹栽培が盛んで、昭和30年代以降の大規模な排水事業と土地改良によって穀倉地帯へと変わってきている。また、周辺の山麓山腹には、ぶどう棚がめぐり、全国有数の産地となっている。今回発掘調査を実施した鶴の木館跡は、自然堤防上に位置し、ごくわずかに南に傾斜した平坦面となっている。遺跡の北東に自然堤防の微高地が延びており、長岡山丘陵に連なっている。

遺跡一帯は低湿地への扇状地堆積物が厚く堆積しているため、褐色、灰色のシルト質土壌が広がり下層はグライ化が見られる。その下には黒泥の硬化した腐植質黒色粘土層が広がっており、腐植物の含量も多いことから水稲の根部障害になっている。鶴の木館跡の遺構もこの黒泥の粘土層を掘り込んでいるものがある。この遺跡の堆積土となっている腐植質黒色粘土層の放射性炭素年代測定を実施したところ年代値がBP3200を計測し、縄文時代晩期を示すところ（V自然科学分析から）遺跡が立地する自然堤防が固定化し、植生が被覆するようになったのは縄文時代晩期頃であるといえる。腐植質黒色粘土層は未分解のヨシ層などを由来とする有機物とススキなどの植物遺体が分解し腐植化することによって生じた有機物が混在しているという分析結果から、自然堤防が固定化した後、比較的乾燥した状態であったが、ある時期に地下水の上昇等が起こってヨシ属が生育するような湿润な状態へと変化したことが推測される。

遺跡の所在

遺跡の立地

周辺の土壤



第3図 周辺の地形・地質  
(阿子島功也1983をもとに作成・簡略化)

## 2 歴史的環境

山形県遺跡地図（山形県教育委員会2004）によれば、南陽市には本遺跡を含めて260箇所ほどの遺跡が登録されている。赤湯バイパスに係わる遺跡分布調査でも新規登録の遺跡があり、さらに増加していくとみられる。鶴の木館跡周辺の遺跡に関して時代順に概観する。

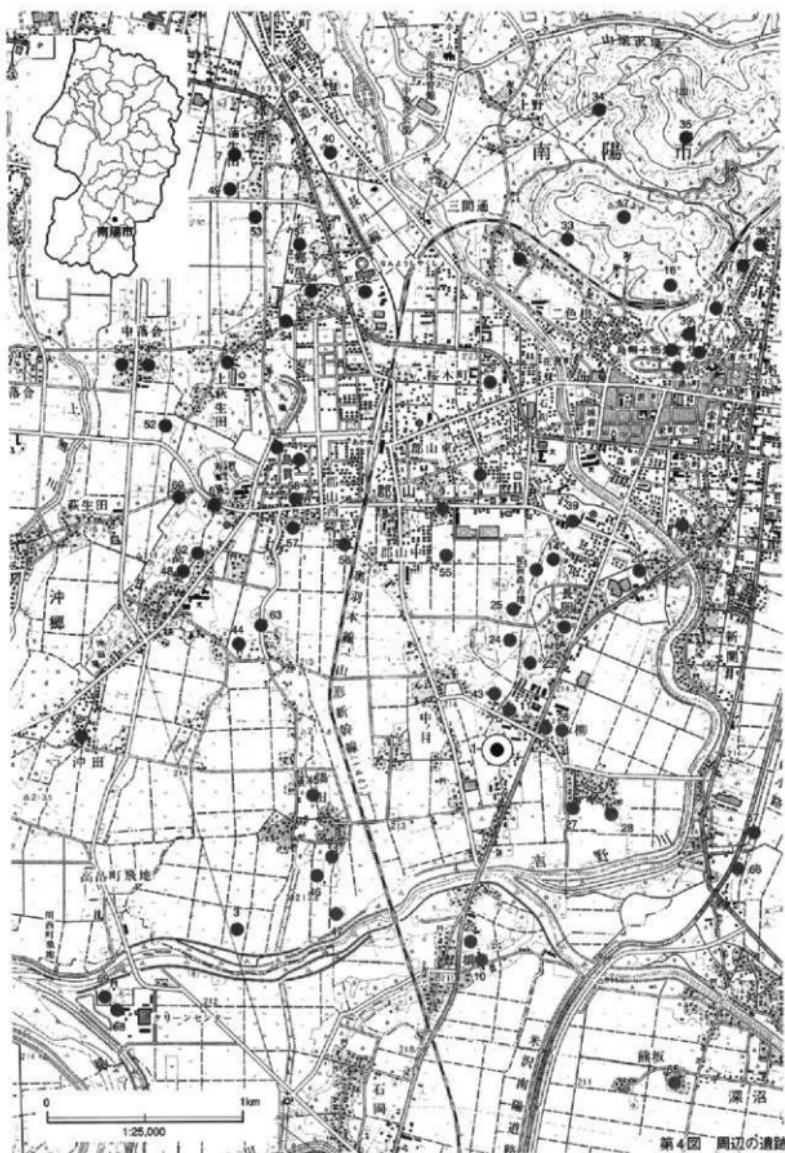
旧石器時代の遺跡としては、長岡山遺跡から石刃が採集されており、長岡丘陵部分に旧石器時代の遺跡が存在するとみられる。

縄文時代の遺跡は山間部から谷地田周辺まで広く分布する。縄文時代早期の遺跡としては漆山地区の大野平遺跡があげられる。沈線文系の完形土器の出土をはじめ、前期初頭までの遺物が多く出土した。取上坂斜面に位置する月ノ木B遺跡からは、早期の長い期間に活動の拠点だったとみえ、早期から前期にかけての遺物の出土がみられた。前期の遺跡としては、本遺跡から800m東に位置する押出遺跡がある。昭和46年の沼尻排水路建設工事で発見され、昭和60～63年にかけて国道13号線南陽バイパス建設工事に先立って、山形県教育委員会によって発掘調査が実施された。押出遺跡は当時の湖水面に近い低湿地性の遺跡で、土器や木製品などが深さ2mの大谷地の泥炭層から良好な状態で出土した。遺構としては「打ち込み式住居」が35棟も検出された。中期の遺跡は市内各所で発見されている。鍋田地区の百刈田遺跡からは、大木9式から10式期の複式炉を持つ竪穴式住居がまとまって検出されたり、鶴の木館跡の北側、長岡山周辺からも中期の遺物が採集されていることから、丘陵続きや微高地に縄文時代の遺跡が連なっている可能性がある。後期・晩期に入ると遺跡数が減少し、扇状地の河川に沿った自然堤防上や吉野川上流域にわずかに分布を確認している。特に岩谷堂遺跡からは、これまで多くの土器や石器が採集されており、一帯に大きな集落の存在が予想される。

弥生時代の遺跡は沢田遺跡・萩生田遺跡・掛在家遺跡・高堰遺跡・百刈田遺跡・庚塙遺跡などがあり、吉野川や織機川による宮内扇状地に出現する。庚塙遺跡からは竪穴住居跡、萩生田遺跡からは石包丁の出土、百刈田遺跡からは弥生土器がまとまって出土しており、自然堤防をムラの拠点として低湿地での稻作經營をおこなったことが窺える。

古墳時代の遺跡についても丘陵や自然堤防上に数多く存在する。南陽市は古墳が多く分布することが認められ、特に赤湯地区長岡には昭和55年に国指定史跡となった稲荷森古墳がある。稲荷森古墳は昭和53年から数度にわたる測量や発掘調査が行われ、日本海北限の前方後円墳であることが分かった。全長96mを測り、高坏土器・底部穿孔壺形土器などが出土している。また、鳥帽子山公園の東には県指定の二色根古墳群が分布する。蒲生田や梨郷地区の山腹や山頂部分にも古墳群が存在する。古墳時代の集落跡としては、沢田遺跡や源訪前遺跡、百刈田遺跡などで住居跡や遺物を検出している。長岡山の南側にも古墳時代の遺跡が広がっており、鶴の木館跡でも両塗区北側の溝跡に土師器がまとまって出土した。平野部においては、まだ多くの古墳時代の遺跡が眠っているものとみられる。

奈良・平安時代の遺跡は、吉野川下流域にあたる郡山周辺の自然堤防に多く立地する。置賜郡衙が沖澤地区の郡山周辺にあったとの研究や周辺に条里制の痕跡が伺えることから古代に入ってさらに平野部の開発が進められ、計画的な村落も作られていったと考えられる。この時代の遺跡は、鶴の木館跡を含め、沢田遺跡・植木場一遺跡・西中上遺跡・中落合遺跡・庚塙遺



第4図 周辺の遺跡

第2表 間辺の遺跡一覧

番号	登録番号	遺跡名	所在地	時代	種別
1	213-033	鶴の木遺跡	南陽市 羽田字鶴の木	古墳~近世	城郭跡、集落跡
2	213-017	沖田館	沖田	中世~近世	城郭跡
3	213-018	大野屋館	鷺田	中世~近世	城郭跡
4	213-020	中落合館	中落合	中世~近世	城郭跡
5	213-026	若狭郷屋敷	若狭郷屋	中世~近世	城郭跡
6	213-027	郷内館	鷺田	中世~近世	城郭跡
7	213-028	瀬牛田館	瀬牛田	中世~近世	城郭跡
8	213-030	大橋城	大橋	中世~近世	城郭跡
9	213-031	矢野山館	那山	平安 中世	城郭跡
10	213-032	御殿跡	大橋	平安 中世	城郭跡
11	213-034	内城跡	鷺田	中世	城郭跡
12	213-035	熊の唐館	祖母	中世~近世	城郭跡
13	213-036	門陣館	門塚	中世~近世	城郭跡
14	213-037	長岡館	長岡	中世~近世	城郭跡
15	213-038	上野山館	赤湯	中世~近世	寺
16	213-039	中野山館	二色瓶	中世~近世	城郭跡
17	213-040	二色根館	二色瓶	中世	城郭跡
18	A10	島帽子山蛭塚	赤湯字島帽子山	平安	經塚
19	A11	島帽子山古墳	赤湯字島帽子山	古墳(終末期)	古墳
20	A15	太子塗	們塚字太子塗	平安	散布地
21	A16	長岡山	長岡字小生塗	旧石器~绳文(中期) 古墳	集落跡
22	A17	長岡山東	長岡字西田中、西田中南	绳文 平安	散布地
23	A18	長岡山森	長岡字南森	绳文(中期) 古墳(前・中期)	散布地
24	A19	長岡西田	長岡字西田	绳文(中期)	散布地
25	A20	細岡古墳	細岡字細村	旧石器~绳文(中期) 古墳(前期)	散布地 古墳 国史跡
26	A21	水上	祖母字水上	奈良・平安	散布地
27	A22	東田A	祖母字東田	奈良・平安、近世	集落跡
28	A23	東田B	祖母字東田	平安	散布地
29	A24	御留翁	三間通字越越	绳文(中期) 古墳(前期)・平安	散布地
30	A25	横沢	三間通字横沢	绳文(中期) 後期) 奈良	散布地
31	A26	東六角	三間通字東六角	绳文(中期) 平安	集落跡
32	A27	唐船	三間通字唐船	绳文(中期) 奈良・平安	散布地 集落跡
33	A28	二色根古墳	二色根字南京	古墳(終末期)	古墳群 県史跡
34	A32	輕沢山古墳	上野字輕沢山	古墳(終末期)	古墳群
35	A33	上野山古墳	上野字輕沢山	弥生・古墳(終末期)	散布地 古墳群
36	A6	夷平	赤湯字夷平道	绳文(晚期) 中世	散布地
37	A7	北町	赤湯字新田	绳文(前期)	散布地
38	A8	船荷舟	赤湯字深山	绳文(前期)	散布地
39	A9	上ノ山	赤湯字上ノ山	绳文	散布地
40	O-1	腰音寺	瀬牛田字腰音寺	绳文 平安	散布地
41	O-10	沢田	鳥貴字沢田。六角	弥生・古墳(中期) 奈良・平安	集落跡
42	O-11	鳥貫	鳥貴字六角	古墳 奈良・平安	集落跡
43	O-12	中の目下	中の目字下	奈良・平安	散布地
44	O-13	前小屋	瀬牛田字前小屋	绳文	散布地
45	O-14	大屋敷	瀬牛田字大屋敷	平安	散布地
46	O-15	奥内田	瀬牛田字奥内田	平安	散布地
47	O-16	宿田尻	瀬牛田字宿田尻	平安	散布地
48	O-17	高槻屋敷	高槻字将葉細敷	奈良・平安	散布地
49	O-2	幽生田南館	瀬牛田字南館	绳文 余良・平安	城郭跡
50	O-20	中落合	中落合字守西前田	奈良・平安	集落跡
51	O-21	萩生田	萩生田字白山	弥生 平安	集落跡
52	O-22	桜ノ木	萩生田字桜ノ木	奈良・平安	散布地
53	O-3	当時作	萩生田字当時作	绳文 奈良・平安	散布地
54	O-4	西田	若狭郷屋字西田	平安	散布地
55	O-6	早畠田	郡山字早畠田	奈良	散布地
56	O-7	岡々ノ上	郡山字岡々ノ上	奈良	散布地
57	O-8	沢口	郡山字沢口	奈良・平安	集落跡
58	O-9	郡山中駒	郡山字中駒	奈良・平安	散布地
59	分15-21-29	季の木	們塚字季の木	绳文 平安	包城地
60	分20-27-30	大駒	高槻字大駒	古墳 平安	散布地
61	分20-27-31	古里敷	高槻字古里敷	平安	散布地
62	分24-31-6	西中上	高槻字西中上	平安	散布地
63	平成14年度登録	百周田	鳥貴字百周田	绳文(中期) 弥生 古墳 奈良・平安	集落跡
64	平成14年度登録	中原敷	若狭郷屋字中原敷	奈良・平安	散布地
65	C-43	熊坂館	高岡町 深沼字熊坂	中世	散布地
66	C-44	舟入	深沼字舟入	绳文 平安	散布地
67	C-45	押出	深沼字押出	绳文(前期)	集落跡
68	F-1	千代田	夏茂字字千代田	奈良・平安	包城地
69	F-2	苗茂熊	夏茂字熊の内	中世	城郭跡

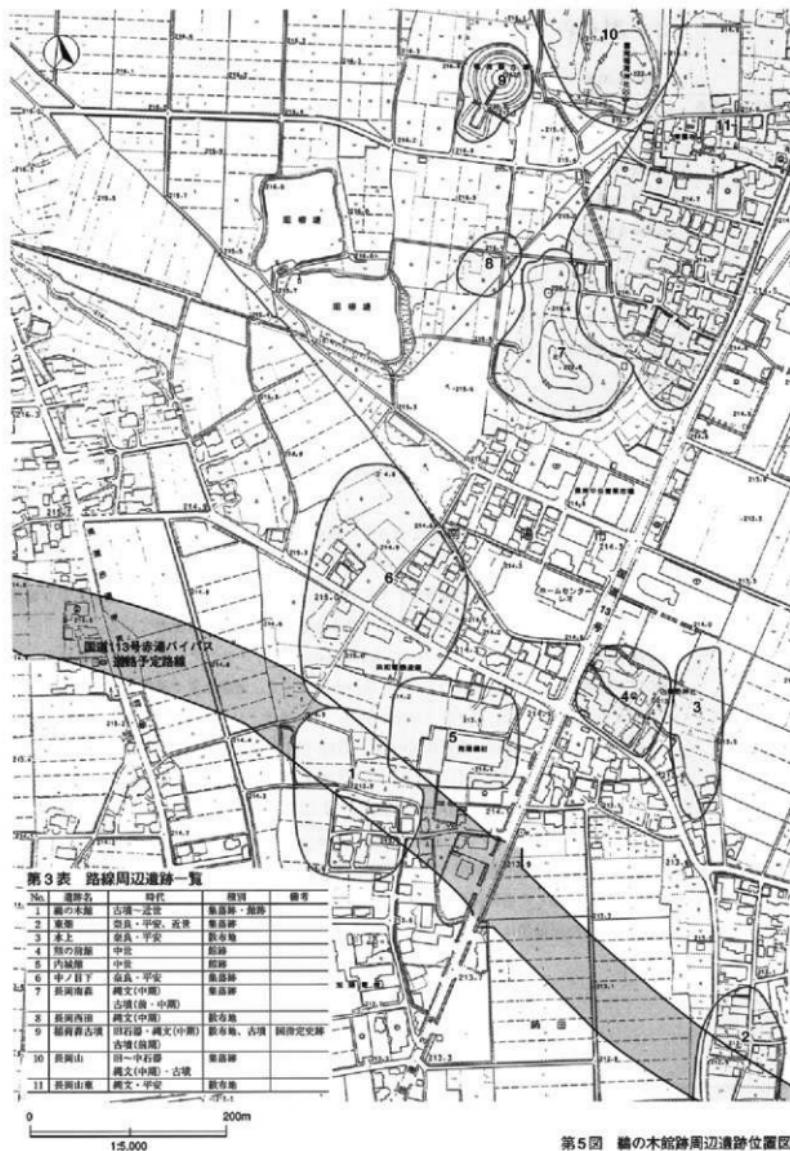
※番号は第4図に。登録番号は山形県遺跡地図 G2004 に付記

跡・檜原遺跡など多く確認されている。北側山間部には梨郷平野窯跡など須恵器の窯跡が分布し、集落等への供給地となっていた。

**中世の城館跡** 中世の遺跡としては、数多くの城館跡が特徴的である。平成10年にまとめられた「山形県中世城館跡調査報告書 第1集」では、南陽市域だけで60箇所の城館跡が登録された。鶴の木館の周辺だけでも宮崎館・熊野館・鶴塙館・大橋館・露橋館・間根館・内城館など大小様々な館跡が存在する。当センターが平成8・9年に発掘調査を実施した植木場一遺跡では、部分的ながら堀跡と土塁が検出され、遺物などから15～16世紀頃の館跡と見られている（高橋 敏1998）。宮崎館跡は米沢藩主の鷹狩りや休み所となっていたと伝えられており、そのために御殿跡とも呼ばれ、現在も字名として残っている。また、この地域は古利宮内熊野神社や板碑が集中して分布すること、経塚造営などからも、庶民信仰の高まりと宗教行事の民衆化が広く浸透していたらうことが理解できる。近世の享保年間に描かれた村絵図や黒井堰絵図などには鍋田周辺の館跡や道、水利、屋敷など様子をみることができる。

#### 参考文献

- |          |      |  |
|----------|------|--|
| 阿古島 功    | 1983 | 『五万分の一地形分類図 説明書』『赤湯・上山』 山形県            |
| 佐藤 錦雄    | 1990 | 『南陽市史』 南陽市                             |
| 佐藤 錦雄    | 1986 | 『南陽市史 考古資料編』 南陽市                       |
| 佐藤 錦雄    | 1996 | 『南陽市史 年表』 南陽市                          |
| 小野 実     | 2001 | 『設置の歴史』 郡土出版社                          |
| 長井 政太郎   | 1973 | 『新訂 山形県地誌』 中央書院                        |
| 横山 明男    | 1998 | 『山形県の歴史』 山川出版                          |
| 阿古島 功    | 1988 | 『考古学発掘調査のための微地形分類 地理 33-3』 古今書院        |
| 押切 智紀    | 2003 | 『東畑A遺跡発掘調査報告書』 山垣文セシ第116集 山形県埋蔵文化財センター |
| 山形県教育委員会 | 1999 | 『山形県中世城館跡分布調査報告書 第1集』                  |



第5図 織の木館跡周辺遺跡位置図

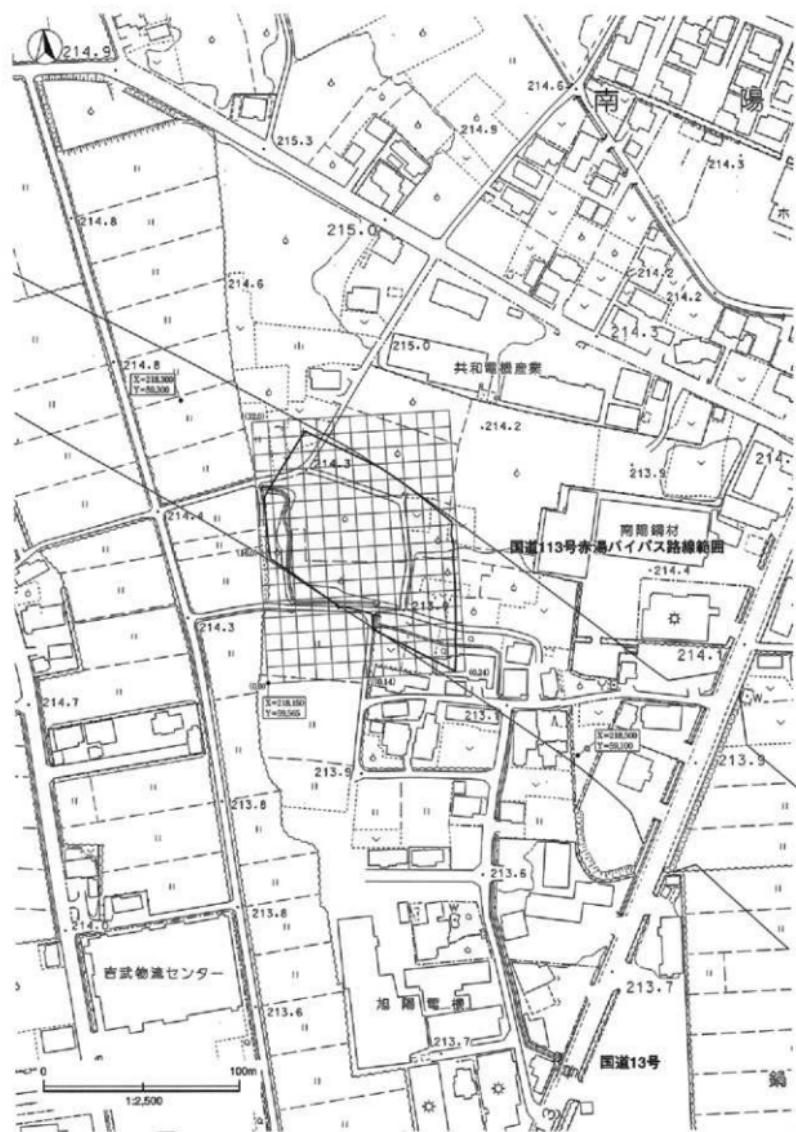
### 3 調査の方法

薦の木館跡の調査では、遺跡・遺構の明確な位置を記録するために国土座標第IV系を基準としたグリッド網を設定した。測量基準杭の設定と水準点の移動にあたっては業者委託により、国道113号赤湯地区路線測量3級基準点を視準点とし、調査区内に公共座標杭を4点を設置し本遺跡のグリッド設定の基準杭とした。この公共座標のXY軸を基準に座標計算を行い、そのデータを基に、遺跡内に5m四方のグリッド網を設定した。各グリッドはX：218.150 Y：59.565を起点に、南から北に向かって1 2 3 4～と付した算用数字と、西から東に向かって1 2 3 4～と付した算用数字の組み合わせによって表示し、2-10グリッドや15-9グリッド等と呼称した。これらの各グリッドは、遺物の出土位置表示、遺構のおおまかな位置表示を行うためのものであり、遺構の平面断面の記録化作業の基準になるものもある。水準に関しては基準点4点に一般国道113号赤湯地区路線測量の仮BMを与点とし、3級水準測量に準じて行った。

**調査区** 今回の調査区は道路建設予定地ということもあって調査範囲が東西に継長であることから調査区を南北に横切る用水路や農道の境を目安として調査区を大きく中央区・南区・東区・西区などと便宜的に区別した。これは、2章以降の本文においても調査区内におけるおよその位置関係を示す場合に使用している。

**記録方法** 遺構の掘り込みにあたっては遺構の大きさや重複関係を考慮して土層観察用ベルトを随時設定し、写真撮影や実測図等の作成を行った。土層の注記には新版標準土色帖（1997版）を使用し、一部土色計測機器による観察も行っている。遺構から出土した遺物は、遺構名や登録遺物番号を記載し、遺構外遺物はグリッド名や基本土層に準拠して取り上げている。

**デジタルカメラによる遺構測量** 記録写真撮影は調査の進歩に合わせて随時35mm判のカメラとデジタルカメラを使用、遺物の出土状態や遺構の検出状況など6×7判の中型カメラ、遺跡全景や遺構集中区域は9×12の大型カメラを併用した。フィルムはモノクロームとカラーリバーサルフィルムの2種を使用し、遺構の検出・土層断面・完掘状況の他、遺物の出土状態の撮影を適宜行った。調査の最後には、上空からの俯瞰撮影を行っている。遺構図は1/20の縮尺を基本とし、小ピットや遺物の出土状況などは1/10の縮尺で作成した。また、調査の途中からデジタルカメラを使用した写真解析（（株）セビアス）による平面・断面の記録図作成を行っている。これらの発掘調査で得られた出土品・実測図・写真等の資料は、当センターの整理基準に準拠して整理を進め、デジタル処理した遺構図面については画像校正や図面編集を行い報告書作成に活用した。デジタル化した記録類はDVDディスクに保存し、出土品は報告書作成終了後、収蔵保管している。



第6図 橋の木館跡調査区位置図

## 4 基本土層

堀の木館跡における堆積土は、調査区内においてほぼ一様である。大きく4層に分層されⅠ～Ⅳ層と表記した。土層観察は調査区境の壁面を利用し、東西に長い調査区の形状を勘案して、北東部A～A'・西部B～B'・南部C～C'・南西部D～D'の4ヵ所で記録を行っている。また東側に位置するSD880堀跡の精査後、遺構の断切りを行いV層以下の土層を確認、記録を行っている。以下各層の特徴と分布を述べる。なお、各堆積層については、土壤分析を含めた古環境復元を行っているので詳細はV章の自然科学分析を参照のこと。

表 土 層 Ⅰ層：茶褐色土層（10～20cm）

果樹耕作土、及び畑耕作土となる。調査区全域に分布する。後世の整地により改変擾乱されている可能性が高い。部分的に果樹の擾乱があり、深いところではV層まで及んでいる。層厚は平均して20cm程である。平安時代から現代にいたる遺物を包含している。開墾にあたって削平されたり果樹の擾乱が多い中央区南では層厚が薄い。

包 含 層 Ⅱ層：茶褐色土 滲移層（10～15cm）

表土と粘質シルト層との間層で、土性としてはⅠ層と類似する。中世から古代にかけてまとまった土器が出土していることを考えるとこの層中に生活面のレベルがあると見られる。本層を概期の遺物包含層と推定できる。

Ⅲ層：灰褐色粘質シルト層（10cm）

腐植質の堆積層で薄く全域を覆っている。この層中から古墳時代の土器がまとまって出土している。古墳時代以降の旧表土であった可能性が高い。本層は調査区のわずかに疊んだところにより厚く堆積している。古墳時代から平安時代の遺物を含む。

遺構確認面 Ⅳa層：黄褐色シルト層 遺構確認面（5～10cm）

調査区北側から中央付近に広がる。部分的に赤褐色砂シルトが被る。古墳時代の溝跡を埋めるように広がっており、2次的に北側から流れ込んで堆積したものと考えられる。

Ⅳb層：褐色シルト 遺構確認面（15～20cm）

シルト質の堆積土で、調査区北側と南側では土質・色調で若干異なる。古墳時代から平安時代にかけての遺物を少量含んでいる。本層以下が地山層となっている。Ⅲ層を除去した範囲とⅣa層の及ばない範囲では遺構確認面となった。この下の遺構と遺物を調査する目的で、中央に試掘トレンチを数箇所に入れたが遺構・遺物は検出されなかった。Ⅳa・Ⅳb層において遺構確認を行い、部分的に遺構の明確でない箇所ではV層上面まで下げている。

V層：灰褐色シルト（15～25cm）

砂や粘土、泥が細粒化している。下部はグライ化が著しく、灰色がかったり。

VI層：灰色シルト層

地点によって砂が多くなる。標高213.0mを測り、このレベルから湧水が始まる。検出している遺構の大半は、この層準で底面となっている。

## VII層：腐植質黒色粘土層

## 腐植質の粘土層

植物繊維等の腐植物を含み、粘性が強く硬い。南陽市の平野部一帯を広く覆うよう広がっており、東畑A遺跡の報告書中の堆積土の理化学分析では、約3100年前頃に生成されたとの分析結果が得られ、この層は縄文時代晚期頃の生成と予想されてくる。今回の調査でも放射性炭素年代測定を行ったが、同様な年代値が示されている。検出した建物跡の柱穴はこの層まで掘りこんでいるものが多い。

## VI層：赤茶褐色泥質粘土層

## V层：灰色粘質砂層（以下不明）

基本堆積層の状態については、主に色調と土質、層厚を記し、合わせて観察時の所見を記した。IV層以下は砂質土層や粘質土層であり、本遺跡周辺の基盤層が疊・砂・泥・泥炭などの扇状地堆積物であるとの認識と矛盾しない。また、V層以下になると著しい湧水が認められる。調査区の南側は、果樹等の耕作により大半の包含層と造構面が破壊されていた。機械による掘削は深いところで表土から1mもの深さに及んでいる。

下層に堆積する腐植質黒色粘土層については土壤の理化学分析によって、腐植質黒色粘土層の年代値が縄文時代晚期を示したことから、遺跡が立地する自然堤防が固定化し、植生が被覆するようになったのは縄文時代晚期頃であるといえる。さらに腐植質黒色粘土層に未分解のヨシ属などを由来とする有機物とスキなどの植物遺体が分解し腐植化することによって生じた有機物とが混在していることは、遺跡一帯が自然堤防が固定化した後、比較的乾燥した状態であったのがある時期に地下水の上昇等が起こってヨシ属が生育するような湿润な状態へと変化したためとの分析結果が得られている。隣接する百刈田遺跡において、この黒色粘土層から弥生時代中期の土器がまとめて出土したことは、弥生時代には定住できる安定した環境にあったと予想できる。

縄文時代晚期



中央北 北壁層序（南から）



中央北 北壁層序（南から）

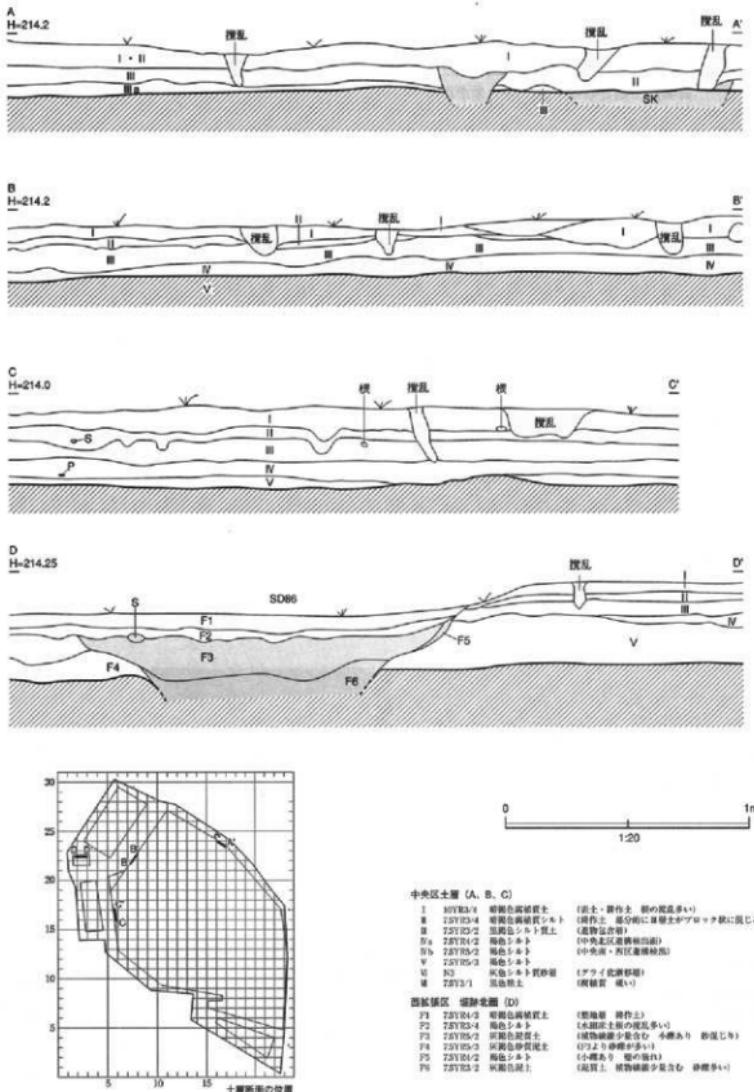


中央南 西壁層序（東から）



西区 東壁層序（西から）

## II 透路の概観



第7図 基本土層

## 5 遺構・遺物の分布

### (1) 遺構の分布

#### 遺構の分布

鶴の木館跡の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡24棟、塀・柱列跡11基、土壙、井戸跡6基、掘跡2条、溝跡113条、ピット群などである。この中で、溝跡については連続する同一の遺構でありながら別番号を付したものもあり、本来は80条ほどの検出数と考えられる。

遺構全体の配置は第8図に掲載した。また、これとは別に地形や隣接する遺構同士の関係を明確にするために第9～14図に区域ごとの遺構分布を示した。検出した遺構の分布状況を概観すると全体的に遺跡内に散在するが調査区の中央部に南北に多く認められる。検出された遺構は古代と中世から近世のものが大半を占め、調査区の北側から南側にかけてある程度の密度があり、東側と西側の堀跡付近はピットなどが僅かに分布するのみであった。

古代の遺構は調査区の中央部分に多く分布し、本遺跡の中心的な施設が集中し、掘立柱建物跡11棟、塀跡4基、溝跡、土壙、井戸跡などがある。古代の遺構は南北に走る溝跡と関連しており、南北に広がっていくものと推定される。建物軸線もそれぞれ方向を同じにしており、集落景観は規則的な建物の配置形態をとる可能性が高い。

中世～近世の遺構は、中央部分と西区にまとまっており、古代の生活域と分布域が異なっている。検出した遺構は掘立柱建物跡13棟、井戸跡5基、土壙、溝跡、堀跡などである。中央付近の建物跡は8棟あり、東西棟の建物となっている。それぞれ規模や形態の違いはあるものの軸線方向を同じくしていることや一部建物の切り合いから、建て替えなどがあったものとみられる。西側の調査区からは中世以降と思われる総柱建物跡や掘立柱建物跡が3棟検出した。やや離れていることや総柱の配置から、時期的に異なる遺構の可能性がある。この他、調査区東側に中世以降と推定される大型の建物跡や年代不詳の土壙がある。また、東西方向、南北方向に多数の溝跡が検出された。古墳時代以降数時期にわたって掘り込まれたと見られる。

遺跡周辺においては、1970年頃に大規模な場整備事業等が実施され、水道管や用水路、農道建設に伴う著しい削平や整地によって改変された経緯があり、本遺跡内においても用水路建設などで削平された部分があった。また、以前は果樹地になっていたこともあります。抜根などによる根の搅乱がいたるところで見られ、一部遺構を破壊している状況が確かめられた。特に調査区の南側ではこれら後世の搅乱により遺構の不鮮明さを残す結果となっている。

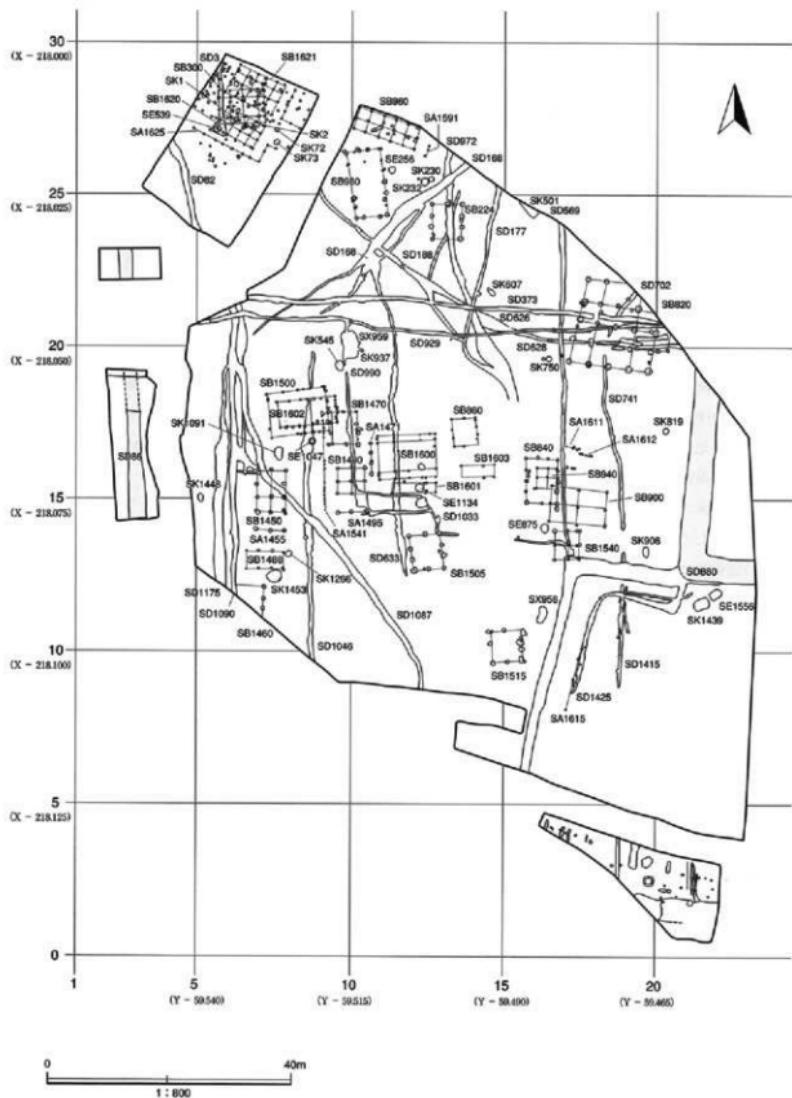
#### 遺構の配置

#### 古代の遺構

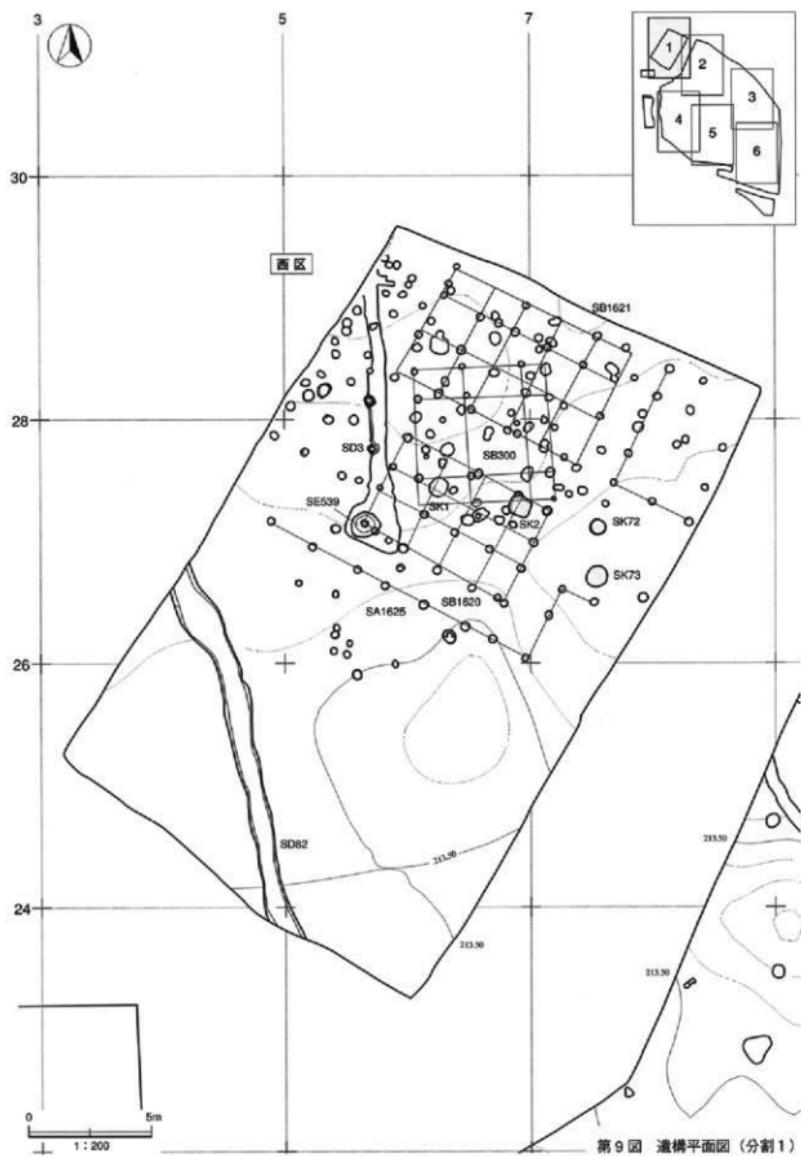
#### 中世～近世の遺構

#### 削平と整地

## II 造跡の概要

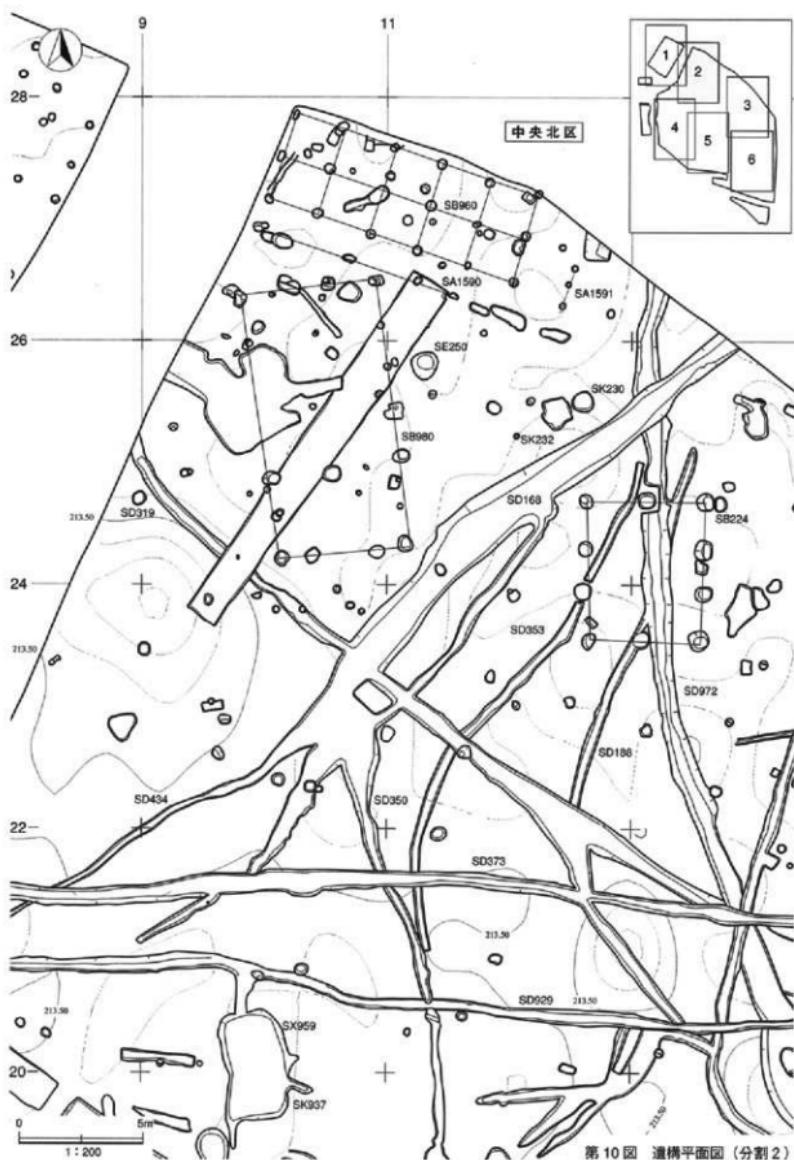


第8図 造構全体図

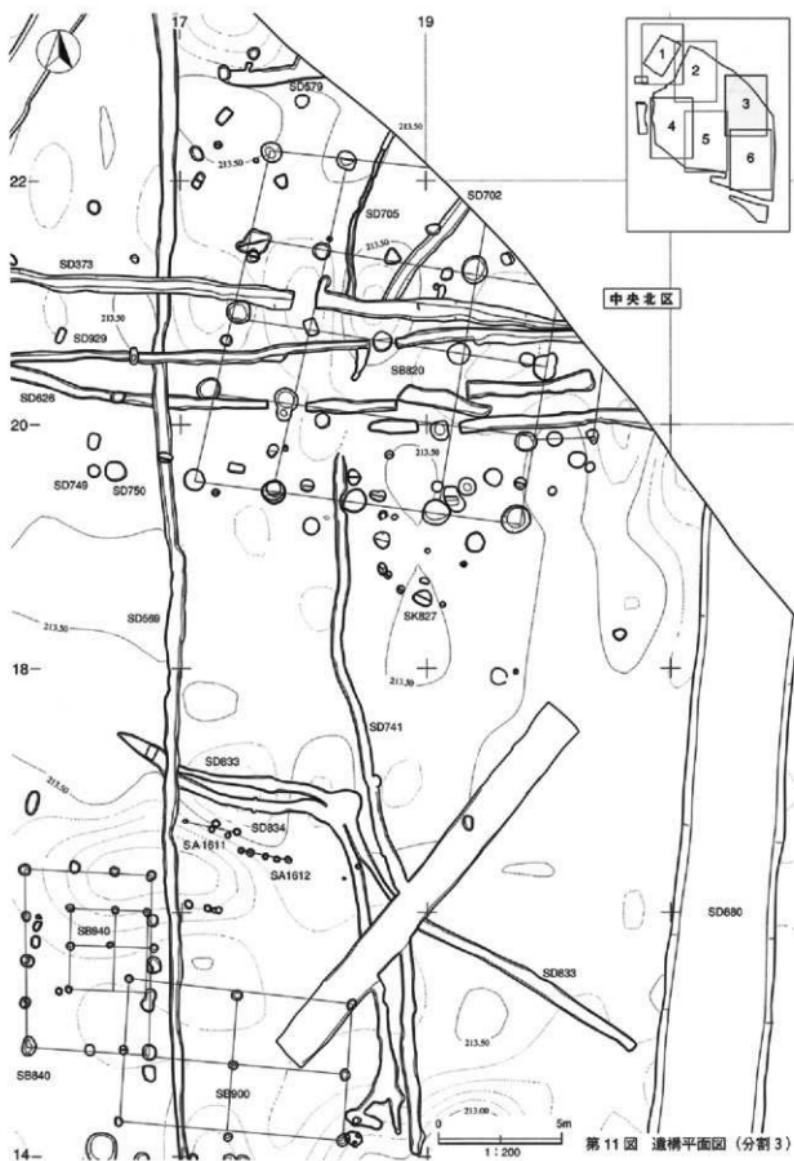


第9図 遺構平面図（分割1）

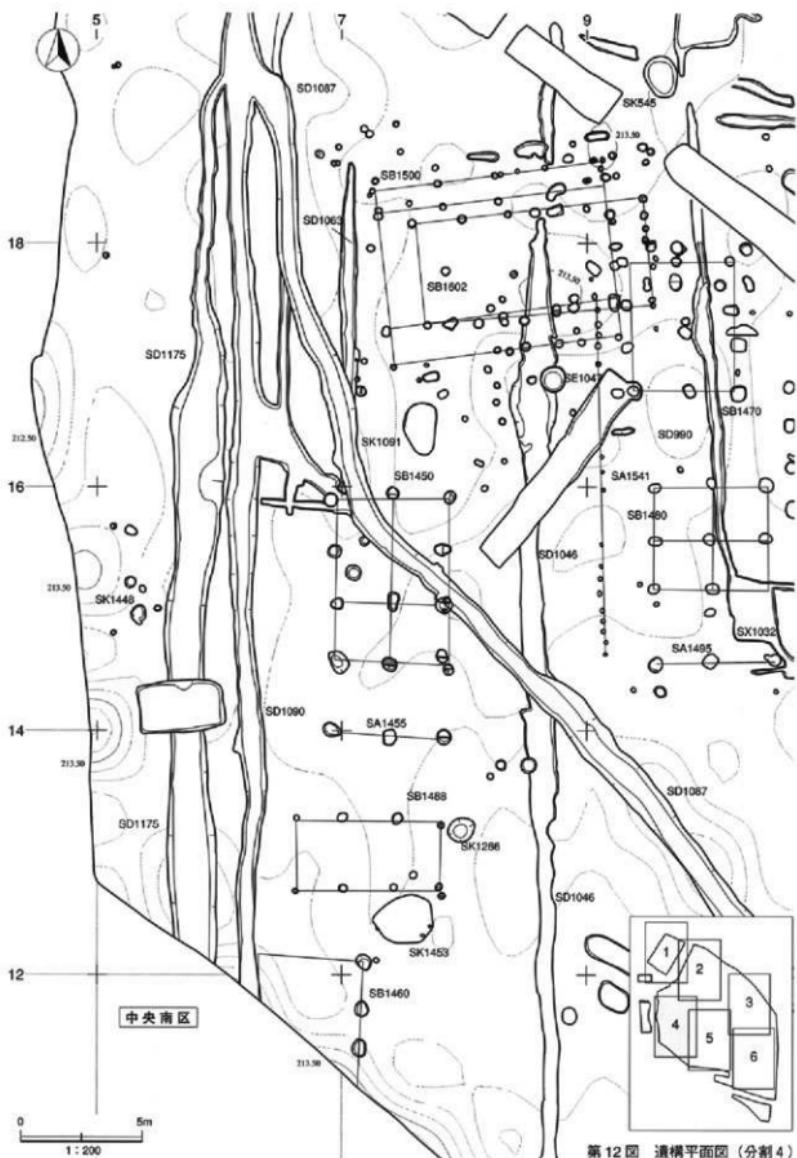
II 遺跡の概観



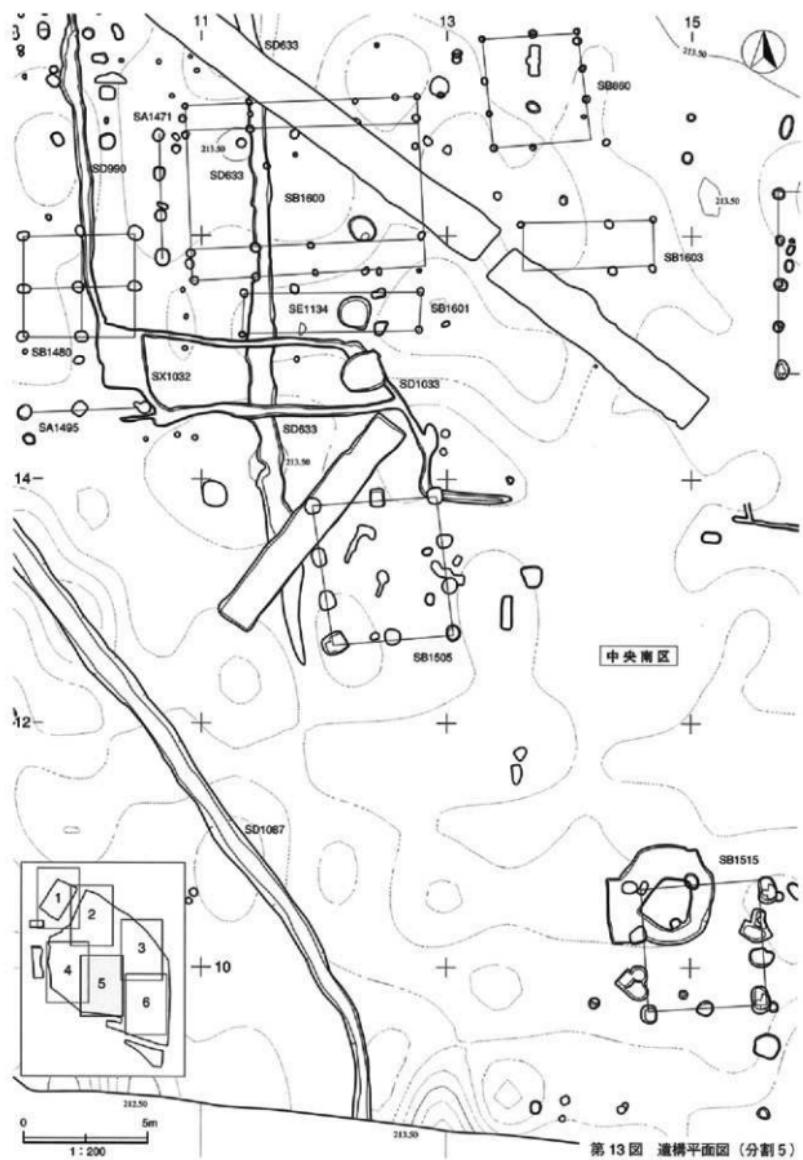
第10図 遺構平面図(分割2)



II 遺跡の概観

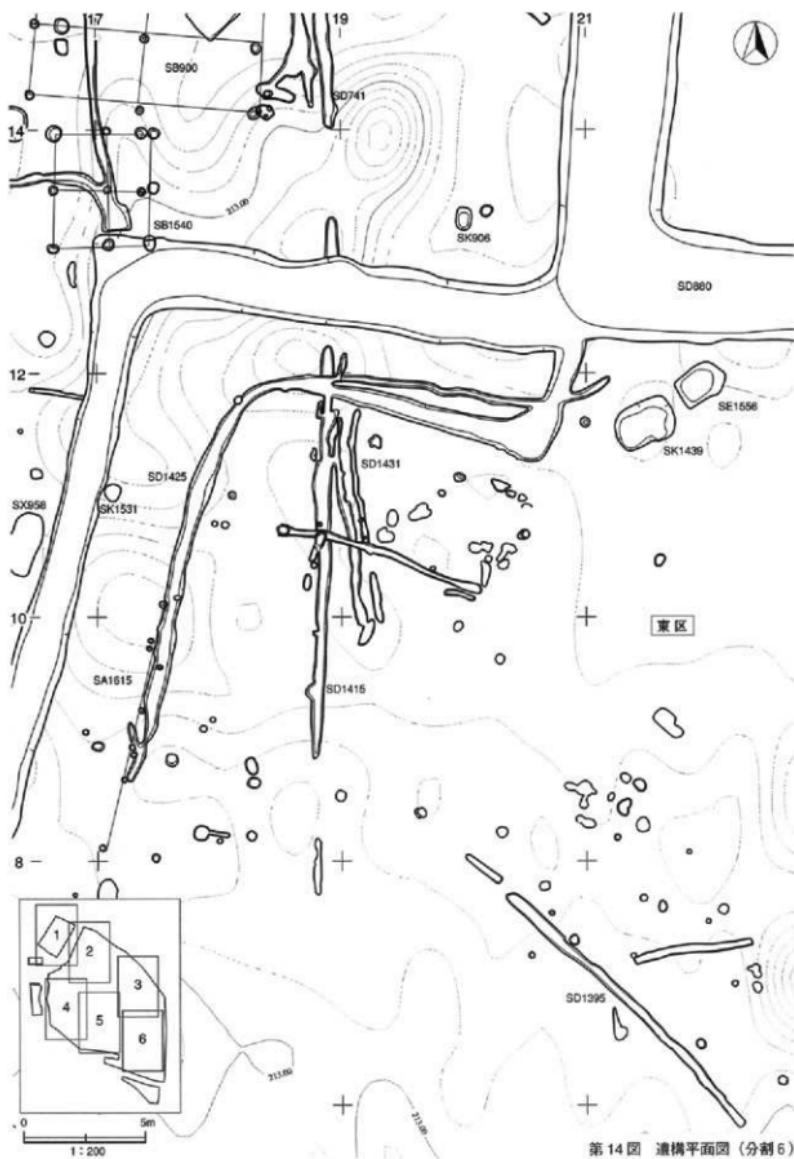


第 12 図 遺構平面図 (分割 4)



第13図 遺構平面図（分割5）

II 遺跡の概観



第14図 遺構平面図(分割6)

## (2) 遺物の分布

出土遺物は遺構の分布状況とほぼ同様な傾向を示しており、遺物の出土状況とその内訳について第15図に示した。遺構内から8100点（約58%）、遺構外から5799点（42%）の総数 遺 物 総 数 13,899点が出土した。出土土器の内訳は、土師器片9538点、須恵器片4173点、中近世陶磁器 121点、木製品10点、石製品12点、その他自然遺物類であり、古代の遺物が主体をなし、古墳時代がやや多く、中世以降の遺物は少ない。

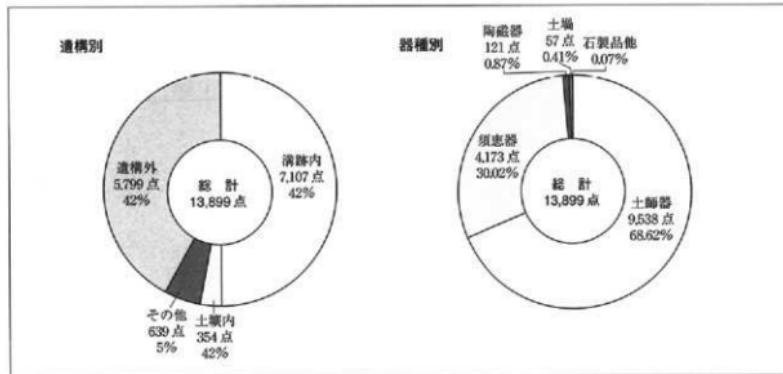
古墳時代の遺物は S D 319・353・620・930・972等、調査区北側の溝跡とその周辺に分布 古墳時代の遺物 が認められた。大半は摩滅したものであるが、部分的にまとまって出土したところがある。

古代の遺物は、溝跡や土壌を中心にして出土した。遺構内から出土した遺物の約 80%は溝跡内からの出土であり、S D 168・633・1046・1175等の溝跡から出土した。これらの大半は平安時代に集約される資料である。内訳は土師器が 3091点、須恵器が 1978 平安時代の遺物 点である。出土量が多い土師器は壺の破片がほとんどで、須恵器類では特に壺類が多い。溝跡からは砥石などの石製品の他、投げ込まれたと見られる自然隕（川原石）も多数出土している。また、遺構は確認できなかったが、鉄滓・織口羽片も溝跡内から検出されており、律令期における製鉄を窺わせる資料も得られている。

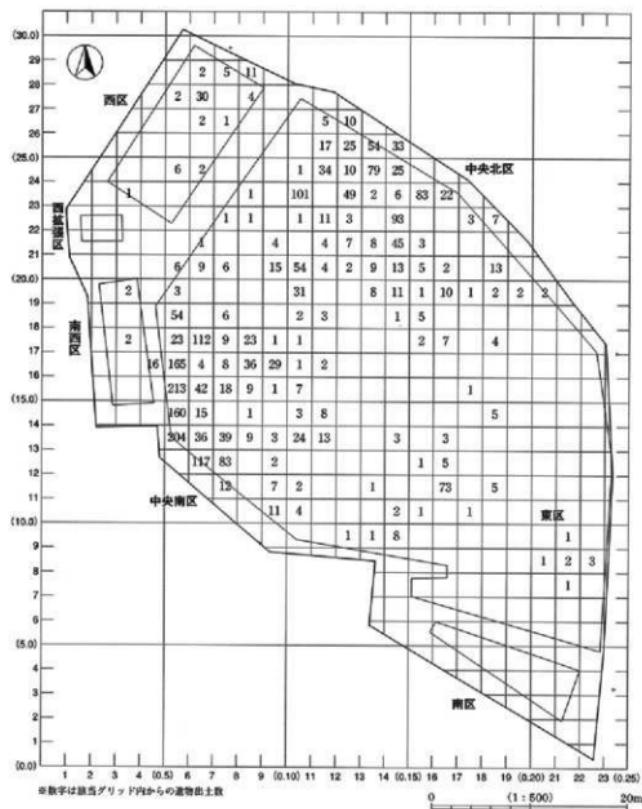
中世から近世の遺物は量的に少なく、包含層及び S D 373・729・929・880・1087・1425 中～近世の遺物 などの溝跡、その他井戸跡や土壌からの出土であった。近代以降になると表土付近や用水路跡・溝跡などから陶磁器類の出土が認められた。

遺構内外、包含層内からの出土数は第16図・第3表に示した。グリッド毎の出土数量を全体視すると、調査区の北側と出土数の多かった溝跡周辺からの遺物数が多いことが伺える。これは遺構ライン検出のために包含層を掘り下げて調査を進めたことにもよる。

遺物の詳細については報告文中でも触れているが、遺構内出土遺物を中心に図化に努め、組成表や観察表にまとめた。



第15図 遺物構成グラフ



第16図 包含層内グリッド別遺物出土数分布図

第3表 犬の木館跡遺構別遺物出土数 (1)

遺構名	総数	頸部部				土器部				土壌	脚部部				石製品	備考	
		环	壺	瓶	瓶	壺	壺	高壺	瓶		環	壺	壺	瓶			
遺構内																	
EB 189	7	3	1			2	3										
EB 194	4	3					3										
EB 198	1						1										
EB 209	1	3															
EB 210	46					17	1	25		3							
EB 217	11					4	6	1									
EB 218	12					7	5										
EB 223	1						1										
EB 225	1						1										
EB 245	2						2										
EB 246	2		2														
EB 301	1	1															
EB 305	1						1										
EB 306	2	2															
EB 1166	4					3	1										
EB 1166	24	7	1			6	3	1		4							
EB 1267	8	6				1	1										
EB 1282	1							1									
EB 1309	6	1					1	4									
EB 1321	1							1									
EB 1536	11	5					1	5									
EB 244	13	3	3			2	2	3									
EB 245	8					4	4										
EB 266	1						1										
EB 1219	2						2										
EB 2006	1						1										
SD 82	1		1													RQ46	
SD 86	2		1							1							
SD 88	1													1			
SD 167	20	1				8	10	1									
SD 168	297	725	41	56	1	1771	18	296	12	49					1	※1	
SD 177	76	12	3	6		37	17	1									
SD 188	16	4	5			1	6										
SD 201	1						1										
SD 203	7					3	4										
SD 309	16					1	3	6								RPS7	
SD 319	21					10	6	8								RPS33	
SD 322	11					5	6										
SD 323	1						1										
SD 350	236	81	3	6	1	54	85	5	1							RPS3/RP84	
SD 353	168	4				48	31	12									
SD 355	1						1										
SD 373	202	14	5	1	1	83	97		1							土壌1	
SD 536	11							11								RPS6	
SD 566	14					8	6										
SD 568	4					2	2										
SD 569	8	3	1			1	3										
SD 579	8	1				3	4										
SD 696	34	1	3	1		6	25									RPS3	
SD 630	30	1				1		28									
SD 633	303	203	7	6	1	28	55	2								1	※2
SD 645	9						9										
SD 686	9					8	1									RPS3	
SD 687	21					7	13	1								RPS3	
SD 690	8	2				6											
SD 702	76					2	74									RPE1	
SD 721	10					6	4										
SD 729	14	4	3	1		5	3										
SD 741	2						2										
SD 809	25	11				4	10										
SD 820	10	3	1	1		6	1										
SD 829	4	6	3	10	2	3					3	9	1	3		角部分(側L側面)	
SD 829	65	10				27	14		7							1	鐵石
SD 530	178		2			62	103	5	6								RPS6～RPS8～RP100
SD 955	53	1				26	26									半3	
SD 972	205		4			60	2	156	12	1							
SD 990	12	5	2			4											
SD 1003	2	1					1										
SD 1033	13	9		1	1	1										1	
SD 1046	1085	485	26	25	1	3	299	241	3							2	※4
SD 1048	3	1				1	1										
SD 1063	3		1								2						
SD 1087	224	113	12	25		35	32	3	3							RP148/ RP149	
SD 1088	1	1															
SD 1090	70	28	4	17			20		1								
SD 1114	3	1					2									土壌1	
SD 1171	5	4				1											
SD 1175	714	264	41	92		95	5	197	20							半5	
SD 1344	16	16														RPS6	
SD 1359	3										2		1				
SD 1425	13	2	1							1	3	5	1	1	1	鐵石1	

## II 進路の概観

第4表 鶴の木館跡遺構別出土数（2）

遺構名	組数	箱型器			土師器			陶磁器			石器品	備考
		环	盒	甌	环	盒	甌	高环	盆	甌		
遺構内	SD 1431	4	2	1			1					RP23
	SD 1448	1		1								
	SD 1452	8	4			1	2	1				
	SD 1474	14				6	7	3				
	SD 1558	4	2	1		1						
	SD 1559	7	2	1			1	3				
	SE 256	21	3	1		8	9					
	SE 529	2					2					
	SE 875	3		1		2						
	SE 1047	4	2				1		1			
	SE 1134	20	3	1								
	SK 1559	1								1		
	SK 2	1				1						RP38
	SK 170	12	1			2	1	7	1			
	SK 174	13	8	2		3						
	EH 217	7					7					
	SK 220	26	4			1	21					RP56
	SK 224	8	1			1	6					
	SK 225	7	1	1			5					
	SK 261	19				9	8	2				
	SK 267	30		1		1	10	17	1			RP116～RP118
	SK 425	4				4						RP4
	SK 501	52			10	16	6	20				
	SK 502	1				1						
	SK 515	4				3	1					
	SK 625	10				3	7					
	SK 629	11				9	2					
	SK 930	2				2						
	SK 937	20	4	1		1			14			RP58
	SK 1091	28	15	2	5	3	2	1				RP113/RP115
	SK 1142	1	1									RP151
	SK 1266	1		3								
	SK 1448	69	19	4	4	13	19	10				※6
	SK 1449	6	1			3	2	2				
	SK 1453	3	3									
	SK 1531	19	7				10	2				RP152
	EH 25	1										
	SP 37	1	1									RP26
	SP 120	2				1	1					
	SP 215	26	8			5	15					
	SP 292	6				1	5					
	SP 303	21				19	2					
	SP 307	1				1						
	SP 333	1		1								
	SP 341	2				2						
	SP 363	1				1						
	SP 371	1				1						
	SP 396	3				3						
	SP 441	1				1						
	SP 451	1	1									
	SP 468	14				1	13					
	SP 518	4					4					
	SP 544	2				2						
	SP 580	2				2						
	SP 599	1	1									
	SP 708	92				92						RP60
	SP 736	1	1									
	SP 929	1		1								
	SP 1060	4	2			2						
	SP 1274	1				1						
	SP 1471	4	2	3		1						
	SP 1472	1	1									
	SK 968	225	129	9	3	16	2	78	3			RP103～RP112
	SK 1032	10	5	2		2			1			
遺構外	グリット付	2703	846	65	210	1	4	116	99	809	13	200
	中央区北	2405	141	18	21	1	637	561	123	141	117	15
	中小区南	118	60	1	16	1	12	8	6	6	3	3
	西区(駿河区)	206	4	1	1	15	13	27	123	3	15	3
	東区	12	4	1		2	1		1	1	1	1
	兼六上古田山通	266	26	4	5	70	8	132	6	3	2	8
	遺構内	8100	236	165	289	9	10	50	61	3091	68	171
	7599	1001	90	253	1	6	112	184	2298	283	329	33
	總計	13899	3347	253	542	10	16	303	245	5389	381	500
	注	※1 SD 146	RP62～RP72/集計外(口口口5/鉄片2)									
	※2 SD 633	RP65/RP119～RP125/RP127～RP144/鐵石1										
	※3 SD 972	RP287～RP317/RP319～RP322/RP324～RP326/RP337～RP347/RP349～RP352										
	※4 SD 1006	RP353～RP355/RP357～RP359/RP360/RP361/RP362/RP363/RP364/RP365/RP366/RP367										
	※5 SD 1173	RP248～RP252/RP254～RP264										
	※6 SD 1445	鐵石1(137G)/標本2(30.5G-7G)/RP4(21.4G)/RP24/RP51(23.1G)/RP23(24.5G)/RP37(24.6G)/RP223(24.1G)/RP26(24.6G)/RP2(26.7G)/RP4(27.5G)/RP23/RP23(27.6G)/RP25(28.4G)/RP26(28.7G)/RP41～RP43.3(28.8G)/駿河区(鉄片1)										
	※7 グリット剥離片	(16.4G)(1) 16.4G (4) 21.3G (4) 25.4G (9)										
	※8 中央江北	RP1～RP11/RP13～RP17/RP22/RP29/RP32/GJ/集計外(口口口5/鉄片1)										

### III 検出した遺構と遺物

#### 1 掘立柱建物跡・柱列跡

今回の調査で検出された掘立柱建物跡は24棟、柱列（堀跡）は11列であり、大きく調査区の北部及び中央部分、西地区に3箇所に分布範囲が分かれる。これらの建物群は建物の軸線方向や柱穴の掘形規模から数時期に分かれ、このうち11棟は平安時代（9世紀中頃）、11棟は中世から近世にかけての時期に属すると考えられる。その他2棟は、時期不明ながら規模や配置、向きから中世以降のものと考えられる。

各遺構を報告するに際し、規模・柱間寸法は柱痕の中心を結んだ数値で示し、柱痕の依存が確認できなかったものは底面の中心部から計測している。柱間寸法については0.1m及びcmを単位として記載した。

#### 中央区

**S B 224 建物跡** S B 224建物跡は調査区北側の23～24-12～13グリッドに位置し、S D 168溝跡の東脇2mのところにある。遺構確認面はIV a層面で、標高は213.6mである。建物の中央を古墳時代の溝S D 927が走っている。また、柱穴の一部は遺物包含層としたⅢ層の堆積土に覆われていた。近接して北側にS B 980建物跡がある。本建物跡は東西梁行き4.8m、南北桁行き5.8mの規模を測り、平面積は27.84 m<sup>2</sup>となる。建物の軸方向はN-3°-Wである。

本建物跡を構成する柱穴は10個確認した。北西隅の柱穴から198、203、217、218、187、219、194、206、209、210である（第17図）。建物北梁行きの総長は4.9mである。それぞれの柱穴の柱間寸法は2.4～2.5mの範囲にある。これに対応する南梁行き総長は4.8m、その柱間寸法もまた2.3～2.5mの範囲にある。東側桁行きはE B 194～210で構成される。桁行き総長は5.4m、柱間寸法はいずれも1.8mを測る。西側桁行きはE B 198からE B 218の4個の柱穴がある。柱間寸法はいずれも1.8mを測る。柱掘り方の平面形は方形や隅丸方形である。掘り方は50×40cm前後のものが多く、最大は60cm×60cm前後のものがある。柱痕は9ヶ所で確認した。柱痕は直径20～25cmの円形を呈しており、すべて掘り方の底まで達している。柱痕の堆積土はほぼ單一層で暗褐色のシルトであった。柱痕のないものは抜き取った後の堆積と考えられる。柱穴の堆積土からは少量の土器が出土している。これらの土器は掘り方を埋め戻した際に混入したものと考えられる。

S B 224建物跡は、東西2間×南北3間の南北棟である。柱穴掘り方の大きさは、近接するS B 980建物跡に類似し建物の軸線方向もこれと併行する。本建物跡は出土した遺物や柱の配置から平安時代（9世紀中頃）に位置づけられる。

**S B 820 建物跡** S B 820建物跡は中央北区19～21-17～19グリッドに位置し、遺構確認面はIV a層の上面で、その標高は213.6mである。建物はS D 373・929と重複し、平面の切り合いからS B 820建物跡が古い。

**本建物跡は東西4間13.2m、南北4間13.5mの規模を測り、東側は部分的に張り出す様子を見る。検出部分の平面積は178.2m<sup>2</sup>となり、建物の南北軸はN-11°-Eである。本建物跡を構成する柱穴は20個確認した。北西隅の柱穴から587、695、714、730、732、691、700、718、717、738、701、720、805、711、759、973、961、760、765、814となる（第19図）。西側の南北列それぞれの柱穴の柱間寸法は北側から3.3m+3.3m+3.3m+3.6mである。これに対して南側の東西列の柱間寸法は東側から3.3m+3.3m+3.3m+3.3mである。柱穴の平面形は円形や不整円形である。掘り方は径70~100cmにおよび、最大はE B 961で140×120cmである。柱痕は明確には確認できなかった。ただ、中央部分に不自然に落ち込む部分と硬い底面となっていたことから礎石を配置したか、ほぼ平坦な柱穴であった可能性がある。柱掘り方からの遺物は少なく、ほとんど古墳時代から平安時代の土器の碎片で、掘り起こし、整地したときの混入と考えられた。本建物跡は、掘り方の規模や柱構造から一般的の住居とは考えがたく、特殊な機能を担った建物の可能性が高い。**

**S B 840建物跡 S B 840建物跡は中央区15・16-15・16グリッドに位置し、遺構確認面は2間×4間の建物IVa層の面で、その標高は213.5mである。建物はS B 940と重複し、掘り方の切り合いからS B 840建物が古い。南側では、S B 900建物跡と一部重なりっている。掘り方内堆積土の違いからS B 900が新しいと提えた。**

**本建物跡は東西梁行き5.0m、南北桁行き7.5mの規模を測り、平面積は38.5m<sup>2</sup>となる。建物の長軸はN-4°-Eである。本建物跡を構成する柱穴を13個確認した。北西隅の柱穴1489、835、836、837、839、855、1490、1491、841、843、844、846、848から構成される（第21図）。北梁行きの柱間寸法は東側から1.6m+1.7m+1.7mである。これに対応する南梁行きは東側から2.5m+2.5mである。東桁行きの柱間寸法は北側から1.6m+1.9m+1.8m+1.9mであり、平均は1.82mを測る。西桁行きの柱間寸法は北側から2.0m+1.9m+1.8m+1.8mであり、平均は1.82mを測る。柱穴の平面形は円形や不整方形である。掘り方は径30~50cm前後で最大はE B 846で55×45cm、最低はE B 1490で33×25cmである。柱痕は8ヶ所で確認した。柱痕は直徑12~15cmの円形を呈している。柱痕の堆積土は暗褐色粘質シルトである。柱痕のないものは抜き取った後の堆積と考えられる。柱穴の堆積土からは少量の土器が出土しているが、これらの土器は掘り方を埋め戻した際に混入したものと考えられる。**

**S B 860建物跡 S B 860建物跡は中央区17-13グリッドに位置し、遺構確認面はIV層からV層上面で、検出面標高は213.5mである。本建物跡は2間×3間の南北棟で南側梁間が3間となっている。梁行き3.9m、桁行き4.8mの規模を測り、平面積は18.7m<sup>2</sup>となる。建物の長軸はN-4°-Wである。本建物跡を構成する柱穴を13個確認した。北西隅の柱穴から678、680、684、782、675、776、783、784、789、791、792、1592である。（第23図）。北梁行きのそれぞれの柱穴の柱間寸法は東側から1.9m+2.0mである。これに対応する南梁行きは東側から1.0m+1.3m+1.6mである。東桁行きの柱間寸法は北側から1.8m+1.4m+1.6mであり、平均は1.57mを測る。西桁行きは長さ4.8m、柱間寸法は北側から1.8m+1.5m+1.5mであり、平均は1.57mを測る。柱穴の平面形は円形や不整円形である。掘り方は径20~30cm前後である。柱痕は3ヶ所で確認した。柱痕は直徑8~13cmの円形を呈している。柱痕の堆積土は灰褐色シルトであった。柱痕のないものは抜き取った後の堆積と考えられる。柱穴の堆積土から遺物**

の出土はない。

**S B 900 建物跡** 本建物跡は中央北区の東、14～15～16～17グリッドに位置する。検出面はIVa層下部である。遺構確認のため掘り下げたが、本来はIV層上面で検出できたものとみられる。本建物は南北方向に2間、東西方向に2間の柱穴が並ぶ（第24図）。柱穴は845、871、877、842、872、879、874、873、908である。建物は南北方向よりも東西方向の間隔が長いので東西棟と判断しておく。建物棟の軸方位はW-7°-Nを指す。柱穴の掘り方は $20 \times 15 \sim 24 \times 20\text{cm}$ である。平面形はやや不整円形である。深さは13～22cmである。柱穴の間隔は北側東西列で北側から4.5m+4.5m、中柱列で4.5m+4.5m、南側で4.5m+4.5m、南北列ではいずれも3.0m+3.0mである。遺物の出土はみられなかった。

**S B 940 建物跡** 本建物跡は中央区15～16グリッドに位置する。検出面はIV層下部からV層上面である。建物プラン確認のためグライ化したシルト層まで掘り下げたが、本来はIV層上面で検出できたものとみられる。この建物は、S B 840建物跡と重複し、南端はS B 900と部分的に重なっている。平面プランは2間×2間の総柱建物である（第25図）。また東西方向よりも南北方向の間隔が長いので南北棟と判断した。建物棟の軸方位はN-4°-Eを指す。

柱穴の掘り方は $20 \times 22 \sim 30 \times 33$ である。平面形は円形もしくはやや不整な円形である。深さは22～34cmである。柱痕は直径12～16cmの円形を測る。柱痕は掘り方底面近くまで達している。柱痕は黒褐色シルトあるいは砂質シルトである。柱穴の間隔は東側から1.6m+1.8m、中柱列で1.7m+1.7m、西側で1.6m+1.8m、北梁行きで東側から1.5m+1.8m、中柱列で1.6m+1.8m、南側で中柱が確認できなかった。遺物の出土はみられなかった。E B 844での切り合いからS B 840→S B 940の前後関係を捉えた。

**S B 960 建物跡** 本建物跡は中央区の北西角、27～28～11グリッドに位置する。遺構検出面はIVa層である。本建物跡の北側は調査区外に西側は農道下に広がっているとみられ全体像は不明である。また、柱穴の一部は近年の果樹支柱設置により破壊されていた（第31図）。

建物の規模は検出している部分で南北3間、東西5間の東西棟の総柱建物跡である。柱穴の掘り方は $20\text{cm} \times 24\text{cm} \sim 25\text{cm} \times 30\text{cm}$ の円形で検出面からの深さは17cmを測る。柱痕は明確でなく、遺存状態がよくなない。この建物の四隅の柱穴の中心間の距離は東側柱列で3.9m、西側柱列で3.9mで、北側柱列で10.4m、南側柱列で10.5mを測る。平面積は $41\text{m}^2$ となる。柱間の距離は東側柱列で北から測って1.9m+2.0mとなり、北側柱列では東から2.0m+2.1m+2.1m+2.2m+2.0mとなる。柱穴の埋土からの遺物の出土はない。本建物跡が機能した時期は掘り方の規模や建物配置、軸向きから中世以降の時期と考えられる。

**S B 980 建物跡** S B 980建物跡は中央区北西の25・26・10グリッドに位置し、S B 960建物跡の南2mのところにある。遺構確認面はIVa層の面で、その標高は213.6mである。建物の中央に試掘トレンチがあり、西側を果樹の抜根による擾乱があり柱穴掘り方を破壊していた。

本建物跡は3間×6間の大型の建物跡で、東西梁行き5.4m、南北桁行き11.0mの規模を測り、平面積は $59.9\text{m}^2$ となる。建物棟の軸方向はN-10°-Wで、南北棟となる。本建物跡を構成する柱穴を18個確認したが、西側の破壊された柱も含めると20箇所の柱があったと想定される。柱穴は北西隅から952、278、291、1587、317、273、951、287、296、315、1609、282、953、954、258、238、324、329となる（第29図）。東桁行きの長さは11.0mで、それぞれの柱

穴の柱間寸法は北から $1.8m + 1.8m + 1.8m + 1.9m + 2.0m + 1.8m$ を測る。これに対応する西桁行きの長さも $11.0m$ で、その柱間寸法は東桁行きに対応する。北梁行きは4個の柱穴がある。北梁行きの長さは $5.4m$ 、柱間寸法は東から $1.8m + 1.8m + 1.8m$ で、南梁行きの長さは $5.4m$ で、柱間寸法は東から $1.3m + 2.8m + 1.3m$ を測る。建物内部にも間仕切り柱と思われるものが配置されている（E B 287・296）。南側梁間中央の広がっている部分は建物入り口の可能性がある。柱掘り方の平面形は不整方形・梢円形である。規模は $50 \times 40cm$ 前後であるが、試掘トレーナー部分では、掘り下がったため若干小さくなっている。柱痕は11ヶ所で確認した。柱痕は直径 $13 \sim 17cm$ の円形を呈しており、掘り方の底まで達している。柱痕の堆積土は褐色灰色のシルトで、柱痕のないものは抜き取った後の堆積と考えられる。柱穴の堆積土からは少量の土器が出土している。これらの土器は掘り方を埋め戻したり抜き出した際に混入したものと考えられる。

本建物跡の時期は中世以降の建物跡と異なる配置や堆積状況をもち、出土した遺物から平安時代（9世紀中頃）と考えられる。

**S B 1450 建物跡** S B 1450 建物跡は中央区西側の14・15-7グリッドに位置している。S D 1087溝跡が建物跡中央で重複し、建物の柱掘り方を切っている。検出面はIV b層下部からプラン確認の困難な掘り方部分ではV層まで掘り下げている。検出面での標高は $213.3m$ を測る（第26図）。

建物は梁行き2間、桁行き3間の南北棟である。建物の主軸はN-2°-Wで、桁行き長は $6.7m$ 、梁行き長は $4.8m$ を測り、面積は $32.2m^2$ ある。掘り方平面形は不整梢円形のものが多く、長径 $45 \sim 70cm$ 、深さは $40 \sim 55cm$ を測る。柱痕跡は掘り方中央部分にくくものは少なく、端にくくものが多い。柱痕径は平均 $22cm$ ほどで硬い黒色粘土層まで掘り込んでいる。柱穴の埋土は褐色、暗褐色、灰褐色の混合シルトで、底面付近は黒色粘土層になっている。柱間隔は北梁の柱痕で東より $2.4m + 2.4m$ 、同じく南梁で $2.4m + 2.4m$ である。また桁行きの柱間隔は東側柱列で北より $2.2m + 2.2m + 2.3m$ 、西側柱列で $2.2m + 2.2m + 2.3m$ である。南側に3m離れて柱列が続くが、柱間が空きすぎているため、建物を構成しないと判断し、解説とした。

遺物は柱掘り方から土器や須恵器の壊や壺の破片が出土した。本建物跡の時期は中世以降の建物跡と異なる配置や堆積状況をもち、出土した遺物から平安時代（9世紀中頃）に位置づけられる。

**S B 1460 建物跡** 本建物跡は中央区西側の11-7グリッドに位置している。S D 1090溝跡が建物跡西側で重複し、建物の柱掘り方を切っている。また、後世の果樹栽培の擾乱を受け、南・西側は破壊されていた。検出面はIV b層下部からプラン確認の困難な掘り方部分ではV層まで掘り下げている。検出面での標高は $213.3m$ を測る（第28図）。

建物は梁行きは不明ながら、桁行き2間以上の南北棟であると予想される。桁行き柱列から建物の主軸はN-3°-Eである。掘り方平面形は不整梢円形で長径 $35cm \sim 45cm$ 、深さは $45 \sim 60cm$ を測る。柱痕跡は掘り方中央部分にあり柱痕径は平均 $20cm$ ほどで硬い黒色粘土層を掘り込んでいる。柱穴の埋土は暗褐色、灰褐色の混合シルトで、底面付近は砂質シルトになって湧水が著しい。柱掘り方からの遺物の出土はなかった。

**S B 1470 建物跡** S B 1470 建物跡は中央区 16・17・9・10 グリッドに位置し、S D 1046 溝跡と S D 633 溝跡に挟まれた位置にある。遺構確認面は IV b 層で、標高は 213.4m である。建物の中央を中世以降の溝 S D 990 溝跡が走っている。近接して南側に S B 1480 建物跡がある。本建物跡は南北桁行き 5.4m、東西梁行き 4.4m の規模を測り、平面積は 23.76m<sup>2</sup> となる。建物の軸方向は N - 2° - W である。本建物跡を構成する柱穴は 10 個確認した。北西隅の柱穴から 1546、1547、1548、1549、1550、1005、993、1001、1004、1006 である（第 32 図）。建物東桁行きの長さは 5.4m で、それぞれの柱穴の柱間寸法は北から 1.8m + 1.7m + 1.9m である。これに対応する西桁行きの長さも 5.4m で、その柱間寸法は 1.8m + 1.8m + 1.8m である。北側梁行きの長さは 4.4m で、柱間寸法は東から 2.2m + 2.2m を測る。南側梁行きは長さ 4.3m である。南側梁行きの柱間寸法は東から 2.1m + 2.2m を測る。掘り方の平面形は不整の隅丸方形である。掘り方は長径 40 ~ 50cm 前後の範囲に収まる。柱痕は 7ヶ所で確認した。柱痕は直径 15 ~ 18cm の円形を呈しており、掘り方の底まで達している。柱痕の堆積土は黒褐色シルト・茶褐色のシルトであった。掘り方から土師器の坏破片が出土している。これらの土器は掘り方を埋め戻した際に混入したものと考えられる。

S B 1470 建物跡は、東西 2 間 × 南北 3 間の南北棟で、柱穴の大きさは、近接する S B 1505 建物跡に近似し、また建物の軸線方向もこれと併行する。本建物跡の時期は出土した遺物や柱の配置・堆積土から平安時代に位置づけられる。

**S B 1480 建物跡** 本建物跡は中央区 南側、15・9・10 グリッドに位置する。検出面は IV b 層下部である。遺構プラン確認のため掘り下げたが、本来は IV 層上面で検出できたものとみられる。この建物の北側には S B 1470 建物跡が、南側には SA1495 柱列跡がある。それぞれの軸方位はほぼ一致している。S B 1480 の建物の軸方向は N - 3° - W である（第 34 図）。

本建物は南北方向に 2 間、東西方向に 2 間の柱穴が並ぶ。南側の S A 1495 柱列は並列しているものの柱列の間隔が他の柱列の間隔よりも長いため、建物とは別の構造物と考えた。したがってこの建物跡は 2 間 × 2 間の純柱建物跡と考える。また、東西方向よりも南北方向の間隔が長いので南北棟と判断しておく。柱穴の掘り方は 30 × 35cm ~ 46 × 58cm で、平面形は方形もしくはやや不整な長方形である。深さは 22 ~ 27cm である。柱痕は直径 13 ~ 16cm の円形であり、すべての柱穴より検出された。柱痕は灰褐色のシルト或いは砂質シルトである。柱穴の間隔は南北列で東側から 2.2m + 2.1m、中柱列で 2.2m + 2.0m、西側で 2.2m + 2.0m、東西列で北側から 2.2m + 2.2m、中柱列で 2.2m + 2.2m、南側で 2.2m + 2.1m である。遺物は掘り方埋土・柱痕より土師器や須恵器の小破片が出土している。

**S B 1488 建物跡** 本建物跡は中央区 南側、12・13・7 グリッドに位置する。グライ化したシルト層面まで検出したため、遺構確認は V 層上面となったが、本来は IV 層で確認できたものと考えられる。現状の地形は平坦であり、確認面の標高は、213.3m 前後でほぼ一定する（第 35 図）。

本建物跡は東西桁行き 3 間、南北梁行き 1 間の東西棟建物跡であり、桁行きを基準とした建物の主軸方向は E - 18° - N を指す。建物跡は 8 個の柱穴で構成される。桁行きの長さは 6.0m を測り、桁行きの柱間寸法は東から 2.0m + 2.0m + 2.0m となる。梁行きは 1 間であり、東側梁行きは 2.7m、西側梁行きは 3.0m である。建物の平面積は 18.0m<sup>2</sup> となる。柱穴の平面プランは円形を基調とする。柱穴の平面規模は E B 1487 が最小で径 12cm、最大が E P 1270 で径 33cm

2 間 × 3 間の建物

2 間 × 2 間の柱列跡

1 間 × 3 間の建物

となる。検出面からの深さは18~22cmと浅い。本建物跡に伴う柱穴から遺物の出土はみられない。

**S B 1500 建物跡** S B 1500 建物跡は、中央区中ほど17・18・7・8グリッドに位置している。S B 1450 建物跡の北4m、S B 1470 建物跡とは東側で一部重なり合う。遺構検出面はIV層上面である。確認面の標高は213.5mで、現状は平坦な地形をしている（第36図）。

**二面廻の建物** 本建物跡は二重に廻る柱列からなり、第1（内側身舎）の柱列は14個の柱穴、第2の柱列（外側）は10個の柱穴により構成されている。第1の柱列は、北の桁行き9.5m、南桁行きは9.5mである。東梁行きは4.6m、西梁行きは4.8mである。第2の柱列は建物の縁と考えられ、北側と南側に付く。その大きさは東西9.5mを測り、北桁行きを基準とした建物の長軸方向はE-3°-Nである。

身舎に相当する第1柱列の各柱間寸法は、北側桁行きで2.3m~2.6mとほぼ一様である。桁行き柱穴の柱間寸法の平均は北桁行き2.4mである。また、梁行きについては先に述べたように4.8mである。東側の柱間は1.5m+1.6m+1.5mとなる。柱穴の平面形は円形をし、それぞれの直径及び辺の大きさは20~25cmの範囲にあり、その深さは25~35cmの間にある。11ヶ所で径10~12cmあまりの柱痕を認めた。柱痕はすべて褐色シルトである。柱痕の認められないものについては、柱を抜き取り埋ったものと考えられる。

身舎に付属する縁と考えられる第2柱列の北側柱列は東から2.3m+2.3m+2.3m+2.6mの9.5m、南側柱列は東から2.3m+2.3m+2.3m+2.6mの9.5mである。縁の出は南に150cm、北に100cmである。柱穴の平面形は梢円形や円形をしている。柱穴の大きさは径15~20cmの範囲にあり、それぞれの深さは20~25cmを測る。総じて身舎を構成する柱穴よりやや小さい傾向がある。

本建物跡は柱列が二重に配置することから二面縁を持つ建物跡と考えられる。東西4間×南北3間、そして縁を含めた建物全体の面積は69.3m<sup>2</sup>である。南と北の縁は身舎の桁行きに対応し4間である。これに対し東は3間となり、中央に柱が建つことから平入りの建物であったと考えられる。また東側や南側は柱数が多く、狭い配置の箇所があり入り口部分の可能性が高い。出土遺物から所属時期を明確にできないものの柱の規模や配置、堆積土から中世から近世にかけての時期に属するものと考えられる。

**2間×3間の建物** **S B 1505 建物跡** S B 1505 建物跡は中央区南の12~13~12グリッドに位置し、S D 633溝跡の東隣にある。遺構確認面はIV b層で、標高は213.4mである。本建物跡は東西2間、南北3間の南北棟で、南北桁行き5.8m、東西梁行き5.1mの規模を測り、面積は29.58m<sup>2</sup>となる。建物の軸方向はN-2°-Wである。

本建物跡を構成する柱穴は10個確認した。北西隅の柱穴から1542、1543、1222、1544、1216、1224、1231、1234、1236、1545である（第38図）。建物東桁行きの長さは5.6mで柱穴の柱間寸法は北から1.8m+1.9m+1.8mである。これに対応する西桁行きの長さは5.8mで、その柱間寸法は2.0m+1.8m+2.0mである。北側梁行きの長さは5.0mで、柱間寸法は東から2.5m+2.5mを測る。南側梁行きは長さ5.1mである。南側梁行きの柱間寸法は東から2.5m+2.6mを測る。柱穴掘り方の平面形は不整の隅丸方形である。規模は径40~50cm前後の範囲に収まる。柱痕は10ヶ所で確認した。柱痕は直径16~24cmの円形を呈しており、掘り方の

底まで達している。柱痕の堆積土は炭混じりの褐色シルトである。掘り方埋め土から土器器の坏破片が出土している。これらの土器は掘り方が埋まる段階に混入したものと考えられる。S B 1505建物跡の時期は出土した遺物や柱の配置から平安時代に位置づけられる。

**S B 1515建物跡** S B 1515建物跡は中央区南東の9・10・14・15グリッドに位置する。遺構確認面はIV b層で、標高は213.4mである。本建物跡の柱掘り方のほとんどが後世の果樹栽培の耕耘により破壊擾乱を受けていたため、擾乱部分をていねいに掘り下げ、柱穴掘り方の検出に努めた。精査により本建物跡は東西2間、南北3間の南北棟で、南北桁行き5.4m、東西梁行き4.6mの規模を測り、平面積は24.84m<sup>2</sup>となることがわかった。建物の軸方向はN-8°-Wである。

2間×3間の遺物

本建物跡を構成する柱穴は10個確認した。北西隅の柱穴から1552、1554、1310、1309、1551、1553、1555、1323、1321、1318である(第39図)。建物東桁行きの長さは5.4mで柱穴の柱間寸法は北から1.8m+1.8m+1.8mである。これに対応する西桁行きの長さは5.4mで、その柱間寸法は1.8m+1.8m+1.8mである。北側梁行きの長さは4.6mで、柱間寸法は東から2.3m+2.3mを測る。南側梁行きは長さ4.6mである。南側梁行きの柱間寸法は東から2.3m+2.3mを測る。柱穴掘り方の平面形は不整の隅丸方形と思われるが、後世の破壊などで形状がはっきりしないものがある。規模は径50~60cm前後の範囲に収まり、柱痕は7ヶ所で確認した。柱痕は直径14~18cmの円形を呈しており、ほぼ掘り方の底まで達している。柱痕の堆積土は炭混じりの暗褐色シルトが主である。掘り方埋め土から土器器の破片が出土した。土器は掘り方が埋まる段階に混入したものと考えられる。S B 1515建物跡の時期は出土した遺物や柱の規模や配置から平安時代に位置づけられる。

**S B 1540建物跡** 本建物跡は中央区13-16・17グリッドに位置し、検出面はIV層下部である。遺構確認のためグライ化したシルト層まで掘り下げたが、本来はIV層上面で検出できたものとみられる(第41図)。この建物の北側にはS B 900建物跡がある。また、建物中央を北からS D 569溝跡、西からS D 1253溝跡があり、S D 880につながっている。S D 880の溝跡がS B 1540建物跡の柱掘り方を切っていることからS B 1540→S D 880の順序がとらえられ、この溝は南側の柱掘り方を部分的に削っている。本建物跡は南北方向に2間、東西方向に2間の柱穴が並び、純柱建物跡と考えた。また、東西方向よりも南北方向の間隔が長いので南北棟と判断しておく。建物棟の軸方位はN-2°-Wを指す。

2間×2間の純柱建物

柱穴の掘り方は25×27cm~42×53cmである。平面形は円形もしくは不整な梢円形で深さは18~24cmを測る。柱痕は直径12~15cmの円形となる。柱痕は暗褐色砂質シルトである。柱穴の間隔は東側の桁行きで北側から2.4m+2.4m、中柱列で北から2.4m+2.4m、西桁行きで2.4m+2.4m、梁行きでは北梁列の東から1.9m+2.1m、中柱列で1.9m+2.1m、南側で東から1.9m+2.1mである。遺物はE B 1536掘り方の埋土より須恵器坏・土器器壺の破片が11点出土している。

**S B 1600建物跡** S B 1600建物跡は、中央区ほど15.16.17-11.12.13グリッドに位置している。S B 1470建物跡の東、4mのところにある。また、建物の東半分は試掘トレンチにより掘り下げられ、柱穴などの確認ができなかった。遺構検出面はIV層下部である。確認面の標高は213.5mで、現状は平坦ながら、ややなだらかな高まった地形をなしている(第42図)。

本建物跡は二重に囲む柱列からなり、第1（内側身舎）の柱列は11個の柱穴、第2の柱列二面廻の建物（外側）は、9個の柱穴を検出した。身舎の北桁行きは9.55m、南桁行きは9.4mである。東梁行きは4.9m、西梁行きは4.9mである。第2の柱列は建物の縁と考えられ、トレンチなどで確認できなかった柱穴もあるが、その大きさは東西9.5m×南北7.4m、面積は70.3m<sup>2</sup>を測る。北桁行きを基準とした建物の長軸方向はE-3°-Nで、SB 1500建物跡と規模や向きが同じである。

身舎に相当する第1柱列の各柱間寸法は、北側の桁行きで東から2.3m (2.3)+(2.3)+2.6mで、南側桁行きは東から2.3m+2.3m+2.3m+2.6mとはほぼ一様である。また、梁行きについては東側で4.9m、西側で4.9mである。柱穴の平面形は円形をしている。それぞれの直径及び辺の大きさは20~25cmの範囲にあり、その深さは23~30cmの間にある。EB 779、1010、1097に径12cmあまりの柱痕を認めた。柱痕はすべて褐色シルトである。柱痕の認められないものについては、柱を抜き取り埋ったものと考えられる。

身舎に付属する縁と考えられる第2柱列の縁の出は南に150cm、北に100cmである。各柱穴の柱間寸法は北側柱列で2.3~2.6mである。南側柱列は東から2.3m+2.21m+2.4m+2.6mである。柱穴の平面形は梢円形や円形をしている。柱穴の大きさは径15~22cmの範囲にあり、それぞれの深さは16~20cmを測る。総じて身舎を構成する柱穴よりやや小さい傾向がある。褐色シルトあるいは暗褐色シルトの柱痕を652・1125で認めた。柱痕のないものについては抜き取った後に堆積したものと考えられる。

本建物跡は柱列が二重に配置することから二面縁を持つ建物跡と考えられる。東西4間×南北2間、そして縁を含めた建物全体の面積は70.3m<sup>2</sup>である。南と北の縁は身舎の桁行きに対応し4間である。これに対し東と西は二間となり、中央に柱が建つことから平入りの建物であったと考えられる。出土遺物から所属時期を明確にできないものの柱の規模や配置、堆積土から中世から近世にかけての時期に属するものと考えられる。またSB 1500建物跡と柱は位置や規模が類似する

**SB 1601建物跡** 本建物跡は中央区、15-9・10グリッドに位置する。遺構確認面はIV層下部1間×3間の建物であるが、本来はIV上面で確認できたものと考えられる。現状の地形は平坦であり、確認面の標高は、213.5m前後では一定する（第43図）。本建物跡は桁行き3間、梁行き1間の東西棟あり、桁行きを基準とした建物の主軸方向はE-4°-Nを指す。建物跡は8個の柱穴で構成される。桁行きの長さは7.3mを測り、桁行きの柱間寸法は東から1.8m+3.5m+2.5mとなる。梁行きは1間であり、計測値は1.8m（1尺）である。以上の計測値により建物の面積は13.1m<sup>2</sup>となる。柱穴掘り方のプランは梢円形や隅丸長方形を基調とする。柱穴の平面規模は径18~40cmとなり、概して20cm前後のものが多い。検出面からの深さはEB 1120・1133で16cm、他のものは8~12cmと浅く、両者に差がみられる。柱穴規模に大小が認められることについてその位置からは規則性は見出せず、現状からその理由について推測するに至っていない。

**SB 1602建物跡** 本建物跡は中央区南側、17・18-7・8グリッドに位置する。遺構確認面はV層上面であるが、本来はIV層で確認できたものと考えられる。現状の地形は平坦であり、確認面の標高は、213.5m前後では一定する（第44図）。

本建物跡は桁行き5間、梁行き2間の東西棟建物跡であり、桁行きを基準とした建物の主軸

方向はE - 1° - Nを指す。建物跡は12個の柱穴で構成される。桁行きの長さは9.4mを測り、2間×5間の建物  
桁行きの柱間寸法は東から1.2m + 2.2m + 2.0m + 2.0m + 2.0mとなる。梁行きは2間であり、  
東側梁行きは4.2m、西側梁行きは4.2mである。建物の平面積は39.48m<sup>2</sup>となる。柱穴の平面  
プランは円形を基調とする。掘り方の平面規模はEB1604が最小で径22cm、最大がEB1547で  
径42cmとなる。検出面からの深さは25~40cmである。本建物跡に伴う柱穴から遺物の出土  
はみられない。S B 1500建物跡と重複しているが、前後関係ははっきりしなかった。

**S B 1603建物跡** 本建物跡は中央区、15 - 14グリッドに位置する。遺構確認のためIV層下部  
まで掘り下げたが、本来はIV上面で検出できたものと考えられる(第43図)。確認面の標高は  
213.5mである。本建物跡は建物の主軸方向からS B 1600建物跡やS B 860建物跡と並存して  
いたと推定される。本建物跡は1間×3間の建物で、南北向きを基準とした建物の主軸方向は  
E - 4° - Nを指す。建物跡は8個の柱穴で構成されるが2ヶ所で確認していない。柱間寸法は  
東西1.8m、1.8m、2.0m、南北2.0mとなる。以上の計測値により建物の平面積は112m<sup>2</sup>となる。  
柱穴掘り方のプランは円形を基調とする。掘り方の平面規模は径16~24cmとなり、検出面か  
らの深さは20~25cmと浅い。

## 西 区 (第45~50図)

**S B 300建物跡** 本建物跡は西区の北側、25~27-5~7グリッドに位置する。検出面はIV  
層下部である。遺構確認が困難な堆積層のため、少しずつ掘り下げ検出したが、本来はIV層上  
面で検出できたものとみられる。本建物は南北方向に3間、東西方向に3間の柱穴が並ぶ。柱  
穴は66、77、18、13、14、28、30、23、25、35、24、31、32、33、50、48である。建物は東西  
方向の間隔が長いので東西棟と判断しておく。建物棟の東西軸の方位はN - 2° - Wを指す。

柱穴の掘り方の規模は15×18cm~22×25cmである。平面形はやや不整円形で、深さは7  
~12cmである。柱穴の間隔は東西列の梁行きで北側から1.0m + 2.3m + 2.0m + 2.0m桁行き  
南北列で東側から1.3m + 3.0m + 1.3mである。規則的に配置しているものの間尺は一定して  
いない。東面の桁行きの中ほどにある二本の柱跡は入り口部分に相当することも考えられる。入口部分  
柱穴からの遺物の出土はなかった。

**S B 1620建物跡** 本建物跡は西区の北側27~29-4~7グリッドに位置する。遺構検出面は  
IV a層である。建物の規模は南北3間、東西4間の東西棟の総柱建物跡である。柱穴の掘り方  
は12cm×16cm~20cm×26cmの円形で検出面からの深さは7~10cmと浅い。柱痕は明確  
でなく、遺存状態がよくない。この建物の梁行きは東側柱列で1.5m + 1.3m + 1.8mの4.6mを  
測り、桁行きは南側柱列で東から1.5m + 1.8m + 1.8m + 1.8mの6.9mを測る。平面積は33.8m<sup>2</sup>  
となる。柱穴の埋土からの遺物の出土はない。本建物跡が機能した時期は掘り方の規模や建物  
配置、軸向きから中世と考えられる。柱跡の堆積状況からS B 300建物跡よりも先行する。

**S B 1621建物跡** 本建物跡は西区の北側に、21~23-3~6グリッドに位置する。遺構検出  
面はIV a層である。建物の規模は南北3間、東西5間の東西棟の総柱建物跡である。南に位置  
するS B 1620建物跡と柱筋が通っており、建物間の間隔が開くが、一つの建物を構成する可  
能性がある。また、東側にも柱筋の通っている箇所があるが東側に達する明確な根拠がなく保  
留しておく。

1間×3間の建物?

入口部分

3間×4間の総柱建物

3間×5間の総柱建物

柱穴の掘り方は12cm × 16cm ~ 23cm × 28cm の円形で検出面からの深さは9 ~ 15cmと浅い。柱痕は明確でなく、遺存状態がよくない。この建物の梁行きは西側柱列で1.3m、1.8m、2.0mの5.1mを測り、桁行きは南側柱列で東から1.8m + 1.8m + 1.8m + 1.8m + 1.8mの9.0mを測る。平面積は42.14m<sup>2</sup>となる。柱穴の埋土からの遺物の出土はない。本建物跡が機能した時期は掘り方の規模や建物配置、軸向きから中世と考えられる。柱跡の堆積状況からS B 300建物跡よりも先行する。S B 1620建物跡とS B 1621建物跡は共に機能していたと見られ、南側には塀(S A 1625)が残っている。

## 2 柱列跡

縄の木船跡からは柵跡あるいは堀跡と考えられる柱列跡が11基検出された。これらは他の遺構との関係や出土土器から大きく2群に分けることが可能である。具體的には古代の獨立柱建物跡と中世以降の建物跡に関わる付属施設である。

**S A 1455柱列跡** S A 1455柱列は14 - 7グリッドに位置し、近接して北側にS B 1450がある。検出面はIV b層からV層にかけて確認し、検出面での標高は213.3mである。柱列は3個の柱穴で構成され、全長4.8m、柱間寸法はE B 1269とE B 1268間が2.3m、E B 1268とE B 1267間が2.5mとなり、柱列の軸向きはE - 3° - Nとなる。柱穴掘り方は不整方形を呈し、規模は一辺55 ~ 70cmを測る。柱痕はすべてに認められ、径は16 ~ 18cmを測る。検出面からの深さは45cm前後を有していた。S A 1455柱跡はその位置関係からS B 1450と並置されていた可能性が高く、3つの柱跡は柵としての機能を担っていたと考えられる。

**S A 1471柱列跡** S A 1471柱列は16 - 10グリッドに位置し、近接して西側にS B 1470があり、東側にはS B 1600が位置する。検出面はIV b層からV層にかけて確認し、検出面での標高は213.4mである。柱列は4個の柱穴で構成され、全長5.2m、柱間寸法はE B 1004とE B 1008の間が1.7m、E B 1008とE B 1024の間が1.7m、E B 1024とE B 1015の間が1.8mとなり、柱列の軸向きはN - 2° - Wとなる。柱穴掘り方は不整方形を呈し、規模は一辺40 ~ 50cmを測る。柱痕はすべてに認められ、径は20 ~ 23を測る。検出面からの深さは40cm前後を有していた。S A 1471柱跡はその位置関係からS B 1470と並置されていた可能性が高い。4つの柱跡は柵としての機能を担っていたと考えられる。

**S A 1495柱列跡** S A 1495柱列は14 - 9グリッドに位置し、近接して北側にS B 1480がある。検出面はIV b層からV層にかけて確認し、検出面での標高は213.3mである。柱列は3個の柱穴で構成され、全長4.8m、柱間寸法はE B 1039とE B 1104の間が2.3m、E B 1104とE B 1108の間が2.5mとなり、柱列の軸向きはE - 3° - Nとなる。柱穴掘り方は不整円形を呈し、径は55 ~ 60cmを測る。柱痕は一部認められ、径は16 ~ 18cmを測る。検出面からの深さは30cm前後を有していた。S A 1495柱跡はその位置関係からS B 1480と並置されていた可能性が高く、3つの柱跡は柵としての機能を担っていたと考えられる。

**S A 1541柱列跡** S A 1541柱列は中央区南側に南北に長く位置し、近接して西側にS D 1046があり、東側にはS B 1580が位置する。検出面はIV b層からV層にかけて確認した。柱列は確認したものだけで14個の柱穴で構成され、全長16m、柱間寸法は40 ~ 60cmの間隔で配置され、柱列の軸向きはE - 2° - Nとなる。柱穴掘り方は円形を呈し、規模は径7 ~ 10cmを測

る。検出面からの深さは15cm前後を有していた。S A 1541柱跡はその位置関係や堆積土の状態からS B 1470・S B 1480と並置されていた可能性が高く、柱列跡は壠あるいは塀としての機能を担っていたと考えられる。

**S A 1590・1591柱列跡** 本柱列跡は26-10・11・12グリッド、S B 960建物跡の南脇に位置する。遺構確認面はIV a層で、確認面の標高は213.5mを測り、ほぼ平坦な地形となっている。S A 1590柱列は4間5個の柱穴で構成され、柱列の軸方向はN-20°-Eを指す。柱穴の平面プランは円形を基調とし、平面規模はいずれも15-23cmを測る。S A 1591柱列は2間3個の柱穴で構成され、柱列の軸方向はN-11°-Eを指す。柱穴の平面プランは円形を基調とし、平面規模はいずれも13-15cmを測る。

**S A 1611・1613柱列跡** 本柱列跡は16-17グリッドに位置する。遺構確認面はIV a層上面で、確認面の標高は213.5mを測り、ほぼ平坦な地形となっている。柱列は2間3個の柱穴で構成され、二列に並ぶ。どちらも列の軸方向はE-5°-Sを指す。柱穴の平面プランは円形を基調とし、平面規模はいずれも12-16cmを測る。検出面からの深さはバラツキがあり、E P 858で22cm、E P 852で36cmとなる。遺物の出土はない。

**S A 1612柱列跡** 本柱列跡は16-17グリッドに位置する。遺構確認面はIV a層上面で、確認面の標高は213.5mを測り、ほぼ平坦な地形となっている。柱列は5間6個の柱穴で構成される。柱間距離は、西側で60cm、東端の柱穴だけ1m50cm離れている。列の軸方向はE-6°-Sを指す。柱穴の平面プランは円形を基調とし、平面規模はいずれも15-20cmを測る。検出面からの深さはバラツキがあり、E P 863で27cm、E P 866で35cmとなる。遺物の出土はない。S A 1611-1613は類似した掘り方と堆積土であり、ほぼ同時期に掘り込まれたものと考えられる。

**S A 1615柱列跡** 本柱列は7-9-17グリッドに位置し、西側にS D 880があり、東側には重なるようにS D 1425が位置する。検出面はIV b層で検出面での標高は213.3mである。柱列は確認したものだけで6個の柱穴で構成され、全長9m、柱間寸法は1.1-2.2mの間隔で配置され、柱列の軸向きはN-8°-Eとなる。柱穴掘り方は梢円形を呈し、規模は径20-30cmを測る。検出面からの深さは15cm前後を有していた。S A 1615柱跡はその位置関係や堆積土の状態からS D 1425よりも新しいことがわかる。遺物の出土はない。

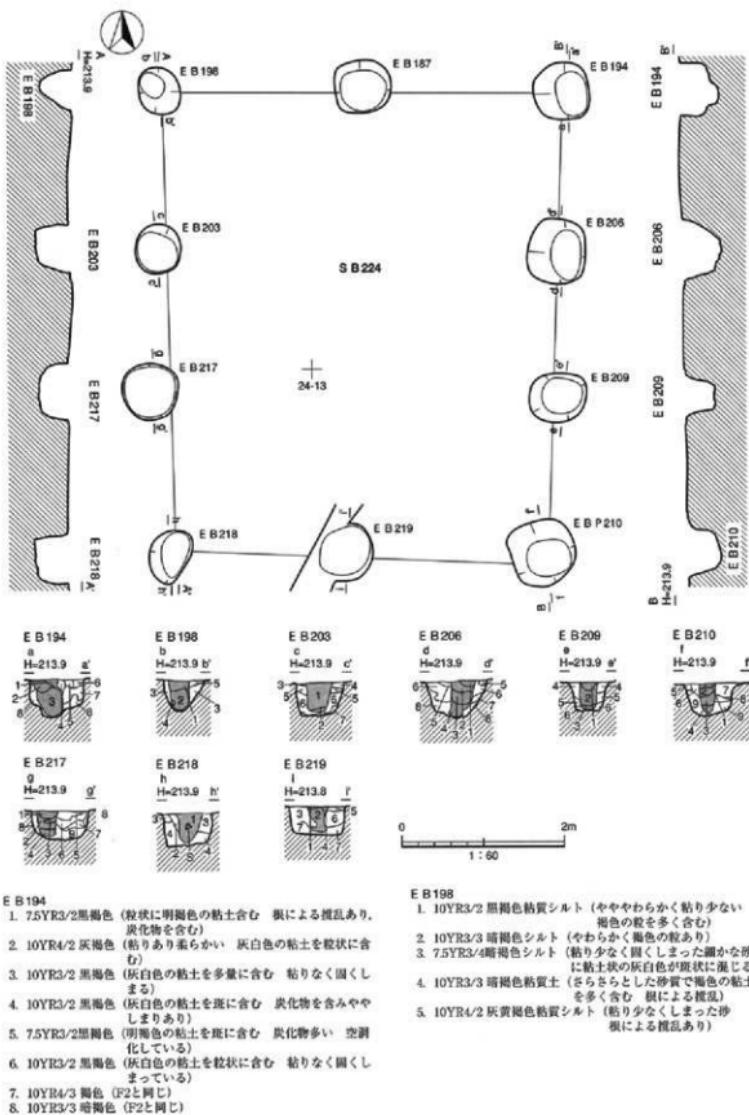
**S A 1625柱列跡（西区）** S A 1625柱列は西区に位置し、近接して北側にS B 1620建物跡がある。検出面はIV b層からV層にかけて確認し、検出面での標高は213.4mである。柱列は確認したものだけで11個の柱穴で構成され、全長14m、柱間寸法は1.3-1.8mの間隔で配置され、柱列の軸向きはE-13°-Sとなる。柱穴掘り方は円形を呈し、規模は径15-20cmを測る。検出面からの深さは20cm前後を有する。S A 1625柱跡はその位置関係や堆積土の状態からS B 1620と並置されていた可能性が高く、柱列跡は壠としての機能を担っていたと考えられ、さらに西側に延びていた可能性がある。

## 第5表 鳩の木館跡検出の建物跡一覧

番号	グリッド位置	規格	接触方向	柱数	柱番号	規形種	面S	柱径深	柱行S	梁行S	梁間R	梁間F	面積	時期		
SB 224	23 - 12	2 × 2	N-3-W	10	196 197 198 199 200 201 202 203 204 205	50 ~ 60	20 ~ 25	5.4m	4.8m	1.8m	2.4m	27.84	古代			
SB 300	西区	2 × 3	N-E-W	16	66 77 15 13 14 28 30 23 25	15 ~ 25	7 ~ 12			5.8m	5.3m		30.7	中世		
SB 820	20 - 19	4 × 4	柱柱	N-1-E	26	587 665 714 730 732 691 718 717 735 701 720 805 711 759 760 765 814 837 700 961	70 ~ 100	20 ~ 30			13.5m	13.2m	3.3m	33m	178.2	中世
SB 849	15 - 16	2 × 4	N-E-E	12	1489 835 836 837 838 859 841 1490 1491 846 846 844 843	40 ~ 55	25 ~ 40	12 ~ 15	7.5m	5.0m	1.8m	2.5m	38.5	古代		
SB 360	17 - 13	2 × 3	N-E-W	13	676 690 684 782 675 776 783 784 792 791 789 1592	20 ~ 30	25 ~ 40	8 ~ 13	4.8m	3.9m	1.6m	2.0m	18.7	中世		
SB 900	14 - 17	2 × 2	W-7-N	9	845 842 874 871 872 873 877	20 ~ 25	13 ~ 22			9.0m	6.0m	4.5m	3.0m	54	近畿以降	
SB 940	15 - 16	2 × 2	柱柱	N-E-E	8	854 853 832 850 851 849 847	20 ~ 33	22 ~ 34	12 ~ 16	3.4m	3.3m	1.7m	1.7m	11.2	古代	
SB 960	27 - 11 28 - 11	3 × 5	柱柱	N-20-E	16	956 957 959 945 942 264 262 941 947 268 244 245 249 946	20 ~ 30	15 ~ 17			(16.5m)	(19m)	2.1m	2.1m	41	中世
SB 980	25 - 10 26 - 10	3 × 6	N-10-W	16	954 278 281 273 251 269 953 1609 324 329 315 287	20 ~ 30	15 ~ 50	13 ~ 17	11.1m	5.4m	1.8m	1.8m	59.9	古代		
SB 1450	14 - 7	2 × 3	柱柱	N-2-W	11	1170 1446 1068 1166 1064 1067 1165 1061 1062 1447 1162	45 ~ 70	40 ~ 55	22	6.7m	4.8m	2.2m	2.6m	32.2	古代	
SB 1460	11 - 7	(2) ×	N-3-E	3	1279 1281 1282	40	60	20	(3.6m)		1.8m			古代		
SB 1470	15 - 9	2 × 3	N-3-W	10	1546 1547 1548 1549 1550 1505 993 1001 1004 1006	40 ~ 50	20 ~ 30	15 ~ 18	5.4m	4.4m	1.8m	2.2m	21.7	古代		
SB 1480	15 - 9	2 × 2	柱柱	N-3-W	8	1025 1035 1037 1018 1028 1031 1026 1029	30 ~ 60	30 ~ 45	13 ~ 16	4.4m	4.4m	2.2m	2.2m	19.3	古代	
SB 1488	13 - 7 13 - 8	1 × 3	E-18-N	8	1487 1481 1270 1483 1486 1272 1277 1484	12 ~ 33	29			6.0m	3.0m	2.0m	3.0m	18	中世	
SB 1500	18 - 8 18 - 9	2 × 4	2面 縦縫	E-3-N	24	1190 1193 1178 1179 1511 1510 1514 1494 1517 1077 1078 1075 1602 1052 1054 1044 1062 1462 1042 1460 1512 1564 1043 1625	16 ~ 30	20 ~ 30	16 ~ 12	9.5m	7.3m	2.3m	2.4m	69.3	中世	
SB 1505	13 - 12	2 × 3	N-2-W	10	1542 1543 1226 1544 1224 1545 1226 1234 1233 1216	40 ~ 55	25 ~ 40	14 ~ 16	5.8m	5.0m	1.9m	2.5m	29	古代		
SB 1515	9 - 14 10 - 15	2 × 3	N-8-W	10	1552 1554 1310 1309 1551 1555 1323 1321 1318 1553	50 ~ 60	40 ~ 65	14 ~ 18	5.4m	4.6m	1.8m	2.3m	24.8	古代		
SB 1540	13 - 17	2 × 2	柱柱	N-2-W	9	909 1561 912 1836 1563 914 1538 1533 1532	25 ~ 53	18 ~ 24	12 ~ 15	4.9m	4.0m	2.4m	2.0m	19.2	古代	
SB 1600	16 - 11 16 - 12	2 × 4	南北	E-4-N	22	1014 1092 682 1010 1093 1095 1125 1129 1128 1028 1628 1596 1597 1127 1129 1130	15 ~ 25	20 ~ 30	16 ~ 12	9.4m	7.4m	2.3m	(2.4m)	66.5	中世	
SB 1601	16 - 12	1 × 3	E-4-N	5	1126 1133 1121 1147 1143 1137 1138 1120 1130	18 ~ 40	20 ~ 25			7.7m	1.7m		1.7m	13.1	中世	
SB 1602	18 - 8 18 - 9	2 × 4	E-1-N	12	1181 1177 1559 1604 1499 1030 1074 1605 1048 1045 1547 1006	12 ~ 33	20 ~ 25	15 ~ 18	9.4m	4.2m	2.0m	2.1m	39.5	中世		
SB 1603	16 - 14	1 × 1 ?	N-4-E	5	295 792 797 799 1598	16 ~ 24	20 ~ 24	20 ~ 25	5.6m	2.0m	1.8m	2.0m	11.2	中世		
SB 1620	西区	3 × 4	N-22-E	15	116 120 127 145 125 109 36 144 168 139 121 136 138 143	12 ~ 26	7 ~ 16			6.9m	4.6m	1.8m	1.5m	33.8	中世	
SB 1621	西区	3 × 5	N-22-E	20	98 118 121 122 149 114 117 22 147 148 113 118 135 134	12 ~ 28	9 ~ 15			9.0m	5.1m	1.8m	(1.6m)	45.9	中世	
SA 1541	中央南			N-3-W		廻り柱列多数	5 ~ 15						0.7 ~ 1.2m		中世	
SA 1455	14 - 7			E-3-N	3	1269 1268 1267	55 ~ 70	30	16 ~ 18	4.8m		2.0 ~ 2.2m			古代	
SA 1471	16 - 10			N-2-W	4	1004 1008 1024 1015	40 ~ 50	35	20 ~ 23	5.2m		1.8m			古代	
SA 1495	14 - 9			E-3-N	3	1029 1104 1108	55 ~ 60	30	16 ~ 18	4.8m		2.4m			古代	
SA 1611	16 - 17			E-5-S	3	857 858 862	15 ~ 20	36		0.4 ~ 0.7		1.6m			中世	
SA 1612	16 - 17			E-5-S	5	863 864 865 866 867	15 ~ 20	35		0.5 ~ 0.7		0.6 ~ 0.8m			中世	
SA 1615	東区			N-8-E	8	1378 1377 1376 1417 1418 1422 1423 1424	20 ~ 26	15		1.1 ~ 2.2		1.6 ~ 2.5m			不明	
SA 1625	西区			E-12-S	11	104 105 106 122 124 140 141 157 156 155 156	15 ~ 20	30		1.3 ~ 1.8		1.5 ~ 2.6m			中世	

\*柱間：柱間奥から柱間幅を示す。  
\*柱行：柱行や柱行の範囲を示す。柱数の場合は、平均値をとった。  
\*面積：面積の最もかから範囲を示す。  
\*面積：柱行の最もかから範囲 (m²)





第17図 S B 224 遺物跡 (1)

### III 枝出した遺構・遺物

#### E B203

1. 10YR3/2 黒褐色シルト (やや柔らかくやや粘りあり、根が残り、空洞多い)
2. 25GY3/1 黒褐色粘質シルト
3. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (柔らかくしまりの弱い砂)
4. 10YR3/3 黒褐色砂シルト (固くしまっていて灰白色の粘土を多く含む 根が多く残る)
5. 10YR3/3 砂色シルト
6. 10YR3/3 増褐色砂質シルト (粘りが強く灰白色的粘土を斑に含む)
7. 10YR4/2 灰黄色砂質シルト (固くしまっていて粘り強い 灰白色的粘土を多く含む)

#### E B206

1. SYR3/2 増赤褐色粘質シルト (粘りなくしまっている 明褐色の粘土を粒状に含む)
2. 5YR4/1 暗褐色粘質シルト (柔らかくやや粒あり。灰白色的粘土の塊を含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト (やややわらかい 灰白色的粘土を斑状に含む 根による搅乱あり)
4. 10YR3/1 黑褐色砂シルト (ややしまっている 黄褐色砂の塊を斑状に含む)
5. 25YR3/1 増赤褐色シルト (粘りなく固い 灰白色的粘土を斑状に含む)
6. 10YR3/2 增褐色シルト (やややわらかく灰白色的粘土を斑状に含む)
7. 5YR4/1 増褐色砂質シルト (粘りなく固い 灰白色的粘土を斑状に含む)
8. 10YR4/2 増褐色砂質シルト (固くしまっている 灰白色的粘土を多量に含む)

#### E B209

1. 5YR3/1 黑褐色粘質シルト (粘り少なくしまっている 明褐色の粘土を多量に含む)
2. 10YR3/3 増褐色粘質シルト (やわらかく褐色の粘土を含む)
3. 10YR3/3 増褐色砂質シルト (粘りが少なくてしまっている 黑褐色を多量に含む)
4. 10YR4/2 灰黄色褐色シルト (やわらかく褐色の粘土を含む)
5. 7.5YR3/2 増褐色粘質土 (ややしまっている 大粒の明褐色の粘土の塊あるいは 増褐色の砂を少量含む)
6. 10YR3/4 増褐色砂質シルト (固くしまった粘土 明褐色の砂の塊を含む)

#### E B210

1. 7.5YR3/2 増褐色シルト (粘り少なくて固くしまっている 明褐色の粘土を多量に含む)
2. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト (やわらかく褐色の砂の塊を含む)
3. 7.5YR3/2 増褐色シルト (ややしまっている 粘りが強い 黑褐色の粘土を斑状に含む)
4. 7.5YR3/2 増褐色粘質土 (固くしまっている 粘りが強い 黑褐色の粘土を多量に含む)
5. 10YR3/2 黑褐色シルト (固く粘りなし 灰褐色の砂の粘土を含む)
6. 7.5YR4/1 増褐色シルト (やわらかく褐色の砂を多く含む 根による搅乱あり)
7. 10YR3/2 黑褐色シルト (ややしまっている 褐褐色の砂を多く含む 根による搅乱多い)
8. 10YR3/3 増褐色シルト (固くしまっている 増褐色の粘土の強い粘土を含む 根による搅乱あり)
9. 25YR3/3 増赤褐色粘質土 (粘りが強く 増褐色の粘土を多量に含む)

#### E B217

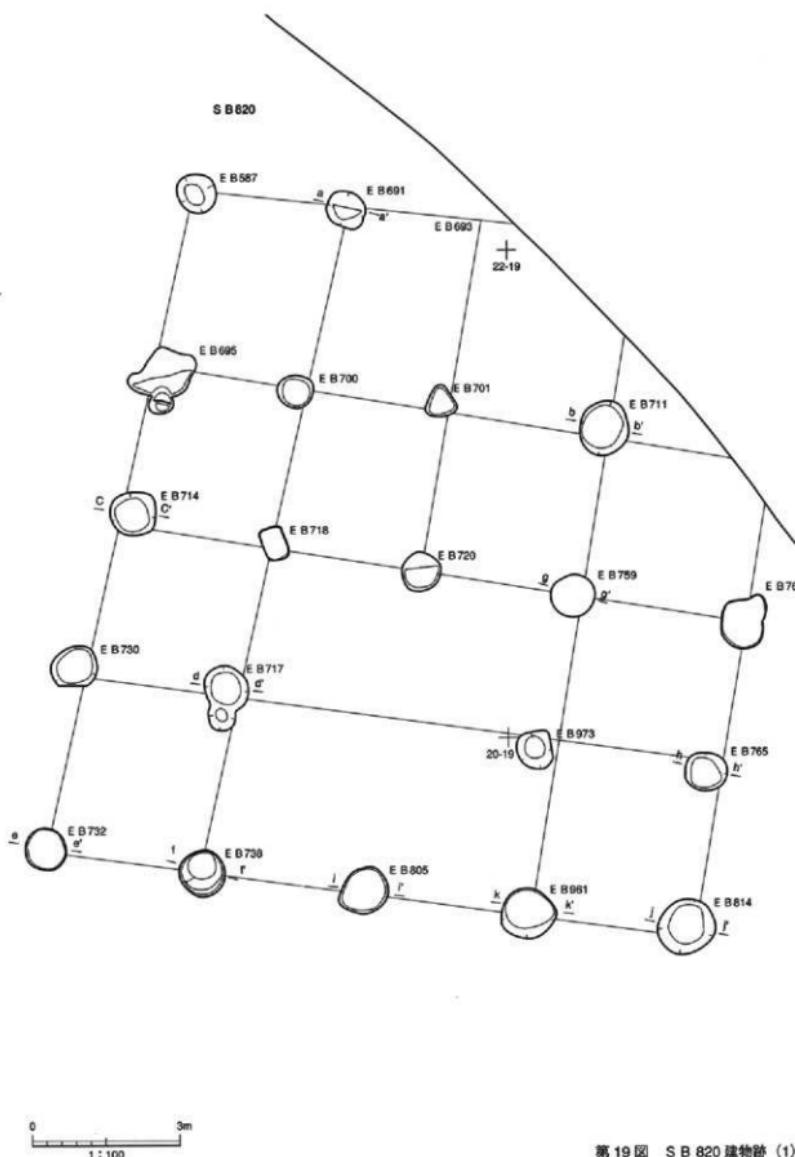
1. 10YR3/1 黑褐色粘質シルト (やややわらかくやや粘る 明褐色の粘土を含む)
2. 10YR3/3 増褐色シルト (やわらかく褐色の粘土を多く含む 空洞が多い)
3. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト (固くしまっている 明褐色の粘土を含む)
4. 10YR3/2 黑褐色粘質土 (ややしまっている 増褐色の粘土を斑に含む)
5. 10YR3/2 黑褐色シルト (やややわらかく粘りあり明褐色の粘土を含む 中央部に遺物あり)
6. 10YR3/2 黑褐色シルト (固くしまっている 明褐色の粘土を含む)
7. 10YR3/1 黑褐色粘質シルト (固くしまっている 明褐色の粘土の塊を中央に含む)
8. 7.5YR3/4 増褐色砂質シルト (やや粘りあり 細かい砂を多量に含む)
9. 10YR3/3 増褐色粘質シルト (粘りが強い)

#### E B218

1. 10YR3/1 黑褐色粘質シルト (やややわらかい 中央部にこぶし大の石を含む 上部に土師)
2. 10YR3/2 増褐色シルト (粘りなくしまっている 増褐色の粘土を斑状に含む)
3. 10YR3/3 増褐色シルト (粘りはなく黄褐色の砂が固くしまる)
4. 10YR3/2 増褐色砂質シルト (粘りなくしまっている 增褐色の粘土を斑状に含む)

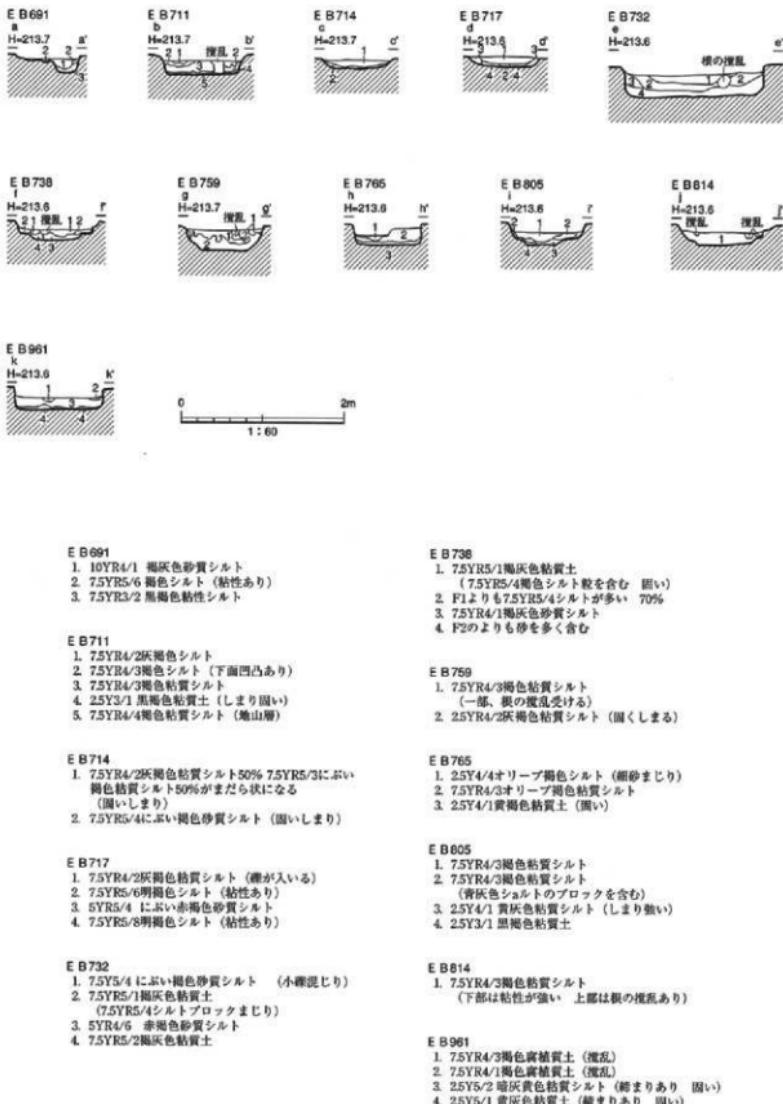
#### E B219

1. 7.5YR3/1 黑褐色粘質シルト (やわらかくやや粘りあり)
2. 7.5YR3/3 増褐色シルト (やわらかく粘り強い 明褐色の粒混じる)
3. 10YR4/2 増褐色粘質シルト (やややわらかなく粘りなし 灰白色的粘土多量)
4. 7.5YR3/2 増褐色シルト (やわらかく粘る 粒が残り搅乱あり)
5. 7.5YR3/3 増褐色シルト (やわらかくやや粘る 灰白色的粘土多量に混じる)
6. 10YR4/3 増褐色粘質シルト (やわらかく粘る 灰白色的粘土多量)
7. 10YR4/3 増褐色粘質シルト (固くしまる 灰白色的粘土多量)

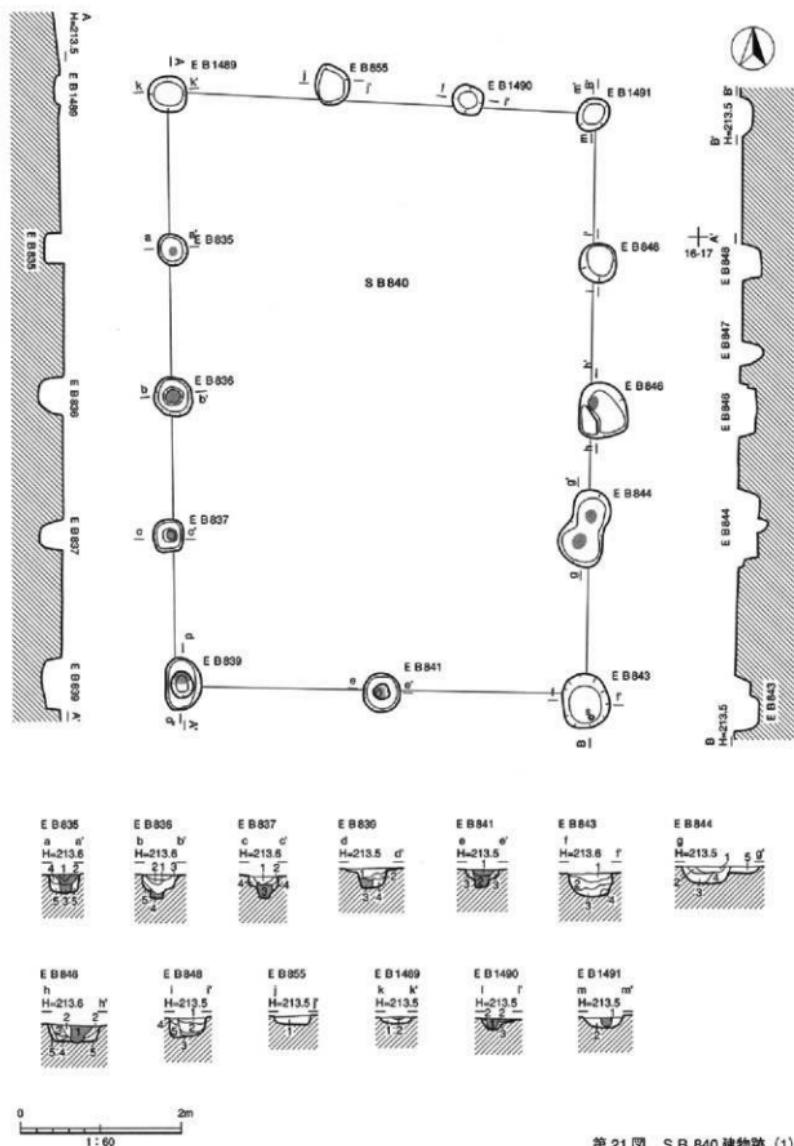


第19図 S B 820 建物跡 (1)

III 検出した遺構・遺物



第20図 S B 820 建物跡 (2)



第21図 S B 840 建物跡 (1)

### III 検出した遺構・遺物

#### E B 848

1. 75YR3/1 黒褐色シルト (75YR5/6明褐色粘質土と75YR5/1褐色粘質土が少量混じる)
2. F1より 6.75YR3/1黒褐色シルトが多い
3. 75YR3/1黒褐色シルト
4. 75YR5/6明褐色粘質土
5. 75YR5/1褐色粘質土

#### E B 835

1. 10YR3/1 黑褐色粘質土
2. 75YR4/1褐色粘質土  
(75YR5/6明褐色砂質シルトブロック混じり)
3. 75YR3/2黒褐色  
(75YR5/6明褐色砂質シルトが少量入る)
4. 75YR5/6明褐色砂質シルト
5. 75YR4/1褐色粘質土 (下部は砂を多く含む)

#### E B 836

1. 10YR3/3 暗褐色粘質土  
(75YR5/6明褐色シルトが少量混じる)
2. 10YR5/1褐色粘質土
3. 75YR5/6明褐色砂質シルト
4. 75YR3/1黒褐色粘質土 (塊片混じる)
5. 75YR5/6明褐色砂質シルト

#### E B 837

1. 75YR3/1黒褐色粘質シルト (固くしまる)
2. 75YR5/1褐色粘質シルト
3. 75YR5/6明褐色砂質シルト
4. 75YR5/1褐色シルト  
(75YR3/1黒褐色粘質土を少量含む)
5. 75Y4/2 黄褐色シルト

#### E B 838

1. 10YR3/3 暗褐色粘質土
2. 75YR3/1黒褐色粘質土  
(75YR5/6明褐色シルトブロックが混じる)
3. 75YR3/1黒褐色シルト  
(75YR5/6明褐色シルトを少量含む)
4. 75YR3/1黒褐色シルト
5. 75YR5/6明褐色砂質シルト

#### E B 841

1. 75YR5/6 明褐色粘質シルト
2. F1に75YR5/1褐色粘質シルトが混じる
3. 75YR5/6 明褐色粘質シルト  
(10YR5/1褐色シルト20%と7.5YR5/2褐色シルトブロック10%が混じる)
4. 75YR3/1 黒褐色シルト

#### E B 843

1. 75YR5/1 褐灰色粘質シルト
2. F2とF3の混合土
3. 75YR5/6明褐色砂質シルト  
(NS1/シルトの粒が塊状に混じる)
4. 75Y3/1 黑褐色シルト

#### E B 846

1. 75YR2/2暗褐色粘質シルト  
(75YR3/1シルトのブロック土が混じる)
2. 75YR5/1褐色粘質シルト
3. 75YR3/1黒褐色粘質土
4. F1とF3が混合する
5. 75YR4/1褐色粘質シルト

#### E B 844

1. 75YR3/2暗褐色粘質シルト
2. F1に75YR5/6明褐色シルトが少し混じる
3. 75YR3/1暗褐色砂質シルト (災片混じる)
4. 75YR5/6明褐色シルト
5. F1とF4が混じりあう (ブロック状)

#### E B 855

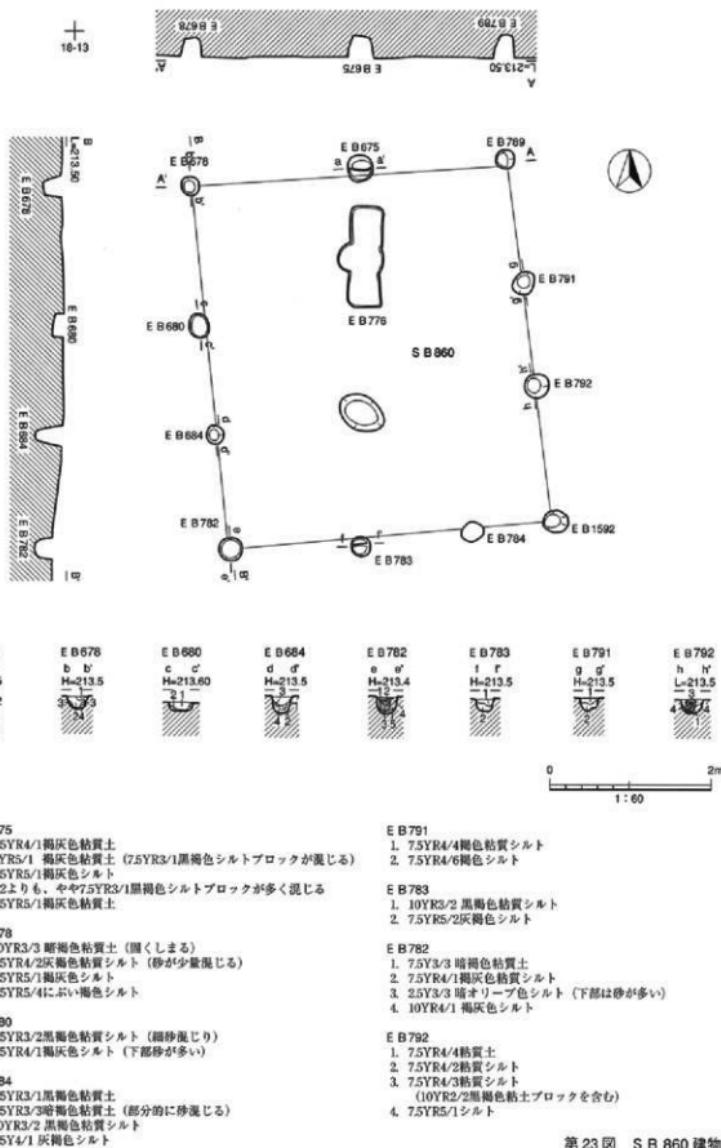
1. 10YR5/2暗褐色粘質シルト  
(75YR5/6黄褐色シルトブロック3~5cmが入る)

#### E B 1469

1. 10YR2/3 黑褐色シルト
2. 10YR4/1 褐色シルト (粗砂を多量含む)
3. 10YR4/1 褐色粘質シルト
4. 10YR4/4 暗褐色シルト  
(10YR4/4褐色砂質シルトが層状に混じる)
5. 10YR4/4 暗褐色シルト  
(10YR2/3暗褐色シルトと粗砂が少量化する)
6. 10YR4/4 暗褐色シルト  
(10YR4/4褐色粗砂が層状に混じる)

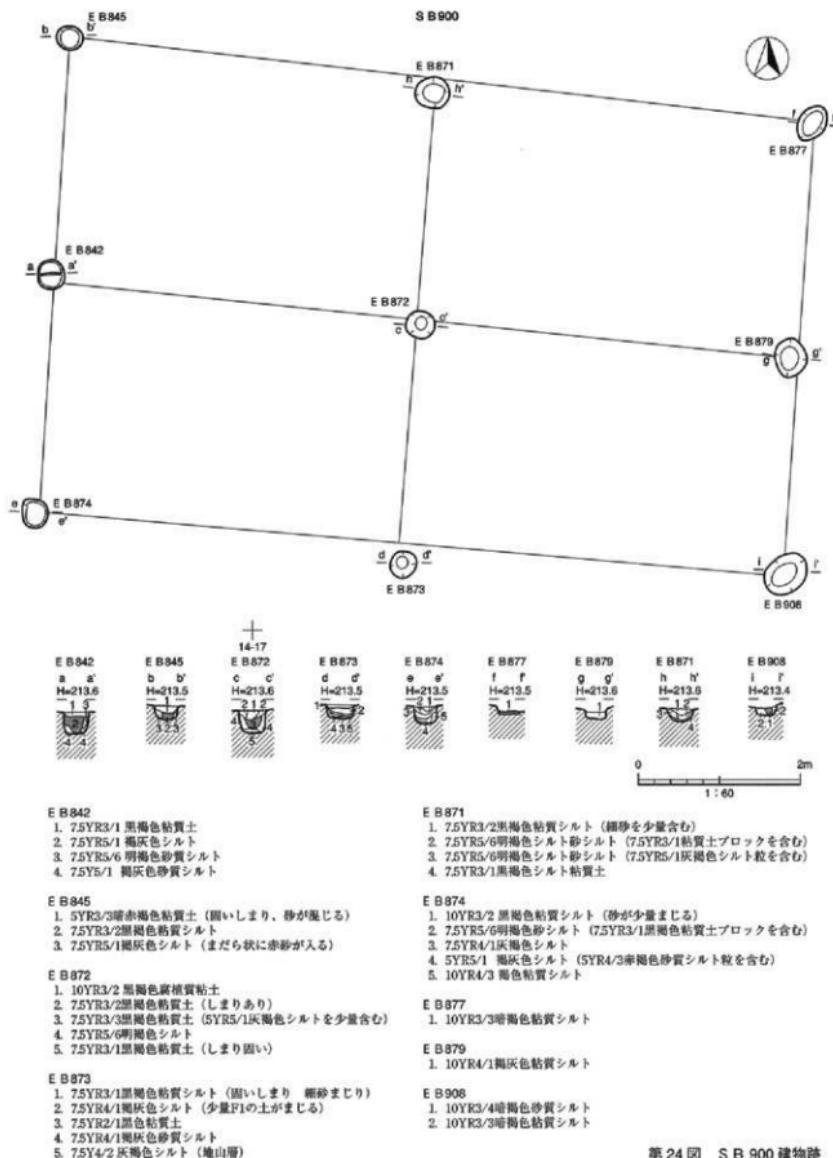
#### E B 1491

1. 10YR2/3 黑褐色シルト (粗砂が少量化する)
2. 10YR2/2 黑褐色シルト  
(10YR4/4褐色粗砂が層状に混じる)

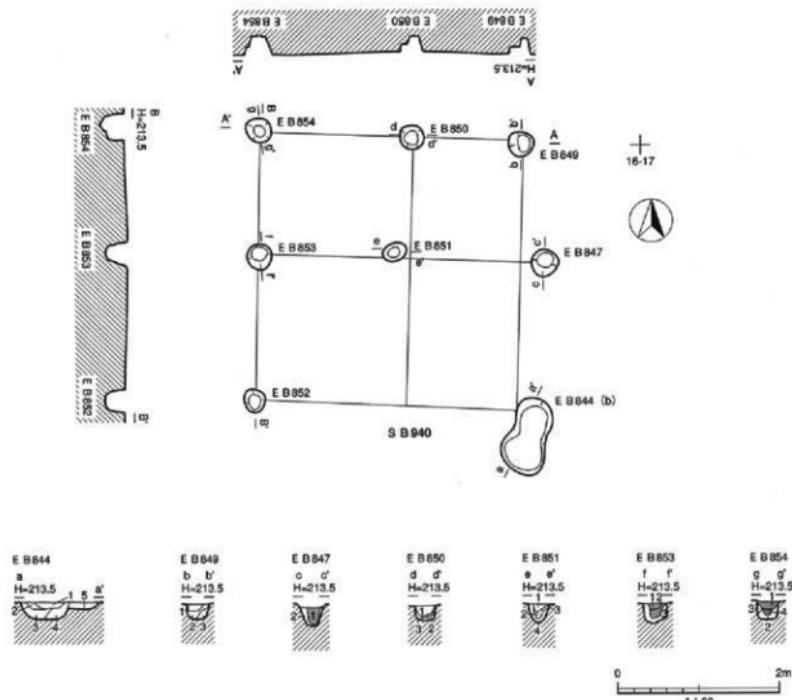


第23図 S B 860 建物跡

### III 検出した遺構・遺物



第24図 S B 900 建物跡



## E B844

1. 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
2. F1(7.5YR5/6明褐色シルト)が少し混じる
3. 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト(炭片混じる)
4. 7.5YR5/1明褐色シルト
5. F1とF4が混じりあう(ブロック状)

## E B849

1. 10YR3/3暗褐色粘質土(砂が少量混じる)
2. 7.5YR5/4明褐色砂(7.5YR5/1シルトの粒が混じる)
3. 7.5YR5/1褐灰色シルト

## E B847

1. 7.5YR3/1暗褐色粘質シルト  
(7.5YR5/1褐灰色シルトのブロックが少量混じる)
2. 7.5YR5/1褐灰色粘質シルト

## E B850

1. 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト(炭片混じり 固くしまる)
2. 7.5YR4/1褐灰色シルト
3. 7.5YR5/2黒褐色シルト

## E B851

1. 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト(固くしまる)
2. 7.5YR3/1黒褐色シルト  
(5YR4/1褐灰色シルト)
3. 7.5YR3/1褐灰色シルト  
(5YR4/1褐灰色粘質シルトが少量含む)
4. 5YR4/1褐灰色シルト

## E B853

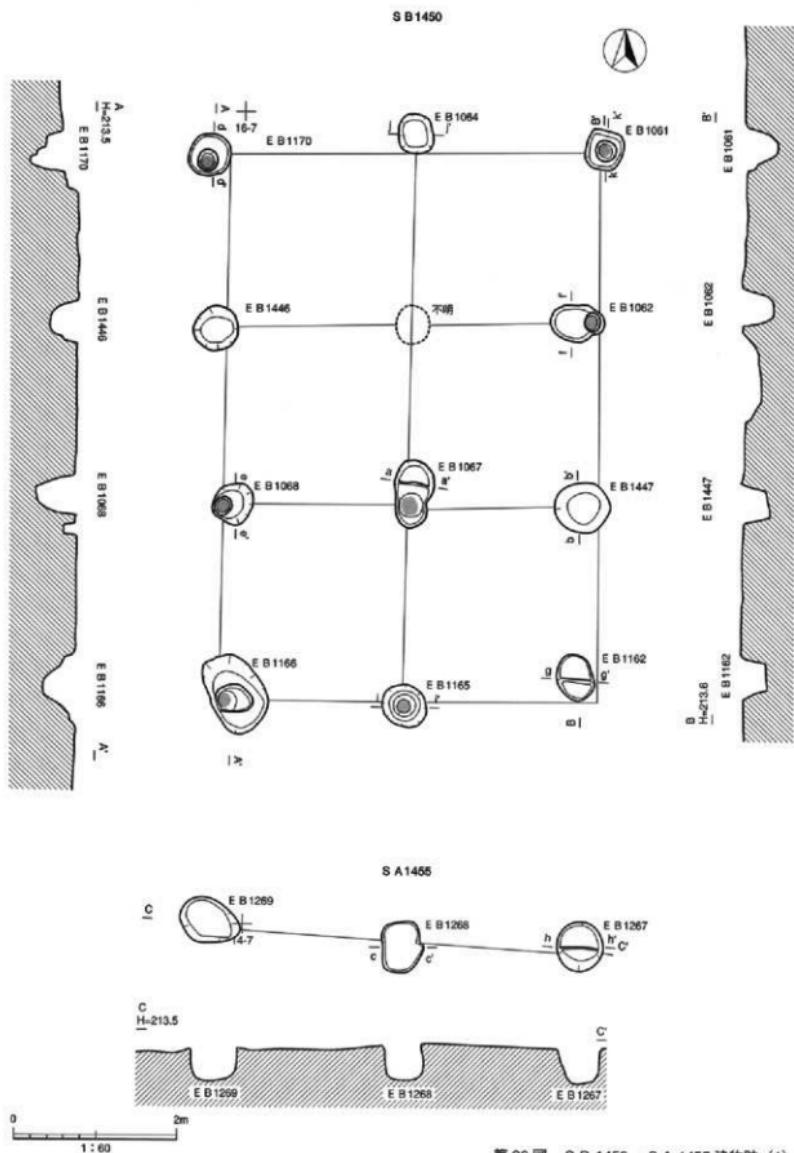
1. 7.5YR3/1黒褐色粘質土  
(7.5YR2/2黒褐色粘質シルトと砂が混じる)
2. 5YR3/3 暗褐色シルト
3. 7.5YR4/1褐灰色シルト

## E B854

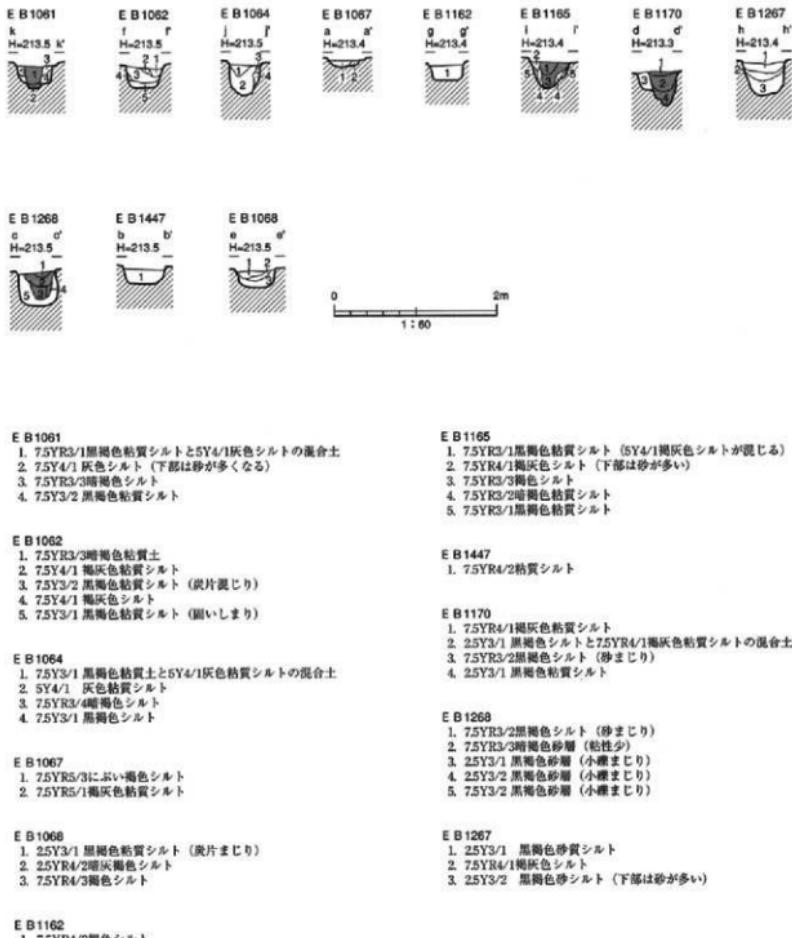
1. 7.5YR3/2暗褐色粘質シルト
2. 7.5YR5/2褐灰色粘質シルト  
(7.5YR5/1褐灰色シルトブロックが混じる)
3. 7.5YR5/4明褐色シルト
4. 7.5YR5/1褐灰色粘質土(固くしまる)

第25図 S B 940 建物跡

III 検出した遺構・遺物



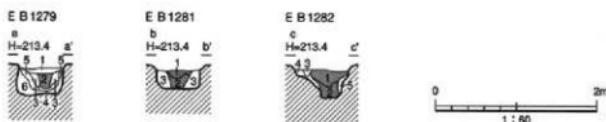
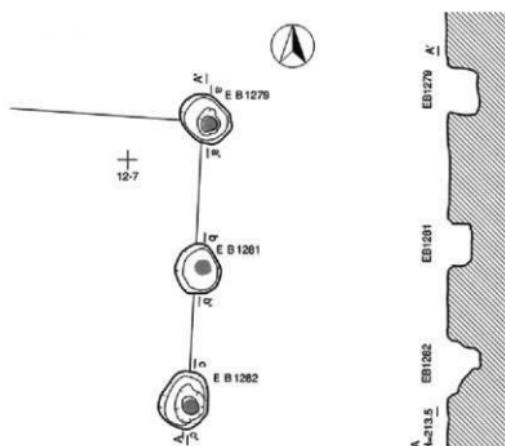
第26図 S B 1450・S A 1455 建物跡 (1)



第27図 S B 1450・S A 1455 建物跡 (2)

III 検出した遺構・遺物

S B 1460



E B 1279

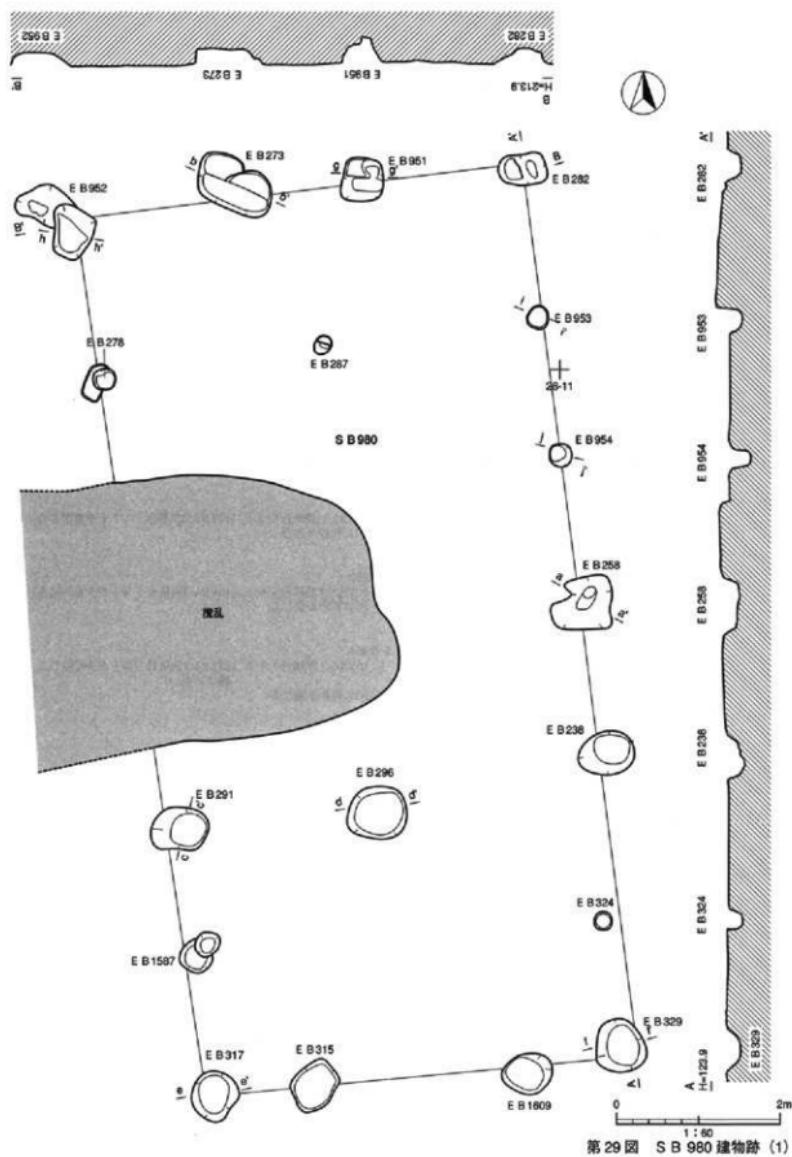
1. 25Y3/1 黒褐色シルト
2. 5Y4/1 灰色シルトブロックと25Y3/1オリーブ黒色シルトの  
混合土（炭片まじり）
3. F2よりも25Y4/1灰色が多い
4. 25Y4/3暗オリーブ黒色砂質シルト
5. 25Y3/3暗オリーブ黒色砂質シルト
6. 25Y4/2灰黄色シルト（地山土）

E B 1281

1. 75TR3/3暗褐色シルト
2. 25Y4/2 暗オリーブ褐色シルト（下部は砂が多い）
3. 25Y3/3 暗オリーブ黒褐色砂シルト

E B 1282

1. 75YR3/3暗褐色シルト（小塊を含む）
2. 25YR5/2暗オリーブ黒色砂質シルト（炭片まじり）
3. 75YR5/6明褐色砂
4. 75YR4/4褐色砂質シルト
5. 25Y4/2 オリーブ褐色砂質シルト



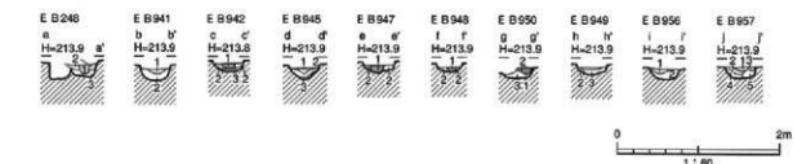
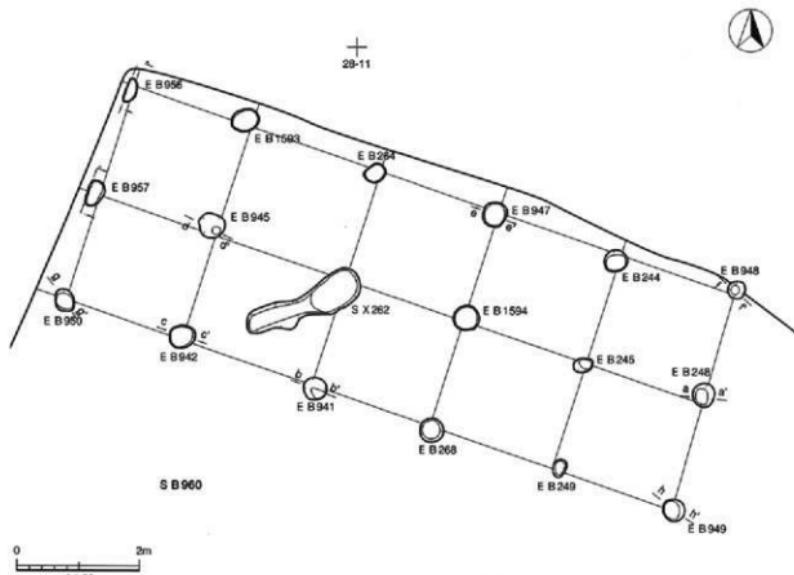
第29図 SB 980 遺物跡 (1)

### III 検出した遺構・遺物



- E B258**
- 10YR2/3 黒褐色シルト (粘性中 しまり強)
  - 10YR2/3 黒褐色シルト (粘性弱 しまり強 鉄分をおびる)
  - 10YR3/3 喧褐色シルト (粘性弱 しまり弱)
- E B273**
- 10YR4/1 黑褐色粘質シルト (灰色粘土ブロックを含む)
  - 75YR5/1 喧灰色シルト
  - 75YR5/1シルト
  - 75YR5/2シルト (上部には10YR5/4粘質シルトが混じる)
- E B291**
- 10YR2/3 黒褐色シルト (しまり中 粘性弱)
  - 10YR2/3 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
  - 10YR2/3 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
- E B296**
- 10YR2/3 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
  - 10YR2/3 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
  - 10YR2/3 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
- E B317**
- 10YR2/3 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
  - 10YR2/3 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
  - 10YR2/3 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
- E B329**
- 75YR3/4 喧褐色シルト (やや砂質をおびる しまり中 粘性弱)
  - 10YR3/4 喧褐色シルト (やや鉄分をおびる しまり中 粘性弱)
- E B951**
- 10YR4/1 喧灰色シルト (10YR2/3黒褐色シルトが少量混じる)
  - F1に粗砂を含む
  - 10YR4/1 喧灰色シルト (粗砂を含む)
- E B952**
- 10YR4/1 喧灰色シルト (10YR2/3黒褐色シルトが少量混じる)
  - F1に粗砂を含む
- E B953**
- 10YR4/1 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
  - 10YR4/1 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
- E B954**
- 10YR4/1 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
  - 10YR4/1 黑褐色シルト (しまり中 粘性弱)
- E B955**
- 10YR2/3 黑褐色シルト (10YR4/1喧灰色シルトが少量混じる)
  - F1に粗砂が混じる
- E B956**
- 10YR2/3 黑褐色シルト (10YR4/1喧灰色シルトが少量混じる  
しまり弱)
  - F1に粗砂が混じる
- E B296**
- 75YR3/4 喧褐色シルト (鉄分をおびる)
  - 75YR3/3 喧褐色シルト (10YR5/4にぶい黄褐色シルトをプロック状に含む  
しまり強 粘性中)
- E B317**
- 10YR2/3 黑褐色シルト (10YR4/6褐色シルトの小ブロックを含む しまり中 粘性弱)
  - 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (しまり中 粘性弱)
  - 10YR5/4 喧褐色シルト (10YR4/6褐色シルトを少量含む しまり中 粘性弱)
  - 10YR4/6 褐色シルト (10YR2/3喧褐色シルトを斑状に含む しまり中 粘性弱)
  - 10YR4/6 褐色シルト (10YR2/3黒褐色シルトを少量含む しまり中 粘性弱)
  - 10YR2/3 黑褐色シルト (粘性強 しまり中)
  - 10YR2/3 黑褐色シルト (10YR4/6褐色シルトを少量含む しまり中 粘性弱)

第30図 S B 980 建物跡 (2)

**E B 248**

1. 10YR2/3 黒褐色シルト (粗砂を少量含む・しまり弱)
2. 10YR2/3 黒褐色シルト (10YR4/1 開灰色粘土を少量含む)
3. 10YR4/1 開灰色粘土質土 (10YR2/3 黒褐色シルトと粗砂を少量含む)

**E B 941**

1. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR4/1 開灰色粘土を少量含む)
2. 10YR3/2 黑褐色シルト (10YR4/1 開灰色シルトが層状に混じる)

**E B 950**

1. 10YR2/3 黑褐色シルト (10YR4/1 開灰色粘土を少量含む)
2. F1に粗砂を少量含む
3. 10YR3/2 黑褐色シルト (10YR4/1 開灰色シルトが層状に含む)

**E B 942**

1. 10YR3/2 黑褐色シルト (10YR4/1 開灰色粘土を少量含む)
2. 10YR3/2 黑褐色シルト (10YR4/1 開灰色シルトが層状に混じる)
3. 10YR4/1 開灰色粘土質土

**E B 945**

1. 10YR2/3 黑褐色シルト (粗砂が少量混じる)
2. 10YR3/2 黑褐色シルト (10YR4/1 開灰色シルトが層状に混じる)
3. 10YR3/2 黑褐色シルト (粗砂を多量含む)

**E B 947**

1. 10YR2/3 黑褐色シルト (10YR4/1 開灰色シルトを少量含む)
2. 10YR2/3 黑褐色シルト (10YR4/1 開灰色シルトが斑状に混じる)

**E B 948**

1. 10YR2/3 黑褐色シルト (粗砂を含む)
2. 10YR3/2 黑褐色シルト (粗砂を多量含む)

**E B 949**

1. 10YR2/3 黑褐色シルト (しまり弱)
2. 10YR2/3 黑褐色シルト (10YR4/1 開灰色粘土質土を少量含む)
3. 10YR4/1 開灰色粘土質土 (10YR2/3 黑褐色シルトと粗砂を少量含む)

**E B 956**

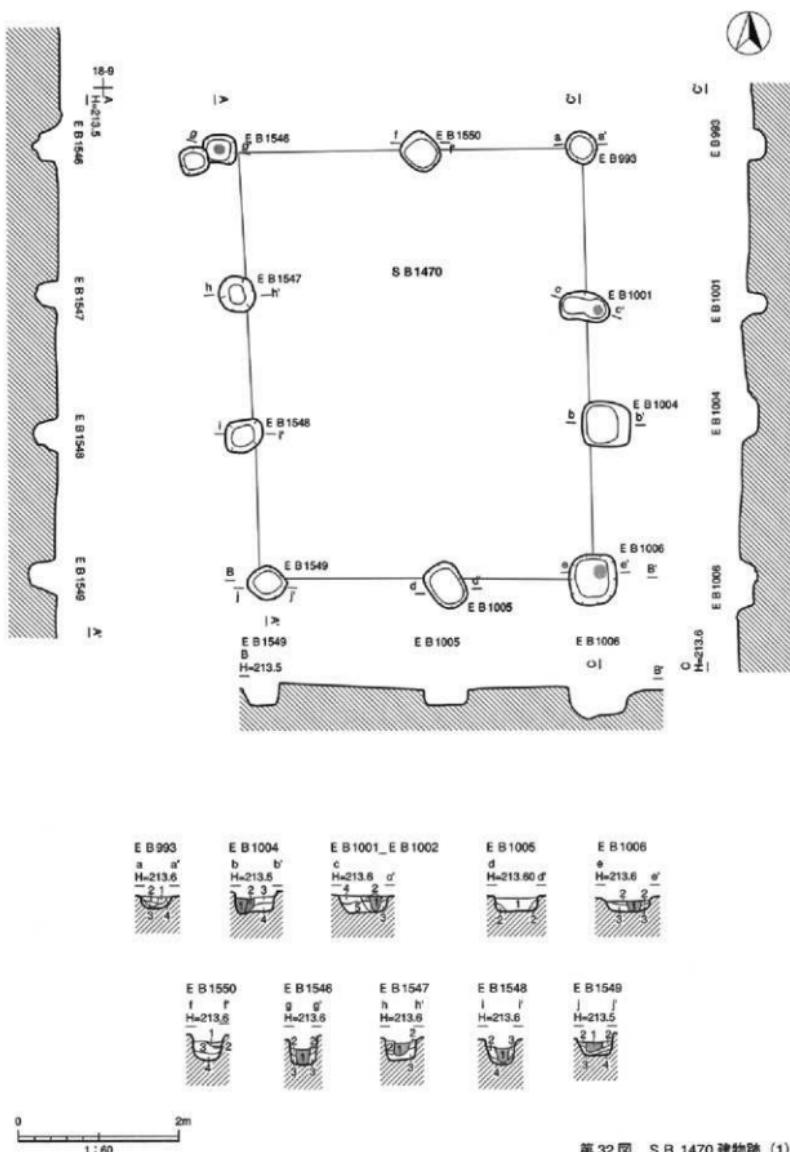
1. 75Y4/2 開灰色砂質シルト (粘性あり)
2. 75YR5/2 黑褐色シルト

**E B 957**

1. 75YR4/3 黑褐色粘土質土
2. 75YR4/1 開灰色シルト
3. 75YR4/1 開灰色シルト (根の擾乱うけ)
4. 25YR4/1 開灰色粘土質土

第31図 S B 960 建物跡

III 検出した遺構・遺物



第32図 SB 1470 建物跡 (1)

**E B 990\_E B 1004**

1. 10YR2/3黒褐色シルト (10YR4/1褐色シルトを少量含む)
2. 10YR2/3黒褐色シルト (10YR4/1褐色シルトと  
10YR4/4褐色シルトを少量含む)
3. 10YR2/3黒褐色シルト (地山の小プロックが混じる)

**E B 993**

1. 10YR2/3黒褐色シルト  
(10YR4/褐色シルトが少量混じる、しまり弱)
2. 10YR2/3黒褐色シルト (10YR4/6褐色シルトと  
10YR4/2灰褐色シルトが斑状に混じる)
3. F2とはほぼ同じ (粘性あり)
4. 7.5YR3/3暗褐色シルト (地山層)

**E B 1004**

1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト土 (細砂混じり)
2. 7.5YR3/2 暗褐色粘質シルト
3. 10YR3/2 暗褐色粘質シルト
4. 5YR3/1 黒褐色粘土 (固いしまり)

**E B 1005**

1. 10YR3/4暗褐色シルト  
(10YR4/6褐色シルトが斑状に混じる。)
2. 7.5YR3/4褐色シルト

**E B 1001\_E B 1002**

1. 10YR2/3 黒褐色シルト (10YR4/2灰褐色シルトが少量混じる)
2. 10YR4/2 灰褐色粘質シルト (10TR2/3黒褐色シルトが少量混じる)
3. F2と同じ (より粘る)
4. 10YR3/3 暗褐色シルト (鉛分をおびる)
5. 7.5YR3/1墨褐色シルト

**E B 1006**

1. 10YR2/2黒褐色シルト  
(炭化物を微量に含む。)
2. 10YR2/3黒褐色シルト  
(10YR4/6褐色シルトを少量含む。)
3. 10YR3/4褐色シルト  
(10YR4/4褐色シルトが少量混じる。)

**E B 1546**

1. 2.5YR2/3暗褐色粘質シルト
2. 7.5YR3/2暗褐色粘質シルト
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土

**E B 1547**

1. 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
2. 10YR3/2 暗褐色粘質シルト
3. 7.5YR4/2暗褐色粘質シルト
4. 2.5Y3/3 墓オーリープ褐色シルト

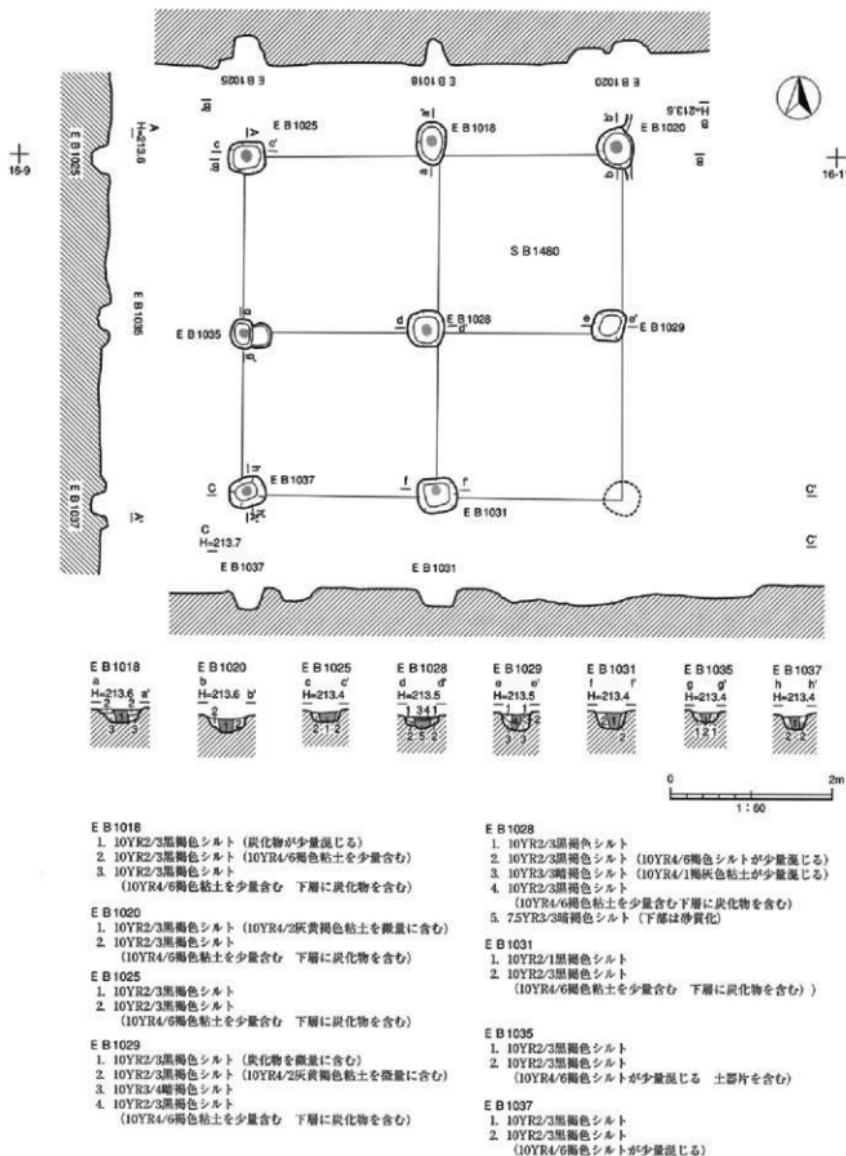
**E B 1548**

1. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト
2. 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト
3. 7.5YR3/2暗褐色粘質土
4. 2.5YR3/1暗赤褐色砂質シルト

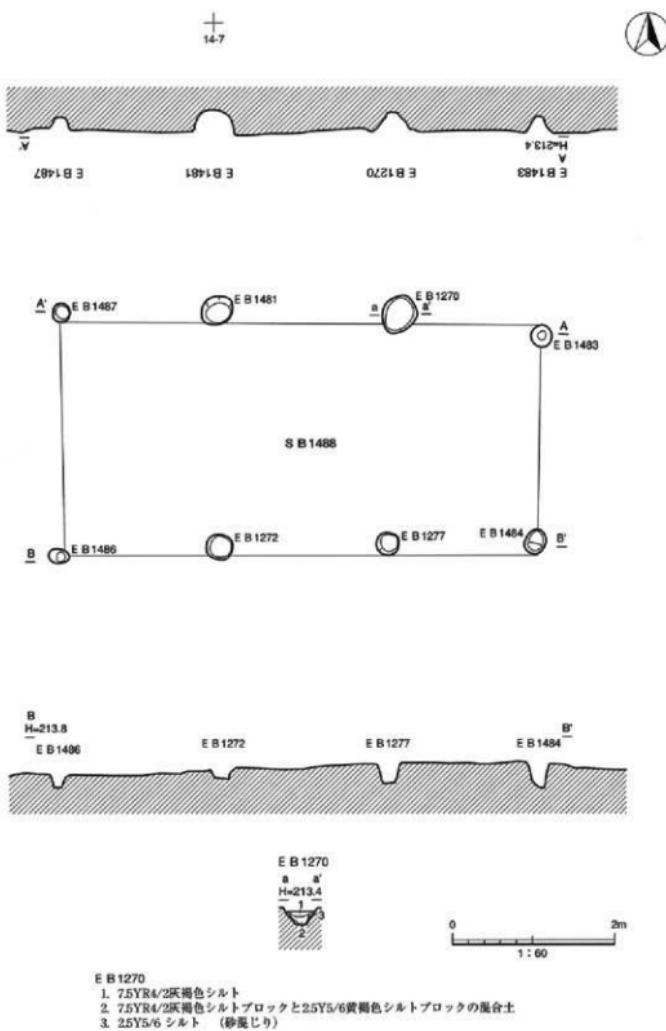
**E B 1550**

1. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト
2. 2.5Y3/1 黑褐色粘質シルト  
(7.5YR2/2暗褐色シルト質粘土粒状に混入)
3. 7.5YR2/1 黑褐色粘質シルト  
(10YR3/2暗褐色シルト質粘土粒状に混入)
4. 7.5YR3/1粘土質土 (重いしまり)

### III 検出した遺構・遺物

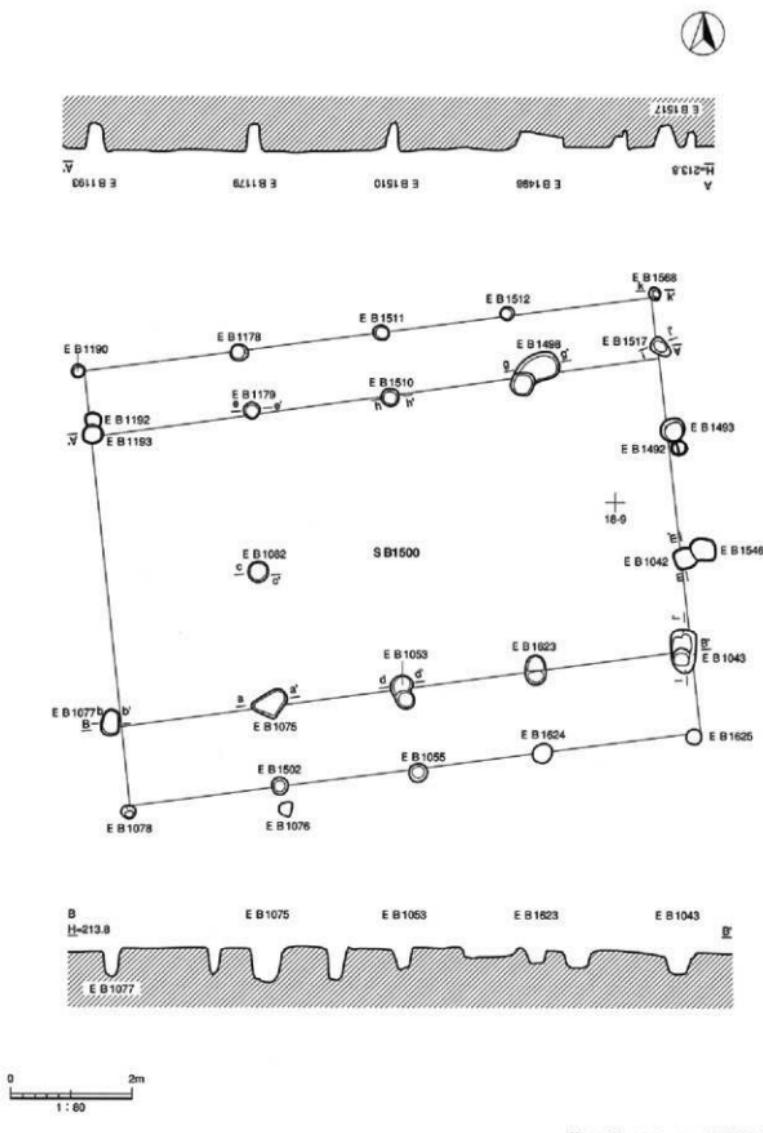


第34図 S B 1480 遺物跡

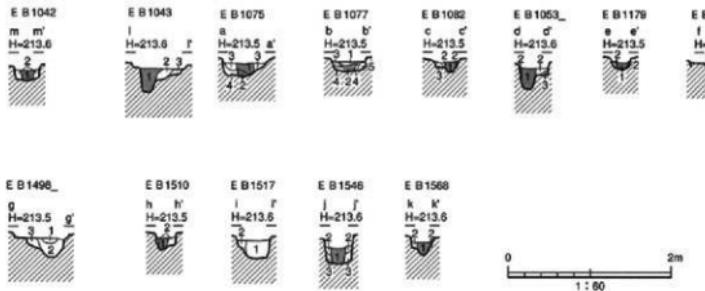


第35図 S B 1488 遺物跡

III 検出した構構・遺物



第36図 S B 1500 建物跡 (1)



**E B 1042**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト (灰片混じり)  
2. 7.5YR4/1褐色色シルト

**E B 1043**  
1. 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト (細砂混じり)  
2. 7.5YR5/4褐色色シルト (7.5YR3/2黒褐色粘質シルトの粒が含む)  
3. 7.5YR3/2黒褐色シルト (2.5YR3/1褐色粘質シルトの粒が含む)

**E B 1048**  
1. 7.5YR3/1黒褐色 粘質シルト (細砂まじり 灰片あり)  
2. 7.5YR5/1黄灰色 シルト

**E B 1053**  
1. 7.5YR3/1黒褐色  
2. 7.5YR3/1黒褐色 シルト  
3. 5Y4/1 灰色 シルト (粘性あり 固い)

**E B 1075**  
1. 7.5YR3/1黒褐色 シルト  
2. 7.5YR4/1褐色色 粘質シルト  
3. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色色 シルト  
4. 7.5YR4/1褐色色 粘質シルト

**E B 1077**  
1. 7.5YR5/3にぶい褐色シルト  
2. 7.5YR5/1褐色色粘質シルト (下部は細砂混入)  
3. 7.5YR5/2灰褐色シルト  
4. 10YR6/4にぶい黄褐色シルト  
5. 10YR5/2灰褐色色粘質シルト

**E B 1082**  
1. 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト  
2. 7.5YR5/3にぶい褐色色シルト  
3. 10YR5/1褐色色粘質シルト

**E B 1179**  
1. 2.5Y3/1黒褐色 粘質シルト  
2. 2.5Y3/3オリーブ褐色 シルト

**E B 1193**  
1. 2.5Y4/1オリーブ褐色 シルト (砂混じり)  
2. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト

**E B 1498**  
1. 7.5YR3/1褐色色粘質シルト  
2. 2.5Y4/1 黄褐色シルト (細砂まじり)  
3. 5Y4/3 暗オリーブ色シルト

**E B 1510**  
1. 2.5Y3/1黒褐色シルト  
2. 7.5YR4/2灰褐色シルト

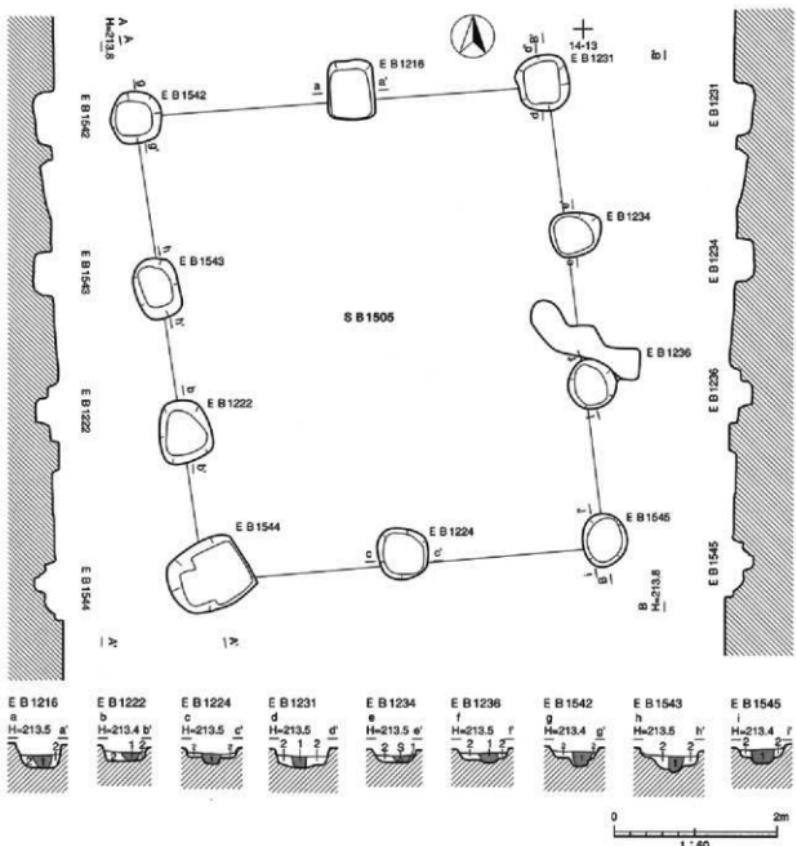
**E B 1517**  
1. 2.5Y3/1 黑褐色シルト (灰片と砂が少量混じる)  
2. 7.5YR3/1黒褐色シルト

**E B 1546**  
1. 2.5YR3/3暗赤褐色粘質シルト  
2. 2.5YR3/2暗褐色粘質シルト  
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土

**E B 1568**  
1. 2.5YR3/2 黑褐色粘質シルト (灰片混じり)  
2. F1に2.5YR5/6明褐色シルトがブロック状に混入

第37図 S B 1500 遺物跡 (2)

III 検出した遺構・遺物



E B 1216

1. 10YR4/1褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黃褐色粘質シルト  
(10YR4/1褐色粘質土が少量混じる。)

E B 1222

1. 10YR4/1褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黃褐色粘質シルト

E B 1224

1. 10YR4/1褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黃褐色シルト  
(10YR4/1褐色粘質土が少量混じる。)

E B 1231

1. 10YR4/1褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黃褐色粘質シルト  
(10YR4/1褐色粘質土が粒状に混じる)

E B 1234

1. 10YR4/2灰黃褐色粘質土  
(10YR4/1褐色粘質土が混じる)
2. 10YR4/2灰黃褐色シルト  
(10YR4/1褐色粘質土が混じる)

E B 1236

1. 10YR4/1褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黃褐色粘質シルト  
(10YR4/1褐色粘質土が斑状に混じる)

E B 1542

1. 10YR4/1褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黃褐色粘質シルト  
(10YR4/1褐色粘質土が斑状に混じる)

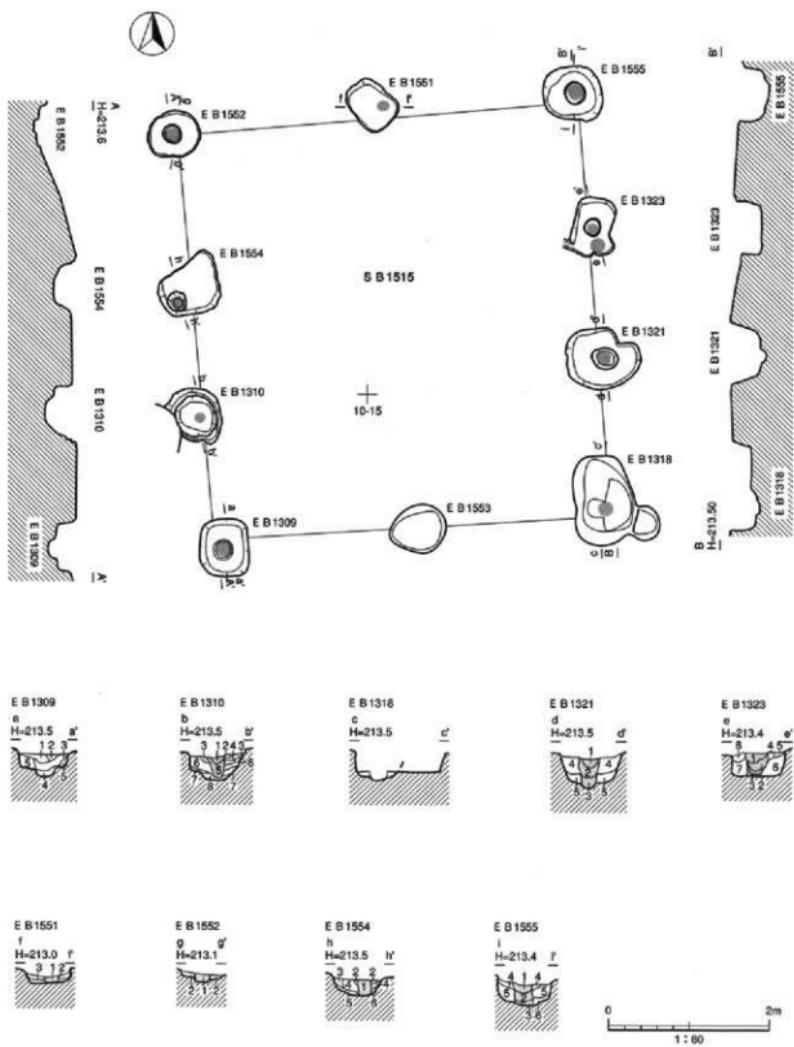
E B 1543

1. 10YR4/1褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黃褐色粘質シルト

E B 1545

1. 10YR3/2暗褐色粘質シルト（小礫を多量に含む）
2. 10YR4/2褐色粘質シルト  
(10YR4/1褐色粘質土が少量混じる)

第38図 SB 1505 建物跡



第39図 S B 1515 建物跡 (1)

### III 接出した造構・遺物

#### E B1309

1. 2SY6/1黄褐色粘質土ブロック 40%と  
5Y6/6オリーブ色粘質ブロック 60%の混合土
2. 5Y4/1 黄灰色シルト
3. F1に2SY4/1黄灰色粘質ブロックが混じる
4. F3より2SY4/1黄灰色粘質土が多い
5. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (砂まじり)

#### E B1310

1. 2SY4/4オリーブ褐色砂質シルト
2. 5Y4/1 黄灰色粘質土
3. 5Y4/1 黄灰色シルト
4. 5Y4/1 黄灰色粘質シルト
5. 5Y6/1灰色シルトブロックと5Y6/6オリーブ色粘土ブロックの混合土
6. F5に2SY4/1黄灰色粘質土20%混じる
7. 2SY4/1黄灰色粘質土
8. 2SY3/1黒褐色粘質土 (砂まじり)

#### E B1318

1. 7SY3/1黒褐色粘質シルト (細砂混じり)
2. 7SY3/1黒褐色粘質土 (細砂混じり 粘性あり 固いしまり)
3. 5Y5/6オリーブ色シルトブロックと7SY3/1シルトブロック混合土
4. 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 (固いしまり)

#### E B1552

1. 2SY2/1黒褐色粘質土 (10YR4/6褐色粘質土が線状に混じる)
2. 2SY2/1黒褐色粘質土 (固いしまり)

#### E B1554

1. 2SY6/6明黄褐色粘質土
2. 2SY6/6明黄褐色粘質土と2SY3/2黒褐色粘質土のブロック混じり土
3. 5Y6/3 明黄褐色粘質土
4. 2SY4/2暗黄褐色粘質シルト
5. 2SY4/2暗黄褐色粘質シルト (細砂混じり)
6. 2SY4/2暗黄褐色粘質シルト (細砂混じり)

#### E B1323

1. 2SY6/6明黄褐色粘質土 (2SY5/1黄灰色粘質シルト粒と  
2SY4/4オリーブ褐色シルト粒を含む)
2. F1に2SY4/1黄灰色が多く含む
3. 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 (砂まじり)
4. 2SY4/1黄灰色シルト
5. 2SY5/1黄灰色シルト
6. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (赤茶の縦状模様あり)
7. 2SY3/2黒褐色シルト
8. 2SY3/3暗オリーブ褐色シルト

#### E B1321

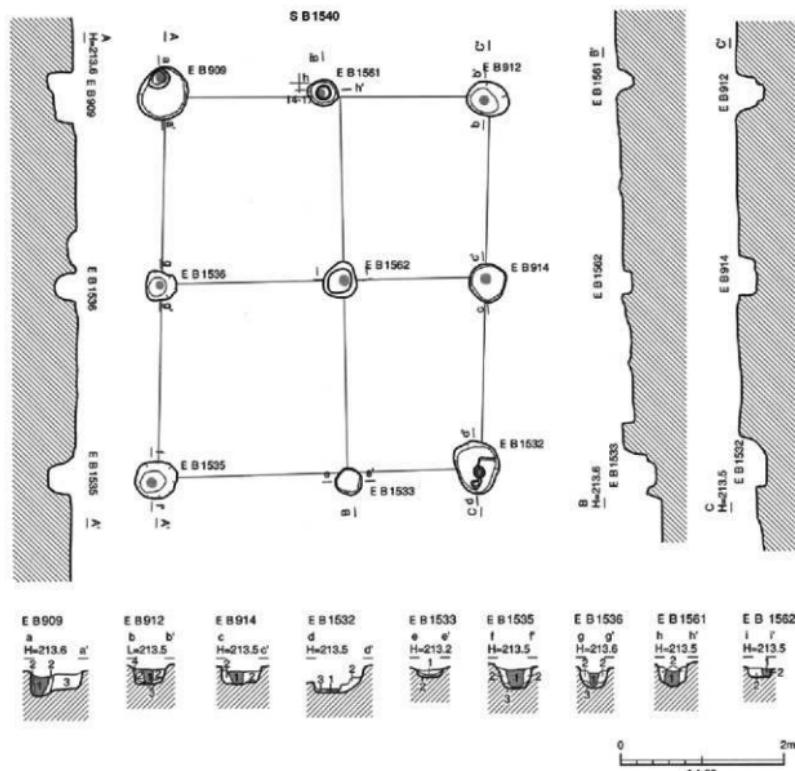
1. 2SY4/2暗灰褐色砂質シルト
2. 5Y5/1 黄灰色粘質土 (5Y6/6シルト粒と  
2SY3/2黒褐色粘質土粒が混じる)
3. F2よりも2SY3/2暗褐色粘質土が多い
4. 5Y5/1 黄灰色シルトと5Y6/6オリーブ色シルトが  
ブロック状に混じる (固くしまる)
5. F4に2SY3/1黒褐色粘質土ブロックが混じる (5~8cm大)

#### E B1551

1. 5Y4/1 黄灰色シルト
2. 2SY4/1黄灰色粘質シルト
3. 2SY3/1黒褐色粘質シルト

#### E B1555

1. 5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト  
(赤褐色の砂が塵に入る)
2. 2SY6/1黄灰粘質土と2SY6/1黄褐色粘質土に  
2SY4/1黄灰粘質土が少量混じる
3. 2SY3/1黒褐色粘質土 (砂混じり)
4. 2SY4/1黄灰色シルト
5. F2に2SY3/1黒褐色が入る
6. 2SY3/1黒褐色砂質シルト (下部は粘質土)



## E B 909

1. 10YR4/1褐色色
2. 10YR5/1灰褐色粘質シルト (10YR4/1粘質土が混じる)
3. 10YR5/2褐褐色粘質シルト

## E B 912

1. 10YR4/2灰褐色粘質シルト (10YR4/1粘質土が混じる)
2. 10YR4/2灰褐色粘質シルト
3. 10YR3/3暗褐色粘質土
4. 10YR4/3に赤い黄褐色粘質シルト

## E B 914

1. 10YR4/1褐色粘質シルト
2. 10YR4/2灰褐色粘質シルト
- (10YR4/1粘質シルト粒が混じる)

## E B 1532

1. 10YR3/1黒褐色粘質シルト
2. 10YR3/3暗褐色シルト
3. 10YR2/1褐色粘質シルト

## E B 1533

1. 10YR4/2灰褐色粘質シルト
2. 10YR4/1褐色シルト

## E B 1536

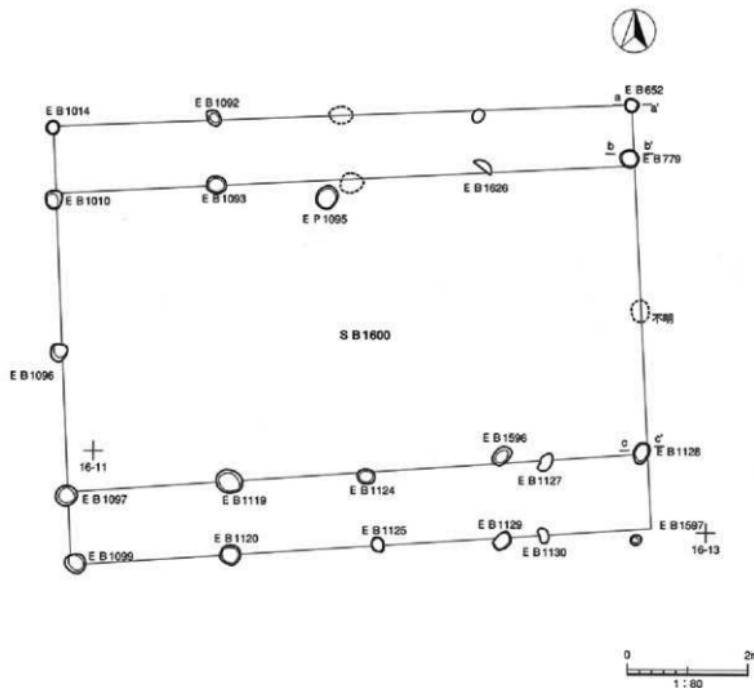
1. 10YR4/1褐色粘質シルト  
(10YR4/2灰褐色粘質シルトが混じる)
2. 10YR4/2灰褐色粘質シルト  
(10YR3/3暗褐色粘質土粒が混じる)
3. 10YR3/3暗褐色粘質土

## E B 1562

1. 10YR4/2灰褐色粘質シルト  
(10YR4/1粘質シルトが少量混じる)
2. 10YR4/3黒褐色粘質シルト  
(10YR4/2灰褐色粘質シルトが少量混じる)

第41図 S B 1540 建物跡

III 探出した遺構・遺物

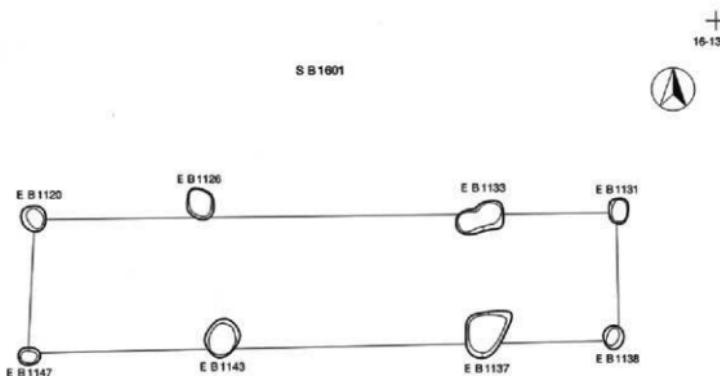


E B 652  
1. 2SY4/2暗灰褐色粘質シルト  
2. 2SY4/4オリーブ褐色シルト  
3. SY5/2 灰オリーブ色シルト

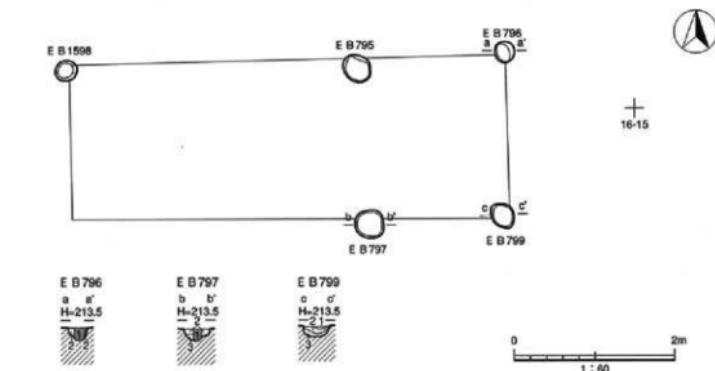
E B 1128  
1. 10YR2/3 黒褐色シルト  
(75Y4/3同色粘土ブロック土混入)

E B 779  
1. 10YR2/3 黒褐色シルト  
(10YR4/4褐色シルトのブロック土が5%混じる)  
2. 10YR4/1 褐色シルト  
(10YR4/4褐色粗砂が少量混じる)

第42図 S B 1600 遺物跡



No	検出面からの深さ	No	検出面からの深さ
1120	14	1137	12
1126	14	1136	8
1131	12	1143	10
1133	16	1147	8



E B 796

1. 10YR2/3 黒褐色シルト (粗砂が少量混じる)
2. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 (10YR4/6褐色粗砂が少量混じる)

E B 797

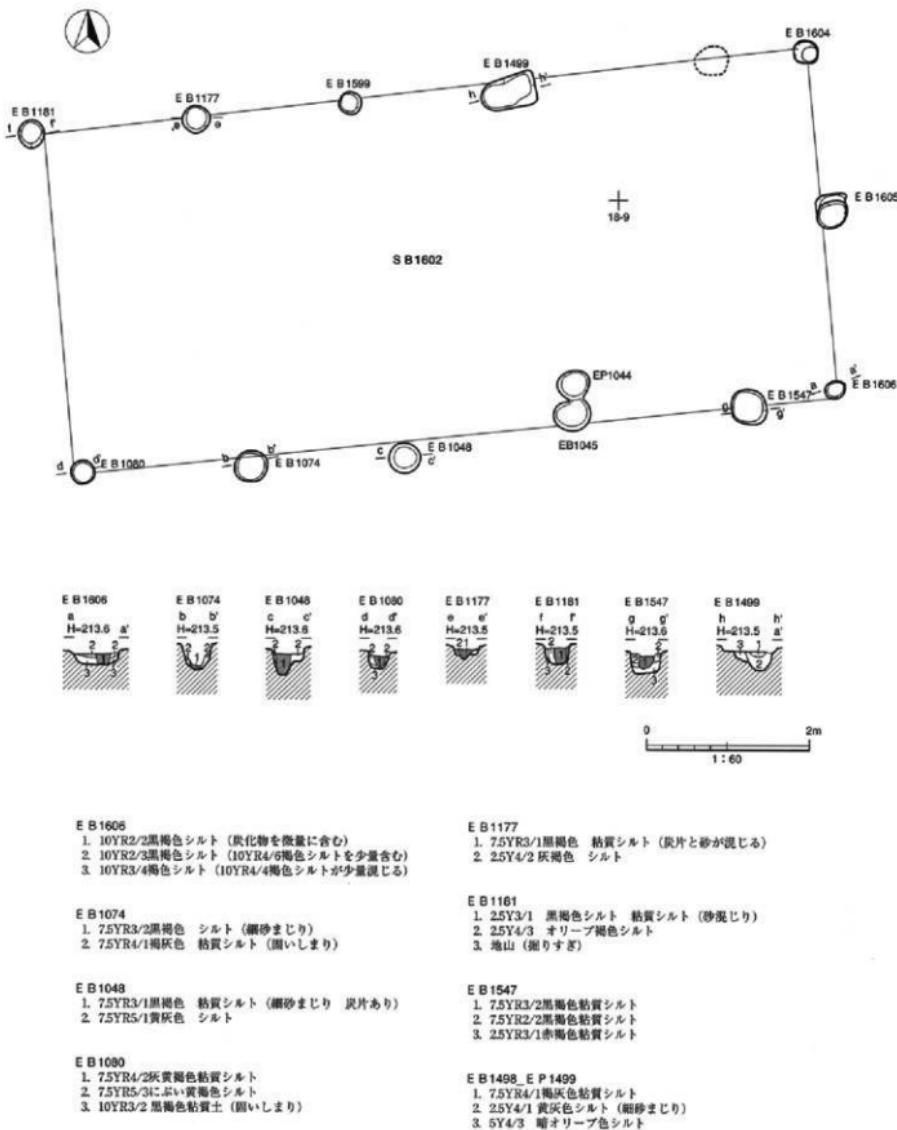
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土
2. 10YR2/4 暗褐色シルト (やや砂質をおびる)
3. 10YR2/3 黒褐色シルト

E B 799

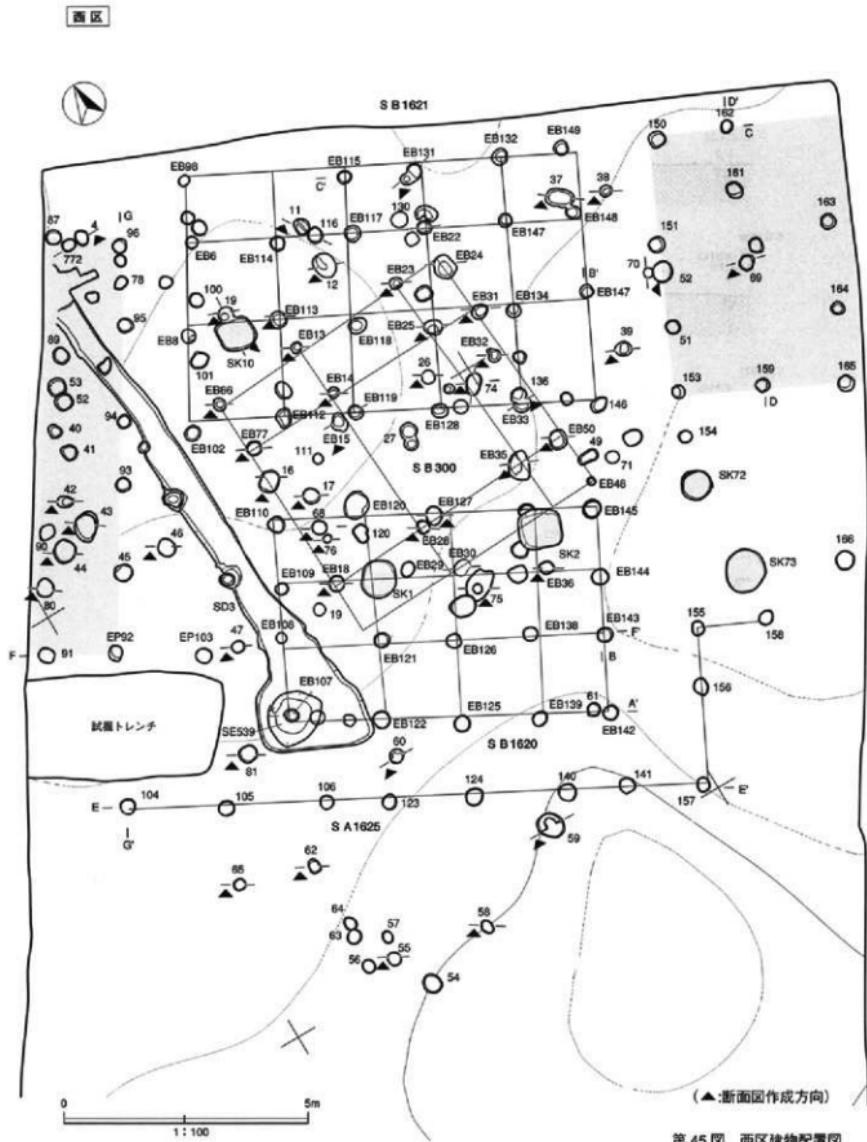
1. 10YR2/3黒褐色シルト
2. 10YR4/2灰黄褐色粘土 (10YR4/6褐色粗砂が少量混じる)
3. 10YR3/1黒褐色粘質シルト (粗砂が混じる)

第43図 S B 1601・S B 1603 建物跡 (1)

III 梱出した遺構・遺物

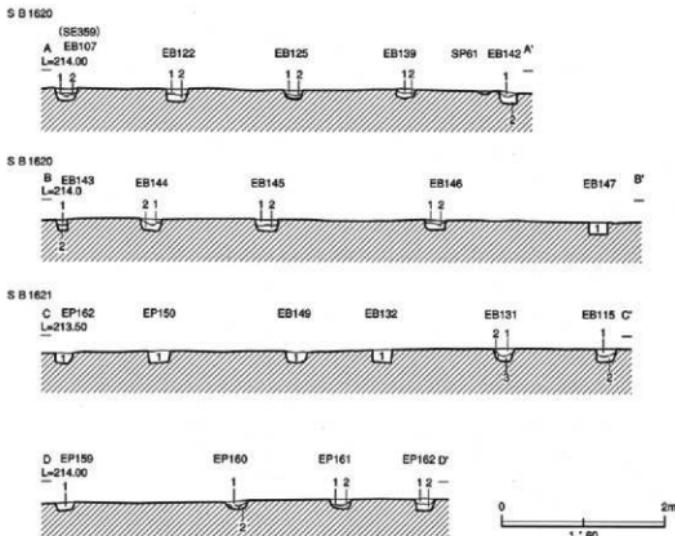


第44図 S B 1602 遺物跡



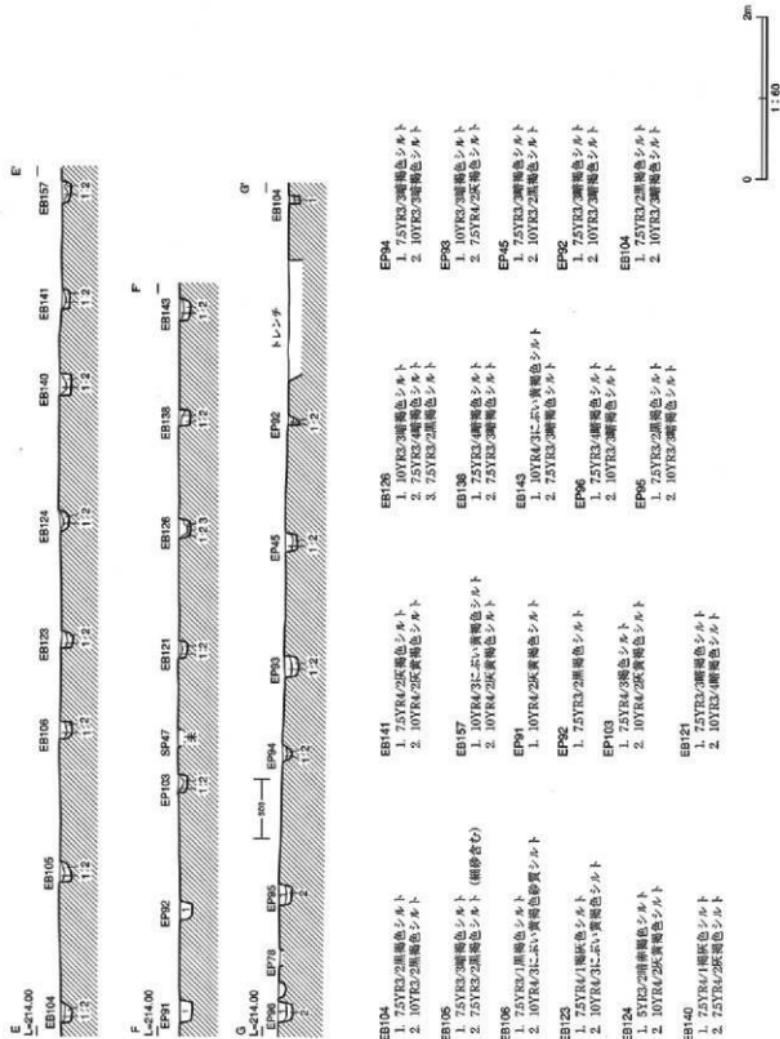
第45図 西区建物配置図

### III 検出した遺構・遺物



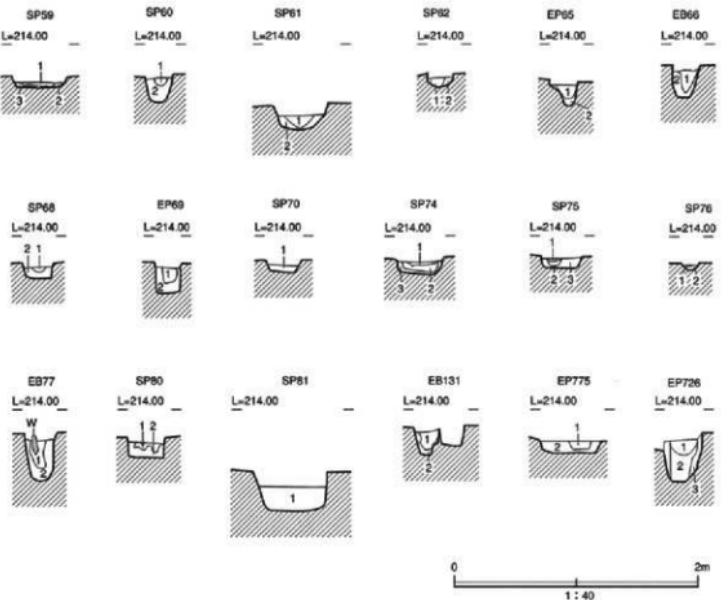
EB107	EB148	EP150
1. 75YR4/3暗褐色シルト 2. 75YR3/4暗褐色シルト	1. 75YR3/3暗褐色シルト 2. 10YR3/3暗褐色シルト	1. 10YR3/3暗褐色シルト
EB122	EB147	EB149
1. 75YR4/3暗褐色シルト 2. 75YR3/4暗褐色シルト	1. 10YR4/2灰黄褐色シルト	1. 10YR3/3暗褐色シルト
EB125	EB144	EB132
1. 75YR3/4暗褐色シルト 2. 10YR3/3暗褐色シルト	1. 75YR4/3褐色シルト 2. 10YR4/2灰黄褐色シルト	1. 75YR3/3暗褐色シルト
EB139	SP159	EB131
1. 75YR3/4暗褐色シルト 2. 75YR3/4暗褐色シルト	1. 75YR3/2黒褐色シルト	1. 75YR4/2灰褐色シルト 2. 75YR3/2暗褐色シルト 3. 75YR3/1黒褐色シルト
EB142	EP160	EB115
1. 75YR3/3暗褐色シルト 2. 75YR3/4暗褐色シルト	1. 10YR4/2灰黄褐色シルト 2. 75YR4/2暗褐色シルト	1. 75YR4/3暗褐色シルト 2. 75YR4/2灰褐色シルト
EB143	EP161	EP162
1. 75YR3/4暗褐色シルト 2. 10YR3/3暗褐色シルト	1. 10YR3/2灰黄褐色シルト 2. 75YR3/3暗褐色シルト	1. 10YR3/3暗褐色シルト
EB145	EP162	
1. 75YR3/3暗褐色シルト 2. 10YR3/3暗褐色シルト	1. 10YR4/2灰黄褐色シルト 2. 75YR3/3暗褐色シルト	

第46図 西区建物跡柱穴(1)



第47図 西区建物跡柱穴 (2)

III 検出した遺構・遺物



**SP59**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト  
2. 10YR4/3暗褐色シルト  
3. 10YR3/3暗褐色シルト

**SP60**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト  
2. 10YR4/2灰黄褐色シルト

**SP61**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト  
2. 10YR4/2灰黄褐色シルト

**SP62**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト  
2. 10YR4/2灰黄褐色シルト

**SP65**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト  
2. 10YR3/2黒褐色シルト

**EB66**  
1. 7.5YR3/1黒褐色シルト  
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト

**SP68**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト  
2. 7.5YR3/4暗褐色シルト

**EP69**  
1. 7.5YR3/3暗褐色シルト  
(硬くしまっている)  
2. 7.5YR3/4暗褐色砂質シルト

**SP70**  
1. 7.5YR3/4暗褐色砂質シルト

**SP74**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト (やわらかい)  
2. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト  
(F1が少量混じる)  
3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト

**SP75**  
1. 7.5YR4/2灰褐色シルト  
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト  
3. 7.5YR3/2黒褐色シルト

**SP76**  
1. 7.5YR4/4褐色シルト  
(1mm未満の砂粒を含む)

**EB77**  
1. 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト (柱材が入る)  
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト

**SP80**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト  
2. 7.5YR3/4暗褐色シルト

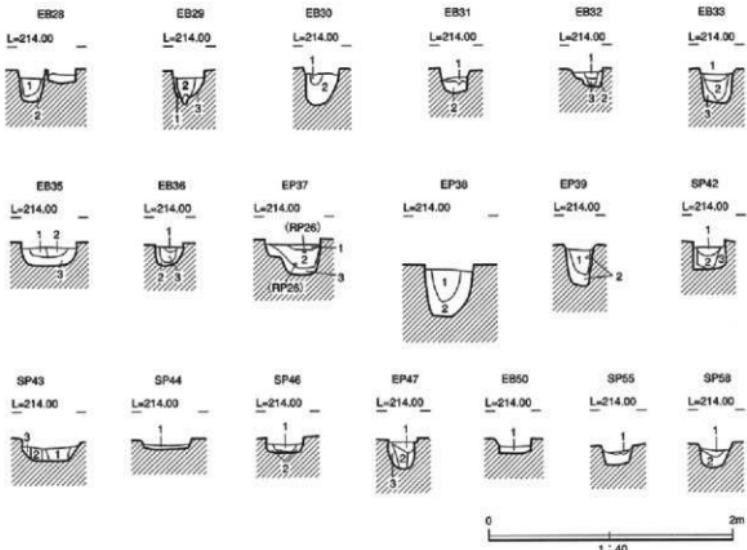
**SP81**  
1. 10YR4/2灰黄褐色シルト

**EB131**  
1. 7.5YR3/2黒褐色シルト  
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト

**EP775**  
1. 10YR3/2黒褐色シルト  
2. 7.5YR4/3褐色シルト

**EP726**  
1. 5YR3/2暗赤褐色シルト  
2. 7.5YR3/2黒褐色シルト (下部に細砂混じる)  
3. 7.5YR3/3暗褐色シルト

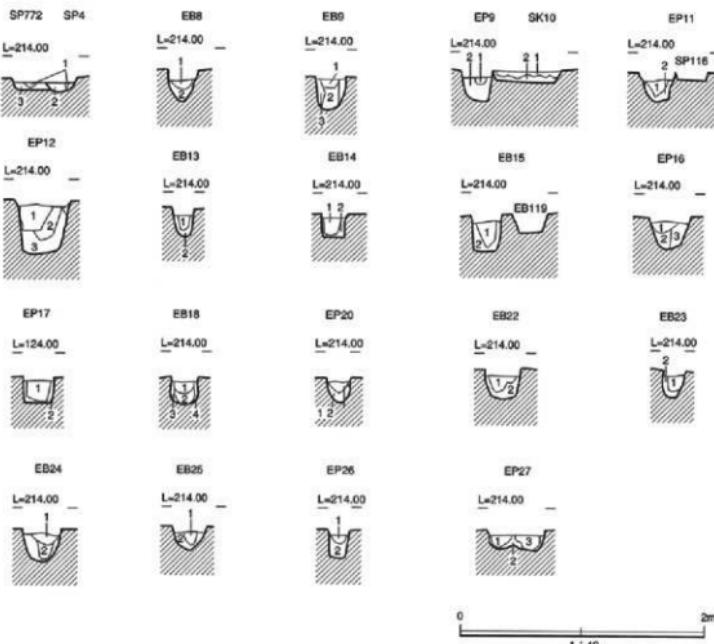
第48図 西区建物跡柱穴 (3)



- EB28**  
1. 75YR3/2黒褐色シルト  
2. 75YR3/3暗褐色シルト
- EB29**  
1. 75YR3/3暗褐色シルト  
2. 75YR3/3暗褐色シルト  
3. 75YR3/2暗褐色シルト
- EB30**  
1. 75YR3/2黒褐色シルト  
2. 75YR3/3暗褐色シルト
- EB31**  
1. 75YR3/2黒褐色シルト  
(F1が少量混じる)  
2. 75YR3/4暗褐色シルト  
(F1が少量混じる)
- EB32**  
1. 75YR3/2黒褐色シルト (細砂を含む)  
2. 75YR3/2黒褐色シルト (炭片を含む)  
3. 75YR3/4暗褐色シルト
- EB33**  
1. 75YR3/2黒褐色シルト (細砂を含む)  
2. 75YR3/2黒褐色シルト  
3. 75YR3/4暗褐色シルト
- EP35**  
1. 75YR3/2黒褐色シルト  
2. 75YR3/2黒褐色シルト (根の擾乱受ける)  
3. 75YR3/3暗褐色シルト
- EP36**  
1. 75YR3/2暗褐色シルト  
2. 10YR2/3暗褐色シルト  
3. 75YR3/3暗褐色シルト
- EP37**  
1. 75YR3/1黒褐色シルト  
(RP26)  
2. 75YR3/2暗褐色シルト  
(RP26)  
3. 75YR3/3暗褐色シルト
- EP38**  
1. 10YR3/2暗褐色シルト  
2. 75YR3/3暗褐色シルト
- EP39**  
1. 75YR3/2黒褐色シルト  
2. 75YR3/3暗褐色シルト
- SP42**  
1. 10YR3/3暗褐色シルト  
2. 10YR3/3暗褐色シルト  
3. 10YR3/3暗褐色シルト
- SP43**  
1. 75YR3/2暗褐色シルト
- SP44**  
1. 10YR3/3暗褐色シルト
- SP46**  
1. 75YR3/2暗褐色シルト
- EP47**  
1. 10YR3/2暗褐色シルト  
2. 75YR3/3暗褐色シルト  
3. 75YR3/3暗褐色シルト
- EB50**  
1. 10YR3/3暗褐色シルト
- SP55**  
1. 75YR3/2黒褐色シルト  
2. 75YR3/3暗褐色シルト
- SP58**  
1. 75YR3/2黒褐色シルト

第49図 西区遺物跡柱穴(4)

### III 敷出した造構・遺物



#### SP772 - SP4

1. 7SYR3/3暗褐色シルト
2. 7SYR3/4暗褐色シルト
3. 7SYR3/4暗褐色シルト (細砂混じり)

#### EB8

1. 5YR3/2赤褐色シルト
2. 7SYR3/4暗褐色シルト

#### EP9

1. 7SYR3/2暗褐色シルト
2. 7SYR3/2暗褐色シルト (やわらかい)
3. 7SYR3/3暗褐色シルト

#### EP9

1. 7SYR3/2暗褐色シルト
2. 7SYR3/3暗褐色シルト

#### SK10

1. 7SYR3/2暗褐色シルト
2. 10YR3/3暗褐色シルト

#### EP11

1. 10YR3/2暗褐色シルト
2. 7SYR3/3暗褐色シルト
3. 10YE3/2暗褐色シルト質シルト

#### EP12

1. 10YR3/2暗褐色シルト
2. 7SYR3/3暗褐色シルト
3. 10YE3/2暗褐色シルト質シルト

#### EB13

1. 7.5YR3/2黒褐色シルト
2. 7.5YR3/4暗褐色シルト

#### EB14

1. 10YR3/2黒褐色シルト
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト

#### EB15

1. 7.5YR3/2黒褐色シルト
2. 7.5YR3/4暗褐色シルト

#### EP16

1. 7.5YR3/2暗褐色シルト
2. 7.5YR3/2暗褐色シルト
3. 7.5YR3/3暗褐色シルト (鉛性あり)

#### EP17

1. 7.5YR3/2暗褐色シルト
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト

#### EB18

1. 7.5YR3/2暗褐色シルト
2. 7.5YR3/2暗褐色シルト
3. 7.5YR3/2暗褐色シルト
4. 7.5YR3/3暗褐色シルト

#### EP20

1. 7.5YR3/2暗褐色シルト
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト
3. 7.5YR3/3暗褐色シルト

#### EB22

1. 7.5YR3/2黒褐色シルト
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト

#### EB23

1. 7.5YR4/2赤褐色シルト
2. 7.5YR4/3暗褐色シルト

#### EB24

1. 10YR3/3暗褐色シルト
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト

#### EB25

1. 10YR3/2暗褐色シルト
2. 7.5YR3/4暗褐色シルト

#### EP26

1. 7.5YR3/3暗褐色シルト
2. 7.5YR3/4暗褐色シルト

#### EP27

1. 7.5YR3/2暗褐色シルト
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト
3. 7.5YR3/2暗褐色シルト

第 50 図 西区建築跡柱穴 (5)

### 3 土 壤

今回の調査で検出した土壤は35基を数える。これらの土壤は時期的に大きく平安時代、中世末から近世（16世紀以降）に分けることができそうである（第58～60図）。前者の土壤群 建物と土壤は古代の建物跡の近くに散在しており、円形・楕円形の平面プランを基調とした浅いものが主である。覆土内から土師器や須恵器が出土しており、平安時代に属するものとして報告する。後者の土壤群は中世以降の建物跡の覆土と同様な堆積土を有し、中世から近世の陶磁器や土鍋などを含んでおり、また中世以降の建物とも近接しているため、該期のものとした。

なお、SK 607・906土壤については、覆土から骨片がまとめて検出されたことから墓壙 墓の可能性が高く、覆土の理化学分析を行った。土壤の所属時期については根拠に乏しいものがあり、性格や年代の明らかでないものがある。また、土壤の多くは近代以降の果樹栽培による擾乱を受けている。

**SK 1** 本土壤は西区に位置し、S B 300建物跡と重なる。検出面はIV層下部である。平面形は隅丸方形を呈し、長径72cm、短径60cm、深さは19cmを測る。堆積層は3層確認した。底面は中心部に向かってなだらかに傾斜している。遺物の出土はない。

**SK 2** 本土壤は西区に位置し、SK 1土壤の東隣にあたる。検出面はIV層下部である。平面形は不整円形を呈し、長径83cm、短径56cm、深さは18cmを測る。堆積層は3層確認した。底面はほぼ平坦である。遺物は土師器の坏片が1点出土した。

**SK 72** 本土壤は西区に位置し、SK 2土壤の東隣にあたる。検出面はIV層下部である。平面形は不整円形を呈し、長径60cm、短径55cm、深さは17cmを測る。堆積層は2層確認した。底面はほぼ平坦である。遺物の出土はない。

**SK 73** 本土壤は西区に位置し、検出面はIV層下部である。平面形は不整円形を呈し、長径66cm、短径58cm、深さは25cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺物の出土はない。

**SK 174** 本土壤は25-14グリッドに位置し南側にS B 224建物跡がある。検出面はIVa層上部で、標高213.5mを測る。規模は長径140cm、短径100cmで平面形は不整楕円形である。検出面からの深さは25cmと浅く、底部は渦曲があり壁もなだらかに立ち上がる。部分的に果樹の支柱により壊されていた。遺物は須恵器の坏片8点、土師器の坏片2点が出土した。

**SK 230・232** 本土壤は25-12グリッドに位置し東側は溝跡S D 168と接する。検出面はIVa層上部で、標高213.5mを測る。2つの土壤が重なり合っているが、SK 230のほうが古い遺構である。2つの土壤の規模は長径250cm、短径120cmで平面形楕円形のものがつながっている。検出面からの深さはSK 230が35cmを測り、底面は平坦で壁は急に立ち上がる。遺物はSK 230から須恵器の坏片4点、土師器の壺破片21点と扁平な罐が3点出土した。

**SK 361** 本土壤は22-13グリッドに位置し南脇にS D 972溝跡がある。検出面はIVa層上部で、標高213.4mを測る。規模は長径93cm、短径82cmで平面形は円形である。検出面からの深さは45cmあり、底面は中央に向けて傾斜している。壁は急に立ち上がる。遺物は土師器の坏片9点、土師器の壺片8点が出土した。

**SK 501** 本土壤は24-15グリッドに位置し北壁に接しているため遺構の全体は判明していない。検出面はIVa層上部で、標高213.7mを測る。規模は検出した部分で長径230cm、短径

92cmで検出面からの深さは15cmと浅く、底面はほぼ平坦で、堆積層に炭化物粒が薄く詰まっていた。底面西角に柱穴が1基確認された。遺物は土器部の碗や壺の破片が52点出土した。

**S K 515** 本土壙は24-15グリッドに位置しS K 501土壙の1m南側にある。検出面はIV a層上部で、標高213.6mを測る。規模は長径52cm、短径35cmで平面形は梢円形である。検出面からの深さは20cmと浅く、断面は逆台形状である。堆積層F1から炭屑がまとまって出土している。遺物としては拳大の礫が出土した。

**新 し い 墓 壙** **S K 607** 本土壙は21-14グリッドに位置し、検出面はIV a層である。平面形は長方形を呈し、検出面での規模は長径160cm、短径53cm、深さは33cmを測る。底面は平坦で壁の立ち上がりはほぼ垂直で急である。堆積土は2層確認し、F2の黒色腐植土から骨片と思われるものが散らばるように検出された。遺物は出土していない。この土壙は骨片の出土から墓壙と思われ、明確な時期を特定できないが、堆積土やⅢ層で確認できたことを勘案すれば、古代以降の所産と想定されるが委託した土壤分析（株パリノサーヴェイ）によれば、墓壙の可能性が高く、年代測定では近世以降の新しい年代が求められている。

**S K 629** 本土壙は20-14グリッドに位置し、検出面はIV a層面である。標高は213.5mを測る。規模は長径113cm、短径88cmで平面形は不整円形である。検出面からの深さは30cmを測り、断面は逆台形状である。砂礫の堆積が認められ、S D 690溝跡に連なるとも考えられたがはっきりしなかった。遺物は土器部の壺片が11点出土した。

**S K 723** 本土壙は20-18グリッドに位置し、検出面はIV a層面である。標高は213.5mを測る。規模は長径115cm、短径109cmで平面形は不整円形である。検出面からの深さは16cmを測り、断面は逆台形状である。遺物の出土はない。S B 820建物跡の柱掘り方と類似する。建物を構成する柱とも考えられるが、ややずれて配置しているため、切り離してとらえた。

**S K 724** 本土壙は中央区北、20-18グリッドに位置し、検出面はIV a層面である。標高は213.5mを測る。規模は長径70cm、短径45cmで平面形は梢円形である。検出面からの深さは25cmと浅く、断面は逆台形状である。遺物の出土はない。

**S K 749** 本土壙は19-16グリッドに位置し、S B 820建物跡の西5mのところにある。検出面はIV a層である。平面形は円形を呈し、径112cm、深さは18cmを測る。堆積層は2層確認した。底面は平坦で硬くしまっている。S B 820建物跡の柱掘り方と類似し建物を構成する柱とも考えられるが、離れて配置しているため切り離してとらえた。遺物の出土はない。

**S K 750** 本土壙は中央区北19-16グリッドに位置し、S B 820建物跡の西5mのところにあり、S K 749と並んで検出した。検出面はIV a層である。平面形は円形を呈し、径114cm、深さは16cmを測る。堆積層は2層確認した。底面は平坦で硬くしまっている。遺物の出土はない。

**S K 819** 本土壙は17-19グリッドに位置し、近代以降の新しい溝跡に東半分が破壊されている。検出面はIV a層上部で、標高213.5mを測る。規模は長径1.2m、短径1.0mで平面形は不整円形である。検出面からの深さは20cmと浅く、壁もなだらかに立ち上がる。遺物の出土はない。

**新 し い 墓 壙** **S K 906** 本土壙は13-20グリッドに位置し、検出面はIV a層である。平面形は隅丸長方形を呈し、検出面での規模は長径95cm、短径66cm、深さは34cmを測る。底面はやや凹凸が認め

られ、壁の立ち上がりは急である。堆積土は2層確認し、黒色の腐植土で炭化物が多量に含まれていた。また焼けた板材の残片がみられた。S K 607と同様に骨片と思われるものが散らばるよう検出されたが遺物は出土していない。この土壤も骨片の出土から墓壙と思われ、土壤分析を委託業務（株バリノサーヴェイ）した。その結果、リン・カルシウムの成分値が高く墓壙の可能性が高いものの、年代測定では新しい年代を示した。近世以降の新しい墓壙と考えられる。

**S K 937・959** 本土壙は中央区やや西側の20-9、20-10グリッドに位置する。遺構確認面はIV b層からV層上面であるが、本来はIV層中において確認できたものと思われる。確認面の標高は213.4mで平坦な地形面である。北隣に位置するS D 929から細い溝が続いている。一体したものと考えられる。さらに南方向のS D 990溝跡へつながっていたものと推定している。平面形は確認面で梢円形を呈し、掘り進めたところ2つの土壤が切りあっていることが判明した。本土壙の規模は検出面において長径4.1m、短径2.8m、深さは53cmを測り、切り合いでS K 959よりもS K 937が新しいことがわかる。まずS K 937から調査していく。S K 937の底面は梢円形となり、周囲の壁は緩やかに立ち上がり、壁が部分的に壁際に張り付いて出土した。堆積土はレンズ状をなす自然堆積であり、4層に分けられた。F1・F2は緩慢な堆積でF3は黒褐色シルトで水成によるものである。S K 937の後、S K 959を精査した。遺物はS K 937の覆土と底面から須恵器5点、内耳付土壙の破片14点、環4点が出土した。S K 959からは自然縛が5点、壁面に張り付く状況で出土した。

中世の土壙出土

**S X 958** 本遺構は中央区と東区の境目にあたる水路駅11-16グリッドに位置する。遺構確認面はIV b層であるが、遺物がIII層中においてまとまって出土しておりより上位の面で遺構を確認できたものと思われる。確認面の標高は213.3mで平坦な地形面となっている。西隣にはS B 1515建物跡が位置する。平面形は梢円形を呈し底面はほぼ平坦である。壁は確認できなかった。本土壙の規模は遺物の検出面においておよそ長径1.6m、短径1.2mほどであったものと予想される。遺物は覆土と底面から須恵器や土師器がまとめて出土したが、投げ込まれ捨てられた状況を見せており、出土した遺物で復元できたものが8点あり、第99、100図に掲載した。

一括土器出土

**S X 1032** 本土壙は15-10グリッドに位置し北側はS D 990とつながり、東側にS D 1033とつながる。検出面はIV層上部で、標高213.4mを測る。規模は長径2.7m、短径1.45mで平面形は隅丸長方形である。検出面からの深さは33cmと浅く、底面は緩やかな起伏があり壁もなだらかに立ち上がる。S B 1600建物跡を廻る溝跡S D 990・1033と関連する遺構と考えられ、北からの水路のコーナー部分にあたり、一種の水溜り場と考えられる。S D 990は東に折れ曲がり伸び、同じくこの土壙からはS D 1033溝跡も東方向へ伸びていく。本遺構からの遺物の出土はない。

水溜まり場

**S K 1091** 本土壙は中央南区16-7グリッドに位置する。遺構確認面はIV b層であるが、本来はIII層中において確認できたものと思われる。確認面の標高は213.4mで平坦な地形面である。S D 1046溝跡とS D 1090溝跡に挟まれ、北側にはS B 1500建物跡、南側にはS B 1450建物跡が位置する。平面形は不整な梢円形を呈し、底面は北側がやや深くなっている。周囲の壁は緩やかに立ち上がる。堆積土はレンズ状をなす自然堆積であり5層に分けられた。F1・2・4は緩慢な堆積でF5は壁面の崩落を伴う早い時期の堆積と判断できる。本土壙の規模は検

外面において長径2.4m、短径1.35m、深さは28cmを測る。遺構の周囲や底面からは柱穴などは発見されなかった。遺物は覆土と壁面から須恵器22点、土師器6点が出土した。

**S K 1266** 本土壇は13-7グリッドに位置し、検出面はV層上面である。平面形は円形をなし断面は台形状になる。底面は楕状に湾曲し、壁は直線状に立ち上がる。土壇の規模は長径103cm、短径99cm、深さ32cmを測る。堆積土は5層確認した。F2層には炭化物や炭片を多く含んでいる。遺物は須恵器の壺破片が1点出土した。

**S K 1448** 本土壇は中央南区西端に位置する。S D 1175溝跡に接しており、V層の褐色シルトまで掘り下げて遺構の確認をした。検出面での標高は213.3mを測る。平面形は長椭円形で、長径3.2m、短径1.7m、深さは5cmと浅い。ここからは須恵器27点、土師器42点出土した。一部S D 1175出土の土器と接合している。

**S K 1453** 本土壇は12-6グリッドに位置し、検出面はIV層である。規模は長径1.84m、短径1.20mを測り、深さは6cmと浅く底面は平坦である。遺物は須恵器の壺片が3点出土した。

**S K 1531** 本土壇は東区10-17グリッドに位置し、検出面はIV層である。平面形は不整椭円形を呈し、検出面での規模は長径1.65m、短径1.05mを測り、深さは5cmと浅い。底面は平坦である。遺物は須恵器の壺破片が7点、土師器の壺破片が12点出土した。

#### 4 井戸跡

井戸跡は6基検出している（第61、62図）。中央北区に2基、中央南区で2基、西区と東区でそれぞれ1基である。いずれも周辺に建物跡を伴う。S E 256は古代の井戸跡と考えられ、その他は、古代の遺構を切っていたり、土壙など中世以降の陶磁器が含むものもあり、中世末から近世にかけての建物跡に伴う遺構と考えられる。S E 256・S E 539・S E 875・S E 1134・S E 1047等は素掘りの井戸で、S E 1556は柱を打ち込んで板材で囲んだ井戸である。いずれの井戸跡からも掘り下げ時から著しい漏水が認められた。

**S E 256** 本井戸跡は25-11グリッドに位置し、周りにはS B 224・960・980などの建物跡がある。平面プランは椭円形を基調とし、規模は径150cm前後、底部径は80cmを測る。検出面からの深さは64cm、断面形は台形状を呈する。遺構の壁面の崩落が認められ、本来は平面規模がやや小さく筒状に近くなると考えられる。堆積土は6層に分けられた。また、覆土から多数の拳大的礫が多数出土した。遺物は土師器片17点、須恵器・壺片4点が出土した。出土遺物から平安時代の井戸跡と考えられる。

**S E 539** 本井戸跡は西区に位置し、側にはS B 300、S B 1620の建物跡が配置する。またS D 3溝跡の南端に掘り込まれているため、溝跡と一緒にした構造を持つものとも考えられる。平面プランは不整円形を呈し、径1.2m前後、底部径は約70cmを測る。検出面からの深さは84cm、断面形は台形状を呈する。堆積土は5層に分けられ、覆土F1から内耳土壙の破片が出土した。

**S E 875** 本井戸跡は調査区の中央部分の堀跡に近いところに位置する。遺構確認面はIVa層面で、表土を除去した段階で確認することができた。確認面の標高は214.3mを測り、現状では平坦な面にある。S B 840建物跡やS B 1600建物跡に近接し、これらの建物に伴う施設と考えられる。平面プランは椭円形を基調とし、規模は径130cm前後、底部径は85cmを測る。

検出面からの深さは1.2m、断面形は長胴形を呈する。井戸壁面の崩落が認められ、本来は平面規模がやや小さく筒状に近くなると考えられる。堆積土は9層に分けられ、堆積状況から下部分は自然堆積ながら堆積土上位のF1・2・3など壁面崩落や人為的な堆土が見られた。遺物は土師器の壺破片2点、須恵器の壺破片1点と棒状の木村片が出土した。土器類は上層からの出土でいずれも流れ込みと判断され、棒状の木製品は井戸跡深く入り込んでおり、井戸に伴うものとみられる。

**S E 1047** 中央南区の16-8グリッドで検出された。IV b層面で確認され、SD 1046と切り合ひ、本遺構が新しい。遺構検出面での平面形はやや不整な円形で長径134cm、短径122cmを測る。遺構の深さは検出面から底面までに85cmあり断面は台形状となっている。堆積土は6層からなり、上層は暗褐色のシルトで下は暗灰褐色シルトになっている。底部付近は潮水が著しく粘性のある泥状になっている。本遺構からは土師器の壺破片2点、須恵器壺破片1点、土壙の破片と思われるものが1点出土した。平安時代の溝跡を切っていること、土壙が含まれていたことから、中世末から近世の時期に機能したと考えられる。隣接するSB 1500建物跡に関連する井戸跡とみられる。

**S E 1134** 本井戸跡は15-12グリッドに位置し、周囲にはSB 1600・1601などの建物跡がある。平面プランは円形を基調とし、規模は径130cm前後、底部径は77cmを測る。検出面からの深さは64cm、断面形は台形状を呈する。遺構の壁面の崩落が認められ、本来は平面規模がやや小さく筒状に近くなると考えられる。堆積土は4層に分けられた。遺物は、覆土から須恵器の壺破片2点、壺破片1点、壺破片1点と疊が出土した。

**S E 1556** 本井戸跡は、東区東端の11-21グリッド、SD 880に隣接して検出した。遺構検出面はIV層であるが、本来はIII層中で確認できたものとみている。SK1439と重なり、東側はSD 880壠跡にぶつかる。井戸跡付近の西側には建物跡ではなく、東側の調査区の外に建物が存在する可能性がある。井戸跡は中央の井戸枠とその外側の掘り方からなる。掘り方平面形は不整の隅丸方形を呈しており、西側にSK1439とつながっている。長軸156cm、短軸145cmで周壁の立ち上がりは急である。井戸枠は約1m間隔に四角に打ち込まれた4本の隅柱を廻すように横板が上下2段に配置され、各面にさらにやや細い縱杭が打ち込まれ横板を支えている。柱材はクリを利用し、縱杭にクリの他にモクレンを利用している。また、横板と縱杭を支えに蓋状のものが張り廻らされた状態で検出された。4つの隅柱材の規模は長さ1.3~1.5m、径15cmを測り、柱の先端は平頭である。検出面から井戸底部にかけて4層の土層が堆積し、粘土、砂シルト、砂が堆積しており、井戸廻縁に徐々に埋没していったとみられる。

遺物は陶磁器の破片1点と完全な形で曲物が1点(RW500)が出土した。自然遺物として桃、曲物出土や梅、胡桃などの種子類も出土した。

## 5 堀 跡

今回の調査において検出された堀跡は2条である。中世末から近世にかけて機能した館跡に伴う堀跡と考えられるが、西側の堀跡とした遺構に関しては位置関係や規模から堀跡なのかどうか、なお検討する必要がある。

**SD 86堀跡** 西区13-18-3グリッドにかけて検出された(第66図)。遺構確認面はIV層で

土 場

井戸枠の検出

クリ材利用

**堀跡・水路跡** あるが、Ⅲ層段階で検出できたものと考えられる。堀は南北方向に伸びており、途中農道をはさんで21-3グリッドにて堀の続きを確認している。堀の軸方向はN-3°-Wである。確認面での幅は約2.2m、堀底の幅は約60cmで、検出面からの深さは105cmを測る。断面形は逆台形で底部付近はやや丸みを帯びている。壁はゆるやかに立ち上がり、大きく外傾している。堆積土は11層からなり、F4・5は人為的な埋め土でF6層以下は泥化した自然堆積層である。遺物はF7・8から内耳付土鍋の破片と須恵器の壺破片が出土した。本遺構は館を囲んだ西側の堀跡遺構或いは鶴の木堤の水路跡とも考えられる。

**SD 880 堀跡** 調査区東側6-20-17-21グリッドにかけて検出された（第63、64、65図）。遺構確認面はⅡ層であるが、堀は南北方向に伸びており、途中水路にぶつかり、東に折れ曲がり延びていく。当初水路にぶつかり水路に合わせて西方向につながっていくものと想定したが、地籍図による堀跡の旧地形観察から東側に折れ曲がっていくことが判明した。ただ南側の水路部分は断面観察から堀跡につながっていたことも考えられる。東側堀跡の軸方向はN-3°-Wである。この場所での堀幅は約4.7m、堀底の幅は1.7mで、表土からの深さは約2.1mを測る。断面形は逆台形で底部付近はやや丸みを帯びている。壁はゆるやかに直線状に立ち上がり、大きく外傾している。堆積土は14層からなり、F2-5は人為的な埋土で黒土や粘土・シルトが塊状に交じり合う堆積土になっている。F6層以下は自然堆積層で、F10以降は泥化して草などの植物遺体が混じっている。覆土からは須恵器や土師器の破片とともに、中世から近世の陶磁器類が出土している。F2からは須恵器の壺片、F3からは擂鉢片、F4・5からは須恵器の壺片が出土したが、いずれもまとまつたものではなく、単独の出土であり堆積していく過程で埋没していった可能性が高い。水路の折れ曲がり部分は幅が約1mと狭くなり、底面までの深さも70cmと浅い。遺物は流れ込みと思われる須恵器や土師器の破片と中世から近世の陶磁器類が出土した。

**内城館の堀跡** 本遺構は字「内城」の地籍図に確認できる城館跡「内城館」の西側の堀跡遺構と考えられ、前述したように地籍図から堀跡の続きを確かめると、大きく東側に直角に折れ曲がり続くことが予想され、これは現在の用水路の位置に相当している。今回の調査で検出したのは堀跡の西南角部分と堀跡からの水路部分と考えられる。

## 6 溝 跡

今回の調査で検出された溝跡は計113条である。ただ連続する同一の遺構でありながら番号を付したものや近代以降のものもあり、本来はもっと少なくなると考えられる。この中には畑や水田の用水路跡や屋敷の水路など、近年に使用されていたものも含まれている。また耕地整理による削平の影響や調査区外に延びるものなど、全体の形状や規模が明確にできないものも多い。調査区北側から南側にかけて検出された溝跡の多くは人工的に掘り込んで整形されたものであり堆積土や出土遺物の状況から常時流水し排水を目的としていたものと区画を目的として設けられたものと分けられそうである。西区のSD3溝跡や中央南区で認められたSD1087溝跡などは遺物の出土量も少なく大半の遺物が流れ込みによるものため年代を把握するのが難しく、年代のはっきりしているもの以外は、堆積土や検出面、遺物、遺構の位置などから、おおよそ古墳時代のもの、平安時代のもの、中世末から近世のもの、近代以降のものと

区分している。報告に当たっては調査区内における位置関係を把握するために便宜的に呼称した中央北区、中央南区、東区、西区に大別し、主なものについて順次報告する。遺構の性格上、平面図と土層断面図は同縮尺で掲載していない。

**S D 3 (第67図)** 本溝跡は、西区で検出した。北壁から南に延び、SE539井戸跡にぶつかる。溝跡の覆土には柱穴が掘りこまれた箇所が幾つか認められた。溝跡が埋没してから S B 1620・1621建物跡が建てられている。遺構確認面はIV層で、幅80cm、深さ15~25cmを測る。溝断面形はかまぼこ形を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積層は3層に分層でき、自然流入による堆積土である。輝が数点みられたものの遺物の出土はなかった。

**S D 82 (第67図)** 本溝跡は西区で検出した。西側の壁面から南側の壁にぶつかり、道路を挟んで、S D 1087に繋がっていくとみられる。幅1.1m、確認面からの深さは平均で35cmを測る。立ち上がりは緩やかで底面はほぼ平坦である。堆積層は3層確認でき、自然堆積である。この溝跡からは須恵器の破片や砥石などが出土した。

SD 1087に繋がる

**S D 168 (第68図)** 本遺構は調査区中央の22-10、23-11、24-11、25-12、25-13グリッドに位置する。遺構確認面はIVa層で、溝は調査区北側から緩やかな傾斜面の中を南方向に延びていく。溝周辺はほぼ平坦な地形をなす。溝跡は途中で3方向に分かれ、流下していくが、途中から徐々に浅くなり部分的に消失している。中央区南側に存在する南北の溝跡（S D 633・1046・1175）につながっていると考えられる。S D 168北側の溝跡検出部分では、幅110cm、深さ45cmを測り、堆積層は6層確認した。堆積層は黒褐色のシルト層を基調とした覆土で、部分的に炭化物や赤化した砂などが混じりあう。底面は若干の凸凹はあるものの滑らかである。底面の標高は北側で213.6m、中央分岐点で213.20mを測る。南北の高低差は40cmと北から南へ向かって緩やかに流下していたものと判断される。また、レンズ状を呈する堆積状況から自然堆積により埋没していたと考えられる。

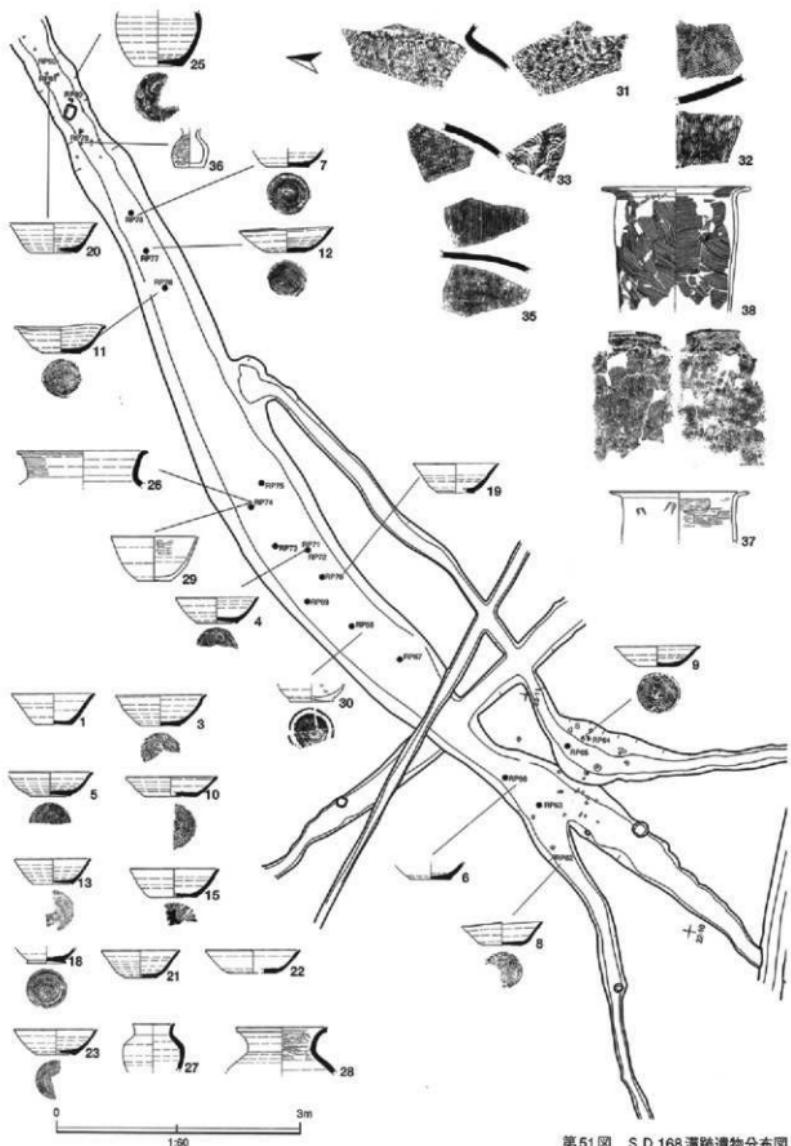
遺物は、本溝跡のプラン確認時から土師器や須恵器が多数出土しており、溝跡底部付近からまとまって多くの土器類が見つかった。また、砥石や焼けた轍、輪の羽口、鉄滓なども投げ込まれた状況で出土している。付近で製鉄等の作業が行われていたことが伺える。遺物の出土状況については第51図に示した。北側壁際から22-10グリッドの分岐する地点まで土器がまとまって出土しており、やや離れたところや異なる層位であっても接合した資料もある。また出土した資料を観察した結果、2次的に熱を受けたり、意図的に碎片に破壊したり、祭祀的な行為を表した形跡は認められなかった。溝跡に廃棄的・投棄された後、埋没したり流されたものと判断される。本溝跡内からは総数2971点の遺物が出土し、組成的には須恵器壺類が24%と最も多く、次いで土師器の壺類で、須恵器の壺類の破片が続く。これら出土遺物の内、比較的の遺存状態の良好な資料について掲載した。

多数の遺物

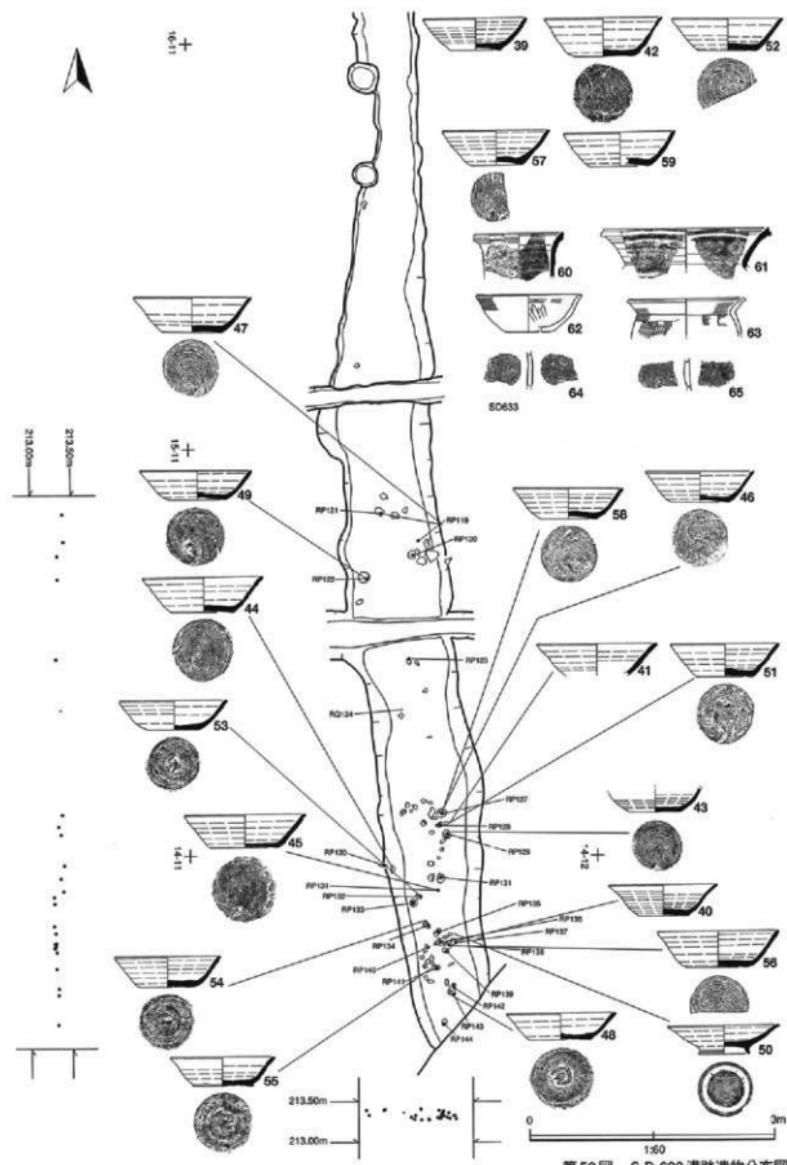
輪羽口  
鐵滓

**S D 373・929 (第70、71、72図)** 本溝跡は中央北区の東西に長く検出した。本遺構が検出された西側では遺構の確認面が低く、擾乱を受けて削平されていた部分もあるため遺存状態が悪い。S D 168溝跡やS D 350、S D 569溝跡等と重複しており、本溝跡がS D 168やS D 350、S D 569溝跡を切っていることから新しいことがわかる。遺構周辺は地形的に南側に向かって緩傾斜しており、南西側ではV層のグライ化したシルト層面で確認し検出した。遺構内堆積土は大きく3層に分層でき、自然堆積土である。二つの溝跡は東西に直線的に配され、東側壁際

III 検出した遺構・遺物



第51図 SD 168溝跡遺物分布図



第52図 SD 633 漢跡遺物分布図

で合流している。調査区内で確認できた規模は東西70m、溝幅40~60cmを測る。周壁は緩く立ち上がる断面掘鉢状を呈するが、東壁側ではやや広がる形状を呈する。底面は凸凹があるがほぼ平坦であり、西側にむかって緩傾斜している。溝跡の東と西の高低差は80cm程度である。遺物は土師器・須恵器・内耳付土壙、砥石、礫類など総数216点を数える。多くの資料は細片であり摩滅が著しい。本溝跡の明確な所属時期・性格は不明であるが内耳付土壙の出土や重複する遺構や検出面等から判断して中世末以降に機能していたと見られる。

**S D 568** 本溝跡は、22~14グリッドで検出した。東から西に延び、試掘トレンチにぶつかる。遺構確認面はIV a層で、幅33cm、深さ14cmを測り、溝断面形はかまぼこ形を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積層は2層に分層でき、自然流入による堆積土である。遺物は須恵器片4点、土師器片8点出土した。

**S D 626 溝跡（第73図）** 本溝跡は中央北区20~14、20~15グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦な地形を呈している。S D 929溝跡によって切られて、S D 972につながっている。20~15グリッド付近で大きく溝幅を広げるような部分を残し、およそ10mで消失している。溝幅は最大で2mを測り、検出面からの深さは最大で43cmを測る。大きく溝幅を広げる部分では、他にS D 177溝跡に切られている。堆積土は3層確かめられ、赤砂や砂利の層が入る。この溝跡からは古墳時代の土師器片が出土したが、遺存状態が悪いため形態や詳細な年代を明らかにできない。砂利といっしょに上流域部から流れ込んで堆積したものと考えられる。

**S D 633 溝跡（第76図）** 本溝跡は調査区中央部に位置する。遺構確認面はIV a層で、その標高は213.4m前後を測る。S D 168から分かれ、南方向にまっすぐに延びて行く溝跡である。10~12~11グリッド付近に至ると果樹の攪乱により検出は困難であった。S D 373・S D 929・S D 1033に切られている。切り合いからはS D 633溝跡が古い。

底面は凸凹しており、小さなピット状のところも認められ、壁面の立ち上がりは緩やかである。S B 1480建物跡とS B 1505建物跡に挟まれた部分に相当する溝部分で須恵器の壊を主とする遺物が多数出土し、遺物の出土状況を第52図に示した。出土した壊類はほぼ完形のものが多く、溝内に投げ込まれた状況を示しており、底部を上にしているものが多い。壺・壺の底部資料でS D 1046出土のものと接合したり、壺破片で同一個体と思われるものもあり、二つの溝跡は同じ時期に機能した溝跡と考えられる。

**S D 972 溝跡（第69、73図）** 本溝跡は調査区中央北の21~13、22~13、23~13、24~12グリッドに位置する。遺構確認面はIV a層である。北側壁から緩やかな傾斜面の中を南方向に延びる。溝周辺はほぼ平坦な地形をなす。溝跡は埋没後、S B 224建物跡の柱振り方により掘りこまれていることからS B 224建物跡よりも古い時期にあたる。S D 373とS D 929に断ち切られ、南方向に伸びていき、途中20~14グリッドで幅が広くなり土師器の壺破片（RP53）がまとまって出土した。その後19~14グリッド付近から徐々に浅くなり消失していく。中央区南側で確認している南北の蛇行した川跡につながっていると考えている。溝断面は、かまぼこ状で立ち上がりは緩やかである。堆積土は赤砂が混じる砂質シルトで自然に埋没していったと見られる。北壁部分では、幅45cm、深さ33cmを測り、中央付近では幅約2m、深さ20cmを測る。本溝跡はプラン確認時から土師器の破片が多数出土しており、溝跡底部付近からまとめて多く見つかった。出土した土器から古墳時代に掘り込まれた溝跡とみられる。

**S D 702・741・1344・1415溝跡（第71図）** 本溝跡は中央北区21-18グリッドからS D 702として南方に伸び、途中S D 373とS D 929により断ち切られ、その後S D 741とした溝跡に連なり南下する。途中15-18グリッドで二手にわかれ、S D 883が分かれる。S D 741はさらに南に伸び、東区内でS D 1415溝跡につながり、南区のS D 1344溝跡に伸びていく。全長約95mに及び、北壁付近では幅30cmで検出面からの深さは15cmを測り、S D 833と分かれる付近では、幅25cm、深さ10cmほどである。本溝跡からは、須恵器や土師器の小破片が94点出土した。大半は北側からの出土である。堀跡からつながる水路に切られ壊されていることも考慮すれば、平安時代の溝跡と考えられる。

**S D 990溝跡（第76図）** 本溝跡は中央南区の中央に位置する。遺構確認面はIV b層で、その標高は213.5m前後を測る。S D 929から分かれ、S K 959・937を通り、南方向にまっすぐに延びて行く。15-10グリッド付近でS B 1600建物跡を囲むように回り込み、東南方向に流れ、S D 880の折れる部分に合流する。コーナー付近はやや幅が広くなっている。14-10グリッド付近での溝幅は25cm、深さ10cmを測る。断面は椀形をなし、立ち上がりは緩やかである。溝のラインは建物跡に合わせた位置取りと見られる。溝跡は平安時代の建物跡（S B 1480）の掘り方を一部破壊している。溝跡内からは、土師器や須恵器の破片が12点出土したが、堆積状況から流れ込みによるものと考えられた。

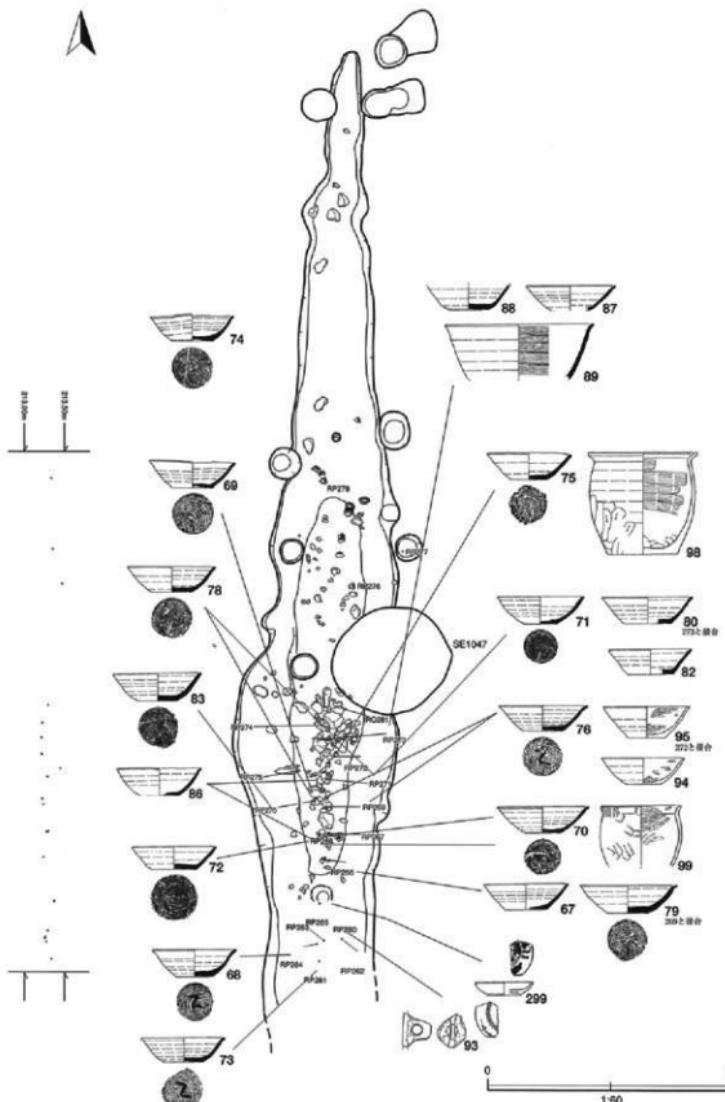
S B 1600を囲む

**S D 1046溝跡（第75図）** 本遺構は中央南区の10-19-8グリッドに位置する。遺構確認面はIV b層で標高は213.5m～214.0mになる。北側から緩やかな傾斜面の中を南方向に延びていく。溝周辺はほぼ平坦な地形となっている。溝跡はS D 168から分流するものと見られるが途中、20-8グリッドでは繋がりを確認することができなかった。溝跡はさらにS D 1087に断ち切られながら流下していくが、徐々に浅くなり消失していく。溝跡はさらに南方の調査区外に延びていくと考えられる。S B 1470建物跡の脇での溝検出部分では、幅2.2mと広くなり深さは33cmを測り、堆積層は3層確認した。堆積層は灰褐色のシルト層を基調とした覆土で、部分的に炭化物や赤砂などが混じり合う。レンズ状を呈する堆積状況から自然堆積により埋没していったと考えられる。16-8グリッドの堆積土が一番深い。S B 1470・1480建物跡の傍部分に相当するところから土師器や須恵器がまとまって多数出土しており、特に溝跡底部付近から多くの土器類が見つかった。また、砥石や川原石・焼けた礫なども投げ込まれた状況で多数出土している。須恵器の甕で、S D 633やS D 1175出土の甕と接合するものがあった。土器が集中した区域を部分的に中世の井戸跡（S E 1047）が壊している。遺物の出土状況については第53図に示した。溝内総出土点数は1085点で、組成的には土師器が45%、須恵器が27%となり、傾向としては須恵器の甕と土師器の内黒窯が多く、甕底部に「乙」と墨書きされた須恵器甕も認められた。これら出土遺物の内、比較的遺存状態の良好な資料について第88～90図に掲載した。

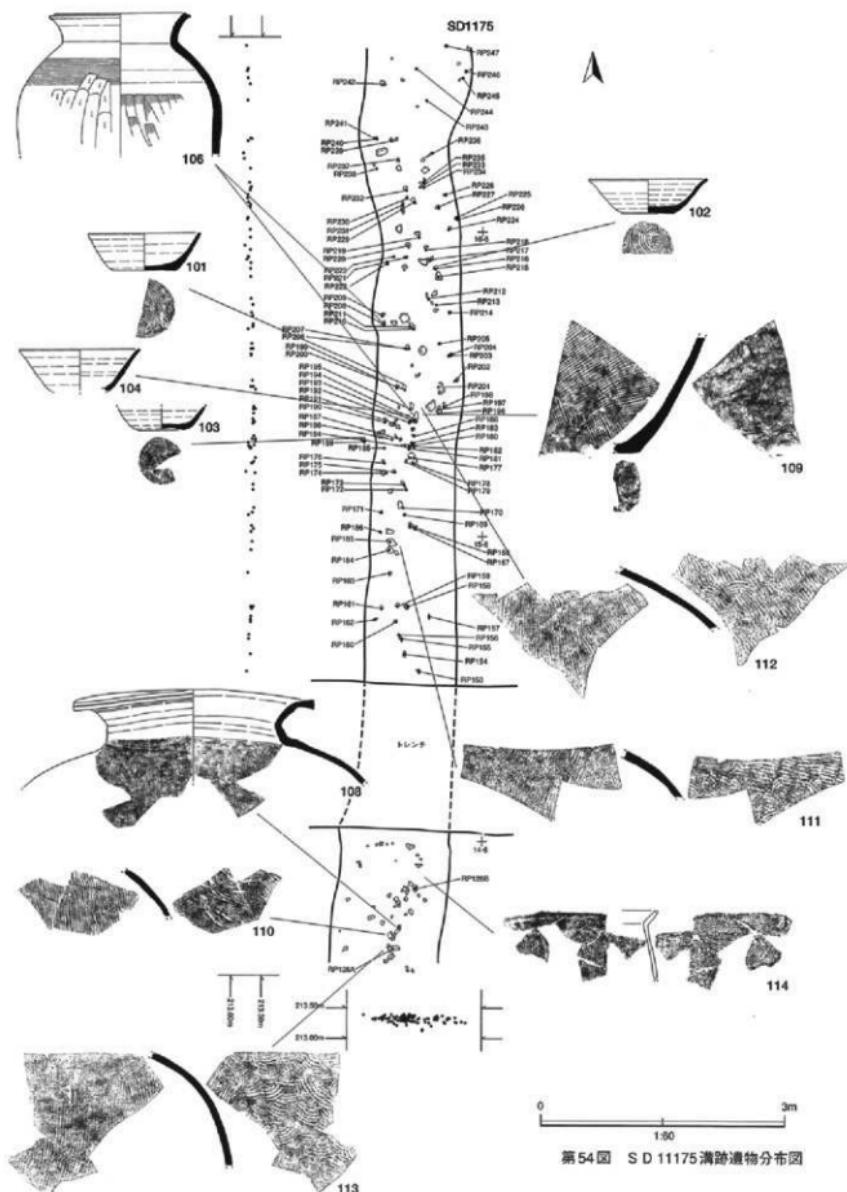
須恵器・土師器  
が多数出土

**S D 1087溝跡（第75図）** 本溝跡は中央南区の西側に位置し、周辺はほぼ平坦な地形を呈している。北西の壁から南方向に向かい、途中で向きを南東に変えまっすぐに延びて行く。道路を挟んで西区で検出したS D 82溝跡からつながる溝跡と予想される。20-6グリッド付近ではS D 1090溝跡やS D 1175溝跡と切り合い、南側の14-8グリッドでS D 1046を切っている。9-12グリッドで調査区の南壁にぶつかるが、さらに南方向に伸びていくものと予想される。溝幅や掘り込みの深さはほぼ一定し、部分的に後世の果樹痕によって破壊を受けている。規模

S D 82と繋がる



第53図 S D 1046 漢跡遺物分布図



第54図 S D 11175溝跡遺物分布図

は平均で60～75cmを測り、検出面からの深さは最大で50cmを測る。堆積土は4層確かめられ、灰褐色のシルト層が入る。この溝跡からの出土遺物は224点を数え、土師器片・壺片と須恵器片・壺片と中世以降の陶磁器片が出土した。いずれも堆積土といっしょに流れ込んで堆積したものと考えられる。

**S D 1175・1090（第74図）** 本遺構は中央区南西側のグリッドに位置する。遺構確認面はIV b層からV層に及び標高は213.3m～213.1mになる。北側の道路との壁際から緩やかな傾斜面の中を南方向に延びていく。溝周辺はほぼ平坦な地形となっている。S D 1090溝跡はS D 82

第6表 溝跡出土の遺物総数

遺構名	総数	須恵器					土師器					石製品	備考
		壺	壺	壺	蓋	他	壺	壺	壺	高壺	他		
SD168	2971	725	41	55	1	1	771	18	1296	12	49	1	*1
SD350	236	81	3	6	1		54		85	5	1		*2
SD633	303	203	7	6	1		28		55		2	1	*3
SD1046	1085	485	26	25	1	3	299		241		3	2	*4
SD1175	714	264	41	92			95	5	197		20		*5
計	5303	1752	118	185	4	4	1247	23	1874	17	75	4	

注：

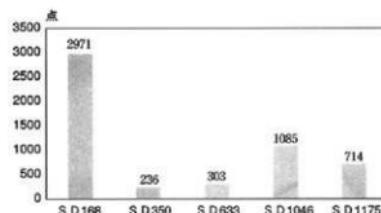
※1 SD168 : RP62～RP82/集計外（縁の羽口5/缺津3）

※2 SD350 : RP83/RP84

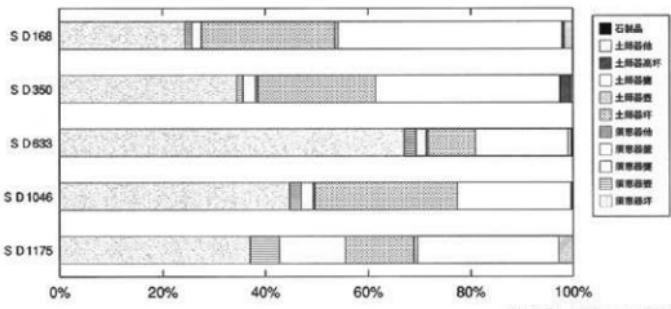
※3 SD633 : RP83/RP119～RP125/RP127～RP144/砾石1

※4 SD1046 : RP146/RP251/RP263～RP274/RP276～RP278/RP280/RQ281/砾石2/集計外（縁の羽口1/缺津2）

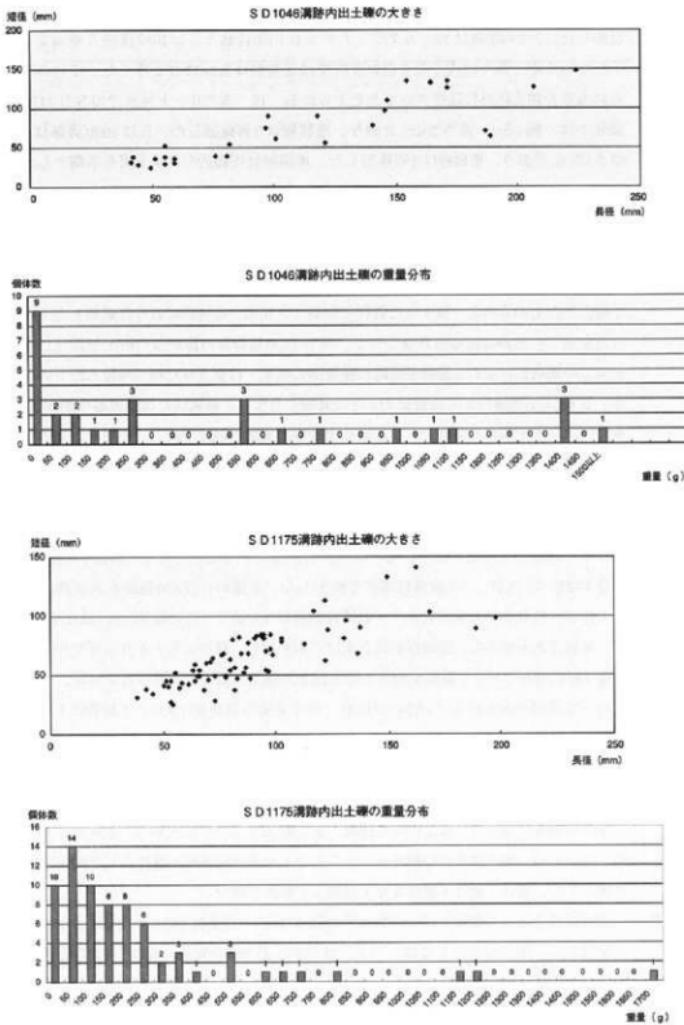
※5 SD1175 : RP126/RP153～RP247/集計外（縁津2）



第55図 溝跡出土の遺物総数



第56図 溝跡出土土器の構成比率



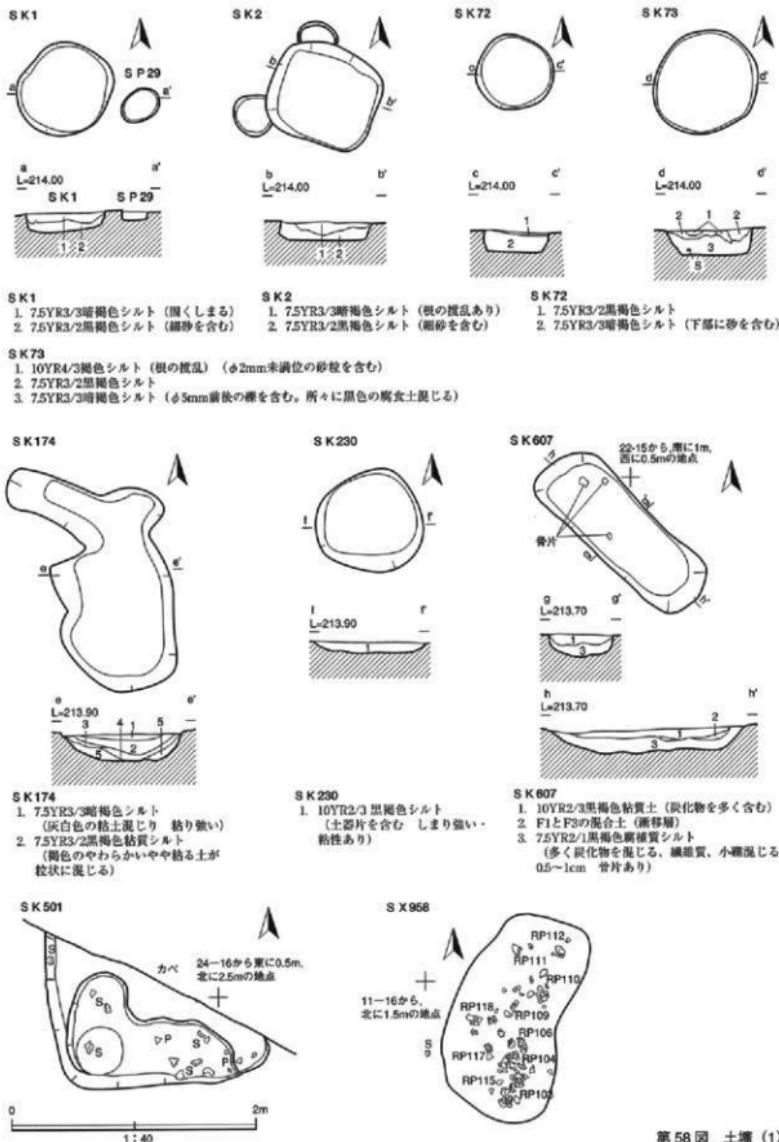
第57図 SD 1046・1175溝跡出土磚の計測グラフ

から分流するもの、S D 1175溝跡は S D 168溝跡からの続きと見られるが中世以降の溝跡 S D 373と S D 929に切られたり、遺構確認のため削り下げたりする中で明確にすることはできなかった。2つの溝跡は 19-6 グリッドで S D 1090溝跡と S D 1087溝跡と並ぶように南へ流下していくが、徐々に浅くなり南の壁際では包含層は 5cmほどと薄くなっている。溝跡はさらに南方の調査区外に延びていくと考えられる。16-5 グリッド付近での S D 1175溝跡検出部分では、幅 1.5m、深さ 30cm を測り、堆積層は 3 層確認した。S D 1090溝跡は、幅 0.9m、深さ 27cm を測り、堆積層は 4 層確認した。堆積層は灰褐色のシルト層を基調とした覆土で堆積状況から自然堆積により埋没していったと考えられる。S D 1175溝跡からは土師器や須恵器が多数出土しており、特に溝跡底部付近からまとまって多くの土器類が見つかった。溝跡南側(13-5 グリッド)で土器が広くまとまって出土しており、須恵器の大甕にはやや離れたところであっても接合した資料があった(第 54 図)。S D 633 と S D 1046 内出土の土器片同士で接合したものもある。出土した資料を観察した結果、意図的に碎片に破壊したり、祭祀的な行為を表した形跡は認められなかった。S B 1450 建物跡の傍からの出土が目立っていることからこの建物跡に関わる遺物が溝跡に纏めて廃棄・投棄された後、埋没したものと判断される。S D 1175溝跡内からは総数 714 点の遺物が出土し、組成的には須恵器破片が 37% と最も多く、次いで土師器の破片で、須恵器や土師器の甕類の破片が続く。中でも大甕の破片資料がまとまって出土したことが注目される。また S D 1175溝跡からは砾石や川原石・焼けた礫なども投げ込まれた状況で多数出土しているが、これら出土遺物の内、比較的遺存状態の良好なものについて第 91、92、93 図に掲載した。一方、S D 1090溝跡からは、遺物の出土は相対的に少なく総数 70 点にとどまり、大半は S D 1175溝跡から紛れ込んだ土師器や須恵器である。S D 1425(第 78 図) 本溝跡は東区で検出した。北側の S D 880 墓跡から水路部分に沿って西の伸び、折れ曲がり南に向かう。遺構確認面は IV a 層で、最大幅 50cm、最大深さ 25cm を測り、底面は凹凸がある。溝断面形はかまぼこ形を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積層は 2 層に分層できる。位置や向きから水路を意識した設定であることが伺え、またこの溝跡に沿って柱列がみられる(SA1615 柱列)。出土遺物は須恵器片 3 点、土師器片 1 点・陶磁器片 8 点・砾石 1 点である。

## 7 遺構外の出土遺物

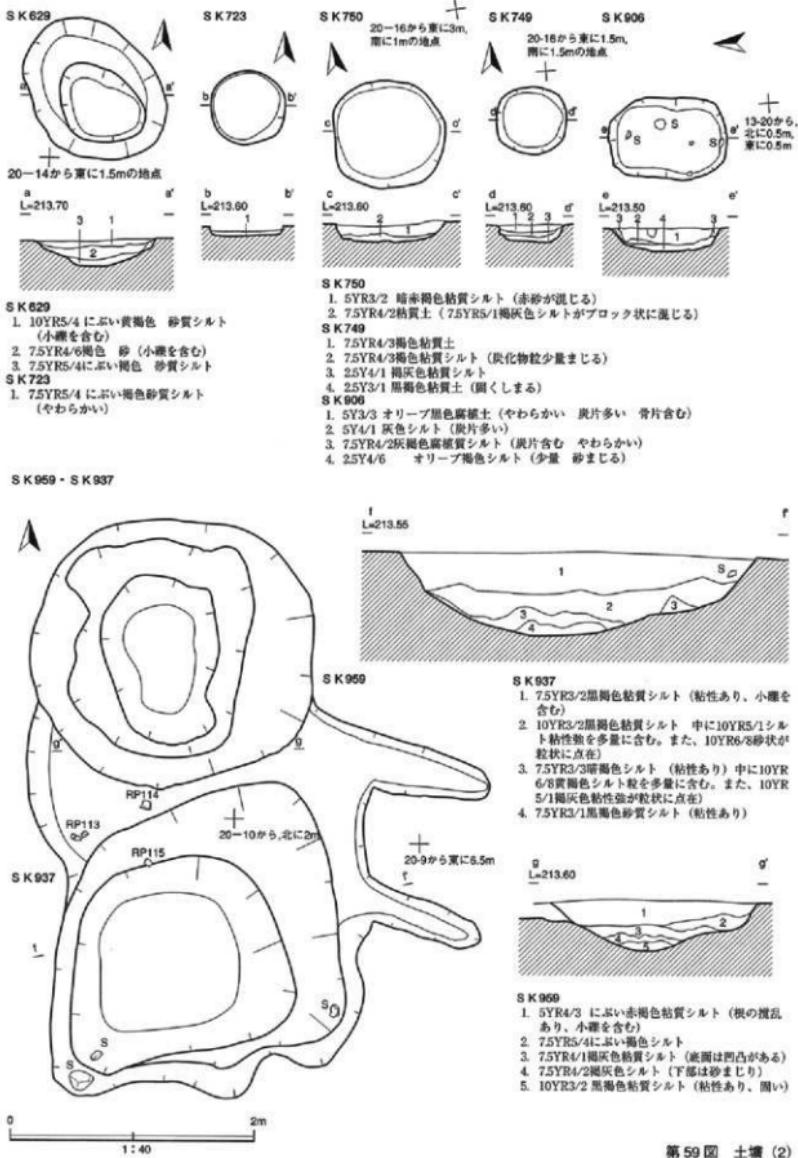
今回の調査において、表土からの採取、表土除去中に出土したもの、遺構とのかかわりが明確でないもの、用水路などの擾乱から出土したものを見出されたとして報告する。遺物は原則として、地区・地点・層位などを記録して取り上げた。

**遺構外の遺物** 遺構外出土として取り上げた遺物は土師器 4246 点、須恵器 1431 点、陶磁器 60 点、石製品 7 点を数える。出土位置としては、中央区北側の S D 168 の周辺、S D 1175 の周辺、建物が集中した中央付近に比較的多く出土している。また西区北壁際からは古墳時代の土師器がまとめて出土し、より北側に古墳時代の遺物が広がっているものと推測する。遺構外遺物のうち図示したものは 64 点で、各遺物の特徴や計測値については第 12・13 表に示してある。

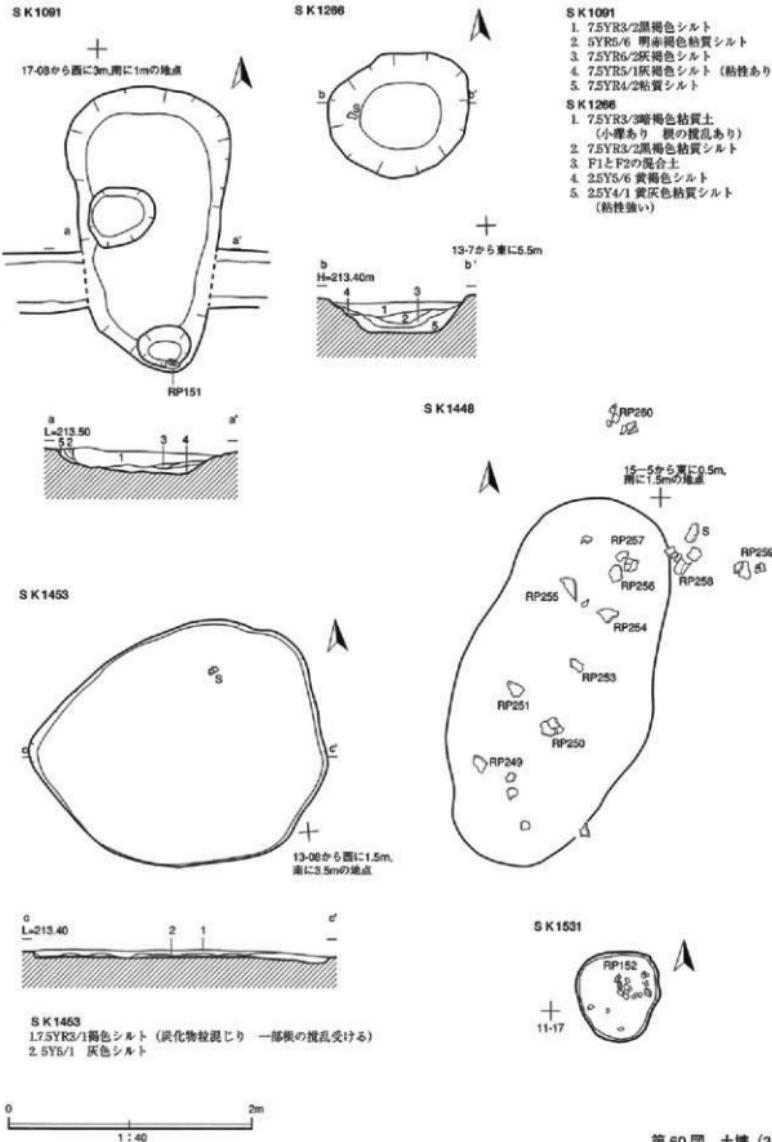


第58図 土壌(1)

III 検出した遺構・遺物



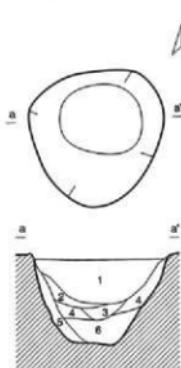
第59図 土壌(2)



第60図 土壌(3)

III 検出した遺構・遺物

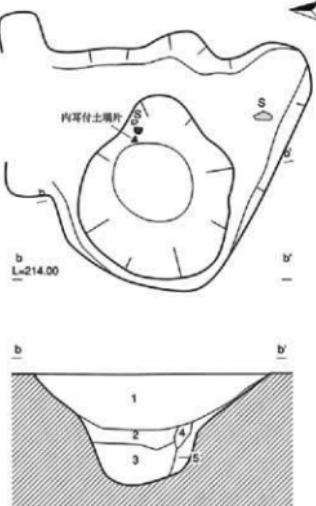
S E 256



S E 256

1. 75TR4/2 灰褐色シルト（小砾含む）
2. 75TR3/2 黒褐色粘質シルト（粘性あり）
3. 75TR3/3 灰褐色砂砾（砂・小砾を含む）
4. 75TR4/3 灰褐色粘質シルト
5. 75TR4/2 灰褐色シルト
6. 25YR3/2 黑褐色泥質シルト

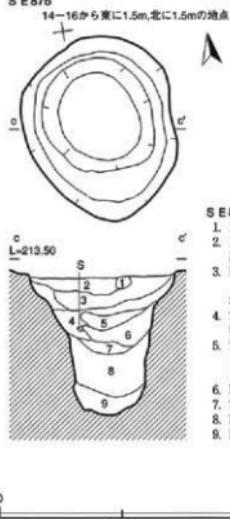
S E 539



S E 539

1. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト（植物組織含む）
2. 75YR3/1 黑褐色シルト
3. 75YR3/2 黑褐色砂質シルト
4. 10YR2/1 黑褐色粘質土（固い）
5. 10YR3/3 灰褐色シルト

S E 875



S E 875

1. 10YR3/2 黑褐色粘質土
  2. 10YR3/2 黑褐色粘質土（10YR2/1 黒色ブロック状、5~10cmが堅じる）
  3. F1と75YR5/6灰褐色砂質シルト（75YR3/1 黑褐色粘質土がまだら状に入る）
  4. 75YR5/6灰褐色砂質シルト（炭化物粒を含む）
  5. 75YR5/6灰褐色砂質シルトブロックと75YR5/1褐灰色粘質シルトブロックが混じる
  6. F3と同じ やや小砾混じり
  7. 75YR4/1褐灰色砂質シルト
  8. N 4/1 灰褐色粘質土（粘性あり）
  9. N 4/1 灰色シルト粘質土（粘性あり）
- 本材料が出土

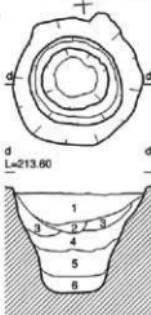
0

1:40

2m

S E 1047

17-9から西に2m、南に0.5mの地点



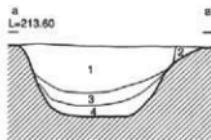
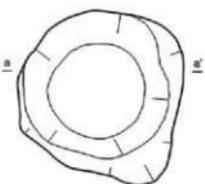
S E 1047

1. 75YR3/3褐褐色シルト（小砾混じり）
2. F1と75YR4/4褐色シルトブロック混じり
3. 75Y3/2 黑褐色シルト（75YR4/1褐褐色シルト混じり）
4. 5Y2/1 黑色シルト（粘性あり やわらかい）
5. 25Y4/1 費灰色粘質土（やわらかい）
6. 25Y3/3 黑オリーブ褐色 泥質シルト（下部に砂が混じる）

第 61 図 井戸跡 (1)

SE 1134

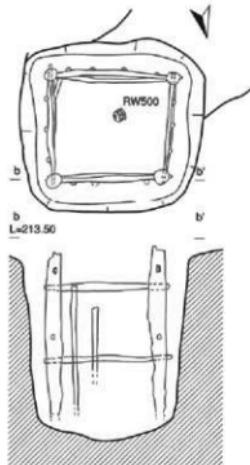
15-12から東に1.5m, 北に3mの地点



SE 1134

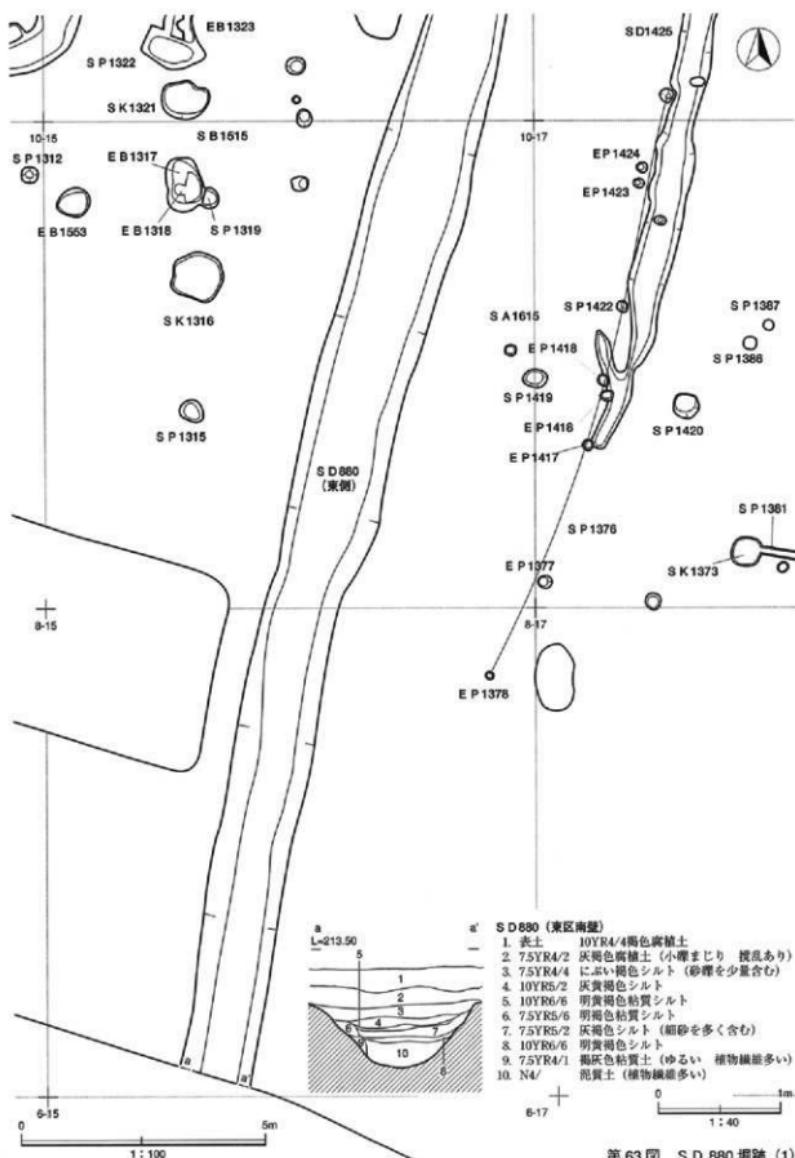
1. 10YR3/3暗褐色シルト (小礫と炭化物を少量含む)
2. 10YR3/3暗褐色シルト (10YR4/1褐灰色粘土をブロック状に含む)
3. 10YR2/2暗褐色シルト (10YR4/1褐灰色粘土を少量含む)
4. 10YR2/3黒褐色シルト (粘性あり)

SE 1556

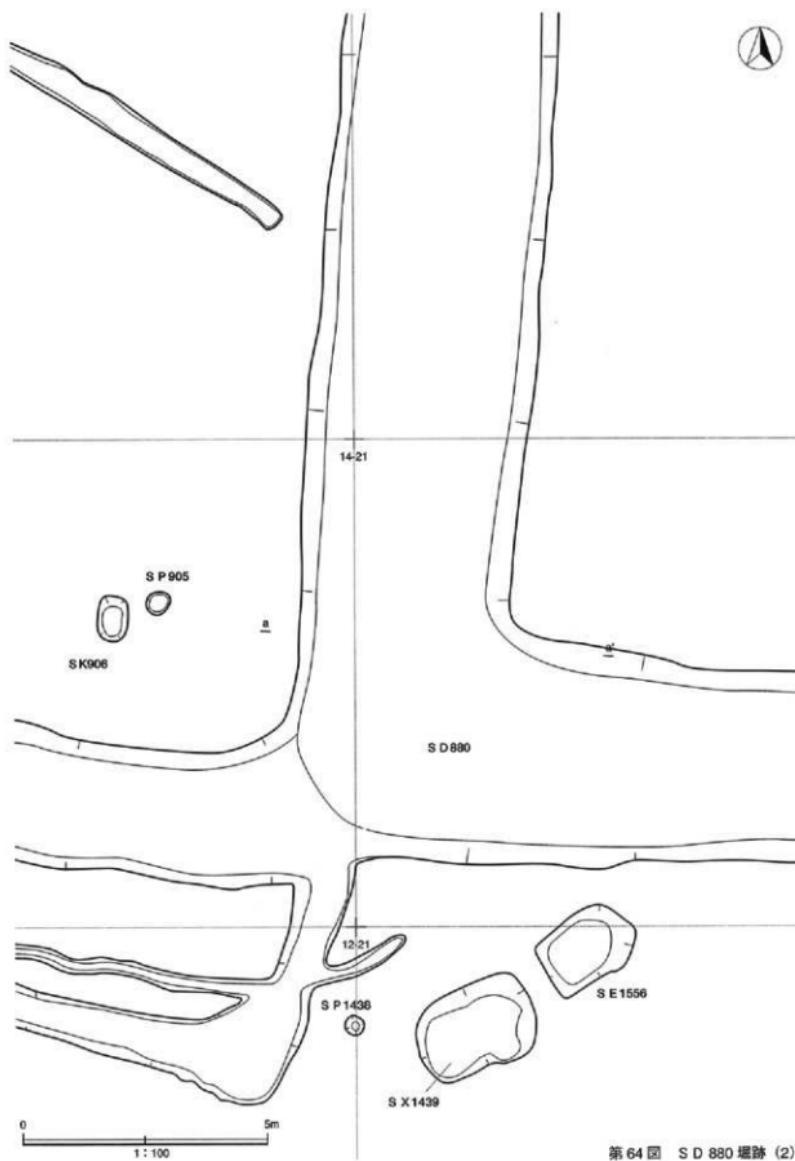


第62図 井戸跡 (2)

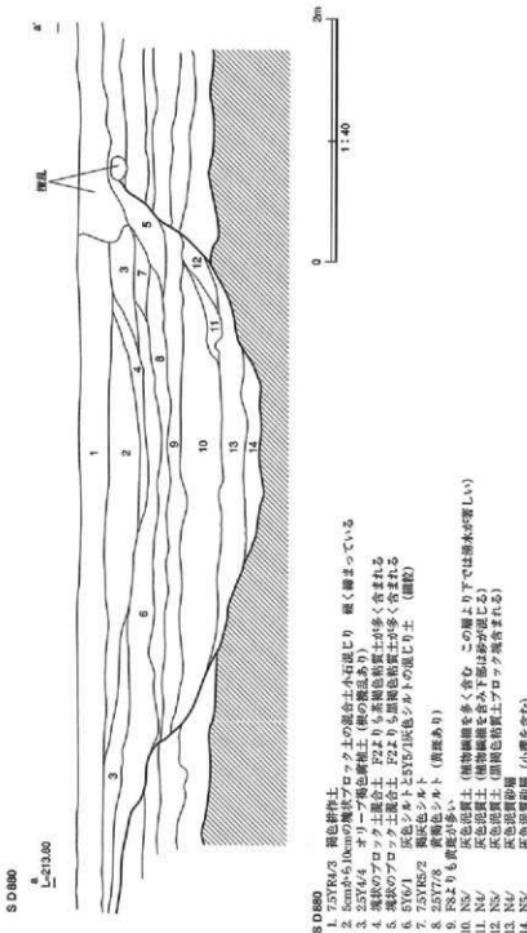
III 探出した遺構・遺物



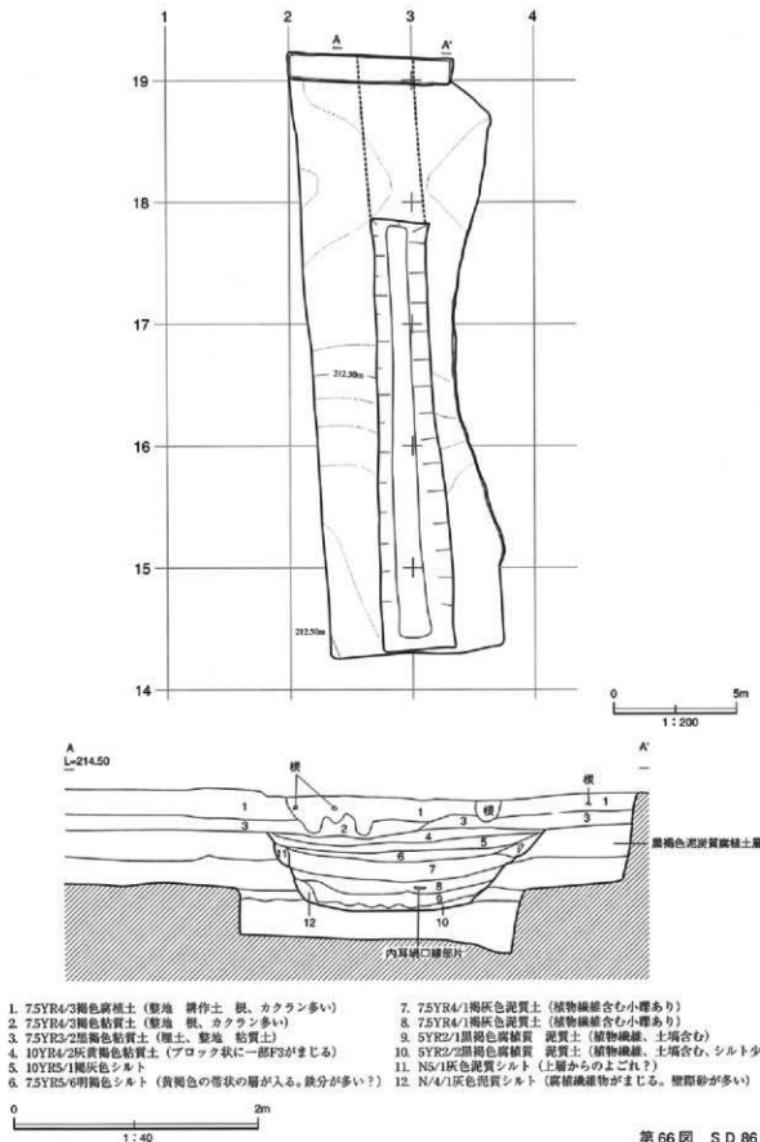
第63図 SD 880 堀跡(1)



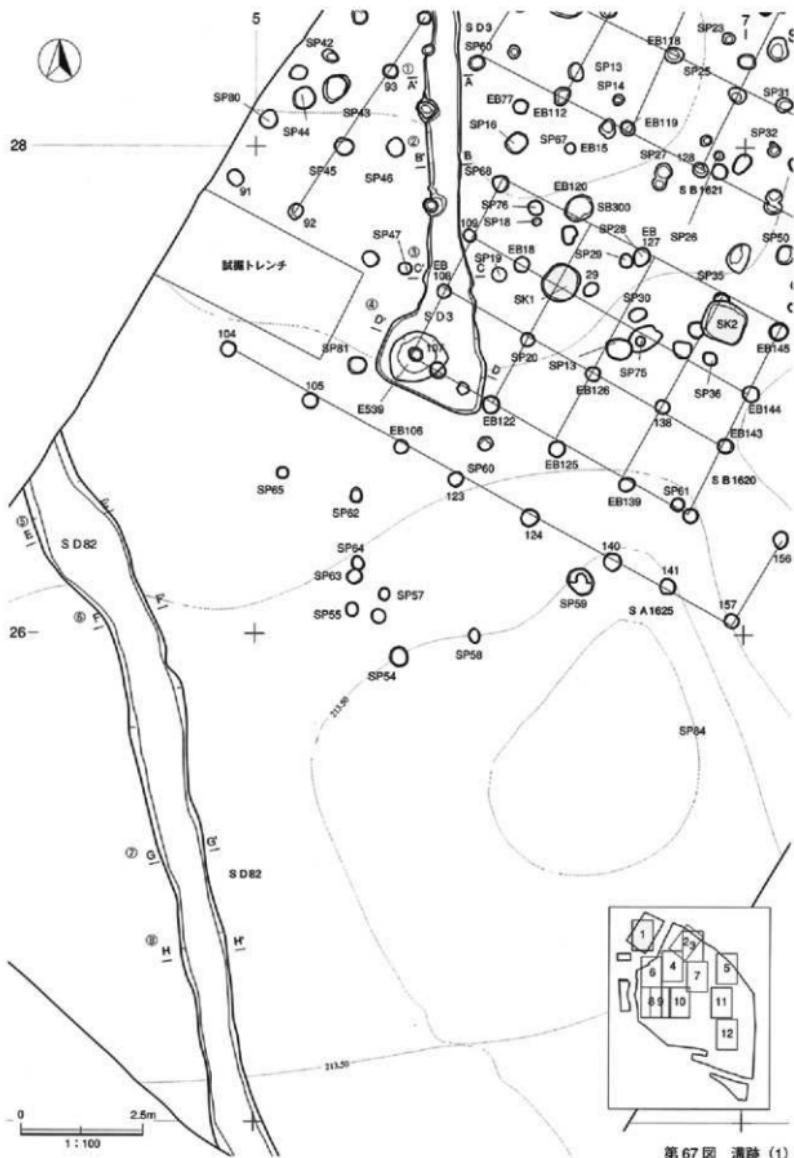
第64図 SD 880 墓跡 (2)



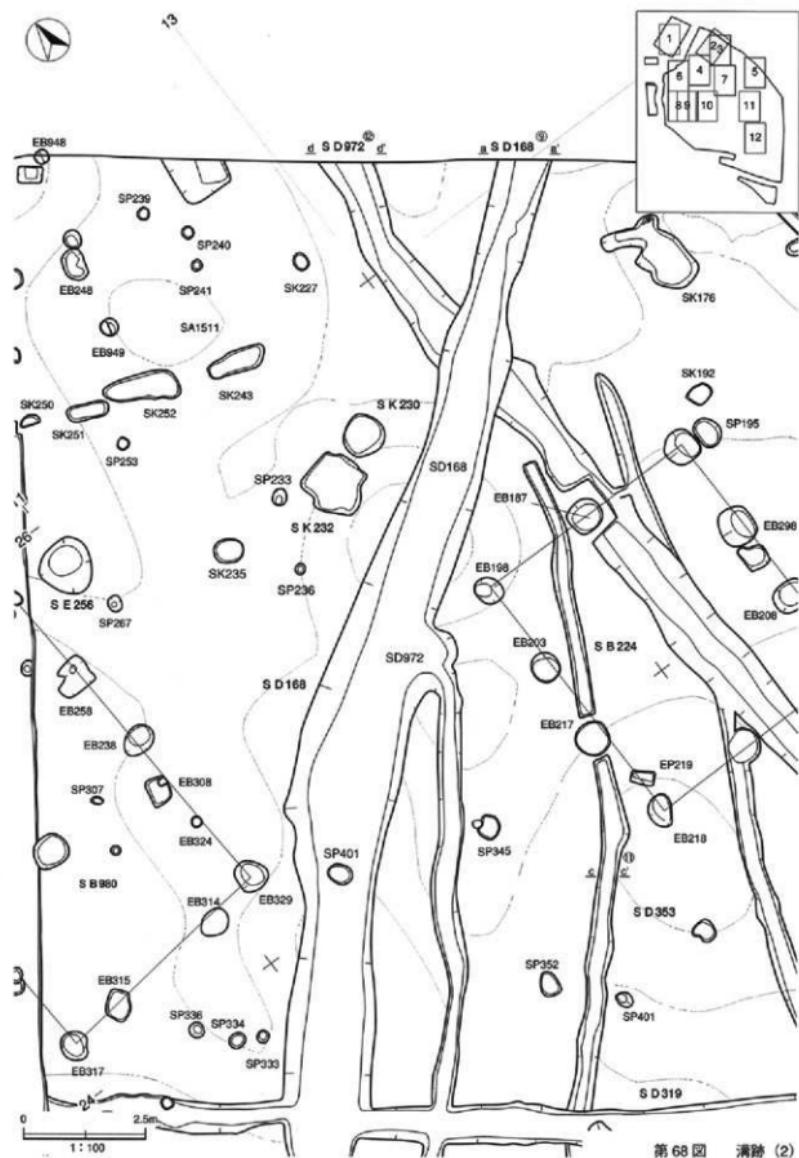
第 65 図 S D 880 堀跡断面図



第 66 図 S D 86 堀跡

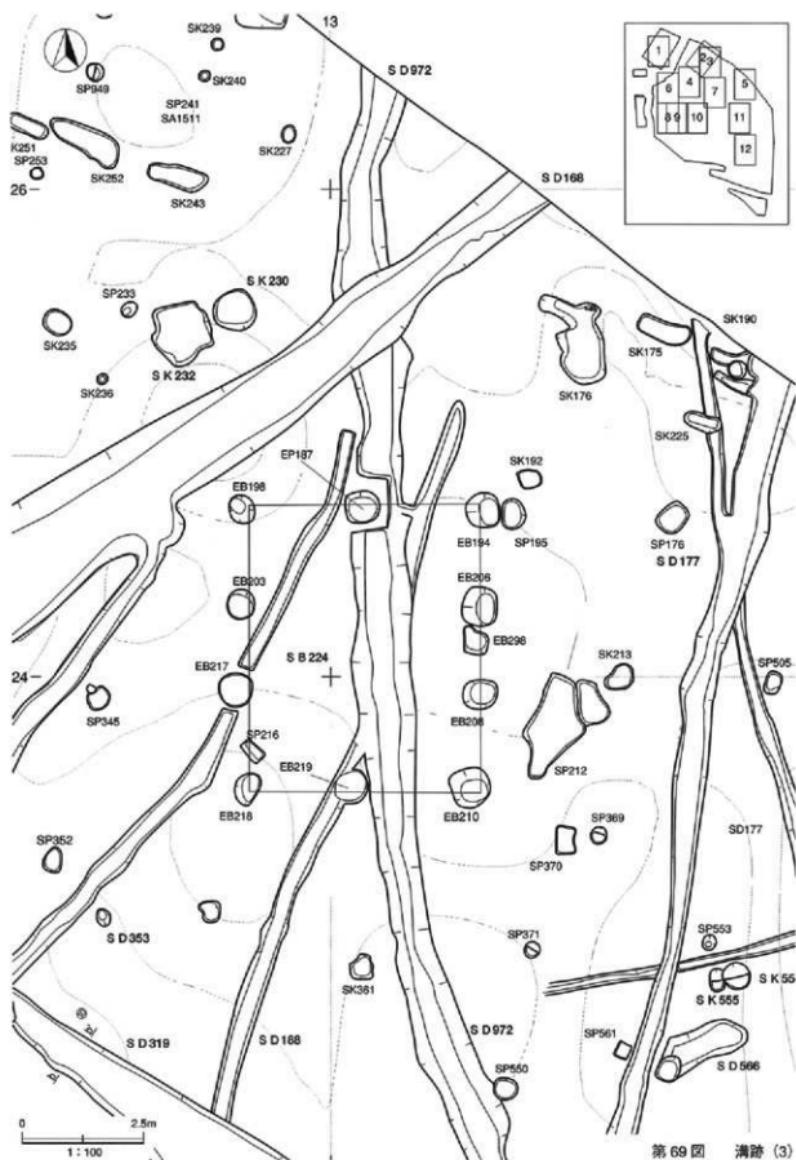


### 第67図 溝跡 (1)

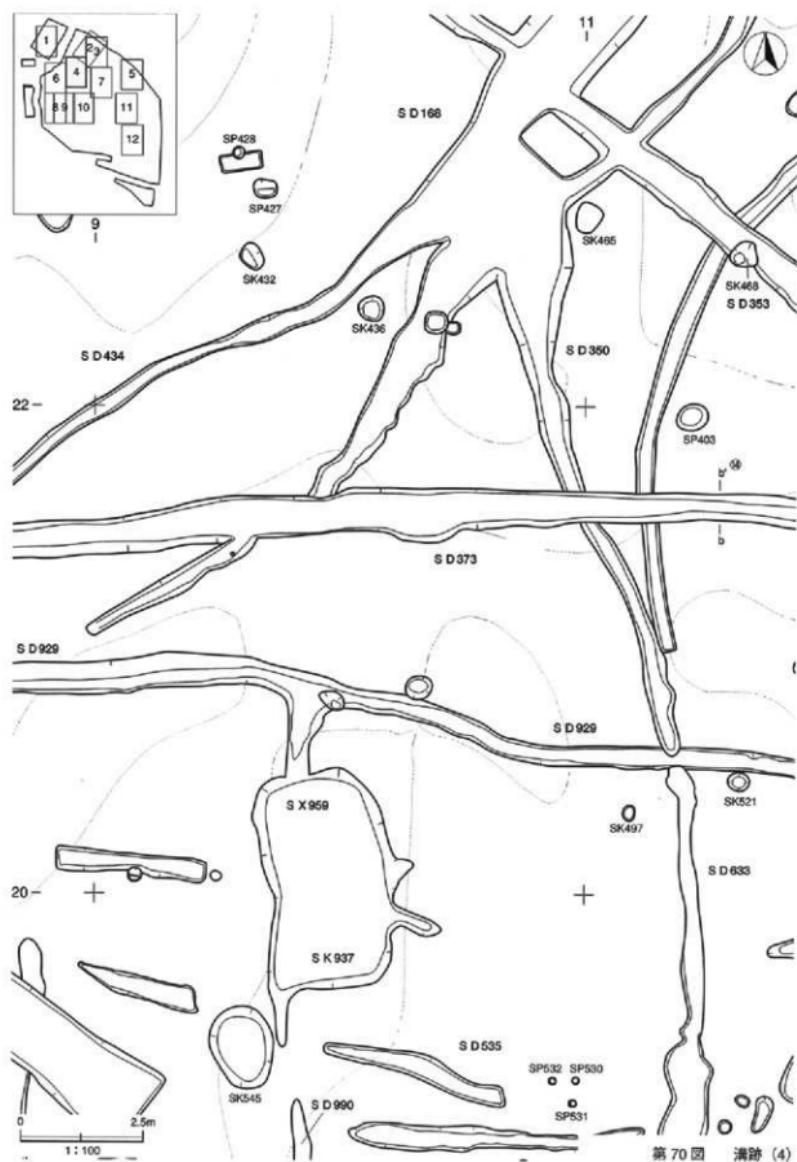


第68図 溝跡(2)

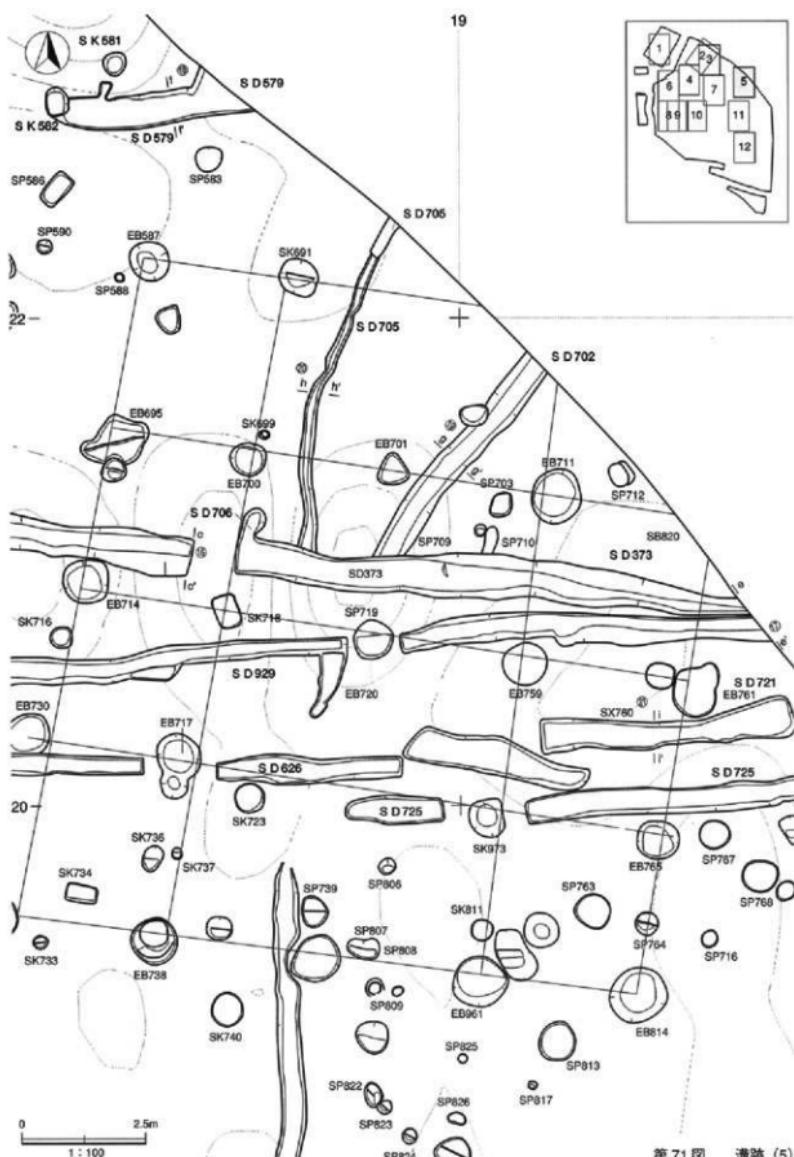
III 検出した遺構・遺物



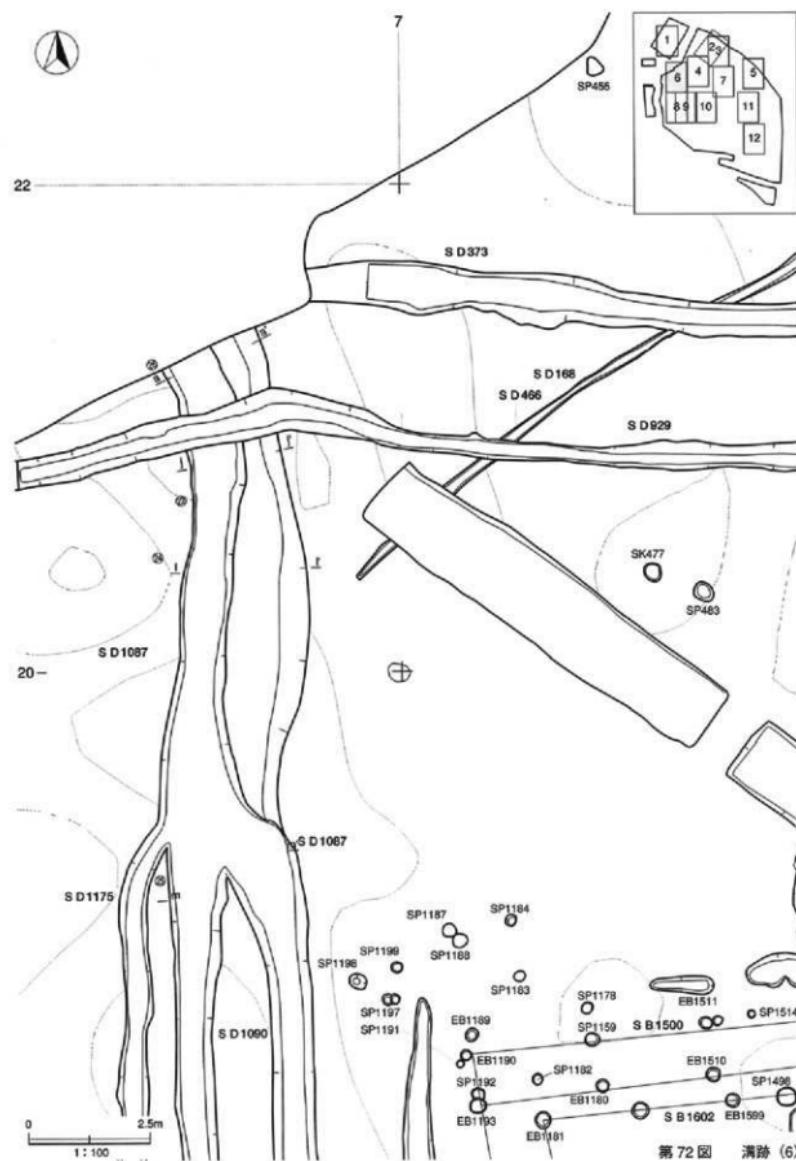
第 69 図 溝跡 (3)



III 検出した遺構・遺物

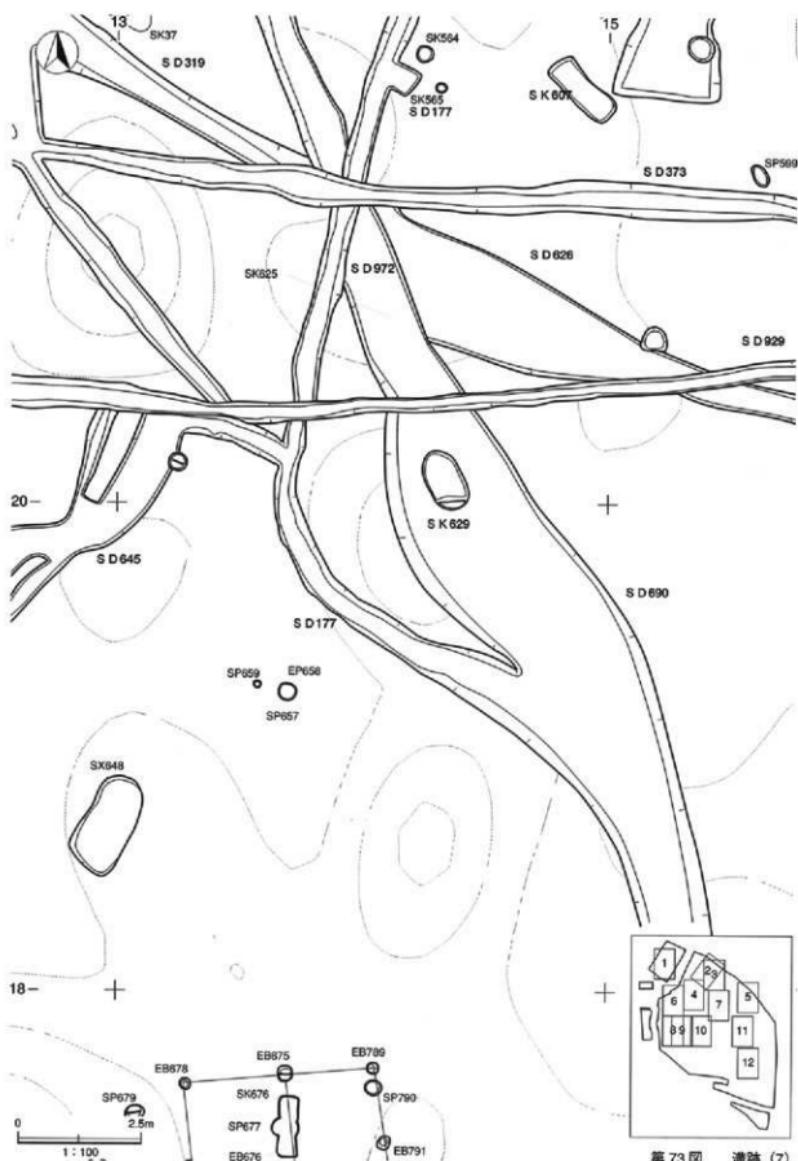


第71図 溝跡(5)

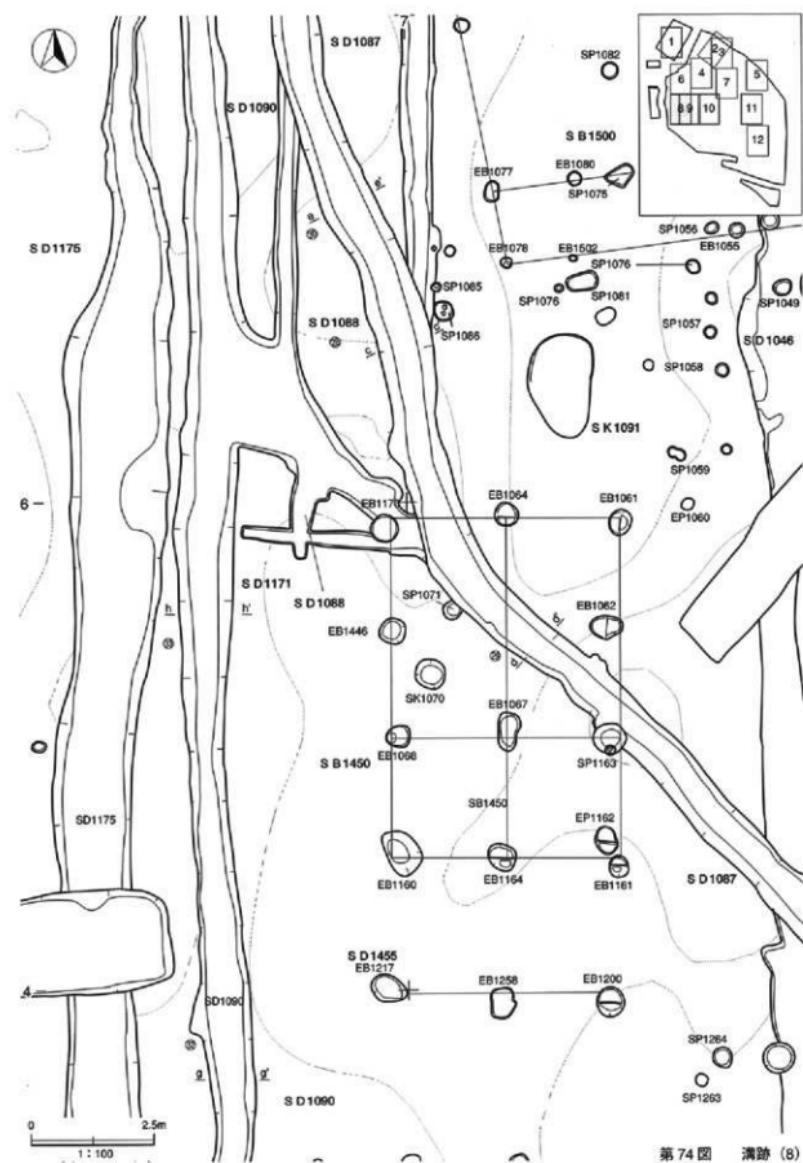


第72図 溝跡(6)

III 検出した遺構・遺物

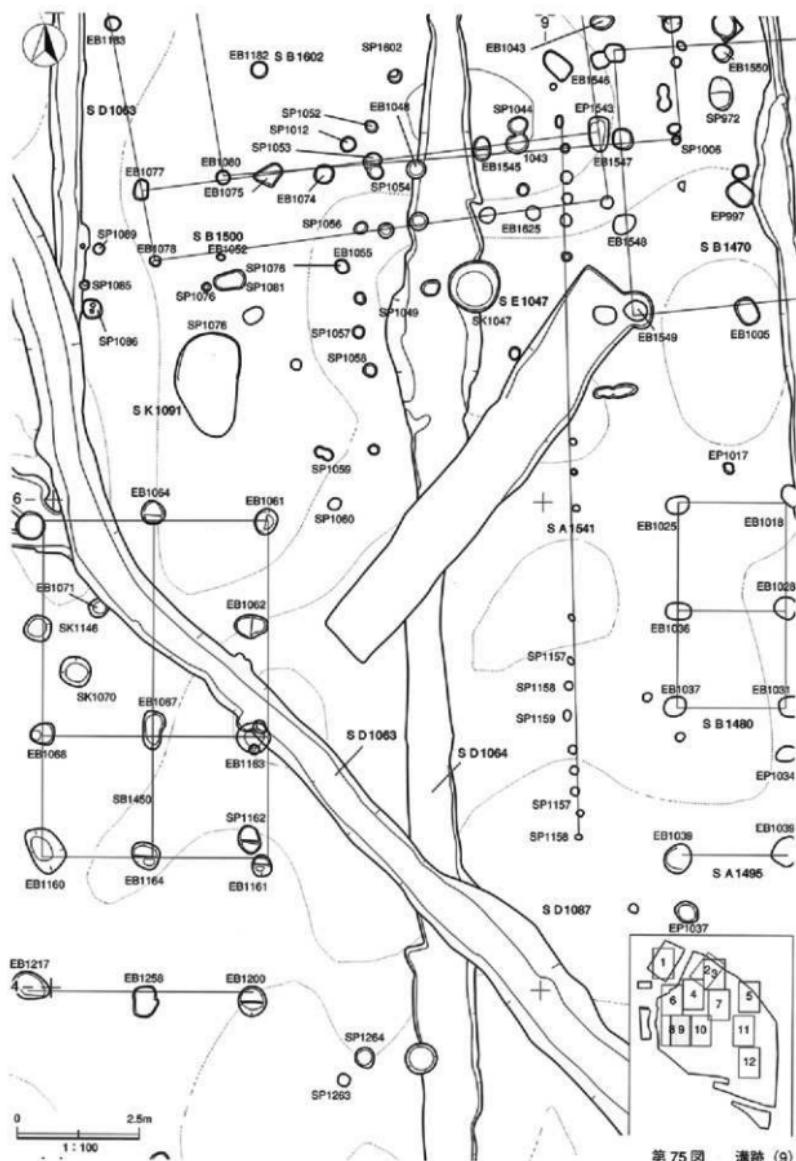


第73図 溝跡(7)

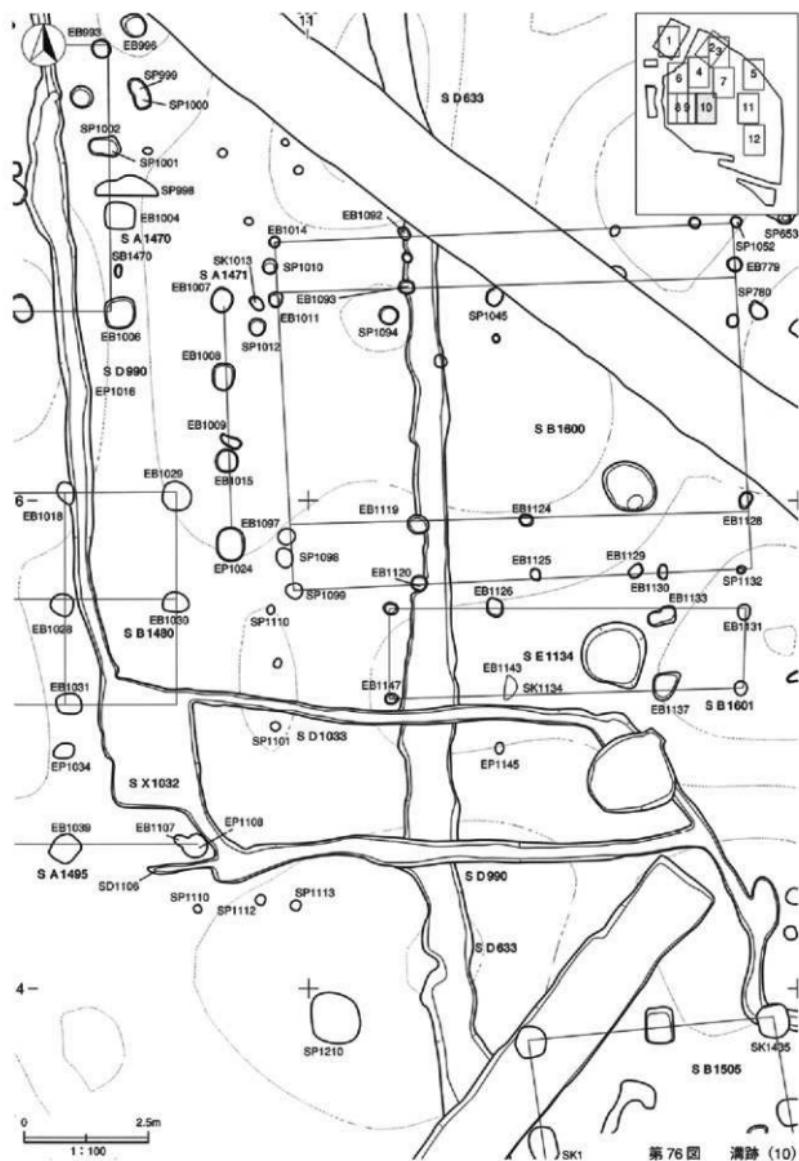


第74図 溝跡(8)

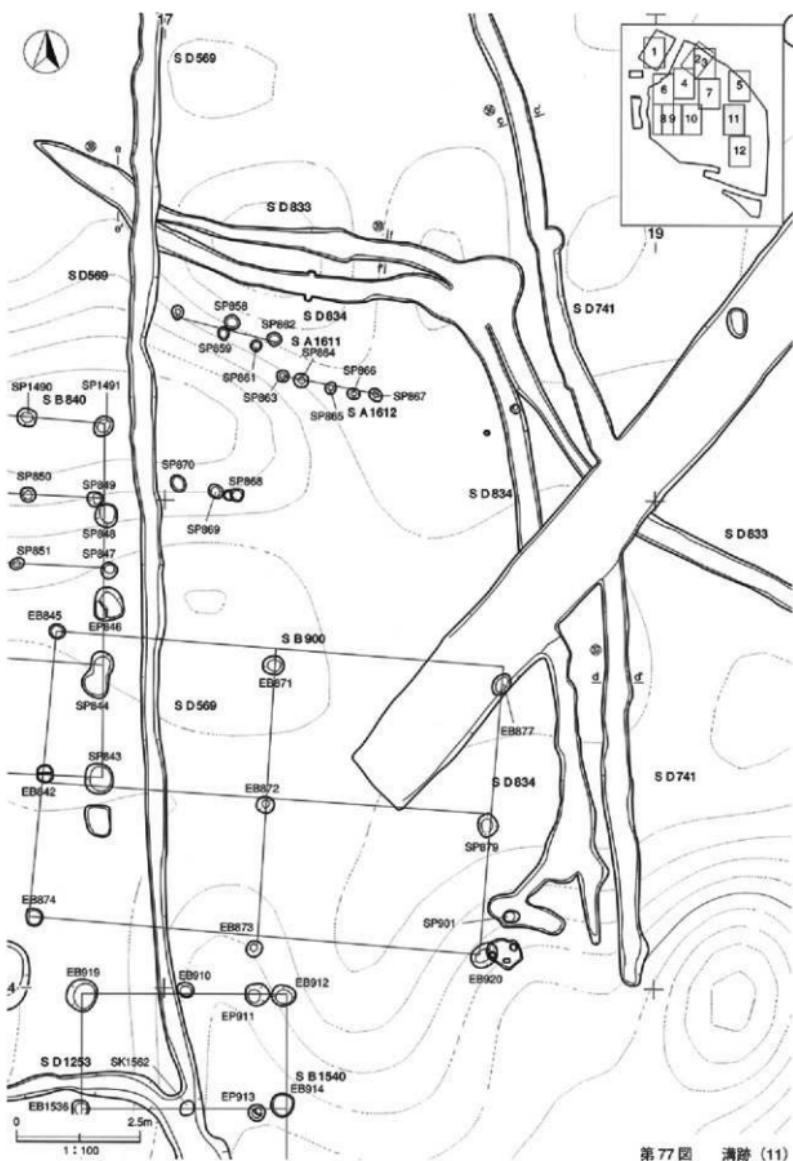
III 検出した遺構・遺物



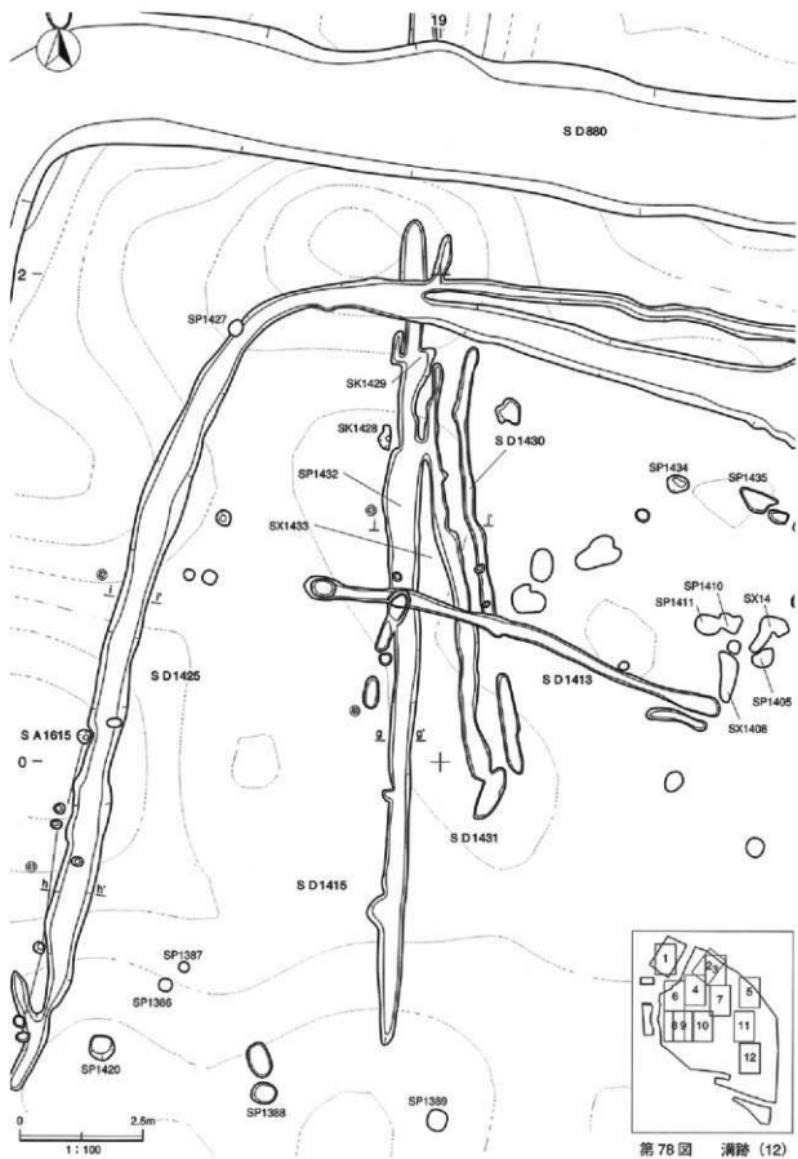
第75図 溝跡(9)



第76図 溝跡(10)

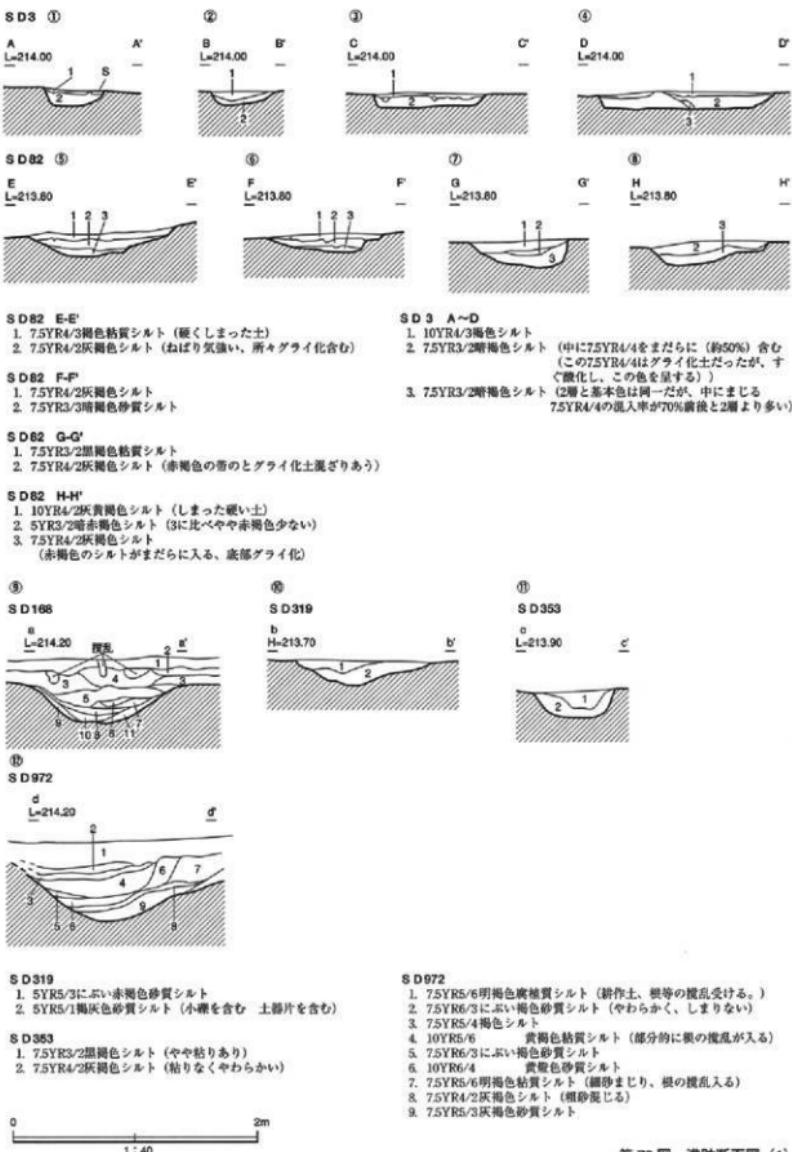


第77図 溝路(11)

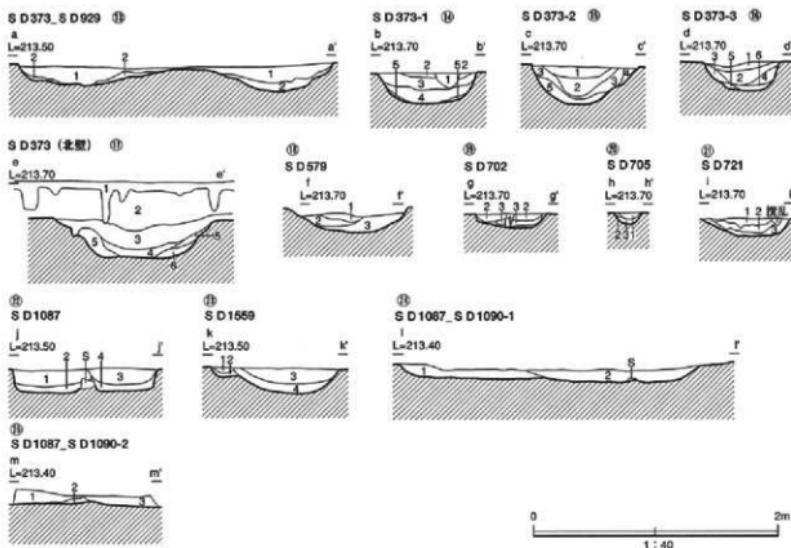


第78図 溝跡(12)

### III 検出した遺構・遺物



第79図 溝跡断面図(1)

**S D373\_S D929**

1. 7SYR5/4 にぶい褐色シルト (小穂を含む)
2. 7SYR6/4 にぶい橙色シルト (下部は砂を多く含む)

**S D373-1・2**

1. 7SYR2/2 黒褐色粘質土
2. 7SYR4/3 黄褐色粘質土 (小穂混じる)
3. 7SYR5/3 にぶい褐色シルト
4. 7SYR5/4 黑褐色シルト
5. 7SYR4/4 黄褐色砂質シルト
6. 7SYR5/5 褐色砂質シルト (SYR5/6粘質シルト少量混じる)
7. 7SYR5/1 開灰褐色シルト (粘性あり 固い)

**S D373 (北壁)**

1. 10YR4/2 黑褐色粘質土
2. 10YR4/6 黄褐色粘質土
3. 7SYR4/2 黄褐色腐殖質粘土 (下部はシルト化)
4. 7SYR5/2 開灰褐色粘質土 (シルト化 青色シルトブロック混じる)
5. 7SYR5/1 開灰褐色シルト

**S D579**

1. 7SYR5/6 明褐色粘質土 (しまりあり)
2. F1C2/7SYR3/2 黑褐色シルト (黒褐色シルトが複数に混じる)
3. 7SYR3/3 黑褐色粘質土
4. 7SYR5/2 黑褐色シルト

**S D702**

1. 7SYR3/1 黑褐色 廉植土 (やわらかい 粒の混じる)
2. 7SYR3/1 黑褐色 粘質土 (しまりあり 灰化物質含む)
3. 7SYR5/6 明褐色 砂質シルト (粘性あり)

**S D705**

1. 7SYR3/2 黒褐色粘質土 (固い 土器片入る)
2. 7SYR4/2 黑褐色粘質シルト
3. 7SYR5/6 明褐色シルト (下部は砂が多くなる)

**S D721**

1. 10YR3/3 黑褐色粘質シルト (砂礫まじり 固い)
2. 7SYR5/1 開灰褐色シルト (砂少量まじる)
3. 7SYR5/4 にぶい褐色粘質土 (固い)

**S D729\_S D1087**

1. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト (やわらかく粘り少ない 粒の大きい砂を多く含む)
2. 10YR3/2 黑褐色砂質シルト (やわらかく粘り強い 灰褐色の粘土多く含む)
3. 7SYR3/2 黑褐色シルト (やわらかく粘りやや強い 灰褐色の粘土を含む)
4. 10YR3/2 黑褐色砂質シルト (やわらかく粘り強い 灰褐色の粘土を多く含む)

**S D729\_S D1559**

1. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト (やわらかく粘り強い)
2. 10YR3/3 黑褐色シルト (やわらかく粘りなし 黃褐色の砂が混じる)
3. 7SYR3/2 黑褐色シルト (やわらかく粘り強い 灰褐色の粘土を含む)
4. 7SYR3/1 黑褐色粘質シルト (やわらかく粘り強い 黄褐色の粘土を含む)

**S D1087\_S D1090-1**

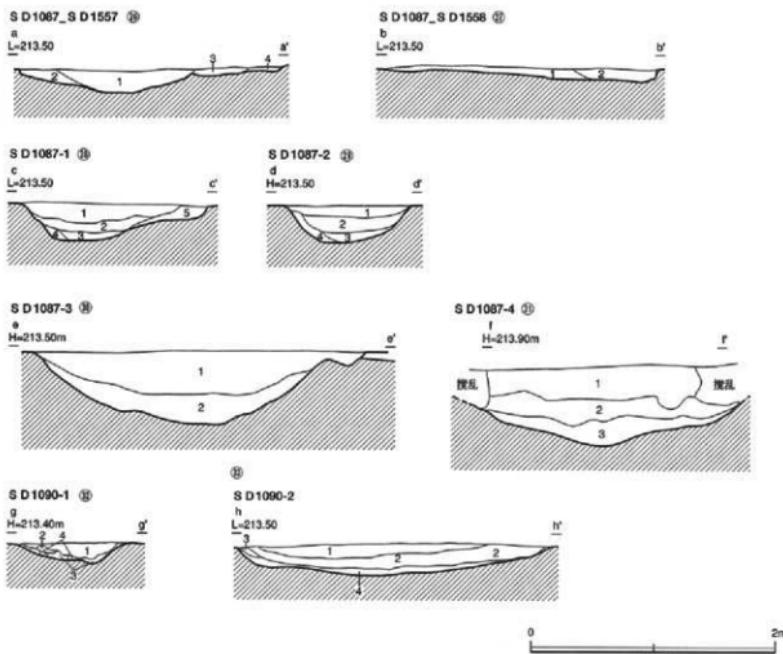
1. 10YR3/2 黑褐色 (やわらかく粘りやや強い)
2. 5YR2/1 黑褐色 (やわらかく粘り強い 粒の大きい砂を多く含む)

**S D1087\_S D1090-2**

1. 7SYR3/2 黑褐色シルト (やわらかくやや粘りあり 所々に礫混じる)
2. 7SYR3/2 黑褐色シルト (やや硬く粘りなし 明褐色の砂を多く含む)
3. 7SYR3/2 黑褐色シルト (やわらかくやや粘りあり 黑色の粘土を大粒状に含む)

第 80 図 溝跡断面図 (2)

### III 検出した地層・遺物



#### S D1067\_S D1557

1. 7YR3/3暗褐色 (黄褐色の砂の大きい砂を多く含む)
2. 10YR3/2暗褐色 (粘性や強い 黒灰色の粘土を多く含む)
3. 10YR3/3暗褐色 (粘性強い 黑灰色の粘土を多く含む)
4. 10YR4/2灰黄褐色 (粘性なし 黄褐色の細かい砂を多く含む)

#### S D1067\_S D1558

1. 7YR3/1暗褐色シルト (粘性あり 黑褐色の砂を含む)
2. 7YR3/2暗褐色砂質シルト (粘性あり 小石を多く含む 黑色の粘り強い粘土を粒状に含む)

#### S D1067-1

1. 7YR3/3暗褐色粘土 (小塊まじり)
2. 7YR3/4暗褐色粘土
3. 2.5Y4/3オーリーブ褐色シルト
4. 2.5Y3/2黒褐色粘土
5. 2.5Y3/2黒褐色シルト

#### S D1067-2

1. 7.5YR3/3暗褐色粘土 (小塊まじり)
2. 7.5YR3/4暗褐色粘土
3. 2.5Y4/3オーリーブ褐色シルト
4. 2.5Y3/1黒褐色粘土

#### S D1067-3

1. 10YR3/4暗褐色 (やわらかく粘りあり 1cm大の小石を含む)
2. 10YR3/2暗褐色シルト (粘性あり)

#### S D1067-4

1. 7.5YR3/2黒褐色シルト (土で根が多い 硬く繊り結びなし)
2. 10YR3/2暗褐色シルト (やわらかく粘り強い 直径1~2mmの石を多く含む)
3. 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト (やわらかく粘り強い 明褐色の粘土を多く含む 直径5mmほどの石を含む)

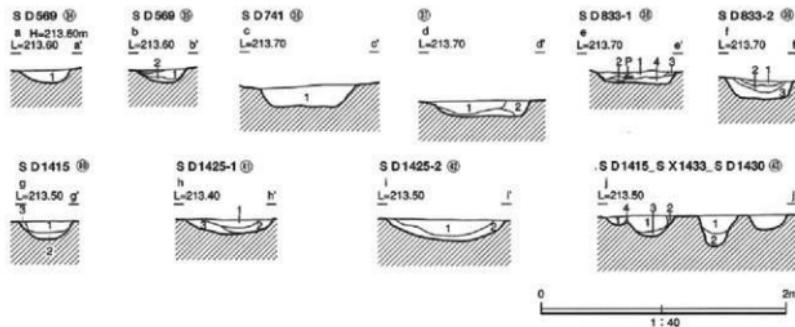
#### S D1090-1

1. 7.5YR3/2黒褐色シルト (硬く締まった状態 小塊と炭化物を含む)
2. 5YR3/1 黒褐色砂質シルト (にぶい褐色をまだらに含む 根の塊あまり)
3. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (砂に粘土が混じる 粘りやや強い)
4. 7.5YR3/2黒褐色砂質シルト (砂に粘土が混じる 粘りやや強い)

#### S D1090-2

1. 7.5YR3/3暗褐色粘土
2. 7.5YR4/1灰褐色粘土 (F1が少量混じる)
3. 5YR5/1 灰色粘土
4. 5YR4/1 灰褐色シルト (下部は5YR4/2 砂、灰片まじり 小塊あり)

第 81 図 溝跡断面図 (3)



**S D 569**  
1. 7.5YR4/2粘質土  
2. 7.5YR4/2粘質土に7.5YR3/3シルトが網状に入る

**S D 741**  
1. 7.5YR5/6砂質シルト  
2. 7.5YR5/3シルト

**S D 833-1**  
1. 7.5YR5/6明褐色砂質シルト  
2. 7.5YR4/4褐色シルト  
3. 7.5YR5/5褐色砂質シルト  
4. 7.5YR4/3褐色シルト

**S D 1415-2**  
1. 10YR6/4 にぶい黄橙色  
砂 (固いしまり 小粒まじり)  
2. 7.5YR5/4褐色 シルト  
3. 7.5YR5/3にぶい褐色 シルト

**S D 1415**  
**E P 1039**  
1. 5Y3/3オリーブ黒色粘質土 (固いしまり)  
2. 5Y3/1オリーブ黒色砂質土 (固いしまり)  
3. 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 (10YR4/4褐色シルトの粒が少量混じる)

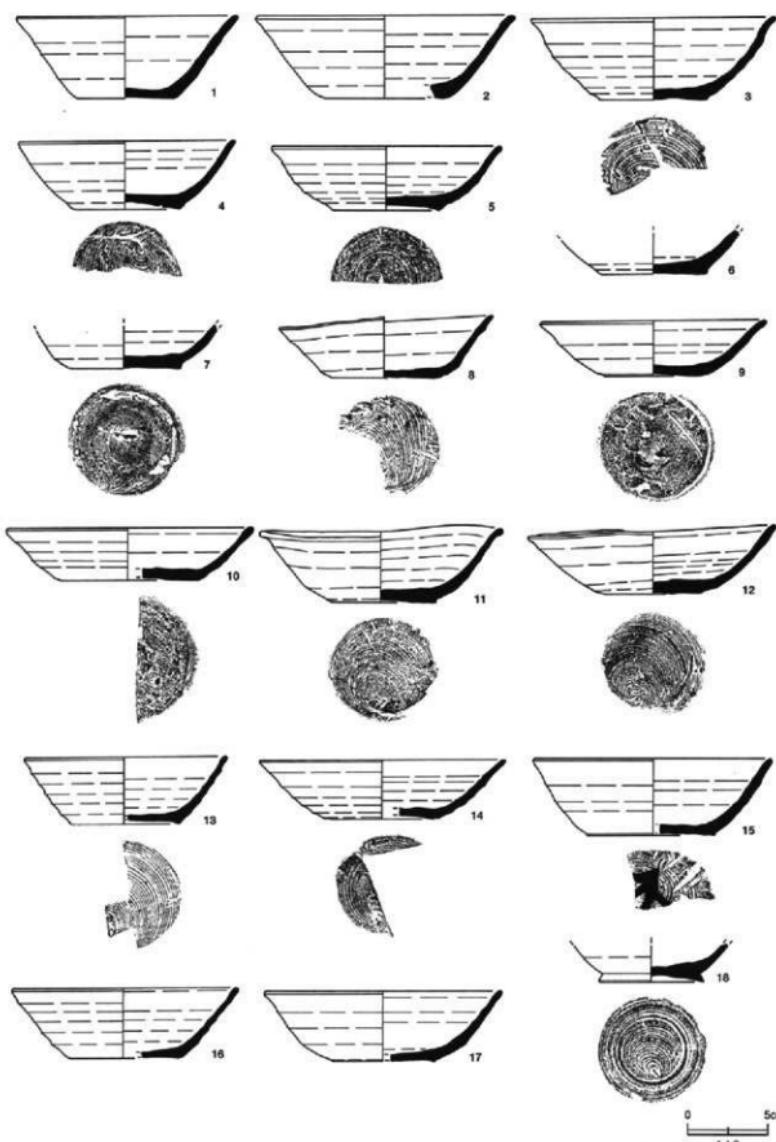
**S D 1425-1**  
1. 25Y4/1黄褐色粘質土 (砂混じり)  
2. 25Y4/2暗赤黄色シルト  
3. 5Y3/1 黑褐色粘質シルト

**S D 1425-2**  
1. 5Y4/2 嗜灰黄色粘質シルト  
2. 25Y4/1嗜灰色粘質土

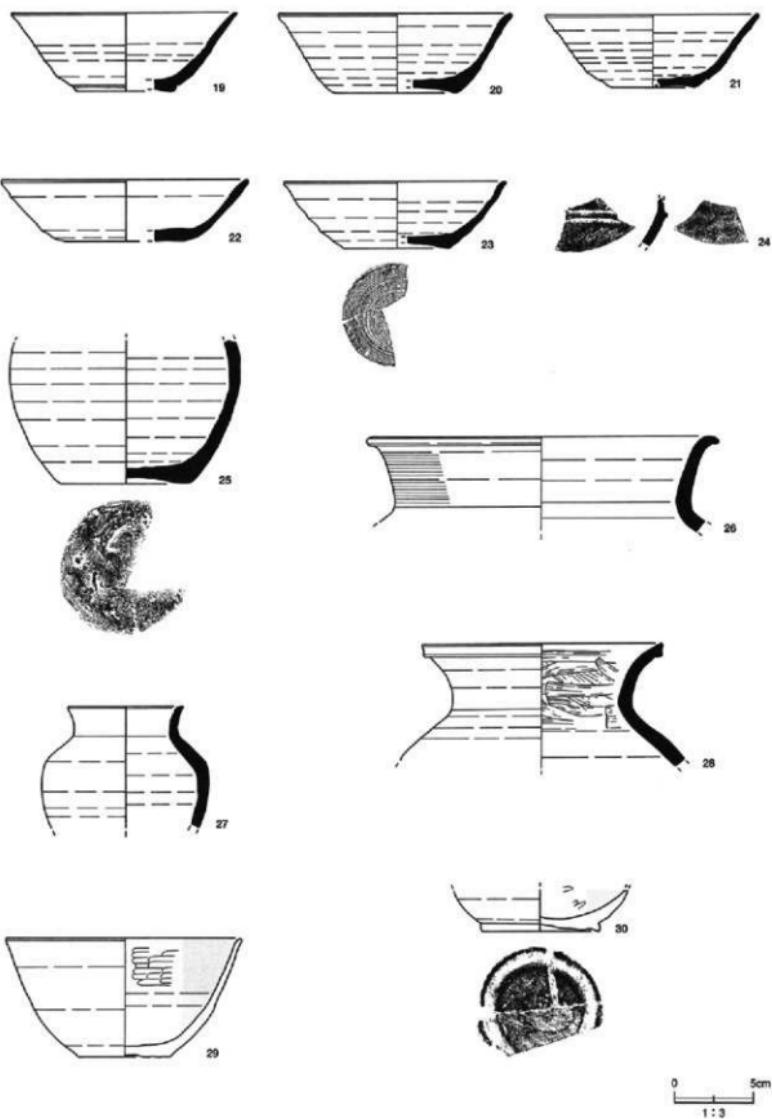
**S D 1415\_S X1433\_S D 1430**  
1. 5Y4/3 瞬オリーブ色シルト  
2. 5Y4/1 灰色砂質シルト (小粒を含む)  
3. 25Y3/1黒褐色砂質シルト粘質土  
4. 10YR5/6明褐色シルト (地山)

第82図 溝跡断面図(4)

III 検出した遺構・遺物

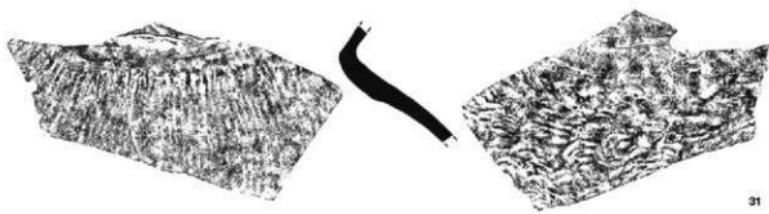


第83図 SD 168 (1)

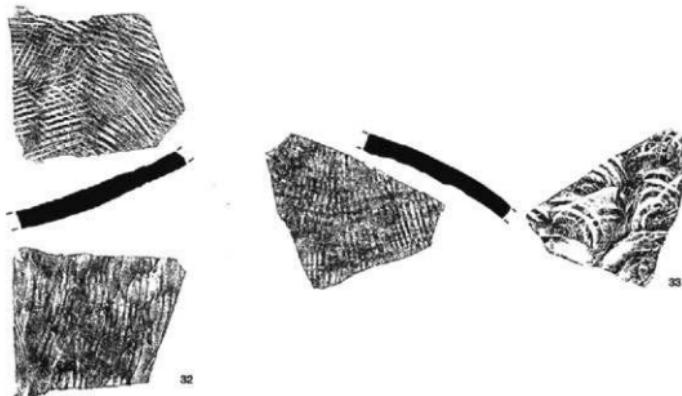


第84図 SD 168 (2)

III 検出した遺構・遺物

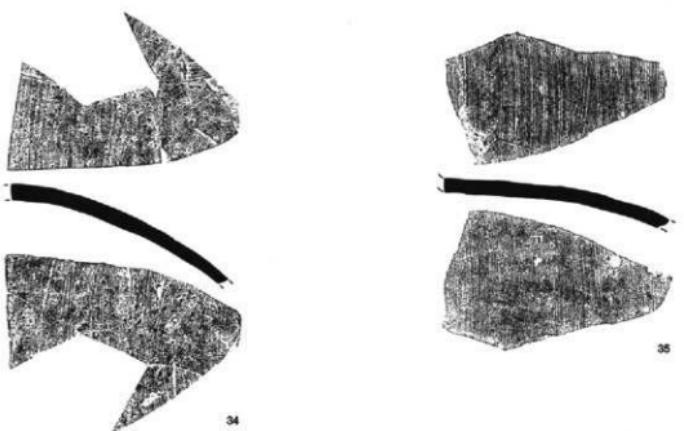


31



32

33

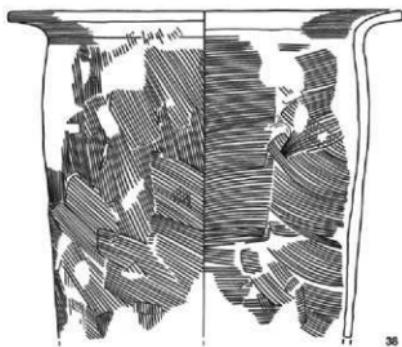
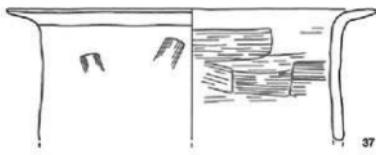
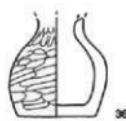


34

35

0 5cm  
1:3

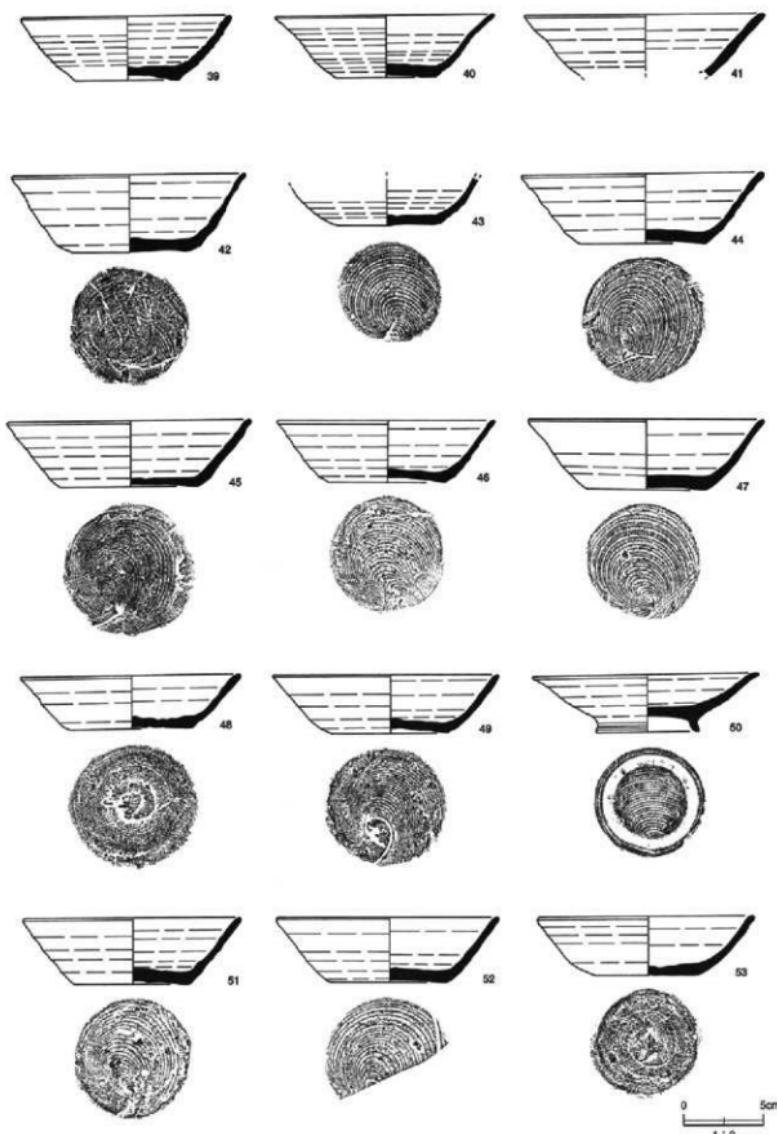
第85図 SD168 (3)



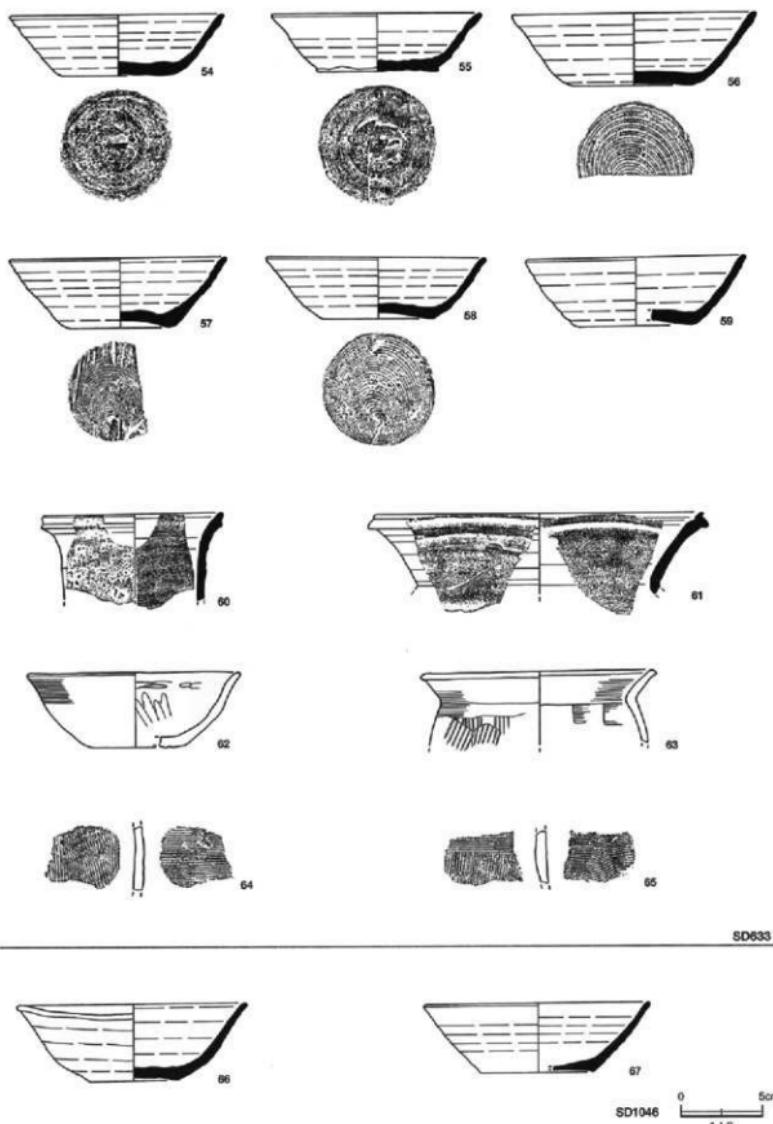
0 5cm  
1:3

第86図 S D 168 (4)

III 検出した遺構・遺物

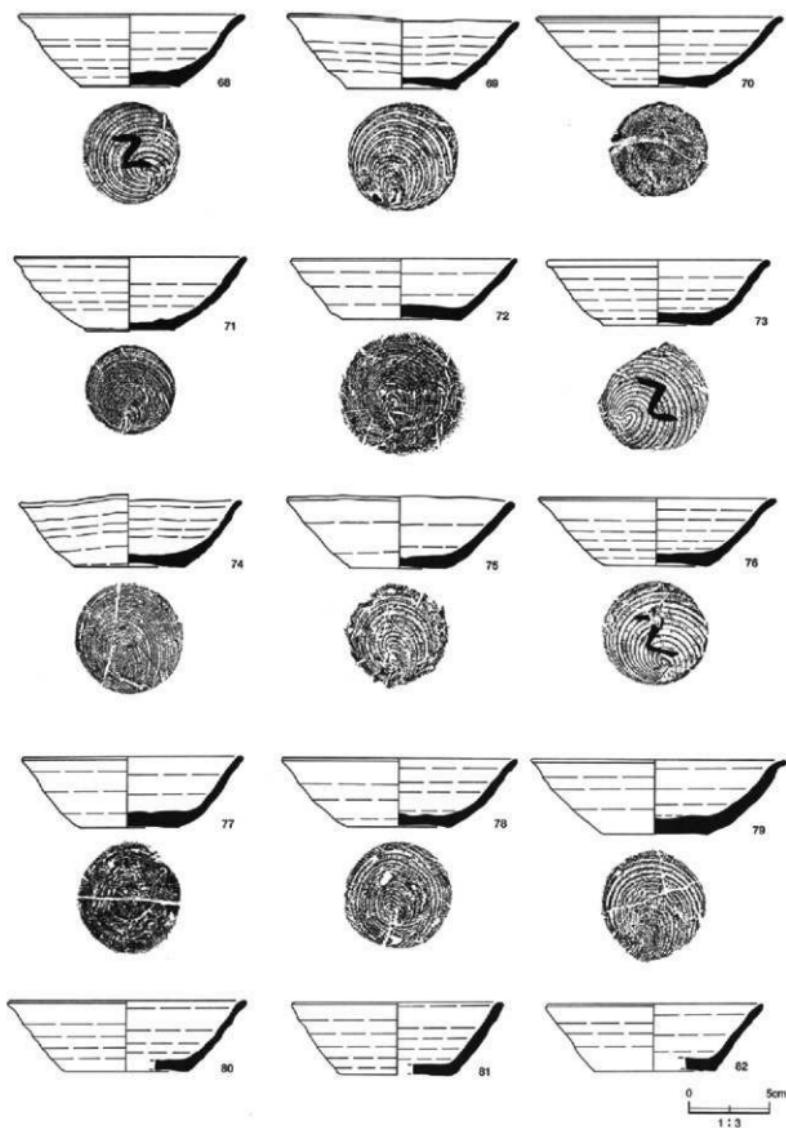


第87図 S D 633 (1)

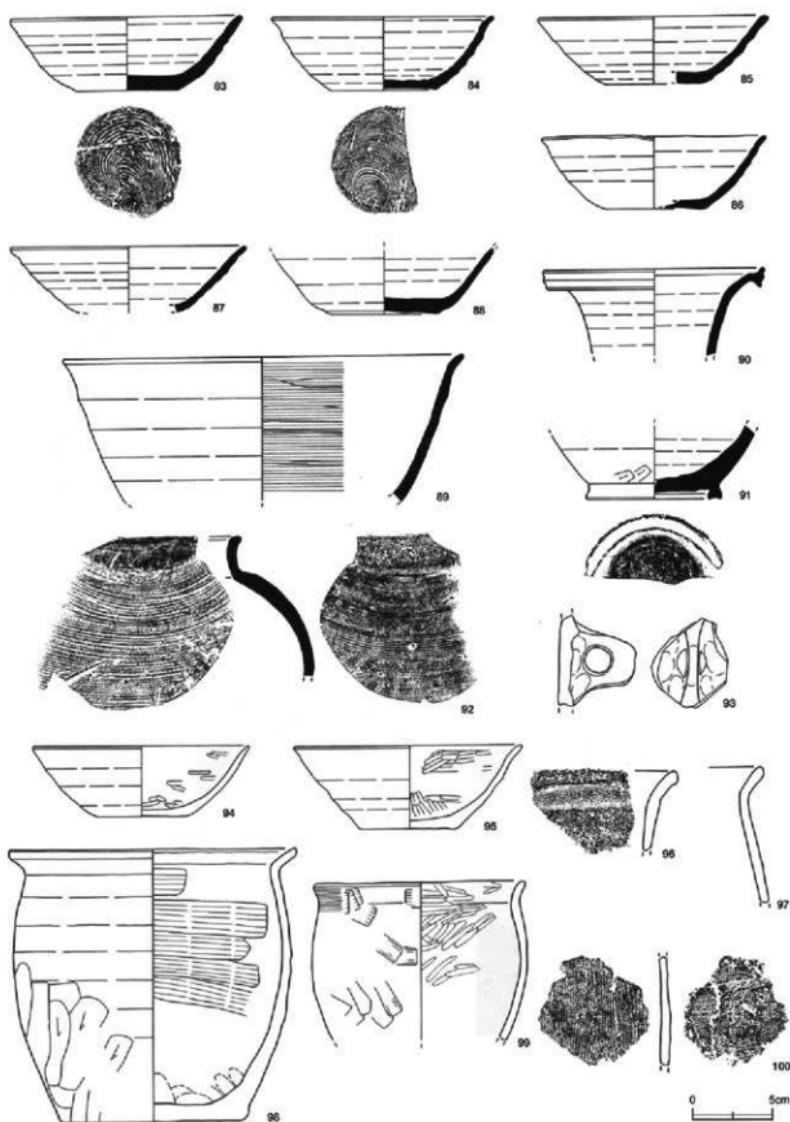


第88図 SD633 (2)、SD1046 (1)

III 検出した遺構・遺物

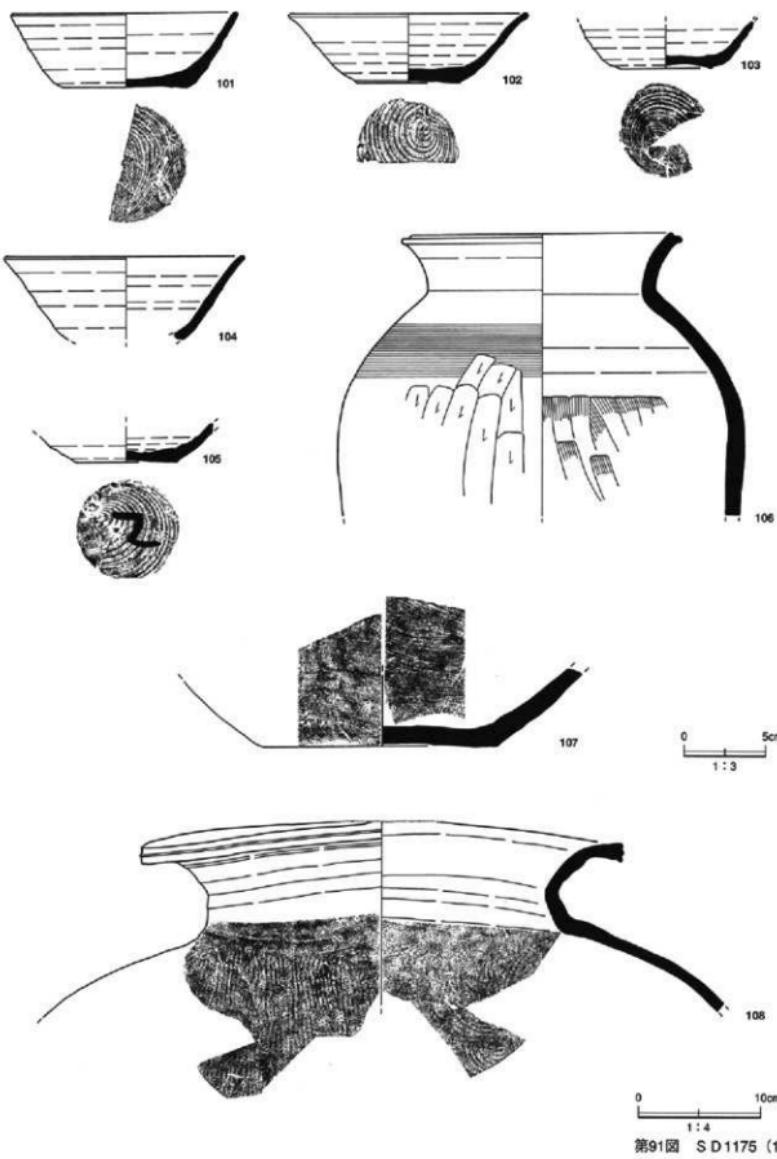


第89図 S D 1046 (2)

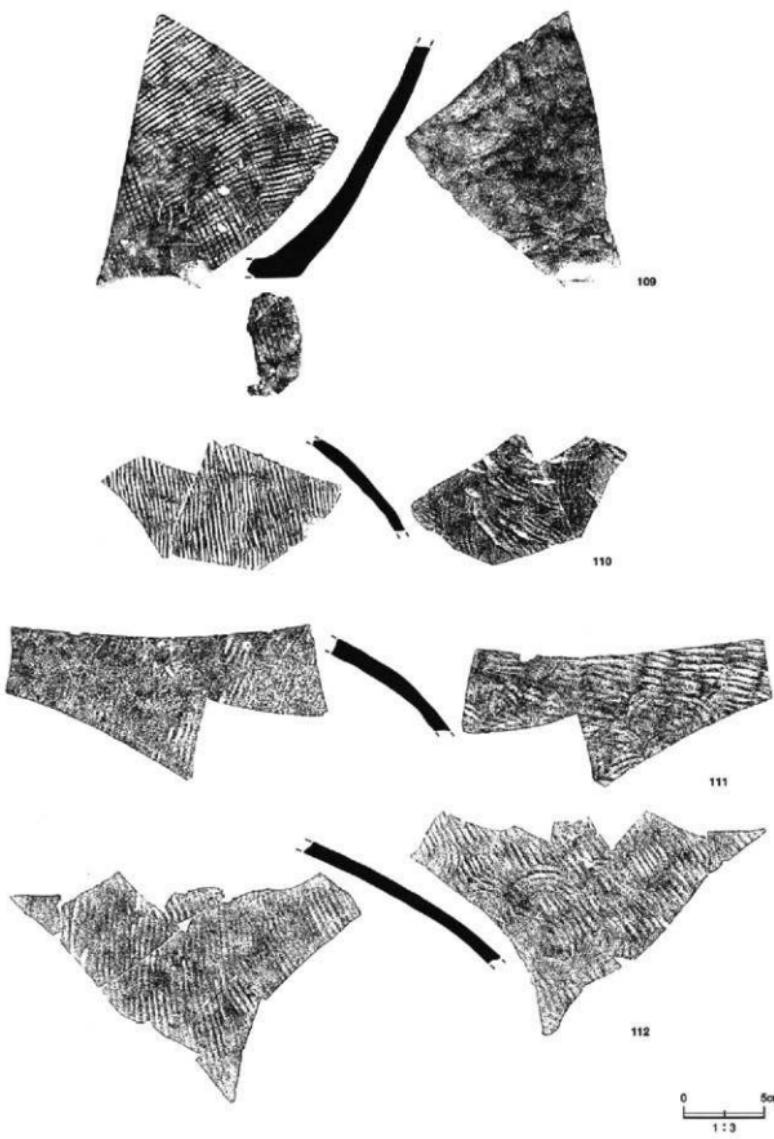


第90図 S D 1046 (3)

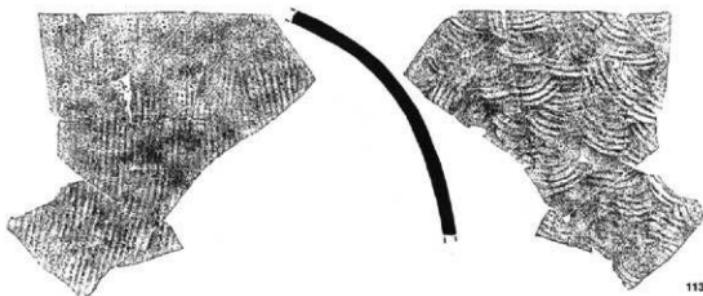
III 検出した遺構・遺物



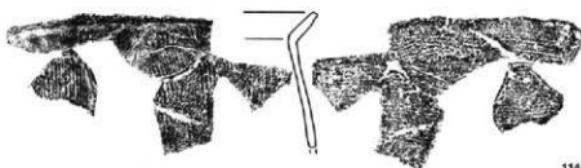
第91図 S D1175 (1)



第92図 S D 1175 (2)



113



114

SD1175



115



117

SD82

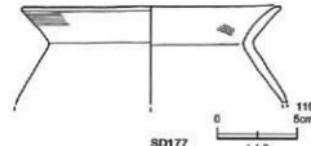


116



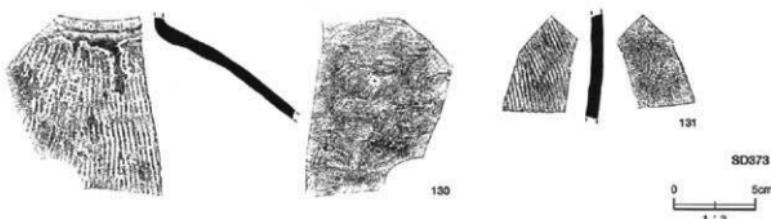
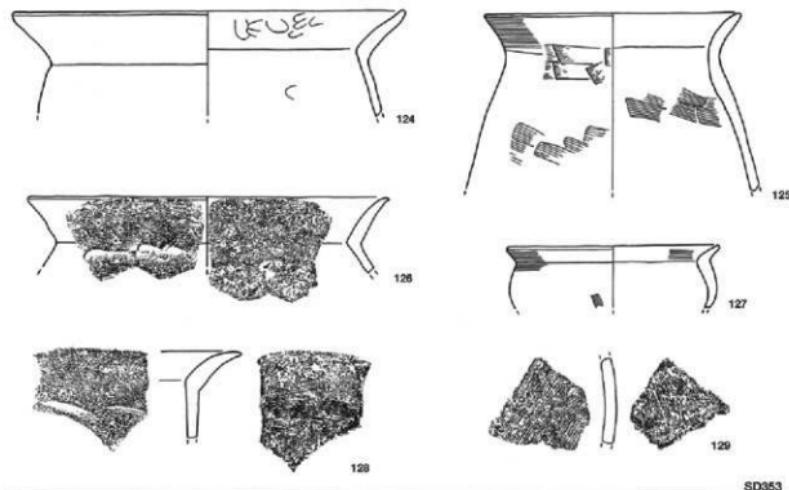
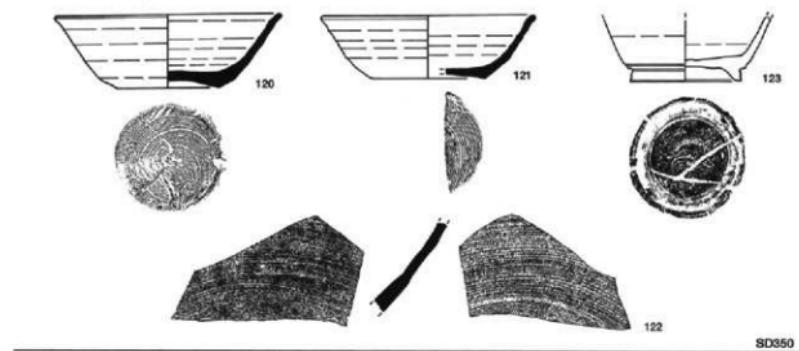
118

SD86



119

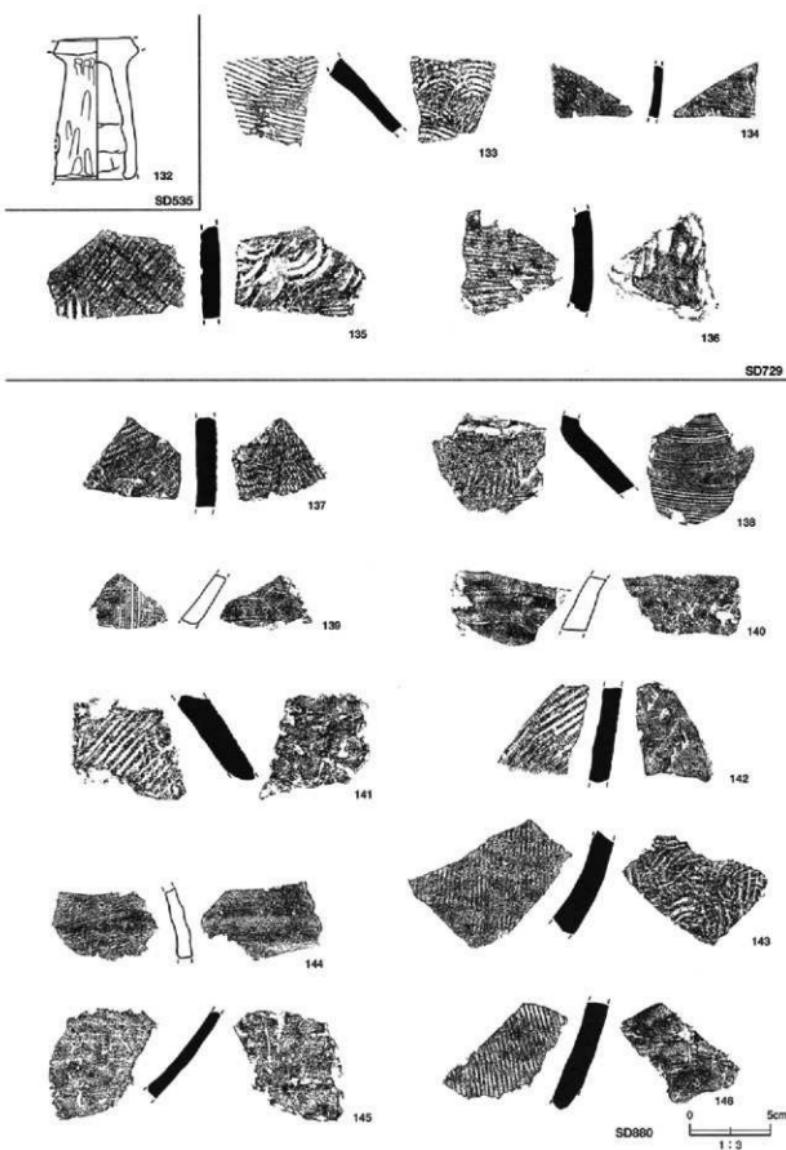
第93図 SD1175 (3)、SD82・86・177



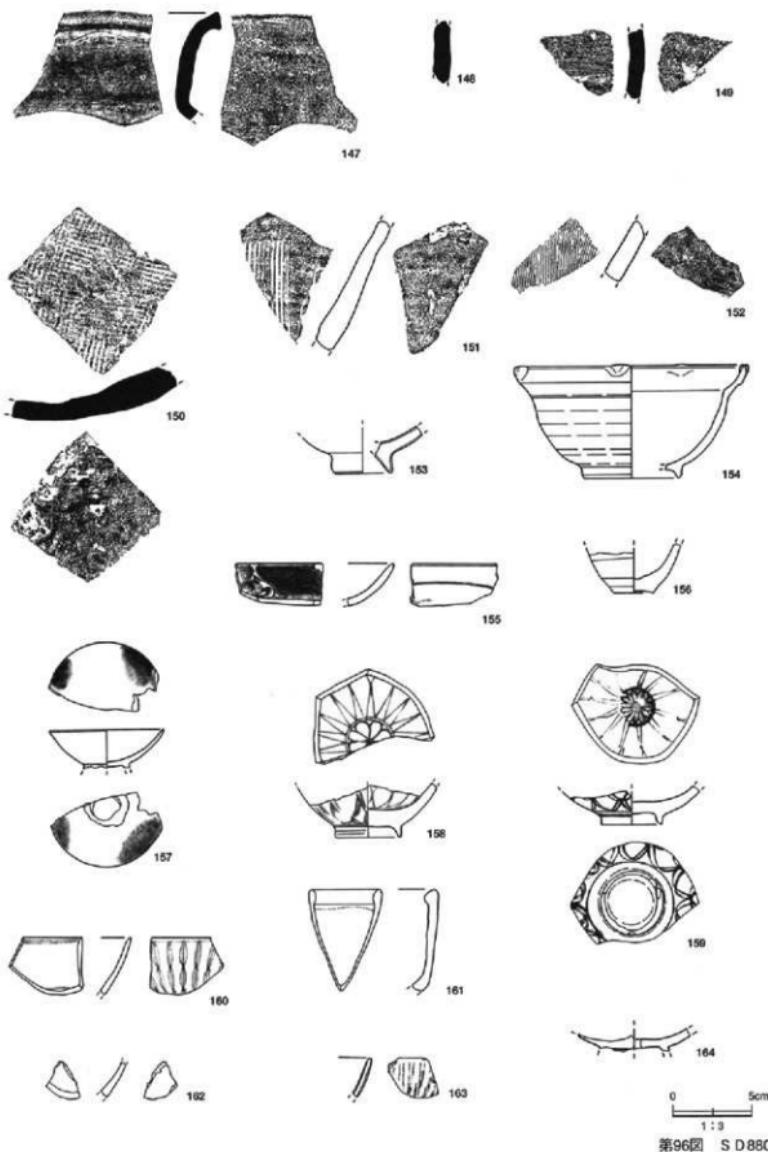
第94図 S D 350・353・373

0 5cm  
1:3

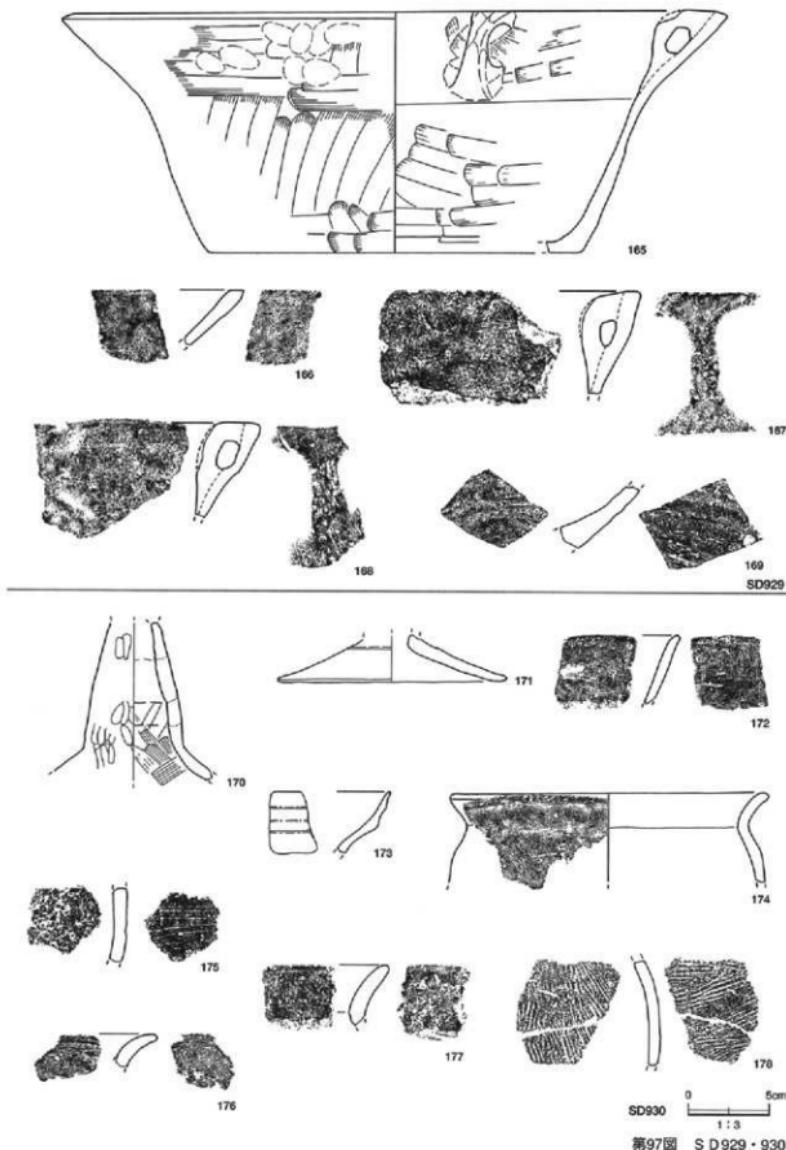
III 検出した遺構・遺物



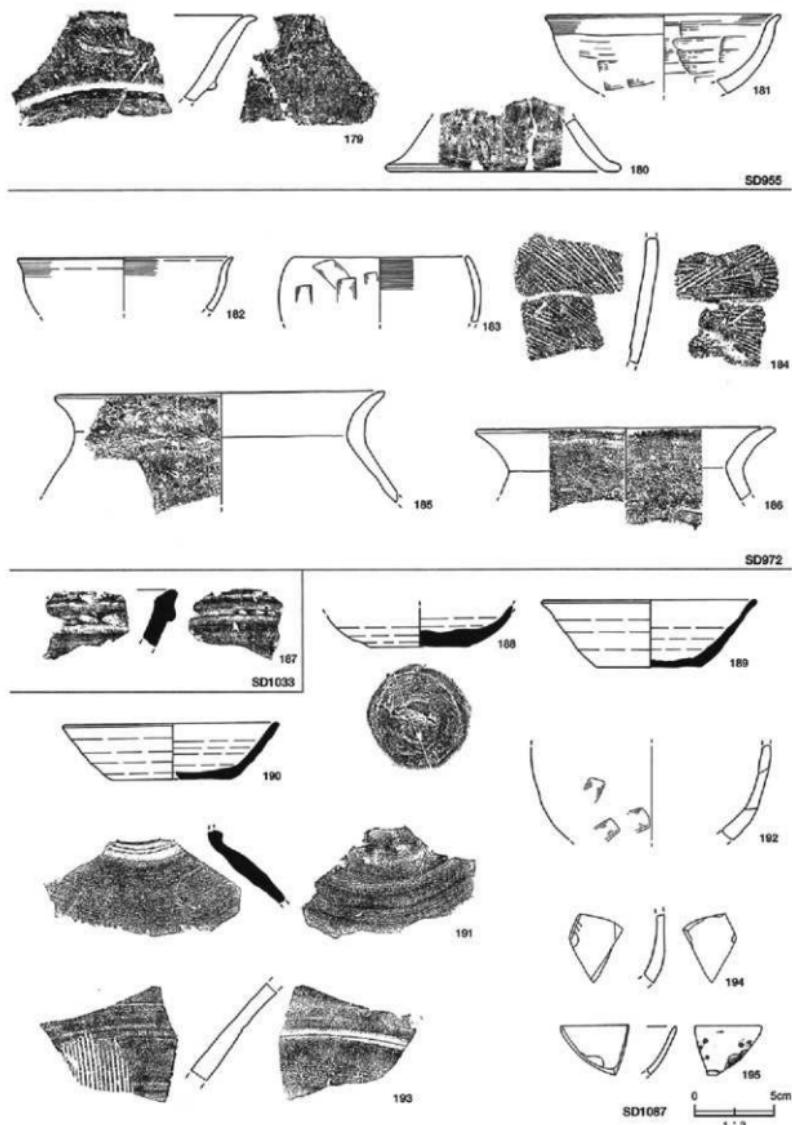
第95図 S D729・880



第96図 S D 880

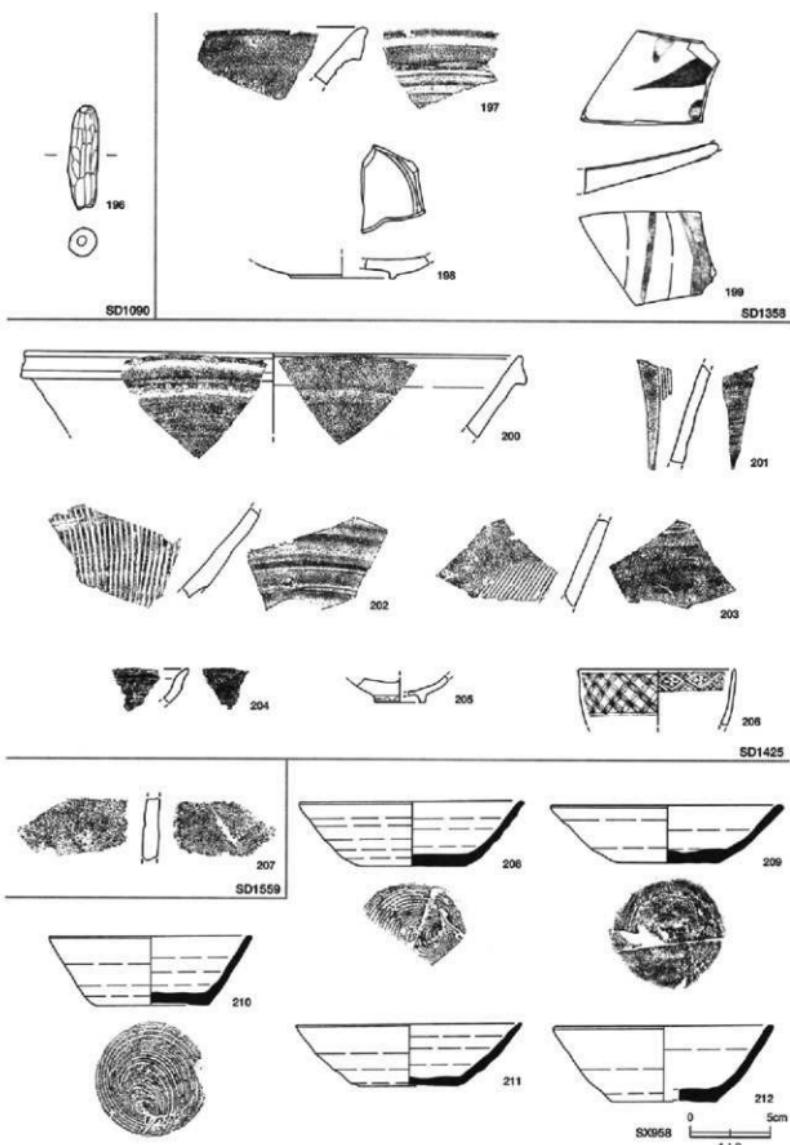


第97図 S D929・930

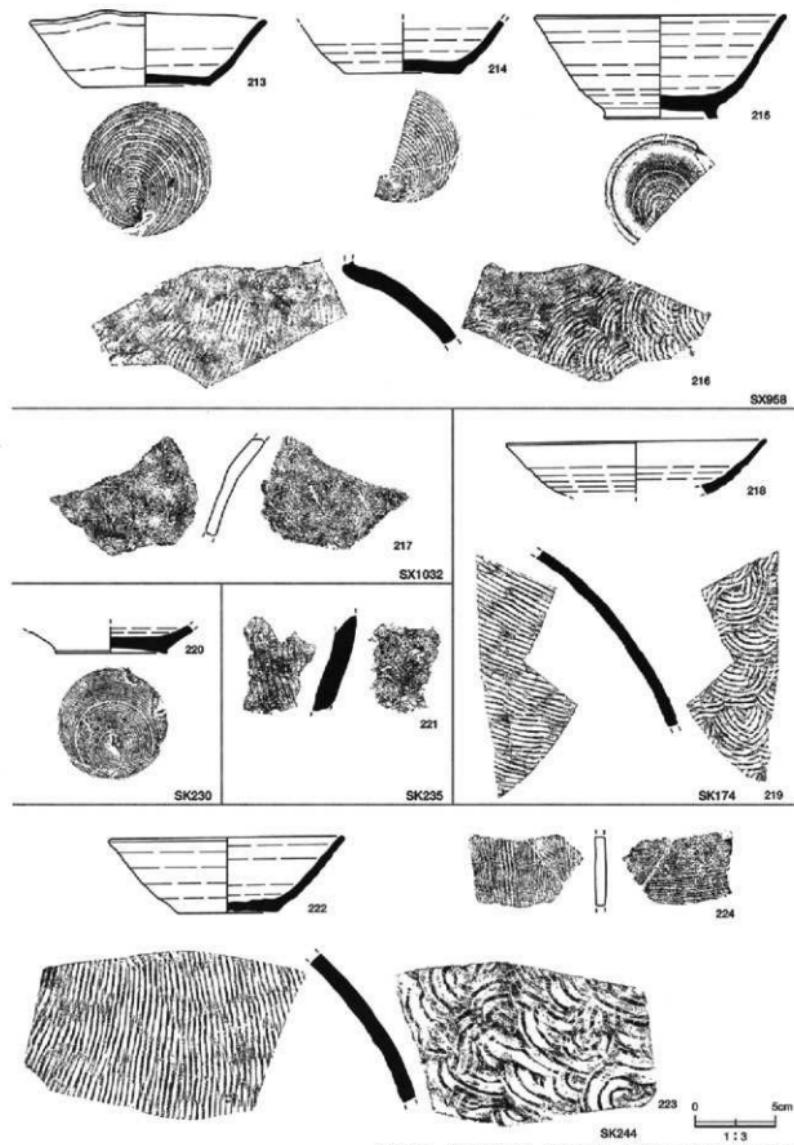


第98図 S D 955・972・1033・1087

III 検出した遺構・遺物

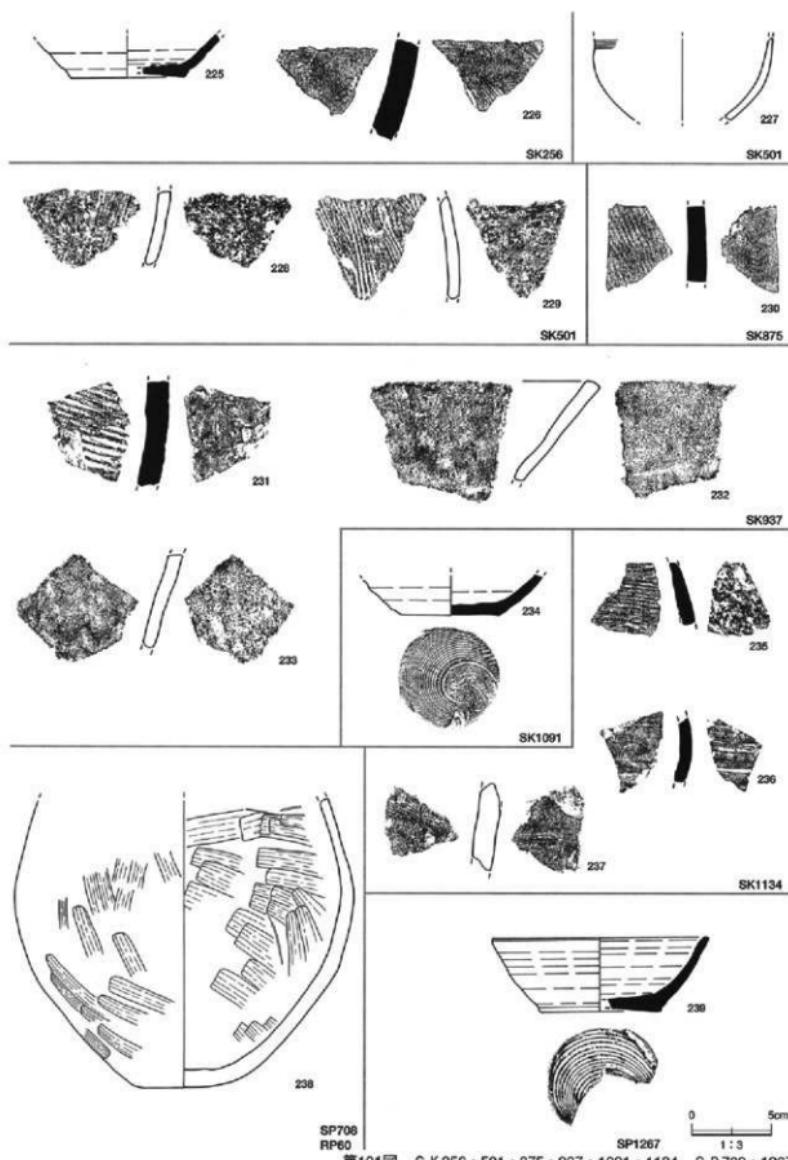


第99図 S D 1090・1358・1425・1559、S X958 (1)

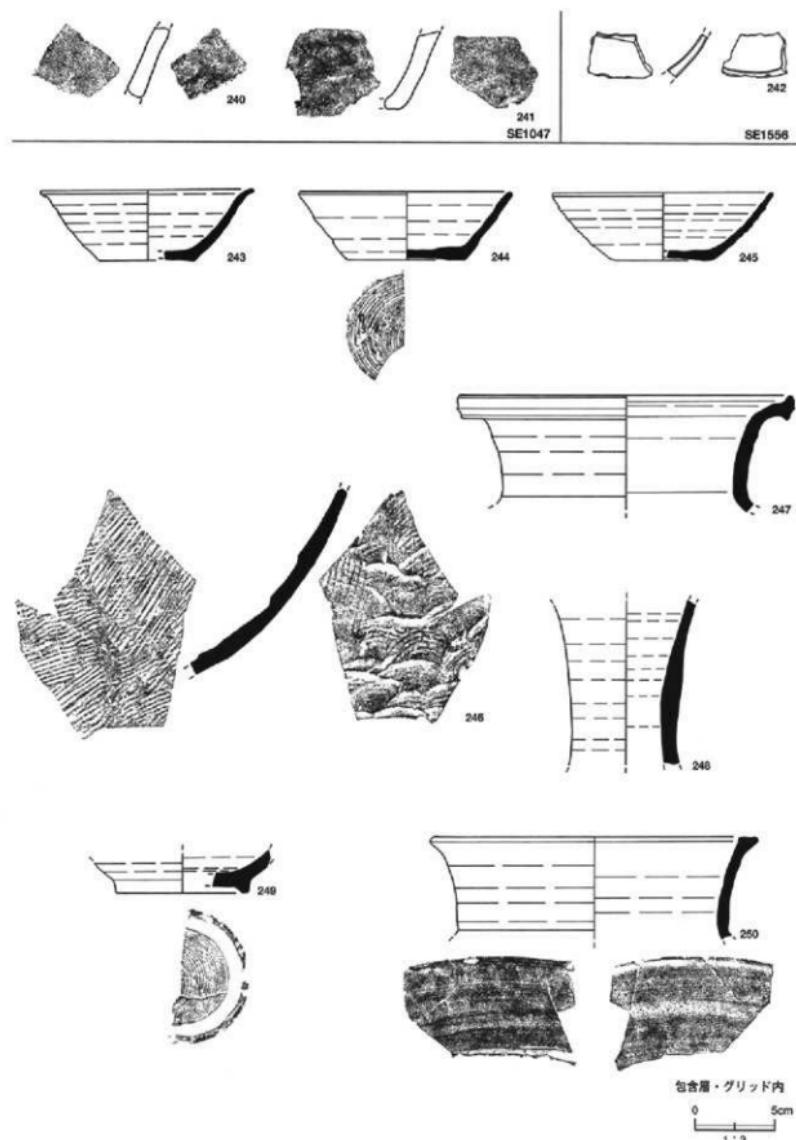


第100図 SX958 (2)、SX1032、SK174・230・235・244

III 検出した遺構・遺物

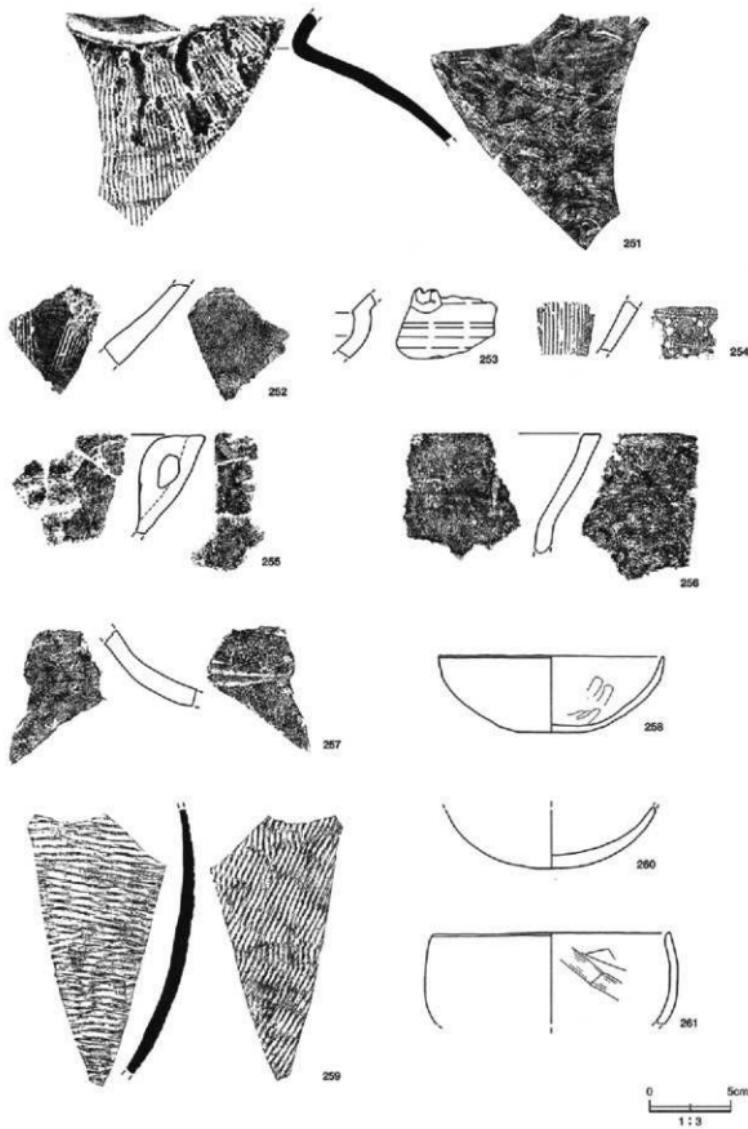


第101図 S K256・501・875・937・1091・1134、S P709・1267

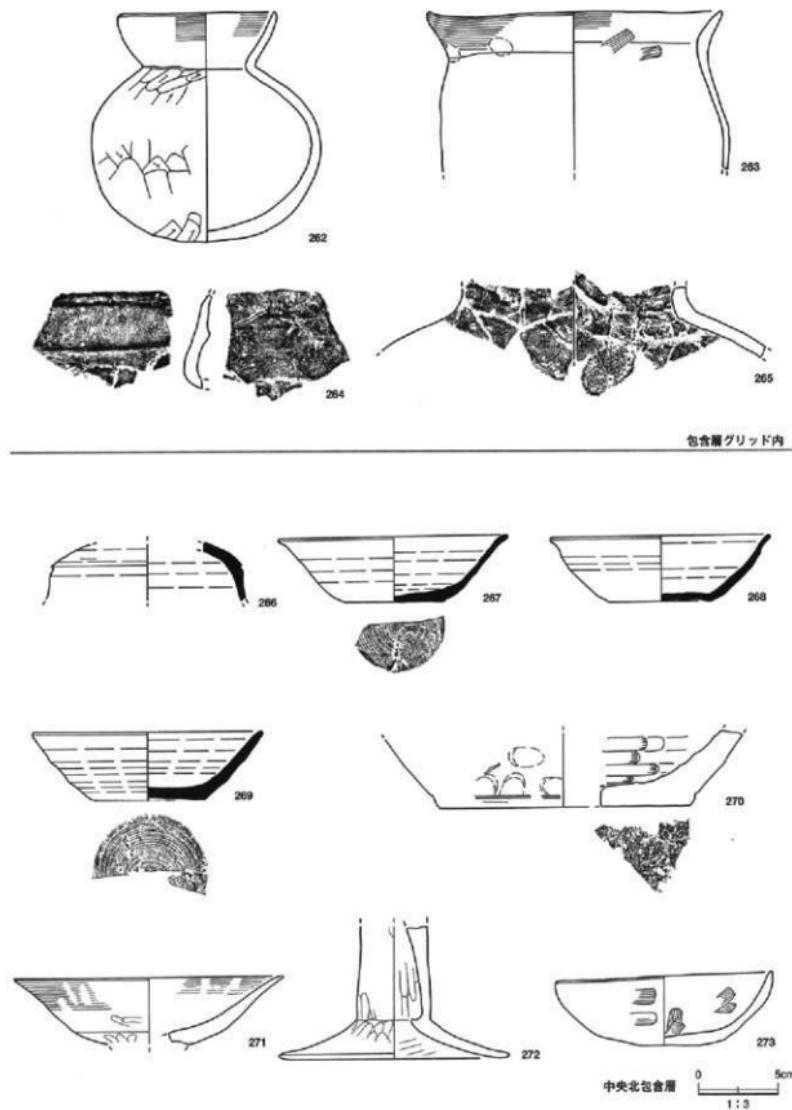


第102図 S E 1047・1556、包含層・グリッド内 (1)

III 検出した遺構・遺物

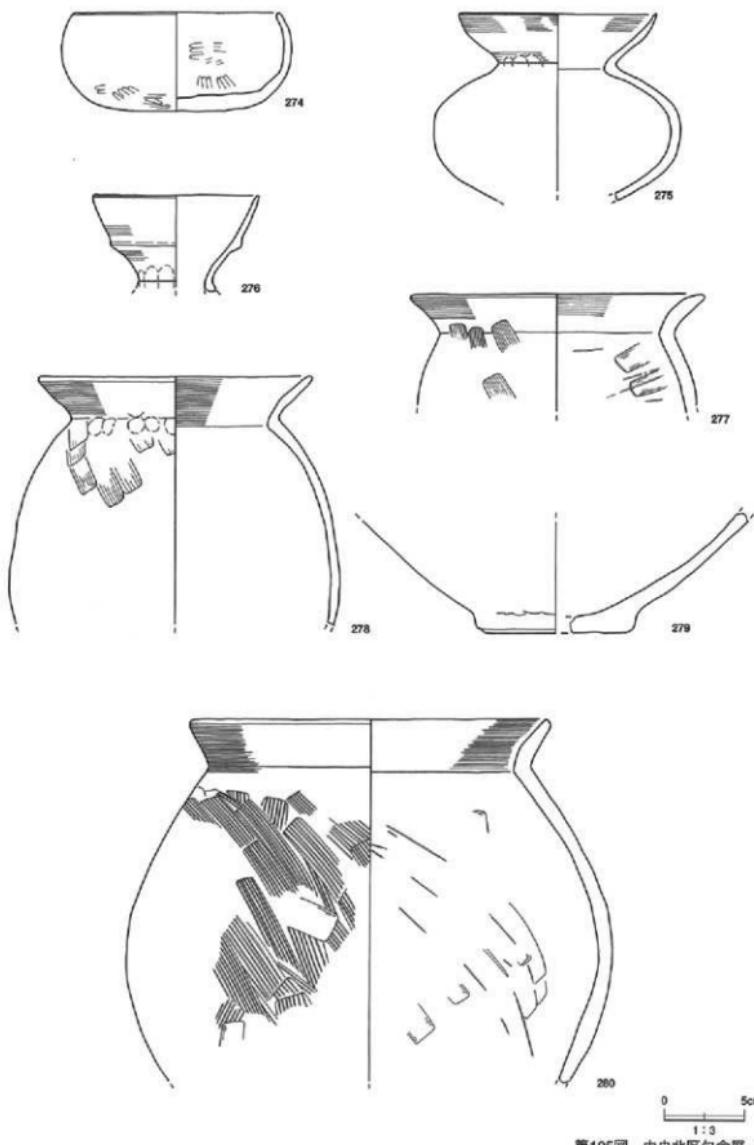


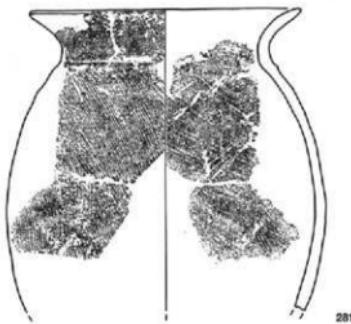
第103図 包含層・グリッド内（2）



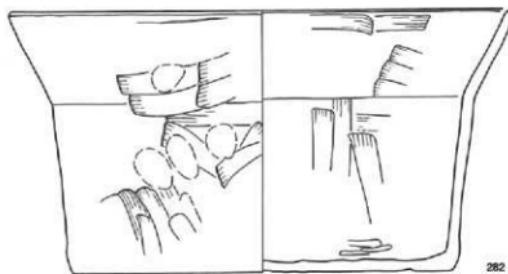
第104図 包含層・グリッド内 (3)、中央北区包含層 (1)

III 検出した遺構・遺物





281



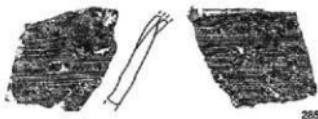
282



283



284



285



286

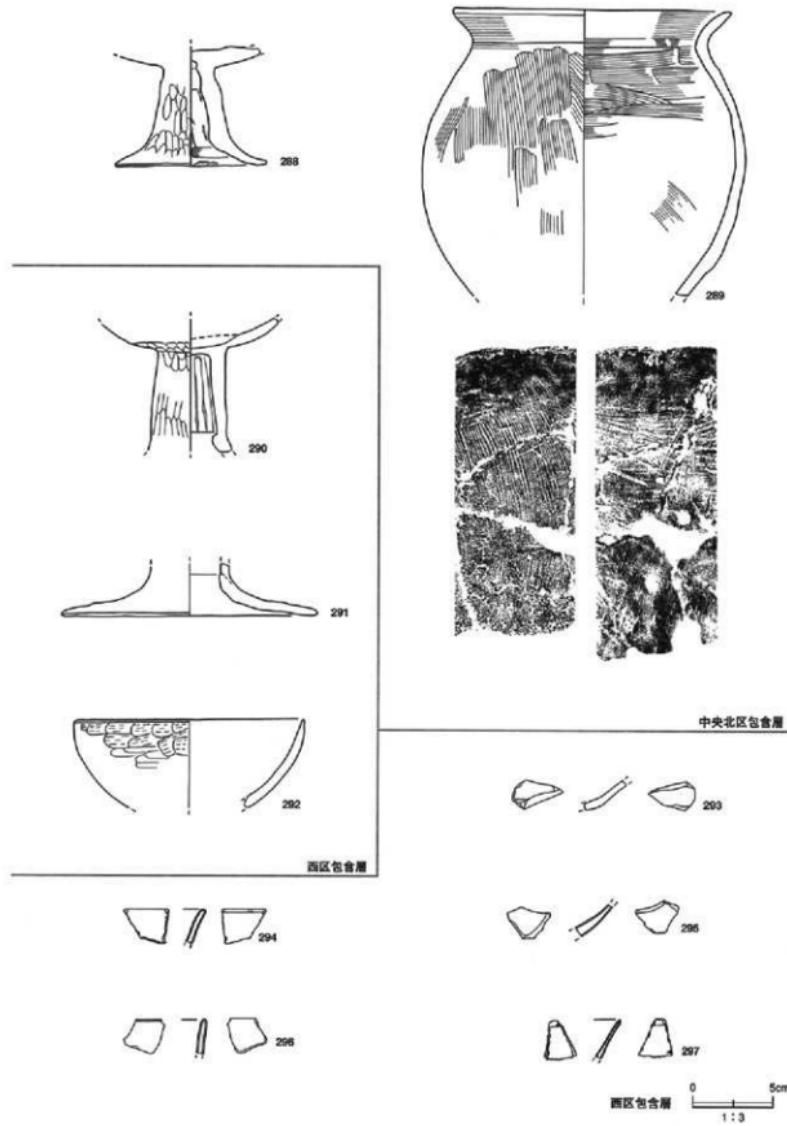


287



1:3

第106図 中央北区包含層(3)



第107図 中央北包含層(4)、西区包含層



298



299



東区 包含層



300



301



302



302



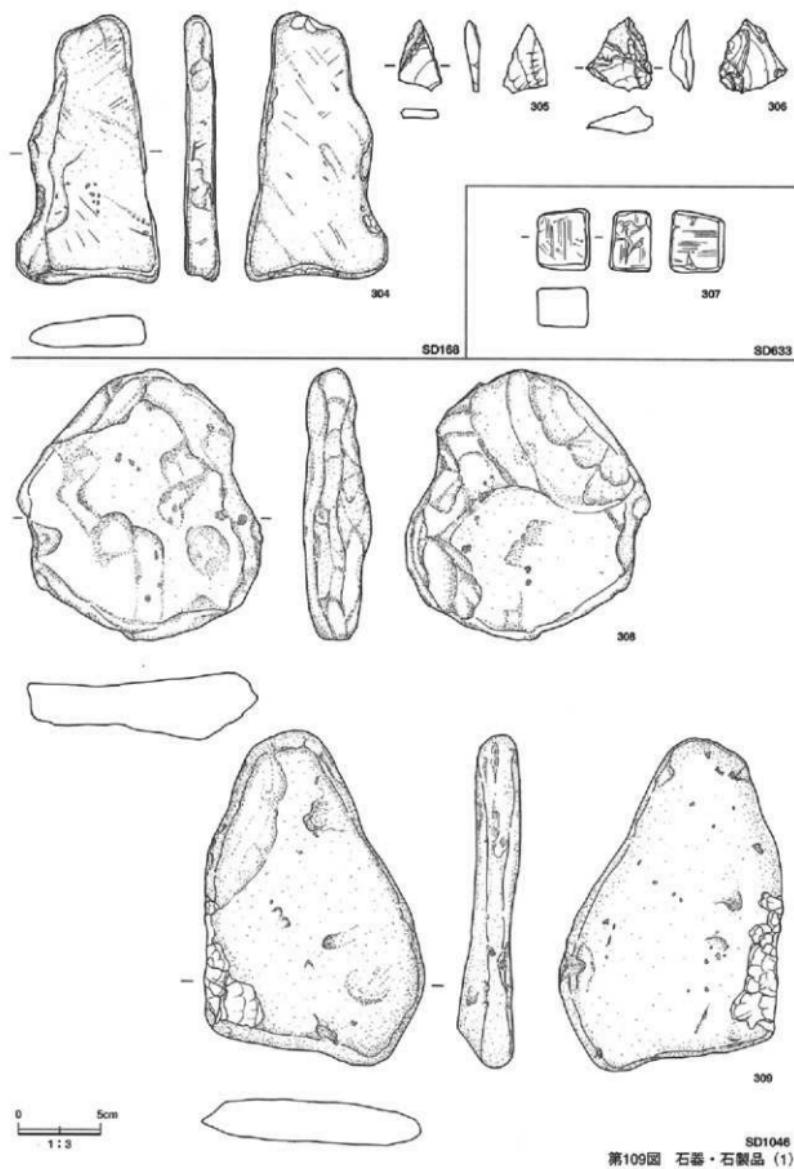
303

南区 包含層

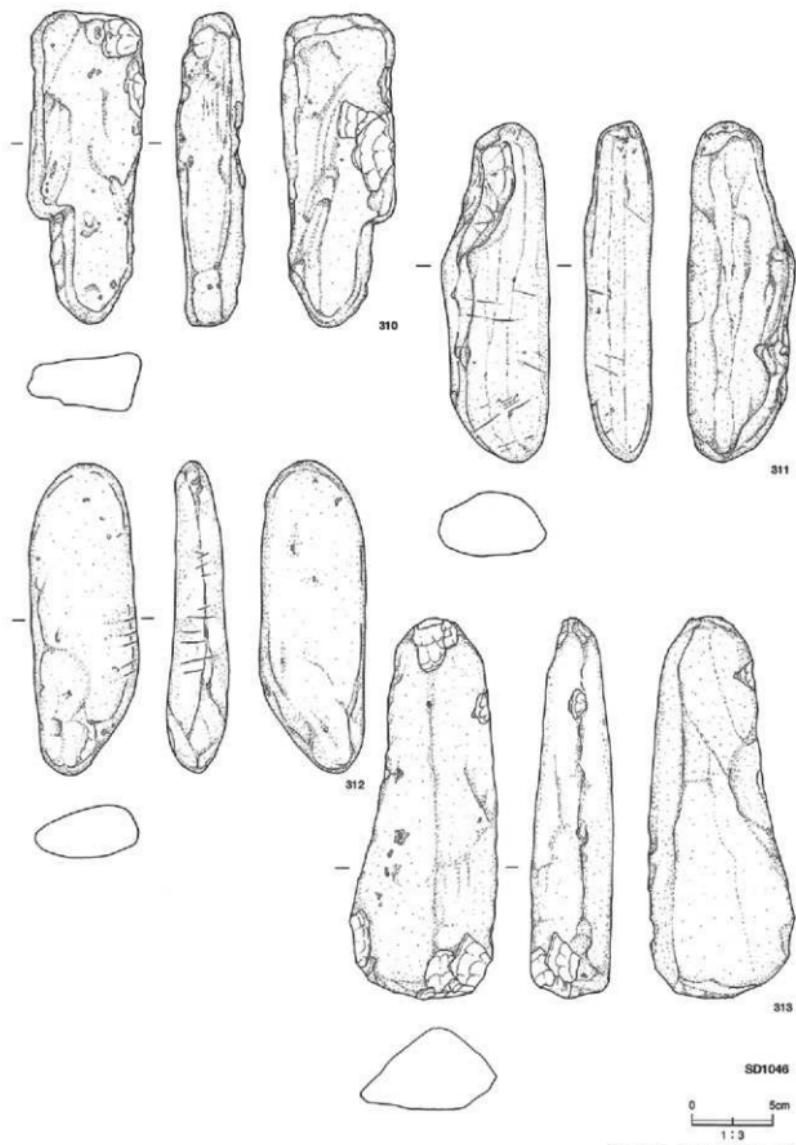
0 5cm  
1:3

第108図 東区・南区包含層

III 挿出した遺構・遺物

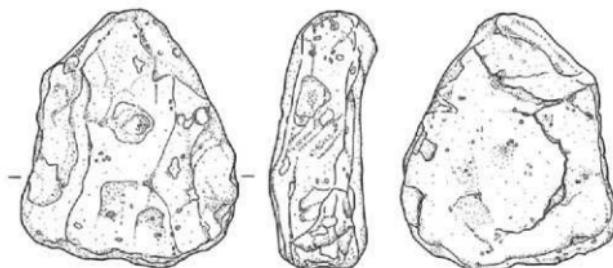


第109図 石器・石製品(1)

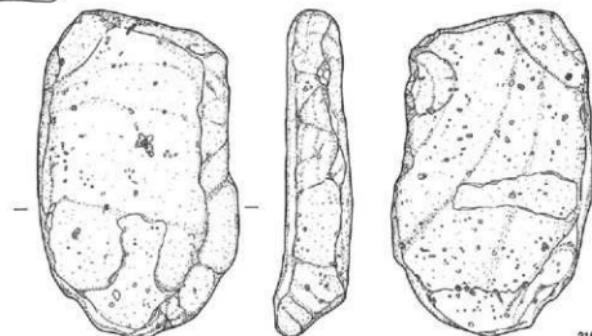


第110図 石器・石製品(2)

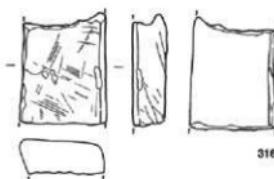
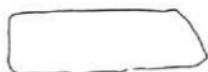
III 検出した遺構・遺物



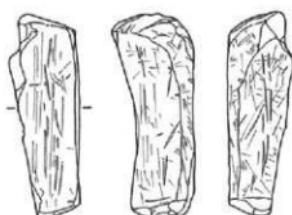
314



315



316



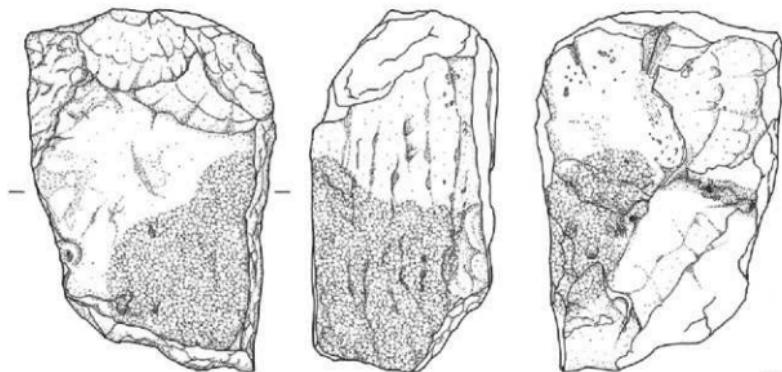
317



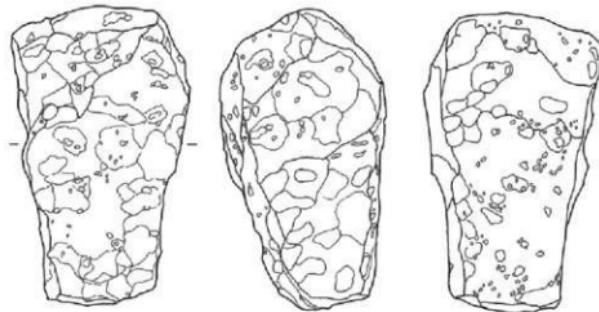
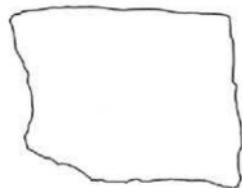
SD1046

0 5cm  
1:3

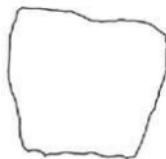
第111図 石器・石製品(3)



318



319



SD1046

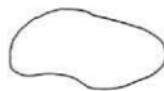
0 5cm  
1:3

第112図 石器・石製品 (4)

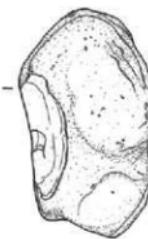
III 検出した遺構・遺物



320



321



322



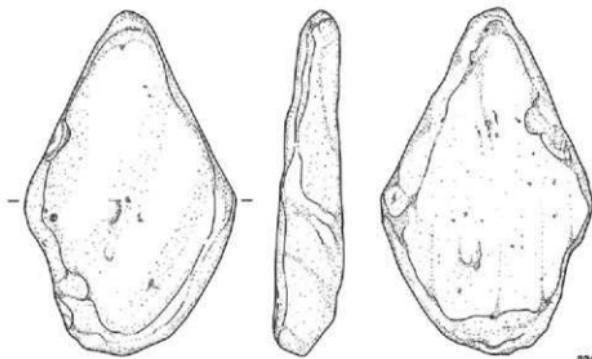
323

0 5cm  
1:3

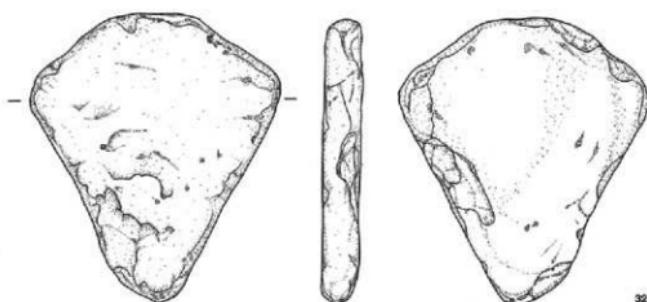


SD1046

第113図 石器・石製品(5)



324



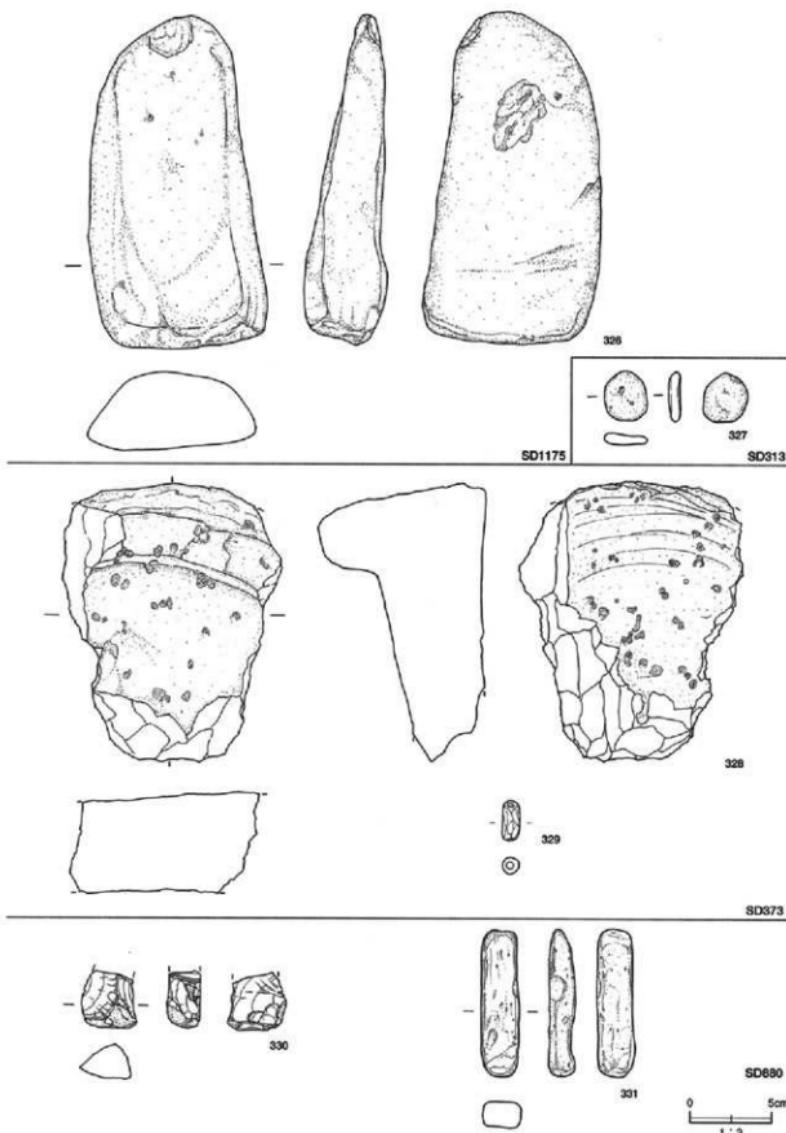
325



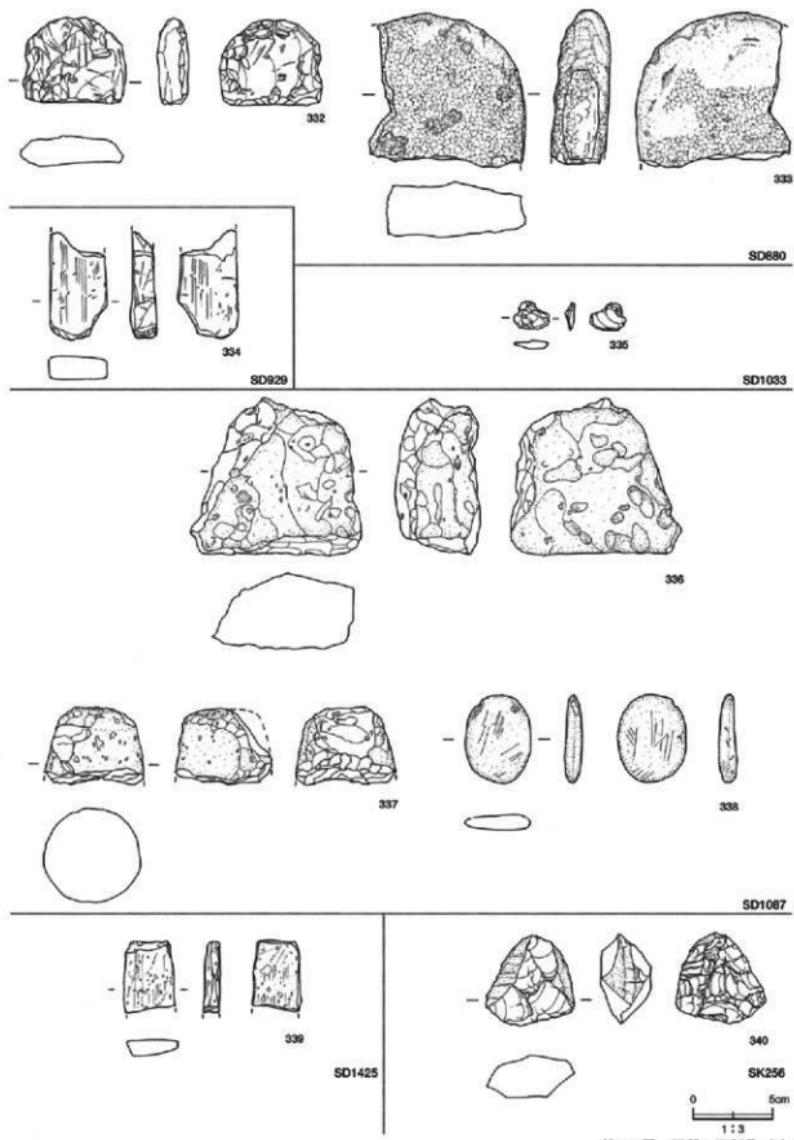
SD1046



第114図 石器・石製品 (6)

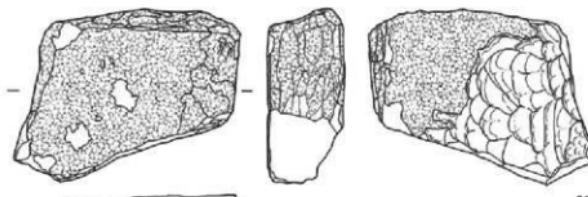


第115図 石器・石製品(7)

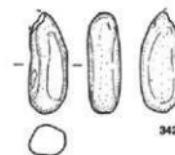


第116図 石器・石製品(8)

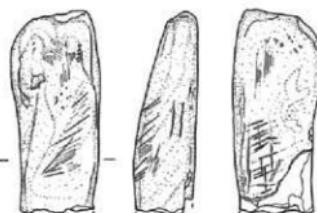
III 検出した遺構・遺物



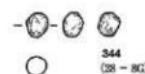
341



SE1556



343  
(13 - 7G)

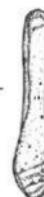


グリッド内



345

中央北



346

中央南

0 5cm  
1:3

第117図 石器・石製品(9)

第7表 土器・陶磁器・土製品観察表(1)

辨別・固 定番号	登録 番号	出土位置 遺構	種別	器種	残存 部	法量				調整範囲			備考
						口径	底径	高さ	器厚	外面	内面	底部	
1	SD168	須恵器	环	口体	132	60.0	50.0	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
2	SD168	須恵器	环	口体	(152)	(72.0)	51.0	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
3	SD168	須恵器	环	口底	(149)	(64.0)	50.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
4	RP71	SD168	須恵器	环	口底	(132)	(64.0)	42.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
5	SD168	須恵器	环	口底	137	64.0	39.5	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
6	RP66	SD168	須恵器	环	底部		65.0		6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
7	RP78	SD168	須恵器	环	底部		66.0		4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
8	RP62	SD168	須恵器	环	口底	130	64.0	38.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
9	RP65	SD168	須恵器	环	口底	(135)	(60.0)	34.0	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
10	SD168	須恵器	环	口底	148	(83.0)	32.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
11	RP76	SD168	須恵器	环	口底	144	62.0	45.5	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	更みあり
12	RP77	SD168	須恵器	环	完形	148	58.0	42.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
13	SD168	須恵器	环	完形	121	66.0	41.0	4.0			糸切り	SD350 出土資 料と接合	
14	SD168	須恵器	环	口底	(148)	(62.0)	36.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
15	SD168	須恵器	环	口底	(145)	80.0	47.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	墨書き	
16	SD168	須恵器	环	口底	(136)	68.0	42.5	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
17	SD168	須恵器	环	口底	(144)	(62.0)	43.0	5.9	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
18	SD168	須恵器	台付环	底部			64.0		3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	古びぶれ
19	RP70	SD168	須恵器	环	口底	(136)	(56.0)	48.0	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
20	RP81	SD168	須恵器	环	口底	140	(74.0)	50.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
21	SD168	須恵器	环	口底	128	52.0	44.5	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	ヘラ削り調整	
22	SD168	須恵器	环	口底	(150)	(74.0)	33.0	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
23	SD168	須恵器	环	口底	134	64.0	41.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
24	SD168	須恵器	壺	体部				5.0	ロクロナデ 裂き端	ロクロナデ		搬入品か	
25	RP80	SD168	須恵器	壺	体底		80.0		5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切 り	SD 1175 出土 資料と接合
26	RP74	SD168	須恵器	壺	口縁	215			9.5	ヘラナデ	ナデ		
27	SD168	須恵器	小壺	口体	(70)			7.7	ロクロナデ	ロクロナデ			
28	SD168	須恵器	壺	口縁	144			8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ		
29	RP74	SD168	土師器	环	口底	144	56.0	73.0	6.0	ロクロナデ	ミガキ	糸切り	内面黒色処理
30	RP68 RP250	SD168	土師器	台付环	底部		71.0		6.0	ロクロナデ	ミガキ		内面黒色処理
31	SD168	須恵器	壺	頭部				11.5	ナデ タクキ	アテ			
32	SD168	須恵器	壺	体部				15.0	タクキ	アテ 動きえ目			
33	SD168	須恵器	壺	体部				10.0	タクキ	アテ			
34	SD168	須恵器	横瓶	体部				9.0	ヘラナデ	ヘラナデ			
35	SD168	須恵器	横瓶	体部				8.3	ヘラナデ	ヘラナデ			
36	RP79	SD168	土師器	小壺	完形		48.0		7.5	ミガキ			黒色処理
37	SD168	土師器	壺	口縁	224			11.5	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ			
38	SD168	土師器	壺	口体	236			6.0	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ			
39	SD633	須恵器	环	口底	(125)	(62.0)	39.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
40	RP138	SD633	須恵器	环	口底	(129)	(60.0)	(38.0)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
41	RP128 RP135	SD633	須恵器	环	口縁	(146)			5.5	ロクロナデ	ロクロナデ		
42	SD633	須恵器	环	完形	142	70.5	47.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	ヘラ削り調整	
43	RP129	SD633	須恵器	环	体底		62.0		4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
44	RP130	SD633	須恵器	环	口底	(147)	76.0	43.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
45	RP131	SD633	須恵器	环	口底	148	82.0	40.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
46	RP127 RP128 RP141	SD633	須恵器	环	口底	132	70.0	38.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
47	RP121	SD633	須恵器	环	口底	140	71.0	43.0	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
48	RP141 RP143	SD633	須恵器	环	完形	133	74.0	42.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切 り	
49	RP122	SD633	須恵器	环	完形	135	70.0	36.0	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	

第8表 土器・陶磁器・土製品観察表(2)

件番・ 図版番号	登録 番号	出土位置 遺構	種別	器種	残存部	法量				調整装置			備考
						口径	底径	器高	器厚	外側	内側	底部	
50	RP131 RP137 RP142	SD633	須恵器	台付壺	口底	138	62.0	35.0	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
51	RP128 RP136	SD633	須恵器	壺	口底 (132)	70.0	40.0	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
52	RP85	SD633	須恵器	壺	口底 (136)	(70.0)	40.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
53	RP132	SD633	須恵器	壺	口底 (130)	64.0	36.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
54	RP131 RP134	SD633	須恵器	壺	完形	130	70.0	37.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
55	RP141	SD633	須恵器	壺	口底 (126)	72.0	36.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
56	RP136 RP141	SD633	須恵器	壺	完形	148	74.0	45.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
57	RP125	SD633	須恵器	壺	口底	132	61.0	43.0	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	底部に縦状の圧痕
58	RP127	SD633	須恵器	壺	完形	132	66.0	38.0	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
59	SD633	須恵器	壺	口底 (134)	(74.0)	42.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り			
60	SD633	須恵器	長脚壺	口縁 (110)				4.5	ロクロナデ	ロクロナデ			
61	SD633	須恵器	壺	口縁 (200)				4.7	ロクロナデ	ロクロナデ			
62	SD633	土器部	壺	口縁 (128) (60.0)	(46.0)	(5.5)			ナデ	ミガキ		内面黒色処理	
63	SD633	土器部	壺	口縁				6.0	ロクロナデ	ハケメ			
64	SD633	土器部	壺	体部				5.5	ロクロナデ	ハケメ			
65	SD633	土器部	壺	体部				6.7	ロクロナデ	ハケメ			
66	SD1046	須恵器	壺	完形	140	54.0	46.0	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
67	RP206	SD1046	須恵器	壺	口底 (136)	(68.0)	42.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
68	RP264	SD1046	須恵器	壺	完形	138	62.5	54.0	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	墨書「乙」
69	RP270 RP271	SD1046	須恵器	壺	完形	140	67.0	46.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り ヘラ削り	
70	RP267 RP268	SD1046	須恵器	壺	口底 (152)	58.0	43.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
71	RP271	SD1046	須恵器	壺	口底 (142)	54.0	45.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
72	RP268	SD1046	須恵器	壺	口底 (140)	72.0	37.5	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
73	RP261	SD1046	須恵器	壺	口底 (135)	66.0	45.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	墨書「乙」	
74	RP278	SD1046	須恵器	壺	完形	138	67.0	44.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	歪みあり
75	RP273	SD1046	須恵器	壺	完形	134	59.0	44.0	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
76	RP269 RP270 RP271	SD1046	須恵器	壺	口底	145	64.0	41.0	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	墨書「乙」
77	RP146	SD1046	須恵器	壺	口底 (140)	62.0	43.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
78	RP270 RP271	SD1046	須恵器	壺	完形	142	64.0	42.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
79	RP266 RP269 RP270 RP271	SD1046	須恵器	壺	口底	155	63.0	46.0	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口唇部やや外反する
80	RP272 RP273	SD1046	須恵器	壺	口底 (142)	(75.0)	43.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
81	SD1046	須恵器	壺	口底	128	69.0	44.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
82	SD1046	須恵器	壺	口底 (132)	(62.0)	41.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り			
83	RP270	SD1046	須恵器	壺	口底 (142)	62.0	45.0	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
84	SD1046	須恵器	壺	口底 (134)	64.0	45.0	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り			
85	SD1046	須恵器	壺	口縁 (140)	60.0	41.5	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り ヘラ削り			
86	RP268 RP271 RP273	SD1046	須恵器	壺	完形	135	60.0	44.5	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
87	RP273	SD1046	須恵器	壺	口縁 (142)				ロクロナデ	ロクロナデ			
88	RP273	SD1046	須恵器	壺	底部 (132)	(64.0)		3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
89	RP273	SD1046	須恵器	壺	口縁	244			ロクロナデ	ロクロナデ			
90	SD1046	須恵器	長脚壺	口縁	134			4.0	ロクロナデ ヘラ削り	ロクロナデ			
91	SD1046SD 633	須恵器	壺	底部		84.0		10.0	ロクロナデ ヘラ削り	ロクロナデ	ヘラ切り	S D 633 出土 資料と整合	

第9表 土器・陶磁器・土製品観察表(3)

件名・番号	登録番号	出土位置 遺構	種別	器種	残存部	法量				調整箇所			備考
						口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	
92	SD1046	須恵器	壺	口体					8.5	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ ヘラナデ		
93	RP280	SD1046	須恵器	壺	取手					開り 振押え	アテ 振押板		
94	RP269	SD1046	土師器	壺	口底	130	56.0	44.0	3.5	ロクロナデ	ミガキ	糸切り	内面黒色処理
95	RP269 RP272	SD1046	土師器	壺	口底	138	58.0	51.0	4.0	ロクロナデ	ミガキ	糸切り	内面黒色処理
96		SD1046	土師器	壺	口縁				6.5	ナデ	ナデ		
97		SD1046	土師器	壺	口体				5.0	ロクロナデ	ロクロナデ		
98	RP273 RP274	SD1046	土師器	鉢	完形	174	112.0	166.0	12.0	ロクロナデ ケズリ	ヘラナデ		
99	RP273 RP267	SD1046	土師器	鉢	口縁	124			4.0	ナデ ヘラナデ	ミガキ		内面黒色処理
100		SD1046	土師器	壺	体部				5.5	ハケメ 縦位	ハケメ 横位		
101	RP199	SD1175	須恵器	壺	口底	136	76.0	45.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
102	RP212 RP216	SD1175	須恵器	壺	口底	142	63.0	42.5	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
103	RP189	SD1175	須恵器	壺	底部				5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
104	RP163 RP192	SD1175	須恵器	壺	口体	(140)			51.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	
105		SD1175	須恵器	壺	底部				61.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り 腹書「乙」
106	RP179 RP188 RP193 RP208 RP260	SD1175	須恵器	壺	口体部	158			11.0	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ ヘラナデ		S D 1046 出土資料と該合
107		SD1175	須恵器	壺	底部				11.0	ナデ	ナデ 振押痕	ケズリ	
108	RP229 RP230 SD1046 RP145 RP150	SD1175	須恵器	壺	口縁	392			8.5	タタキ ナデ	アテ ナデ		複数の地点で癒合した。 亞みあり
109	RP194	SD1175	須恵器	壺	底部		138.0		10.5	斜状タタキ ケズリ	円形アテ		
110	RP126 RP242	SD1175	須恵器	須恵器	壺		(76.0)	6.7		縦状タタキ	アテ		
111	RP165	SD1175	須恵器	壺	体部				9.5	タタキ	アテ		108 と同一個体
112	RP195	SD1175	須恵器	壺	体部				7.6	タタキ	アテ		108 と同一個体
113	RP126	SD1175	須恵器	壺	体部				7.7	タタキ	扁状アテ		
114	RP126	SD1175	土師器	壺	口体				4.0	ナデ ハケメ(裏面) アテ ハコノ(裏面)			
115	RP35	SD82	須恵器	壺	口縁				13.0	ロクロナデ 残底	ロクロナデ		
116	SD86	土器	土鍋	口縁	123				12.0	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕		口縁は平縁平粗
117	SD177	須恵器	壺	口底	(146)	(64.0)	45.5	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り ヘラ削り調整		
118	SD177	須恵器	壺	体部					6.5	平行タタキ	円形アテ		
119	SD177	土師器	壺	口体	(158)				5.5	ナデ ヘラナデ	ナデ		
120	RP83	SD350	須恵器	壺	口底	138	62.0	44.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
121	RP84	SD350	須恵器	壺	口底	(127)	69.0	39.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
122	RP83	SD350	須恵器	壺	体部				8.4	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ ヘラナデ		
123	SD350	縫合上	台付壺	体部		68.0			4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
124	SD833	土師器	壺	口縁	(138)				2.5	ヘラナデ	ナデ ケズリ		
125	SD833	土師器	壺	口縁	(155)				7.1	ナデ ヘラナデ	ナデ ナデ		相手多く含む
126	SD833	土師器	壺	口縁	(214)				8.3	ナデ ヘラナデ	ナデ		裏面にへらの仕事あり
127	SDG33	土師器	鉢	口縁	(128)				8.3	ナデ ハケメ	ナデ		
128	SDG33	土師器	壺	口縁					10.0	ヘラナデ	ハケメ		裏面にへらの仕事あり
129	SDG33	土師器	壺	体部					7.5	ハケメ	ハケメ		
130	SD373	須恵器	壺	頭部					8.5	タタキ	アテ		自然軸
131	SD373	須恵器	壺	体部					7.0	タタキ	アテ		自然軸
132	RP86	SD535	土師器	高環	脚部				7.8	縦位ミガキ	輪積み痕		
133	SD729	須恵器	壺	体部					11.5	タタキ 縦状	アテ 円形		
134	SD729	須恵器	壺	体部					5.0	タタキ 縦状	アテ		自然軸
135	SD729	須恵器	壺	体部					8.8	タタキ	アテ		
136	SD729	須恵器	壺	体部					11.5	タタキ	アテ		
137	SD880(F2)	須恵器	壺	体部					10.8	タタキ	アテ		

第10表 土器・陶磁器・土製品観察表(4)

件番・目 属番号	登録 番号	出土位置 遺構	種別	器種	残存 部	法量			調整技術			備考	
						口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	
138	SD880(F3)	須恵器	壺	縦縫					11.5	アテ→ヘラナデ	タキ→ヘラナデ		
139	SD880(F3)	陶器	縦縫	体部					9.5	ヨコナデ ハナナデ	ヨコナデ ハナナデ	鋤目4条	
140	SD880(F3)	陶器	縦縫	体部					14.5	ヨクロナデ	ヨクロナデ	茶褐色	
141	SD880(F4)	須恵器	壺	体部					15.0	交差タキ	指頭アテ		
142	SD880(F5)	須恵器	壺	体部					12.0	タクキ	アテ		
143	SD880(F5)	須恵器	壺	体部					15.5	タクキ ナデ	弧状アテ		
144	SD880	陶器	壺	体部					8.0	ヨクロナデ→ハナナデ	ヨクロナデ→ハナナデ	濃褐色	
145	SD880	須恵器	壺	体部					8.0	ヨクロナデ	ヨクロナデ	濃褐色	
146	SD880	須恵器	壺	体部					13.3	タクキ タクキ	タクキ タクキ		
147	SD880	須恵器	壺	口縁					8.6	ヨクロナデ	ヨクロナデ 指紋		
148	SD880	須恵器	壺	体部					10.0	タクキ	アテ		
149	SD880	須恵器	壺	壺					8.0	ヨクロヘラナデ	ヨクロヘラナデ		
150	SD880	須恵器	壺	底部					17.7	交差タキ	アテ	自然釉	
151	SD880	陶器	縦縫	体部					13.5	ヨクロナデ	削り ヨクロナデ	鋤目8条 茶褐色	
152	SD880	陶器	縦縫	体部					11.5	ヨクロナデ	削り ヨクロナデ	鋤目9条 茶褐色	
153	SD880(F2)	陶器	台付碗	底部	34.0				7.5	黄褐色	黄褐色		
154	SD880	陶器	台付碗	口底	142	56.0	69.0	5.0	ヨクロナデ	ヨクロナデ	灰褐色 口付盤		
155	SD880(F5)	磁器	皿	口縁					3.8			細色	
156	SD880	陶器	小壺	底部	24.0				7.0	褐色釉(上半)	褐色釉	ヘラ削り	
157	SD880	磁器	台付壺	口底 (70)					3.0	白陶に半円4部位	白陶に半円4部位	青色	
158	SD880(F)	磁器	台付碗	底部	40.0				6.0	網目文	網目文	緋色	
159	SD880	磁器	台付碗	底部	37.0				7.0	二重網目文	網目文 中央に毫		
160	SD880	磁器		口縁					2.0	網目文	横位に横線		
161	SD880	陶器	碗	口底					5.3	ヨクロナデ 剥離	ヨクロナデ	口唇部、内側に剥	
162	SD880	磁器	碗	体部					5.0	褐色釉	褐色釉		
163	SD880	青磁	碗	口縁					5.0	褐色釉	褐色釉		
164	SD880(F3)	磁器	皿	底部					5.0			緑灰色	
165	RP54	SD929	土器	土壺	口底	404	226.0	146.0	8.5	ヘラナデ 剥離	ヘラナデ 剥離	ナデ	外削削付着 内耳付
166	SD929	土器	土壺	口縁	356				9.5	ナデ 剥離	ナデ 剥離		外削削付着
167	RP54	SD929	土器	土壺					8.5	ナデ 剥離	ナデ 剥離		外削削付着 内耳付
168	SD929	土器	土壺	口縁					8.5	ナデ 剥離	ナデ 剥離		外削削付着 内耳付
169	SD929	陶器	片口鉢	体部					14.1	ヨクロナデ ハナナデ	ヨクロナデ ハナナデ		濃褐色
170	RP58	SD930	土器	高环	脚部				9.5	ミガキ	ヘラナデ		内側に輪積み痕 あり 中空
171	RP291	SD930	土器	高环	台部		132.0		8.3	ミガキ			
172	SD930	土器	高环	口縁					6.3				
173	RP99	SD930	土器	高环	口縁	(194)			9.9	ナデ	ナデ		段を持つ
174	RP95	SD930	土器	高环	口縁					ヘラナデ ナデ	ヘケメ		
175	SD930	土器	十脚	高环	体部				7.5		ハケメ		
176	SD930	土器	高环	口縁					8.5	ナデ	ナデ		
177	SD930	土器	高环	口縁					6.0				摩滅
178	RP58	SD930	土器	高环	体部				7.5	ハケメ(縦位)	ハケメ(横位)		
179	RP87	SD955	土器	高环	里部				8.7	ミガキ 剥離	ミガキ		摩滅 口縁外反
180	RP87	SD955	土器	高环	脚部		144.0		7.5	ミガキ ナデ	ナデ		
181	RP87	SD955	土器	九底碗	口縁	(142)			7.8	ナデ ヘラナデ	ヘラナデ ミガキ		
182	SD972	土器	高环	口縁	(130)				4.3	ナデ	ナデ		
183	RP348	SD972	土器	高环	口縁	(104)			4.5	ヘラナデ	ハケメ		
184	SD972	土器	高环	脚部					7.5	ハケメ	ハケメ		
185	RP289	SD972	土器	高环	口縁	(200)			8.9	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ		
186	RP341	SD972	土器	高环	口縁	(184)			10.0	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ		
187	SD1033	須恵器	壺	口縁					9.6	ヨクロナデ	ヨクロナデ		複合状
188	SD1087	須恵器	壺	底部		60.0			5.5	ヨクロナデ	ヨクロナデ		
189	SD1087	須恵器	壺	口底		64.0	36.0	4.0	ヨクロナデ	ヨクロナデ	ヘラ切り		
190	SD1087	須恵器	壺	口底	(130)	(74.0)	34.0	4.5	ヨクロナデ	ヨクロナデ	糸切り		
191	SD1087	須恵器	壺	底部					9.2	ヨクロナデ ハラナデ	ヨクロナデ 指痕		
192	SD1087	土器	壺	体部					6.0	ハケメ			

第11表 土器・陶磁器・土製品観察表(5)

辨別・固 体番号	登録番 号	出土位置 遺構	種別	器種	残存 部	法量				調査箇所			備考
						口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	
193	SD1087	陶器	擂鉢	体部				11.0	ロクロ	鋸目	ロクロナデ		鋸目 8 条
194	SD1087	青磁	碗	体部				18.2					
195	SD1087	陶器	碗	口縁				4.0	梅花模様				白地に灰色
196	SD1090	土製品	土錐	完形	17			64.0					132g 空孕 3mm
197	SD1358	陶器	擂鉢	口縁				8.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	鋸目	茶褐色 鋸目 8 条
198	SD1358	陶器	皿	底部		64.0		7.0		白地に荀二重蘿			
199	SD1358	陶器	大皿	体部				11.0	灰色釉	灰色	灰色		
200	SD1425	陶器	擂鉢	口縁	298			9.8	ロクロナデ ヘラ	ロクロナデ ヘラ	ロクロナデ ヘラ	鋸目	茶褐色
201	SD1425	陶器	擂鉢	体部				6.7					茶褐色 鋸目 2 条
202	SD1425	陶器	擂鉢	体部				9.0	ロクロナデ	鋸目	ロクロナデ	鋸目	灰色 鋸目 5 条
203	SD1425	陶器	擂鉢	体部				8.5	ロクロ ヘラナデ	鋸目	ロクロナデ	鋸目	茶褐色
204	SD1425	陶器	碗	口縁				6.1	茶釉に白粒	茶釉に白粒			
205	SD1425	陶器	碗	底部				3.8	乳白色釉	乳白色釉			
206	SD1425	粗器	碗	口縁	96			3.3	上半 花卉模様	花卉文			白地に鉛
207	SD1559	土器	土壺	体部				7.8	ナデ				煤付着
208	RP108	SX958	須恵器	环	口底	(136)	(68.0)	39.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
209	RP106	SX958	須恵器	环	口底	138	62.0	35.5	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	
210	RP109	SX958	須恵器	环	口底	121	70.0	42.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	墨みあり
211	RP108	SX958	須恵器	环	口底	138	66.0	37.5	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	ヘラ削り調整
212	RP106	SX958	須恵器	环	口底	134	64.0	46.0	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
213	RP105	SX958	須恵器	环	口底	(144)	78.0	45.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
214	RP104	SX958	須恵器	环			70.0		5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
215	RP104	SX958	須恵器	台付环	口底	(150)	69.0	63.5	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
216	RP103	SX958	須恵器	要	頭部				9.0	タタキ	アチ	弧状	自然釉
217		SX1032	土器	溝	体部				8.0	ヘラナデ	指当て痕		煤付着
218		SD174	須恵器	环	口縁	(158)			3.5	ロクロナデ	ロクロナデ		
219		SK174	須恵器	要	体部				6.5	タタキ	弧状アチ		
220	RP56	SK238	須恵器	环	底部		68.0		7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
221		SK235	須恵器	要	体部				11.2	タタキ	アチ		
222		SK244	須恵器	环	口底	(140)	60.0	45.5	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
223		SK244	須恵器	要	体部				8.5	平行タタキ	弧状アチ		
224		SK244	土器	要	体部				6.0	ハケメ(縦位)	ハケメ(横位)		
225		SK256	須恵器	环	底部		68.0		5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
226		SK256	須恵器	要	体部				15.0	ヘラナデ	ヘラナデ		
227		SK501	土器	九字环	体部				5.0	ナデ			摩滅
228		SK501	土器	要	体部				7.5	ヘラナデ	ヘラナデ		
229		SK501	土器	要	体部				7.2	ナデ	ハケメ	ハケメ	
230		SK875	陶器	要	体部				11.0	タタキ			
231		SK837	須恵器	要	体部				12.9	輪状タタキ	アチ		
232	RP114	SK937	土器	溝	口縁	310			9.6	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕		煤付着
233	RP115	SK937	土器	溝	体部				8.6	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕		煤付着
234	RP151	SK1091	須恵器	环	底部		62.0		5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
235		SK1134(F3)	須恵器	要	体部				7.4	タタキ	アチ		
236		SK1134(F3)	須恵器	要	体部				7.5		ヘラナデ		内面に擦痕跡
237		SK1134(F1)	陶器	要	体部				14.0	ロクロナデ	ロクロナデ		
238	RP60	SP708	土器	要	軸面		60.0		10.0	ハケメ ヘラナデ	ヘラナデ		
239		SP1267	須恵器	环	口底	130	72.0	45.0	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
240		SE1047	土器	溝	体部				11.0	ヘラナデ	ヘラナデ		煤付着
241		SE1047	土器	溝	底部				10.0	ナデ ケズリ	ヘラナデ		煤付着
242		SE1556	磁器	碗	体部				4.0				青緑色
243		12-9G	須恵器	环	口底	(130)	60.0	43.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	
244		13-7G	須恵器	环	口底	(129)	72.0	42.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	

第12表 土器・陶磁器・土製品観察表(6)

編目・登録 記号	登録 番号	出土位置 遺構	種別	器種	残存 部	法量				調整装置			備考	
						口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部		
245	13-14G	須恵器	环	口底	134 (60.0)	41.5	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り				
246	16-4G 16- SG	須恵器	甕	体部				10.0	タタキ	アテ				
247	16-5G	須恵器	甕	口縁	(202)			8.4	ロクロナデ	ロクロナデ				
248	17-1G	須恵器	長頸瓶	頸部	(96)			10.0	ロクロナデ	ロクロナデ				
249	17-6G	須恵器	合付环	底部		81.0		7.2	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り			
250	18-5G	須恵器	甕	口縁	(195)			5.0	ロクロナデ	ロクロナデ				
251	18-15G	須恵器	頭部				6.5	平行タタキ	弧状アテ					
252	20-5G	陶器	擂鉢	体部				10.7	ロクロナデ	脚目	脚目7条 底褐色			
253	20-5G	陶器	土瓶	体部				9.0	ロクロナデ	ロクロナデ	鐵輪 住吉口			
254	20-7G	陶器	擂鉢	体部				8.0	ロクロナデ	脚目	鐵輪 脚目10条			
255	20-7G	土器	壺	口縁				7.5	ナデ 塗圧板	ナデ 指圧板	塗付着 取っ手			
256	20-10G	土器	壺	口縁				10.5	ナデ 塗圧板	ナデ 指圧板	塗付着			
257	20-16G	陶器	甕	頭部				11.0	ナデ	ナデ 指圧板	茶褐色			
258	RP1	土器	丸底环	口底	135	40.0	47.0	4.0	ヘラナデ	ミガキ	摩滅			
259	RP52	須恵器	甕	体部				8.3	タタキ	アテ				
260	RP50	土器	甕	环	側部			7.5		ミガキ				
261	23-10G	土器	碗	口縁	144			5.2	ヘラナデ	ミガキ	摩滅			
262	RP51	土器	小底环	完形	94			139.5	8.5	ナデ ケズリ	ナデ			
263	RP323	24-13G	土器	甕	178			5.0	ナデ 塗圧板	ハケメ ナデ	摩滅			
264	RP23	27-6G	土器	甕	口縁			9.5	ナデ	ヘラナデ	口縁に接を持つ			
265	RP23	27-6G	土器	甕	頭部			8.5	ヘラナデ	ハケメ	264と同一個体			
266	北I	須恵器	甕	体部				4.0	ロクロナデ ヘタケ	ロクロナデ	搬入品			
267	北I	須恵器	环	口底	140 (60.0)	40.0	28.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り				
268	北I	須恵器	环	口底	134	62.0	40.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り			
269	RP2	北I	須恵器	环	口底	(170)	(70.0)	42.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
270	北I	陶器	擂鉢	底部		152.0		17.0	脚圧板 滅錆	ナデ				
271	北I	土器	高环	腹部	162			8.5	ハケメ ミガキ	ハケメ ミガキ				
272	RP11	北I	土器	高环	底部			6.5	ミガキ	ミガキ	271と同一個体 中型			
273	RP20	北I	土器	环	完形	132	47.0	42.0	5.0	ハケメ	ハケメ			
274	RP8- RP9	北II	土器	丸底环	完形	126	80.0	60.0	6.5	ミガキ	ミガキ	摩滅		
275	RP20- RP21	23-10G	土器	丸底环	口底	120			7.0	ナデ	ナデ	口縁外反		
276	RP1	北I	土器	甕	口縁	100			4.0	ナデ		口縁に接を持つ		
277	RP17	北I	土器	甕	頭部	172		72.0	8.4	ナデ ハケメ	ナデ ヘラナデ	摩滅		
278	RP16	北I	土器	甕	口縁	163			4.5	ハケメ ナデ	ナデ			
279	RP22	北I	土器	甕	底部	90.0		7.2	ハケメ	ハケメ				
280	RP15	北I	土器	甕	口底	213			9.5	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ			
281	RP19	23-10G	土器	甕	口底	(160)			8.0	ナデ ハケメ	ヘラナデ			
282	北I	土器	壺	口底	305	230.0	159.0	7.5	ヘラナデ 塗圧板	ヘラナデ 指圧板	側面取手部分不規則			
283	北I	陶器	擂鉢	体部				8.0	ヘラナデ	脚目	茶褐色			
284	北I	陶器	擂鉢	口縁				6.7	ロクロナデ	ロクロナデ				
285	北I	陶器	片口鉢	口縁				8.5	ヘラナデ	ヘラナデ	濃褐色			
286	北II	陶器	鉢	口縁				7.0						
287	北I	陶器	碗	口縁				4.2	白地に赤の釉	白地に緑の釉				
288	RP18	北II	土器	高环	脚部	92.0			10.0	ナデ ミガキ	ケズリ			
289	RP5	北II	土器	甕	口底	166			7.5	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ			
290	RP12	西区	土器	高环	脚部				7.0	ミガキ				
291	RP12	西区I	土器	高环	台部	156.0			6.5	ミガキ		輪積み痕あり		
292	RP12	西区	土器	丸底环	口底	(140)	(54.0)		5.5	ミガキ ケズリ	ミガキ			
293	西I	陶器	皿	体部				6.5			灰色			
294	西I	陶器	碗	口縁				3.7	灰色釉	灰色釉	灰色釉			
295	西区I	陶器	碗	体部				3.3	灰色釉	灰色釉				
296	西区I	陶器	碗	体部				3.5	白色釉	白色釉				
297	西I	磁器	碗	体部				3.5			白地に緑			

第13表 土器・陶磁器土製品観察表(7)

番号・目 録番号	登録 番号	出土位置 遺構	種類	器種	残存 部	法量				調整装飾			備考
						口径	底径	器高	器厚	外側	内側	底部	
298		東区	陶器	擂鉢	底部	110.0		13.5	ヘラナデ	御目			鐵輪
299		東区	陶器	皿	口縁	(94)	(54.0)	21.5	3.5	梅花			白地に絵
300		南I	陶器	壺	体部			10.0	ロクロナデ	ロクロナデ			波状沈がめぐる
301		南I	陶器	碗	体部			6.5	綠釉	綠釉			
302		南I	陶器	楕板	体部			10.0	ナデ	ナデ			側刃の壺部分
303		南I	陶器	擂鉢	体部			10.5	ロクロナデ	御目			鐵輪 御目 13条

第14表 磚・石製品観察表

番号・目 録番号	登録 番号	出土 地点	種別	計測値 (mm · g)				調整加工			材質	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	表	裏	他		
304	SD168	磚		163	87	17	370				安山岩	扁平
305	SD168	石器	調片	43.5	26.2	4.9	778				頁岩	破損
306	SD168	石器	調片	45	40	26	20	加工	加工		頁岩	破損
307	RQ124	SD633	磚	砥石	37	32	25	50	磨り	磨り	泥岩	6面使用
308		SD1046	磚		164	139	37	1040			安山岩	裁分付 番平
309		SD1046	磚		203	133	25	950	敲き痕	敲き痕	安山岩	側刃に割れ
310		SD1046	磚		68	69	35	680			安山岩	表面に錆付着
311		SD1046	磚		206	65	39	580	線状の傷		安山岩	
312		SD1046	磚		190	64	36	580			安山岩	
313		SD1046	磚		232	87	48	1100	裏き痕	裏き痕	安山岩	錆付着
314		SD1046	磚		157	128	55	1400			安山岩	
315		SD1046	磚		200	120	38	1580			安山岩	
316	RQ281	SD1046	磚	砥石	68	52	20.5	100	磨り	削れ	白色泥岩	
317	RQ281	SD1046	磚	砥石	123	46	39	240	磨り	磨り	白色泥岩	
318		SD1046	磚		221	151	104	3910	火割れ	火割れ	安山岩	錆付着
319		SD1046	磚		182	103.5	87	1720	削れ	削れ	凝灰岩	火熱を受ける
320		SD1046	磚		145	97.5	51.5	770			安山岩	錆付着
321		SD1046	磚		136	107	32	510			安山岩	側刃に巻き痕
322		SD1046	磚		139	82	40	590			安山岩	
323		SD1046	磚		155	84	30.5	650			自色安山岩	
324		SD1046	磚		210	128	27	1040			安山岩	扁平
325		SD1046	磚		174	151.5	25	820			安山岩	扁平
326		SD1175	磚		230	104	50	1200			安山岩	偏平
327		SD373	磚		30	26	5.7	572			安山岩	
328		SD373	磚	瓦片	170	132	103	1320	削り 磨り 削り 磨り	削れ	凝灰岩	
329		SD373	土製品	土鍋	14	10		18				
330		SD880	石器	調片	35	36	20.4	30			頁岩	織面あり
331		SD880	磚		90	22	16	5498			安山岩	
332		SD880	磚	砥石	52	64	17.5	6652	加工痕	加工痕	凝灰岩	錆付着
333		SD880	磚		89	92	32	400	磨り	磨り	凝灰岩	錆付着
334	RQ59	SD929	磚	砥石	68	36.5	16.5	60	磨り	磨り	火山岩	4面 破損
335		SD1033	石器	調片	16	22	4	12.7			頁岩	
336		SD1087	磚		95	104	45.5	450				
337		SD1087	磚		56	61	57	1130	磨り 磨り	削れ	凝灰岩	
338		SD1087	磚		55.5	41.5	10	26.2	削れ		砂岩	
339		SD1425	磚	砥石	44	30	8.5	17	磨り	磨り	泥灰岩	
340		SK256	石器	調片	58	55	27	881	加工	加工	頁岩	織面あり
341		SE1556	磚		106	123	44	650	加工	加工	安山岩	錆付着
342		SE1556	磚		62	22.5	18	252			安山岩	泥灰岩
343		137G	磚	砥石	124	53	34	250	線状の傷	線状の傷	安山岩	付着物 破損
344	RP41	28-G	磚		15	12	12	221	磨り		泥岩	
345		北II	磚	砥石	94	41.5	12	60	線状の傷			
346		南II	磚		115	73	14	230			安山岩	扁平



## IV 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

鶴の木館跡は、南陽市大字鍋田字鶴之木に所在し、吉野川の自然堤防上に立地する。発掘調査の結果、古代の建物群や遺物、中世の居館に関する遺構や遺物等が検出されている。

今回の自然科学分析調査は、以下のような目的で実施する。①中世の堀跡（SD 86・SD 880）に関して、土壤理化学分析、花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析を行い、当時の古環境に関する情報を得る。また遺構が掘り込まれている自然堆積層についても分析し、遺構内土壌との比較検討を行う。②検出された土器の内容物について、植物珪酸体分析、微細物分析、リン酸、腐植、カルシウム含量を調べ、土器の用途についての情報を得る。③墓坑と考えられる遺構について、リン酸、腐植、カルシウムの含量を調べ、遺体埋納に関する情報を得る。④遺構内から検出された炭化材や木材に関して樹種同定を行い、植物利用に関する情報を得る。⑤検出された炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代資料を得る。

 古環境復元  
土器内容物推定  
遺体埋納物推定  
植物利用  
遺構の年代

### 1 試 料

#### SD 86 北壁

調査区西端で検出された堀跡である。北壁セクションでは、上位より1～12層に分層されている。1～3層は耕作土および整地層である。4～12層が堀跡覆土で、4～5層は管状の斑状鉄が顕著な灰色粘土、6～7層はグライ化した青灰～暗青灰色粘土、8～9層は暗灰～黒色粘土、最下部の10層は青灰色粘土混じり粗粒砂である。また、11・12層は堀の壁面部分にブロック状に認められる。遺構が掘り込まれている自然堆積層である基盤層は、上位から灰色中粒砂混じりシルト、黒色粘土層が認められる。それより下位では、シルト～粗粒砂となり、上方細粒化が認められる。試料は、1層から10層までは各層1点（試料番号1～10）、自然堆積層の最上位のシルト層から試料番号11、黒色粘土層から試料番号12を採取した。

#### SD 880 北壁

調査区東端で検出された堀跡である。北壁セクションでは、上位より概ね6層に分層される。南壁セクションの層位に対比すると、上位から1層、2・4・5層、暗灰褐色粘土（本地点では灰色粘土）、8層、10・11層、12層となる。また、遺構が掘り込まれている自然堆積層は、上位から褐灰色シルト、黒色粗粒砂混じりシルトで、SD 86の周囲の自然堆積層に対比される。ただし、本地点の黒色シルト層では、植物遺体の酸化分解が進んでいる。またそれより下位では、シルト～粗粒砂が認められる。試料は各層から1～2点を採取した。すなわち、試料番号1（1層）、試料番号2（2・4・5層）、試料番号3（暗灰褐色粘土）、試料番号4（8層）、試料番号5・6（10・11層）、試料番号7（12層）である。また、自然堆積層の最上位層から試料

番号 8、黒色シルトから試料番号 9 を採取した。

これらの試料の中から、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、土壤理化分析に、SD 86 から 5 点（試料番号 5～9）、SD 880 から 5 点（試料番号 3～6）、自然堆積層から 3 点（SD 86 の試料番号 11・12、SD 880 の試料番号 8・9）の 13 点を選択する。また、SD 86 が掘り込まれている自然堆積層に認められる腐植層の放射性炭素年代測定を行う。

#### 遺構遺物試料

放射性炭素年代測定用試料として、炭化材 4 点（SD 1046、SK 607・906、SE 1556）、花粉分析用試料として、SE 1556 内の土壌 2 点（内井戸、RW500）、SK 1166 の覆土 1 点の 3 点、植物珪酸体分析試料として、SE 1556 内の土壌 2 点（内井戸、RW500）、SK 1166 の覆土 1 点、SE 1556 から検出されたワラ状の植物遺体 1 点、土器内土壌 2 点（RP11・60）の 6 点を選択する。

種実分析は、SE 1556 から検出された種実 1 点（1 ケース内に複数種類が 30 個程度入っている）、微細物分析は土器内の土壌 2 点（RP11・60）である。

樹種同定用紙料は、SD 1046・1425、SK 906、SE 1556、SK 539、SP166 から出土した建築部材などの木材 14 点である。このうち 3 点（SD 1046・1425、SK 906）は炭化材である。炭化材のうち、SD 1046 と SK 906 は、年代測定を実施する炭化材から分割したものを試料とする。なお、年代測定を実施した SK 607 に關しても、樹種同定を実施する。

リン・カルシウム・腐植分析は、墓坑と考えられている SK 607 から 3 点、SK 906 から 2 点の計 5 点と、土器内土壌 2 点（RP11・60）の計 7 点である。

以上の分析項目・点数の合計は、珪藻分析 13 点、花粉分析 16 点、植物珪酸体分析 19 点、土壤理化分析 13 点、放射性炭素年代測定 5 点、種実分析 1 点、微細物分析 2 点、材同定 13 点、リン・カルシウム・腐植分析 7 点である。

## 2 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

**年 代 測 定** 測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、 $\beta$  線計数法で実施する。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,668 年を使用する。測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma) に相当する年代である。曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

### (2) 硅藻分析

**珪 藻 分 析** 試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に通する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する。

(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986, 1988, 1991a, 1991b)などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性は、Asai & Watanabe(1995)の環境指標種を参考とする。

環境指標種

### (3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9、濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

### (4) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。

植物珪酸体分析

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐浦(1986)の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

珪化組織片

なお、SE1556のワラ状植物遺体は、土壤から調離したあと水洗し、過酸化水素水で灰化させたあとプレパラートを作成して観察を行った。

ワラ状植物遺体

### (5) 種実分析・微細分析

土壤試料は、水に一晩液浸し、0.5mm目の篩を通して水洗する。試料を4mm、2mm、1mm、花粉分析

**微細物分析** 0.5mm 目の篩を用いて粒径別にシャーレに移した後、双眼実体顕微鏡下で観察し、果実、種子や同定可能な葉などの大型植物遺体を抽出する。これを単体の種実試料とともに、形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川, 1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか, 2000）等と比較して種類を同定し、個数を数える。微碎片を含むため個数推定が困難である種類は「+」と、数字以上の個数が推定される種類は「数字+」と表示する。分析後の大形植物遺体は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

#### (6) 樹種同定

**樹種同定** 刃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。炭化材は、自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

#### (7) 土壤理化学分析

**腐植含量** 腐植含量はチューリン法、全窒素は硫酸分解-水蒸気蒸留法（土壤環境分析法編集委員会全窒素 1997）、MI (Melanic index) は腐植簡易分析法（本名・山本 1992）でそれぞれ行う。以下に各項目の操作工程を示す。

##### <試料の調整>

試料を風乾後、軽く粉碎して 2.00mm の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mmφ のふるいを全通させる（微粉碎試料）。

##### <腐植含量>

微粉碎試料 0.100 ~ 0.500g を 100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4 N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃ の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第 1 鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの腐植含量 (Org-C 乾土%) を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

##### <全窒素>

風乾細土試料 1.00 g をケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約 3.0g と硫酸 10ml を加え加熱分解する。分解後、蒸留水約 30ml を加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素含量 (T-N 乾土%) を求める。また、腐植含量を全窒素量で除し、C/N (炭素率) を算出する。

##### <Meranic Index (MI)>

風乾細土約 1.0 g を 50ml 容遠心管に入れ、分注器で 0.5% NaOH 溶液約 25ml を加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で 1 時間振とうする。振とう終了後、0.1% 高分子凝集剤溶液 1 ~ 2 滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15 分間の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液の約 1ml を試験管にとり、0.1% NaOH 溶液 20ml を分注器で加

える (NaOH の濃度は約 0.1 % となる)。この溶液について、分光光度計により 450、520nm の吸光度を測定する。450nm の吸光度が 1 を越える場合には、さらに 0.1 % NaOH 濃度で希釈して測定する (測定時間は抽出後、3 時間以内)。結果の表示は、MI 値 = K450 / K520 で示す。

#### (8) リン酸・カルシウム・腐植分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-原子吸光度法、腐植含量はチューリング法で実施する (土壤環境分析法編集委員会 1997)。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

##### <試料の調整>

試料を風乾後、軽く粉碎して 2.00mm の筋を通して (風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法 (105 °C、5 時間) により測定する。風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mm のふるいを全通させる (微粉碎試料)。

##### <リン酸・カルシウム>

風乾細土試料 2.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約 5ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸 ( $P_2O_5$ ) 濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム ( $CaO$ ) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 ( $P_2O_5$  mg/g) とカルシウム含量 ( $CaO$  mg/g) を求める。

##### <腐植含量>

微粉碎試料 0.100 ~ 0.500 g を 100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4 N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200 °C の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2 % フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第 1 鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの腐植含量 (Org-C 乾土%) を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

## 3 結 果

### (1) 放射性炭素年代測定

結果を第 15・16 表に示す。同位体補正を行った測定年代は、SD 1046 が  $920 \pm 60$  BP、同位体補正 SK 607 が Modern (1950 年を示す  $^{14}C$  濃度との間に有意差が認められない)、SK 906 が  $300 \pm 70$  BP、SE 1556 が  $640 \pm 90$  BP、SD 86 の自然堆積層 (試料番号 12) は  $3,200 \pm 100$  BP、曆年較正 曆年較正曲線である。曆年較正を行った値は、慣例上 10 年単位で表すが、曆年較正曲線や較正プログラムが改正された際に、再計算や比較を行いやすくするため、1 年単位で表記している。その結果は、SD 1046 が calAD1033-1159、SK 906 が calAD1488-1649、SE 1556 が calAD1280-1398、SD 86 自然堆積層 (試料番号 12) は calBC1616-1326 である。

遺構出土の炭化材は大きくとらえると古代末から中世の値を示しているが、全体的に値がばらつきがある。

リン酸分析

カルシウム分析

腐植含量

第15表 放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	補正年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	Code.No.
SD1046	炭化材	920 ± 60	- 26.3	IAA-682
SK607	炭化材	Modern	- 24.8	IAA-683
SK906	炭化材	300 ± 70	- 24.4	IAA-684
SE1556 南西柱材	炭化材	640 ± 90	- 26.7	IAA-685
SD86 試料番号 12	腐植質土壌	3,200 ± 100	- 16.4	IAA-686

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。  
 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。  
 3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68 % が入る範囲) を年代値に換算した値。

第16表 曆年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	曆年較正年代 (cal)					相対比	Code.No.	
SD1046	928 ± 62	cal AD	1,033	- cal AD	1,159	cal BP	917	- 791	1,000 IAA-682
SK607	Modern								IAA-683
SK906	309 ± 73	cal AD	1,488	- cal AD	1,604	cal BP	462	- 346	0.742 IAA-684
		cal AD	1,608	- cal AD	1,649	cal BP	342	- 301	0.258
SE1556 南西柱材	646 ± 93	cal AD	1,280	- cal AD	1,333	cal BP	670	- 617	0.467 IAA-685
		cal AD	1,236	- cal AD	1,398	cal BP	614	- 552	0.533
SD86 試料番号 12	3,202 ± 103	cal BC	1,616	- cal BC	1,386	cal BP	3,566	- 3,336	0.992 IAA-686
		cal BC	1,329	- cal BC	1,236	cal BP	3,279	- 3,276	0.008

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。  
 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。  
 3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68 % が入る範囲) を年代値に換算した値。  
 4) 10 年単位で表すのが慣例だが、若来的な較正曲線の変更による再計算を考慮し、1 年単位で表す。

繩文時代晚期  
 $\delta^{13}\text{C}$  らついており、現在に近い値を示す試料もみられる。今後は層位的な関係や出土遺物等も含めて検討する必要がある。自然堆積層にみられる腐植層は、繩文時代晚期の年代を示す。腐植層の時代は、遺跡が立地する自然堤防が固定化され、植生が被覆した年代に相当すると思われる。また  $\delta^{13}\text{C}$  の値が - 16.4 と古植生を考える上で興味深い数値であるが、詳しくは後述する。

## (2) 珪藻分析

結果を第 17・18 表、第 118・121 図に示す。SD 86 は、試料番号 8・9 から珪藻化石が産出したがそれ以外の試料番号 5~7 は少ない。SD 880 は、試料番号 3~6 から産出する。自然堆積層の SD 86 の試料番号 11, 12, SD 880 の試料番号 9 はいずれも検出個数が少ないと、SD 880 の試料番号 8 のみ比較的多く検出される。化石が産出した試料の完形殻の出現率は、SD 86 が約 50 %、SD 880 が 70 % 前後である。産出分類群数は、合計で 26 属 139 分類群である。遺構別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

水 生 硅 藻  
塩 分 濃 度 S D 86 で珪藻化石が産出した試料番号 8・9 は、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言ふ）が 80 % 以上と優占する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真+好酸性種（pH7.0 以下の酸性水域に最もよく生育する種）～真+好アルカリ性種（pH7.0 以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が多産する。主要種の産状は、流水不定性の *Stauroneis nobilis*、同じく流水不定性で沼澤湿地付着生種群の *Pinnularia gibba* が 10-20 % 検出され、好流水性の *Cymbella turgidula* var.

*niponica*、流水不定性の *Eunotia bilunaris*、*Gomphonema parvulum*、*Syndra ulna*、止水性で沼沢湿地付着生種群の *Gomphonema gracile* 等を伴う。沼沢湿地付着生種群とは、水深が 1m 前後で一面に水生植物が繁茂している沼澤や湿地で優勢な出現の見られる種群である（安藤 1990）。化石の少なかった試料番号 5～7 では、水生珪藻に加え、陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好氣的環境に耐性のある陸生珪藻とが混在する。

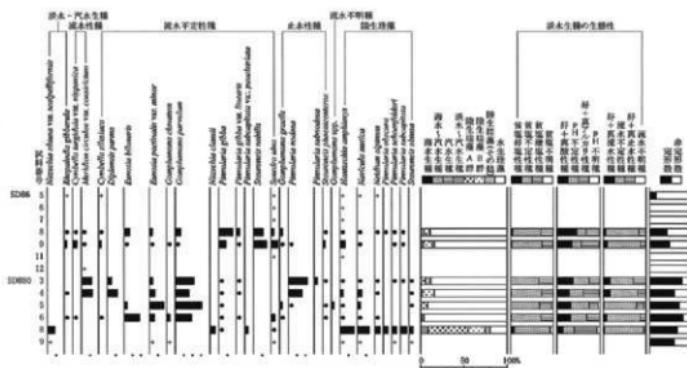
## 陸生珪藻

S D 880 では、珪藻化石群集の違いから試料番号 6・5、試料番号 3・4 で区分される。試料番号 6・5 は、水生珪藻が 90% 以上と優占する。その生態性の特徴は、貧塩不定性種、真+好酸性種～真+好アルカリ性種、流水不定性種と真+好止水性種が多産する。主要種は、流水不定性の *Gomphonema parvulum* が 20～30% 検出され、これに次いで流水不定性の *Eunotia bilunaris*、流水不定性で沼澤湿地付着生種群の *Eunotia pectinalis* var. *minor* が産出する。

試料番号 4・3 は、前試料と同様に水生珪藻が優占するが、流水に対する適応性では真+好流水性種と真+好止水性種も多産する点で異なる。主要種は、流水不定性の *Gomphonema parvulum* と好止水性の *Pinnularia nodosa* が 15～20% 検出され、これに次いで好流水性で中～下流性河川指標種群の *Meridion circulae* var. *constrictum*、流水不定性の *Diploneis parma*、それに流水不定性で沼澤湿地付着生種群の *Eunotia pectinalis* var. *minor* が産出する。中～下流性河川指標種群は、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群である（安藤 1990）。

なお、自然堆積物の試料では珪藻化石の少なく、水生珪藻に混じって陸生珪藻が多少多く認められる程度である。唯一検出された S D 880 の試料番号 8 は、陸生珪藻が全体の約 70% と優占する。主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が 15-20% 検出され、同じく陸生珪藻 A 群の *Neidium alpinum*、*Pinnularia obscura*、乾湿に対する適応性が未区分の未区分陸生珪藻の *Pinnularia schoenfelderi*、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻 B 群の *Pinnularia subcapitata*、*Stauroneis obtusa* 等を伴う。

## 陸生珪藻 A 群



第 118 図 主要珪藻化石群集の層位分布

## 第17表 珪藻分析結果(1)

種 別	生長地			環境 指標種			SD86					SD860				
	泥炭 底	泥炭 表	水	5	6	7	8	9	11	12	3	4	5	6	8	9
<i>Navicula capitata</i> Ehrenberg	Ogb-Meh	aII	rph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula pugnatrix</i> (Bleisch) LL Smith	Ogb-Meh	aII	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Micraster inconspicua</i> Grunow	Ogb-Meh	aII	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia levidens</i> var. <i>victoriae</i> Grunow	Ogb-Meh	aII	ind	U	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia obtusa</i> var. <i>scaphiformis</i> Grunow	Ogb-Meh	aII	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	3	-
<i>Rheopodium gibberum</i> (Ehr.) Müller	Ogb-ind	aII	ind	3	-	-	4	6	-	-	3	-	1	-	-	-
<i>Achmatella crinitula</i> Grunow	Ogb-ind	aII	lph	T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	3	-
<i>Achmatella serpulica</i> Grunow	Ogb-ind	aII	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	2	5	-	-
<i>Achmatella lancifolia</i> (Breb.) Grunow	Ogb-ind	ind	rph	K.T.	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-
<i>Achmatella minutissima</i> Kuetzing	Ogb-ind	aII	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogb-ind	aII	ind	U	1	-	2	4	-	1	2	1	1	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krause	Ogb-ind	ind	ind	R.A.U.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Athyrium ambiguum</i> (Grun.) Simensen	Ogb-ind	aII	lbi	NU	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Calotrichia serpulica</i> Bock	Ogb-ind	aII	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Caloceros leptosoma</i> Kramer & Lange-Bertalot	Ogb-ind	ind	lph	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Calotrichia silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogb-ind	aII	ind	-	-	-	2	1	-	-	1	-	-	1	-	-
<i>Calotrichia silicula</i> var. <i>montana</i> Grun. Cleve	Ogb-ind	aII	ind	-	-	-	2	1	-	-	1	-	-	1	-	-
<i>Cocconeis placenta</i> (Kuetz.) G.Mann	Ogb-ind	aII	ind	U	-	-	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Crataria capitata</i> (Kuetz.) G.Mann	Ogb-ind	aII	ind	S	-	-	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Cymbella acutula</i> Ehr. Cleve	Ogb-ind	aII	ind	O.T.	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-
<i>Cymbella leptoceroides</i> (Ehr.) Kuetzing	Ogb-ind	aII	lph	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella minima</i> Chodat	Ogb-ind	aII	lbi	O	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella navicularis</i> Auerwald	Ogb-ind	ind	O	-	-	-	2	1	-	-	1	-	-	2	3	-
<i>Cymbella pulicaria</i> A.Cleve	Ogb-ind	aII	lph	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella silicula</i> Ehr. Cleve	Ogb-ind	aII	ind	T	2	-	6	-	-	-	-	-	-	8	-	-
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogb-ind	ind	rph	K.T.	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella tumida</i> (Ehr.) Kuetz. Heurck	Ogb-ind	aII	ind	T	-	-	3	5	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ogb-ind	aII	rph	K.T.	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>sipponica</i> Skvortsova	Ogb-ind	aII	rph	T	-	-	3	10	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Cymbella spp.</i>	Ogb-ind	unk	unk	-	-	-	1	3	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> Grun. Cleve	Ogb-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	11	25	-	-	-
<i>Diploneis parma</i> Cleve	Ogb-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia arcuata</i> var. <i>bidentata</i> Grunow	Ogb-ind	aII	lph	-	-	-	1	-	-	-	-	-	8	38	-	-
<i>Eunotia bilobata</i> (Ehr.) Mills	Ogb-ind	aII	ind	-	-	-	12	5	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia flexosa</i> (Ehr.) Kuetz. Heurck	Ogb-ind	aII	lph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Eunotia implicata</i> Nögel & Lange-Bertalot	Ogb-ind	aII	lph	O	-	-	-	-	-	-	3	2	1	-	-	-
<i>Eunotia incisa</i> W Smith ex Gregory	Ogb-ind	aII	ind	O	-	-	-	1	-	-	1	3	3	-	-	-
<i>Eunotia pectinata</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogb-ind	aII	ind	O.T.	-	-	6	4	-	-	8	13	34	12	-	1
<i>Eunotia pectinata</i> var. <i>undulata</i> (Rabenh.) Rabenhorst	Ogb-ind	aII	ind	O	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praeserrata</i> Ehrenberg	Ogb-ind	aII	lph	R.E.O.T.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praeserrata</i> var. <i>bidentata</i> Grunow	Ogb-ind	aII	lph	R.E.O.	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Eunotia tschirchiana</i> Muel.	Ogb-ind	aII	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Eunotia spp.</i>	Ogb-ind	unk	unk	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Destr.) Blaustedt	Ogb-ind	aII	lph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.) Blaustedt	Ogb-ind	aII	lph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.) Petersen	Ogb-ind	aII	r-ph	K.T.	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> var. <i>capitata</i> Grun. Patrick	Ogb-ind	aII	r-ph	T	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria virgata</i> var. <i>strigata</i> Grun. Grun.	Ogb-ind	aII	lph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria rhomboidalis</i> var. <i>angustata</i> (Rabenh.) Rabenhorst	Ogb-ind	aII	ind	U	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema angustum</i> Ehrenberg	Ogb-ind	ind	lph	O	-	-	5	-	-	-	-	-	4	6	-	-
<i>Gomphonema angustum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogb-ind	aII	ind	U	1	-	2	2	-	-	3	6	3	1	-	-
<i>Gomphonema acutum</i> var. <i>guttatum</i> V. Heurck	Ogb-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema elevatum</i> Ehrenberg	Ogb-ind	aII	ind	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	8	-	-
<i>Gomphonema elevatum</i> var. <i>insculptum</i> H. Kobayashi	Ogb-ind	ind	rph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
<i>Gomphonema contractum</i> Laeps & Reichardt	Ogb-ind	aII	lph	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogb-ind	aII	lph	O.U.	-	-	6	1	-	-	-	-	6	4	-	-
<i>Gomphonema helvetica</i> Brun	Ogb-ind	aII	ind	U	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema microspus</i> Kuetzing	Ogb-ind	aII	ind	O	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetz. Heurck	Ogb-ind	ind	ind	U	-	-	11	5	-	46	33	62	39	-	-	-
<i>Gomphonema productum</i> (Grun.) Jahn & Reichardt	Ogb-ind	aII	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema punulum</i> (Grun.) Jahn & Reichardt	Ogb-ind	aII	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-
<i>Gomphonema subclavatum</i> (Grun.) Grunow	Ogb-ind	aII	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema subtilis</i> Ehrenberg	Ogb-ind	aII	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogb-ind	ind	lph	T	1	-	3	1	-	-	-	-	-	6	-	-
<i>Gomphonema vibrile</i> Ehrenberg	Ogb-ind	aII	lph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Gomphonema spp.</i>	Ogb-ind	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-
<i>Gyrosigma acuminatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogb-ind	aII	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gyrosigma scalaripes</i> (Ehr.) Cleve	Ogb-ind	aII	rph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gyrosigma spenceri</i> (W. Smith) Cleve	Ogb-ind	aII	lph	U	-	-	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Hastatosphaera amphibia</i> (Ehr.) Krassow	Ogb-ind	aII	ind	R.A.U.	5	1	4	4	13	1	3	8	4	1	37	7
<i>Meridioria circula</i> var. <i>constructionis</i> (Rabenh.) V. Heurck	Ogb-ind	aII	r-ph	K.T.	-	-	1	1	-	1	25	26	-	-	-	-
<i>Navicula cassis</i> (Breb.) Lange-Bertalot	Ogb-ind	aII	ind	RI	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula conderensis</i> (Kuetz.) Grunow	Ogb-ind	aII	ind	RBS	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula costata</i> Grunow	Ogb-ind	aII	ind	R.A.T.	1	-	-	-	-	-	1	5	-	-	1	1
<i>Navicula costata</i> f. <i>longa</i> (Arnon) Blaustedt	Ogb-ind	aII	ind	R.A.T.	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula elongata</i> Grunow	Ogb-ind	aII	ind	OAU	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula elongata</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.) Patrick	Ogb-ind	aII	rph	U	-	-	1	-	-	-	3	1	1	-	-	1
<i>Navicula gibbera</i> Cleve	Ogb-ind	ind	ind	RJ	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-

第18表 珪藻分析結果（2）

種類	生物性 分類	pH 海水	環境 指標	SD86							SD880						
				5	6	7	8	9	11	12	3	4	5	6	8	9	
Navicula baculata (Agardh) Ehrenberg	Ogb-ind	al-l	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula metica Kutzng	Ogb-ind	al-l	ind	RAS	8	-	-	1	1	-	-	6	11	8	1	14	4
Navicula rotunda Pantocsek	Ogb-ind	al-l	ind	RAS	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula parvula Beck	Ogb-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-
Navicula phecta Ehrenberg	Ogb-ind	al-l	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula pectinata Pustek	Ogb-ind	al-l	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula viridis (Gmelin) Kutzng	Ogb-ind	al-l	r-ph	KU	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium spinosum (Ehrenb.) Kutzng	Ogb-ind	ind	ind	RA	2	-	-	1	-	-	-	1	1	-	1	7	-
Neidium angustum (Ehrenb.) Kramer	Ogb-ind	ind	l-ph	-	-	-	1	3	-	-	2	1	-	1	-	-	-
Neidium modestum (Lange) Cleve	Ogb-ind	ac-l	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Neidium debium (Ehrenb.) Cleve	Ogb-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium hirsutum A.Mayer	Ogb-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium iridum (Thuret) Cleve	Ogb-ind	ind	ind	O	-	-	-	1	-	-	-	1	1	1	-	-	-
Neidium spp.	Ogb-ind	unk	unk	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia breviseta Grunow	Ogb-ind	al-l	ind	RRU	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	3	-
Nitzschia clausii Hantzsch	Ogb-ind	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-
Nitzschia nana Grunow	Ogb-ind	ind	ind	RBS	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
Nitzschia tuberculata Grunow	Ogb-ind	al-l	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Orthosira rossiana (Rabb.) O'Meara	Ogb-ind	ind	ind	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia acrophorpha W Smith	Ogb-ind	al-l	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogb-ind	ind	ind	RA	4	-	2	1	-	-	1	2	-	-	3	-	-
Pinnularia hexaedra (Grus.) Mills	Ogb-ind	ac-l	l-ph	-	-	-	1	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-
Pinnularia hebetioris Cleve	Ogb-ind	ac-l	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens W Smith	Ogb-ind	ac-l	l-ph	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens var. elliptica (Grun.) Cleve	Ogb-ind	ind	ind	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergentissima (Grun.) Cleve	Ogb-ind	ind	ind	O.U	-	-	27	17	-	-	1	2	5	5	1	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogb-ind	ac-l	ind	-	-	7	4	-	-	-	1	2	-	3	-	-	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustedi	Ogb-ind	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
Pinnularia hardyi var. notata H.Kohyasi	Ogb-ind	ac-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia imperialis Mills	Ogb-ind	ac-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia leptopoda (Grev.) W Smith	Ogb-ind	ind	ind	S	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia nemotricha Kramer	Ogb-ind	ac-l	l-bl	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
Pinnularia nobilis Ehrenberg	Ogb-ind	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogb-ind	ac-l	l-ph	O	-	-	1	-	-	-	-	47	32	1	-	-	-
Pinnularia obesula Kutzng	Ogb-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogb-ind	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia schoenfeldii Krauss	Ogb-ind	ind	ind	RI	-	-	1	1	-	-	-	3	-	-	6	-	-
Pinnularia schroederi Blust/Krammer	Ogb-ind	ind	ind	RI	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia streptocarpa Cleve	Ogb-ind	ac-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata Grevy	Ogb-ind	ind	ind	RBS	-	-	1	1	-	-	-	4	-	-	8	-	-
Pinnularia subcapitata var. pacificiana (Grun.) Cleve	Ogb-ind	ind	ind	O.U.RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-
Pinnularia subcordata Hustedi	Ogb-ind	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia substomatophora Hustedi	Ogb-ind	ac-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia sensa Skvortsova	Ogb-ind	ac-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	32	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogb-ind	ind	ind	O	-	-	1	1	-	-	-	3	2	2	32	-	-
Pinnularia spp.	Ogb-ind	unk	unk	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	6	-
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.) Lange-B.	Ogb-ind	ac-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhopodiella quisquiglobula Sverdrup	Ogb-ind	al-l	r-ph	K.T.	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sedigaura americana (Grun.) Mann	Ogb-ind	al-l	l-ph	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sedigaura leucostoma (Kuetz.) Mann	Ogb-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sedigaura pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogb-ind	ind	ind	U	-	-	2	2	-	-	-	5	1	-	-	-	-
Stauroneis acuta W Smith	Ogb-ind	al-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
Stauroneis acuta Ehrenberg	Ogb-ind	ind	ind	T	-	-	1	3	-	-	3	1	1	-	-	-	-
Stauroneis nobilis Schumann	Ogb-ind	ac-l	ind	-	-	19	30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis oblonga Lagerstedt	Ogb-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	2	1	1	-	-	5	2	-	-
Stauroneis pellucens (Nitz.) Ehrenberg	Ogb-ind	ind	l-ph	O	-	-	4	6	-	1	-	-	-	5	1	-	-
Stauroneis pellucens var. signata Meister	Ogb-ind	ind	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis undata Hustedi	Ogb-ind	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Steriella ovata var. planata (W. Smith) Hustedi	Ogb-ind	al-l	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	6	1	1	-	-	-	-
Syndra inaequalis ILKobayasi	Ogb-ind	al-l	r-bl	LKT	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Syndra stina (Kuetz.) Ehrenberg	Ogb-ind	al-l	ind	U	3	4	3	6	15	1	-	-	9	2	1	-	-
海水生長				6	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0
海水～淡水生長				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生長				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～海水生長				3	0	0	7	6	0	0	0	4	0	2	9	3	-
淡水生長				30	6	9	162	194	2	4	209	198	200	209	94	30	-
真藻化能數				33	6	9	169	200	2	4	209	262	200	202	103	33	-

## 八類

H.L. : 滷水濃度に対する適応性 pH : 本イオン濃度に対する適応性 C.R. : 滷水に対する適応性

Ogb-Meh : 滷水～淡水生長 al-l : 酸アルカリ性種 l-bl : 酸不耐性種

Ogb-Hart : 貧栄養帯生長 al-d : 酸アルカリ性種 l-ph : 酸不耐性種

Ogb-ind : 不定生長 ind : 酸不耐性種

Ogb-ph : 酸耐性種 ac-l : 酸耐性種 r-ph : 酸不耐性種

Ogb-unk : 酸不耐性種 ac-bl : 酸耐性種 r-bl : 酸不耐性種

unk : 酸不耐性種 unk : 酸不耐性種

J.上流性川面樹標種, K.中～下流性川面樹標種, N.沿岸潟湖湿地樹標種, O.沿岸潟湖池生種 (以上は安藤 1990)

S.海水生長, T.淡水適応性種, U.好酸性種, RDB.群, RL-E.区分, 伊藤・堀井 1991

### (3) 花粉分析

草本花粉の多産  
水生植物栽培種 結果を第19表、第119・122図に示す。SD 86 覆土の組成は、いずれの試料（試料番号5～9）とも草本花粉の割合が高い。草本類では、イネ科の割合が高く、カヤツリグサ科やヨモギ属の花粉化石がみられる。ガマ属、オモダカ属、ミズオアイ属などの水生植物の花粉が検出されるほか、栽培種（もしくは栽培種を含む分類群）として、ソバ属、ソラマメ属、アズキ属などがみられる。木本花粉では、マツ属とブナ属の割合が高いが、上位でマツ属が増加し、ブナ属が減少する傾向がみられる。

SD 880 覆土でも、試料番号3～6で花粉化石が検出されるが、傾向はSD 86と類似する。ただし、試料番号5で、木本花粉ではブドウ属が、草本花粉ではイネ科の割合が急に高くなる点が異なる。

SD 86とSD 880の地山は、いずれも花粉化石の保存が悪く、ほとんど検出されない。

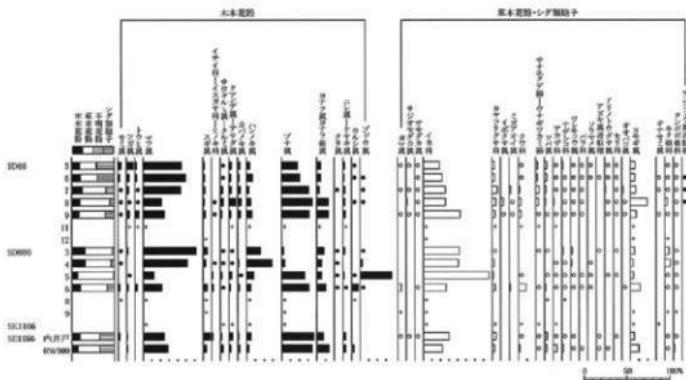
SK 1166は、いずれも花粉化石の保存が悪く、ほとんど検出されない。

SE 1556は、2点とも同様な組成を示す。イネ科を中心とする草本花粉の割合が高く、木本花粉では、マツ属とブナ属の割合が高い。このような組成は、SD 86やSD 880覆土の下部でみられる傾向と類似する。

### (4) 植物珪酸体分析

結果を第20表、第120・123図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

ヨシ属の多産  
イネ属 SD 86 覆土では、ヨシ属の産出が目立ち、イネ属やクマザサ属の割合も高い。イネ属には、初穂に形成される頸珪酸体も認められる。また、コブナグサ属やスキ属を含むウシクサ族、



出発地は、木本花粉+木本花粉シゲ那岐子、木本花粉+シゲ那岐子は総れより木本花粉を除くものを基準として百分率で算出した。  
なお、●はCH11%未満、○は木本花粉 100 個標準誤差の範囲について算出した範囲を示す。

第119図 花粉化石群集の層位分布

第19表 花粉分析結果

種類	試料番号	SD66						SD80						SK1166						
		5	6	7	8	9	11	12	3	4	5	6	8	9	内舟	外舟	EW800			
木本花粉																				
ホリ属	6	5	2	1	2	2	2	1	1	1	5	1					4			
ツガ属	13	7	5	2	2	11	2	2	4	1	1	2					2			
トウヒ属	33	3	2	2	2	9	2	2	1	1	7	1					4			
マツ属(松科)木本花粉	32	54	47	23	18	30	3	119	100	17	27	1				2	6	16		
マツ属(松科)草本花粉	35	54	40	19	19	30	3	30	19	11	17					5	34	22		
マツ属(松科)不確																	15	2		
コウヤマツ属																	3	2		
アカマツ	3	8	5	4	4	6	1	2	2	2	3	4					5	3		
イチイ属-イヌガヤ科-ヒノキ科																	3	2		
サナギ属																	1	2		
ヤマモモ属																	9	4		
ヤマダルミ属																	65	22		
アメニシキ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					14	1		
クマシダ科-アメニシキ属	5	5	6	17	5	5	1	1	1	1	5	3					5	3		
ハシバミ属	1	1	4	6	9	7	1	1	1	1	2	4					1	2		
カバノキ属	4	15	6	11	14	3	1	36	69	20	11	1					9	4		
ハンノキ属	29	46	64	77	71	31	1	20	13	13	24					1	1	21		
コナラ属-ナラ属																	6	5		
コナラ属-カガシ属																	1	1		
クリ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		
ニシキヤマツヤマツ	2	3	5	5	7	2	1	5	3	3	2	1					1	1		
エトキ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		
サザザキ属																	4	4		
カツラ属																	1	1		
シリカ属																	2	2		
カスケ属																	1	1		
カヌレ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		
トチノキ属	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		
ブドウ属										2	6	89	1				1	1		
ノブタ属																	1	1		
ミズキ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		
ニゴノキ属																	1	1		
イボクノキ属					1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		
ムラサキノキ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		
スイカズラ属																	1	1		
草本花粉																	1	1		
ガマ属	1	2	3	3	3	3	1	1	1	1	46	1					1	1		
カモメモガマ属												6					1	2		
オサギ科	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6						1	2		
イネ科	164	241	211	293	561	13	2	330	298	1324	287	9	12			56	202	41	22	
カヤツリグサ科	23	31	50	47	13	2	7	18	24	35						30				
カシキサ属																	1	2		
カシキサ属																	1	2		
ユツクサ属	1	1	1	1	2	3	1	1	1	1	11						1	2		
ミズアチャ属																	15	1		
ガシギシ属	8	11	12	33	37	11	1	1	1	1	14	95					1	2		
ガシギシ属	16	21	33	37	11	1	1	1	1	1	7					1	1	9		
タガ属	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		
ソバ属	24	30	16	15	13	4	1	2	2	2	6	15	3				39	4	26	
アカザ科	4	6	5	3	2	1	1	1	1	1	2	8					2	2		
スズラン科	11	15	4	6	9	1	1	14	3	2	4	1	1				7	1	20	
カシラコ科																	1	1		
カラマツウラ属	1	2	-	9	3	-	-	23	3	-	16	-	-				16	2		
キンボウゲ科																	1	1		
アブナナ科																	2	2		
リンドウ科																	1	1		
セリ科																	3	2		
フジワラ属	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1					1	1		
クマシダ属																	3	2		
アズキ属																	1	1		
アズキ属																	3	2		
アズキ属																	1	1		
アズキ属																	1	1		
アズキ属																	3	2		
アズキ属																	1	1		
シロバナ																	1	1		
シロバナ																	1	1		
シロバナ																	2	2		
シロバナ																	1	1		
シロバナ																	2	2		
シロバナ																	1	1		
オオバコ属																	2	2		
サエムグラ属-アカネ属	1	15	4	3	2	1	1	1	2	1	1	3					1	1		
ジンバク属																	5	5		
コノギ属	47	52	53	221	92	7	6	27	24	63	123	10					43	101		
オナモモ属																	3	3		
キク属	8	7	4	35	3	-	1	39	47	4	4	4					3	3		
シダ科	5	1	2	2	2	-	-	1	6	2	2	1					5	5	12	
シダ科	10	3	2	14	19	-	-	1	4	7	25						19	9		
シダ類																	1	1		
シダ類																	3	5		
シダ類																	1	1		
シダ類																	1	1		
谷																	1	1		
木本花粉	151	224	206	221	227	15	3	241	232	242	225	10	3			17	180	151		
木本花粉	335	434	449	793	836	27	9	496	436	473	678	10	20			98	431	509		
木本花粉	10	3	2	14	16	0	0	1	4	7	9	0	0			0	10	9		
木本花粉	359	420	161	111	282	95	79	41	54	18	169	128	156				51	329	346	
木本花粉	305	1088	816	1125	1344	137	92	775	722	1732	1072	148	158				168	340	1000	

イネ属頸珪酸体 イチゴツナギ亜科などが検出される。この傾向は、SD 880 の覆土でも同様である。

クマザサ属 SD 86 および SD 880 の自然堆積層をみると、SD 86 の試料番号 12 と SD 880 の試料番号 9 では、ヨシ属の産出が目立ち、クマザサ属を含むタケ亜科、コブナグサ属やスキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。上位の試料番号 11 では検出個数が少なく、ヨシ属やクマザサ属などがわずかに認められる。

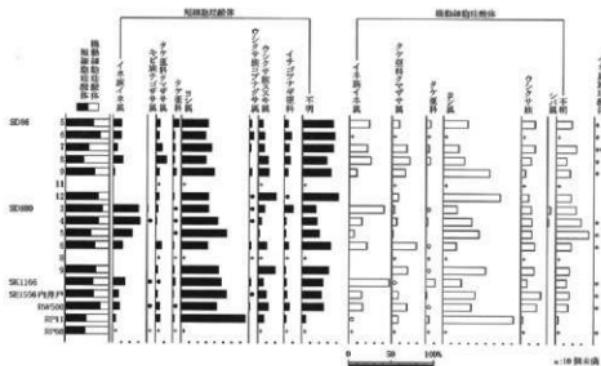
SK 1166 の土壤試料では、ヨシ属の短細胞珪酸体とイネ属の撓動細胞珪酸体の産出が目立つ。イネ属には、頸珪酸体も認められる。またクマザサ属を含むタケ亜科、コブナグサ属やスキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども検出される。

SE 1556 の内部土壤試料および内部から出土した RW500 の内部土壤試料では、堀跡試料と同様にヨシ属の産出が目立つ。またイネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、コブナグサ属やスキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども検出される。

RP11 の土器付着土試料では、堀跡試料と同様にヨシ属の産出が目立ち、イネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、コブナグサ属やスキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。

RP60 の内部土壤試料は、検出個数が少ないものの、RP11 と同様な種類が認められる。この中では、他の試料で産出の目立ったヨシ属とともにイネ属やクマザサ属、スキ属の産出も目立つ。

葉部短細胞列  
頸珪酸体 なお、SE 1556・RW500 のワラ状サンプルは、珪化組織片としてイネ属の葉部に形成される短細胞列や粉穀に形成される頸珪酸体が認められる。



第 120 図 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

第20表 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	SD56						SD680						SK1556			SE1556		RP11	RP60
		5	6	7	8	9	11	12	3	4	5	6	8	9	内部 RW 500	RW 500				
イネ科葉面細胞壁	000	-	-	-	-	-	-	-	151	128	37	22	-	-	30	26	32	4	4	
イネ科イネ属	19	14	6	14	4	-	-	-	4	1	-	-	-	-	1	-	2	-	1	
キビ族オガサワラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	5	3	-	4	1	-	2	-	1		
タケモチクマツサ属	9	5	9	15	10	1	10	13	3	-	13	7	6	1	8	19	6	4	4	
アカザ科	14	3	3	2	19	-	-	-	2	1	-	-	2	4	7	4	2	3	1	
ヨシ属	62	45	36	107	4	95	163	176	89	63	15	112	102	201	175	88	15	-	-	
ウシモチコナグサ属	5	7	2	-	-	-	-	-	2	5	3	-	4	1	-	4	2	5	-	
ウシモチススキ属	10	11	9	14	34	2	61	39	16	3	20	7	50	13	36	50	8	15	-	
イチゴナガサ属	8	12	7	8	11	-	-	-	2	50	9	3	10	1	4	6	14	27	3	
不明キモチ属	51	35	21	16	57	3	79	50	53	26	38	16	54	40	64	59	2	12	-	
不明ヒシノバ属	3	5	7	7	8	-	21	18	7	2	9	1	11	8	10	23	2	5	-	
不明ダニチク属	16	13	17	12	26	1	23	12	10	5	18	2	13	4	11	22	1	6	-	
イネ科葉面細胞壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科イネ属	27	8	24	45	13	-	-	-	42	20	7	21	-	-	61	31	18	1	17	
タケモチクマツサ属	10	5	20	37	23	16	8	3	8	2	29	14	21	1	17	20	10	17	-	
タケモチ	6	4	4	9	-	-	-	-	1	3	-	1	2	1	14	2	1	5	1	
ヨシ属	33	12	21	44	79	4	66	17	45	51	16	8	56	26	79	37	104	16	-	
ウシモチ属	18	5	18	20	7	1	9	12	17	15	16	4	17	9	48	20	3	16	-	
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明	31	8	27	22	24	1	18	24	39	46	18	10	18	16	33	16	4	15	-	
珪化植物	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科葉面細胞壁	8	2	12	10	3	-	-	-	6	1	5	-	-	-	2	8	3	4	-	
合計	197	151	126	124	275	11	296	507	606	166	199	52	254	216	376	416	116	66	-	
イネ科葉面細胞壁	115	42	114	177	146	22	103	103	134	121	101	38	113	129	230	112	127	82	-	
珪化植物	8	2	12	10	3	0	0	0	6	1	5	0	0	2	8	3	0	4	-	
総計	320	195	252	311	424	33	399	610	546	288	305	90	367	347	594	531	243	152	-	

## (5) 種実分析・微細物分析

結果を第21表に示す。SE 1556の単体種実はいずれもモモであった。この中には、一部小動植物のかじり跡と思われる痕跡をもつ個体が含まれている。土器内試料RP11では、種実遺体がモモの検出検出されなかつたが、RP60ではイネ、カヤツリグサ科、アカザ科、スペリヒユ科の種実が検出された。以下に検出された種実に関する形態的特徴を記す。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。灰褐色、広楕円形でやや偏平。先端部はやや尖る。基部は切形で中央部に溝入した溝がある。長さ2~2.5cm、幅2cm、厚さ1.5cm程度。内果皮は厚く硬く、表面は縱に流れ不規則な線状の深い溝があり、全体として粗いしわ状に見える。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎の破片が検出された。淡褐色で、基部に円柱状の特徴的な果実序柄がある。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が規則に継列する。

・カヤツリグサ科 (*Cyperaceae*)

果実が検出された。レンズ状倒卵形。径1~1.5mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・アカザ科 (*Chenopodiaceae*)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1.2mm程度。基部は凹み、溝がある。種皮表面には溝を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・スペリヒユ科 (*Portulacaceae*)

種子が検出された。黒色、腎臓状円形でやや偏平。径0.8mm程度。一端が凹み、溝がある。溝には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が同心円状に配列する。

## 第21表 種実分析・微細物分析結果

分類群	部位	状態	RP11	RP60	SE1556	備考
モモ	核	完形	-	-	24	6個食害痕
		破片	-	-	3	-
イネ	穎	破片	-	3	-	-
カヤツリグサ科	種実	-	1	-	-	-
アカザ科	種子	-	1	-	-	-
スペリヒユ科	種子	-	2	-	-	-
木本	-	-	-	1	-	-
炭化物	-	<0.1cc	<0.1cc	-	-	-
不明炭化物	-	-	<0.1cc	-	-	-
試料分析量	50cc	150cc	(単体)	-	-	-
	63.1g	279.1	-	-	-	-

## (6) 樹種同定

樹種同定結果を第22表

に示す。炭化材のうち、S D 1046 の試料は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、保存状態が悪いために脆く、電子顕微鏡による観察ができなかったため、種類の同定には至らなかつた。その他の木材・炭化材は、針葉樹1種類(マツ属複維管束亞属)、広

第22表 樹種同定結果

遺構	試料名	状態	組織	備考
SD1046	奥片	炭化材	広葉樹(散孔材)	<sup>14</sup> C 試料
SD1425		炭化材	キハダ	
SK539 内	RW40(柱材)	生木	クリ	
SK600		炭化材	クリ	<sup>14</sup> C 試料
SK906	炭材	炭化材	マツ属複維管束亞属	<sup>14</sup> C 試料
SE1556	西北柱材 東北柱材 南北柱材 南東柱材 南面たて枝 南面たて枝2 西面よこ材 北面よこ材下はぞ板	生木	クリ マツ属複維管束亞属 マツ属複維管束亞属 クリ モクレン属 クリ モクレン属 クリ	
SP166 内	RW28(柱材)	生木	ハンノキ属ハンノキ亞属	

葉樹4種類(ハンノキ属ハンノキ亞属・クリ・モクレン属・キハダ)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亞属 (*Pinus subgen. Diploxyylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急～やや緩やかで、晚材部の幅は広い。垂直樹脂道は晚材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

複維管束亞属には、アカマツ・クロマツ・リュウキュウマツの3種とアカマツ・クロマツの雜種(アカクロマツ・アイグロマツ)がある。山形県内では、アカマツが県内全域、クロマツが沿岸地に生育している。

・ハンノキ属ハンノキ亞属 (*Alnus subgen. Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織がある。

ハンノキ亞属には、ハンノキ、サクラバハンノキ、ケヤマハンノキ、ミヤマカワラハンノキ、カワラハンノキ、ヤハズハンノキ、サルクラハンノキの7種といくつかの変種がある。このうち、サクラバハンノキ、カワラハンノキ、サルクラハンノキは現在の山形県には自生していない。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は2-4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

クリは、山形県内の落葉広葉樹林中に普通にみられる落葉高木である。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2-4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は階

## クリ材の検出

段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1・2細胞幅、1・40細胞高。

モクレン属には、ホオノキ、シデコブシ、コブシ、タムシバの4種とコブシの変種であるキタコブシがある。このうち、シデコブシは中部地方の低山・丘陵地に自生しており、現在の山形県には自生していない。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圈部は3・4列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1・5細胞幅、1・40細胞高。

キハダは、山地の落葉広葉樹林内に普通にみられ、谷沿いの斜面地等に比較的多い。

## (7) 土壤理化分析

結果を第23表に示す。自然堆積層 (SD 86の試料番号11、12、SD 880の試料番号8、9) 腐植が少ないでは、腐植含量は他の試

料と比べて高いが、一般的な泥炭層など比べると明らかに低い。また、C/Nが高いことが特徴で、生成されている腐植はA型腐植酸である。

S D 86、S D 880覆土では、土色と腐植含量に対応した関係が見られる。腐植化度については、やや腐植化度が低い試料もあるが、腐植化度が進んでいるA型を示す試料が多い。

## (8) リン酸・カルシウム・腐植分析

結果を第24表に示す。腐植含量は1.2～3.3%の間で変化し、先に述べたS D 86やS D 880と同じくらいの範囲に収まる。リン酸含量はSK 607のF 3のみ極端に高く、他は1.3～3%程度である。カルシウム含量もSK 607・F 3では極端に高いが、他は2.8～4.3%の間で変化する。

第23表 土壤理化分析結果

試料名	土性	土色	腐植含量 (%)	全窒素 (%)	C/N	MI	腐植酸の型	
SD86 No.5	HC	10YR3/4	暗褐	1.28	0.10	12	1.74	B
SD86 No.6	HC	10YR3/4	暗褐	1.24	0.09	14	1.66	A
SD86 No.7	HC	10YR3/4	暗褐	1.36	0.09	15	1.74	B
SD86 No.8	HC	25Y3/1	黒褐	3.85	0.30	13	1.67	A
SD86 No.9	HC	25Y3/1	黒褐	2.35	0.14	17	1.59	A
SD86 No.11	HC	10YR3/4	暗褐	1.11	0.08	13	1.75	B
SD86 No.12	HC	25Y2/1	黒	4.34	0.13	34	1.57	A
SD880 No.3	HC	10YR2/3	黒褐	2.16	0.18	12	1.66	A
SD880 No.4	HC	75YR3/2	暗褐	2.28	0.22	10	1.65	A
SD880 No.5	HC	75YR3/1	黒褐	3.77	0.33	11	1.78	B
SD880 No.6	HC	25Y3/1	黒褐	3.61	0.24	15	1.66	A
SD880 No.8	HC	10YR3/4	暗褐	1.02	0.08	12	1.67	A
SD880 No.9	HC	10YR2/1	黒	2.66	0.11	24	1.55	A

注

土色：マンセル色表示系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による

HC…輕埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

C/N比が高い

A型腐植酸

第24表 リン酸・カルシウム・腐植分析結果

試料名	土性	土色	腐植含量 (%)	P2O5 (mg/g)	CaO (mg/g)
SK607 F1	HC	25Y3/2	黒褐	2.13	1.62
SK607 F2	HC	25Y2/1	黒	3.27	1.26
SK607 F3	HC	25Y2/1	黒	2.44	123.75
SK906 F1	HC	10YR2/3	黒褐	3.33	2.95
SK906 F2	HC	10YR2/3	黒褐	3.01	2.50
RP11	LC	10YR3/4	暗褐	1.57	2.10
RP60	LC	10YR3/4	暗褐	1.22	2.06

注

土色：マンセル色表示系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による

HC…輕埴土（粘土45～45%、シルト0～45%、砂0～55%）

HC…重埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

リン酸が高い

## 4 考 察

### (1) 遺構の堆積環境と周辺植生

遺構が掘り込まれる自然堆積層では、珪藻化石と花粉化石は保存が悪く検出数も少ない試料が多い。好気的環境下による風化に弱い花粉化石が検出されない点や、唯一検出された SD 880 の試料番号 8 で陸生珪藻の産出が目立つことからすると、乾燥を繰り返すような好気的環境であったと考えられる。また、黒色腐植層の年代値が繩文時代晚期を示すことから、遺跡が立地する自然堤防が固定化し、植生が被覆するようになったのは繩文時代晚期頃であるといえる。年代測定で、同位体分別による補正を行うために測定した  $\delta^{13}\text{C}$  の値は、-16.4 であった。 $\delta^{13}\text{C}$  の値は、光合成の様式の違いにより同位体分別の効果が異なるため、植物により異なる。大部分の植物は C3 植物であり、 $\delta^{13}\text{C}$  の値は -25 前後に収まることが多いが、C4 植物では -13 前後の値をとることが多い。このことから、地山には C4 植物由来の腐植が多く含まれていることになる。C4 植物は暖地や乾燥地に生育する植物が多く、イネ科の一部（ススキ属、キビ属、ヒエ属、エノコログサ属など）、カヤツリグサ科の一部、ヒユ科の一部、スペリヒユ科の一部、トウダイグサ科の一部などが含まれる。一方、植物珪酸体分析結果をみると C3 植物であるヨシ属の割合が高く、C4 植物を含むウシクサ族やキビ属、エノコログサ属の割合はさほど多くない。珪藻化石等で推定されたように、自然堤防が固定化して乾燥化すれば、乾燥条件に強い C4 植物（遺跡立地からするとススキなど）が地表を覆うことになり、土壤の  $\delta^{13}\text{C}$  の値は C4 植物の値に近くなる。種類による植物珪酸体生産量の違いを考慮していないためはっきりとはいえないが、ススキ属などの C4 植物に比べ、C3 植物でかつ湿润な場所を好むヨシ属が多産しており、上記の結果とは矛盾する。一方、土壤理化学分析結果をみると、C/N が高いことから未分解の有機物が多く存在していると考えられるが、生成されている腐植は A 型腐植酸で分解が進んでいることになり、C/N 比と腐植酸の結果も矛盾している。これらのことから、自然堆積層に見られる黒色腐植層は、未分解のヨシ属など（C3 植物）を由来とする有機物と、ススキなどの植物遺体（C4 植物）が分解し腐植化することによって生じた有機物とが混在しているといえる。前者は泥炭地などにみられる有機物であり、後者は黒ボク土などの風成層でみられる有機物である。おそらく、自然堤防が固定化したあと陸生珪藻や C4 植物が生育する比較的乾燥した状態であったが、ある時期に地下水位の上昇等が起こってヨシ属が生育するような湿润な状態と変化したため、腐植中に両者が混在していると考えられる。もしくは、このような状況が繰り返し起こっていた可能性もある。ただし、微化石の堆積機構や腐植の生成過程については不明な点も多いことから、同様な事例の蓄積も含め、継続して検討していきたい課題である。

SD 86 は、全般的に珪藻化石の産出が少なく、珪藻化石が産出したのは 8 層と 9 層であった。これらの層から産出す珪藻化石群集は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が優占し、同じく沼沢湿地付着生種群を含む止水性種が伴う。また、流水環境を指標する流水性種は少なかった。よって、8 層や 9 層は、流れは殆どなく、浅く停滞した水域環境であったと思われる。なお 7 層～5 層は、珪藻化石が少なかったが、花粉化石や植物珪酸体などは比較的多く

検出される。堆積機構や堆積後の風化などが原因の一部と考えられるが、堆積物中での珪藻化石の挙動は不明な点も多い。明確な理由はわからない。花粉化石の結果をみると、イネ科の割合が高く、ヨモギ属等を伴うことから、周辺は開けた草地であったと思われる。また、植物珪酸体では、ヨシ属が多く、花粉化石をみても、ガマ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属など水生植物の花粉化石が検出される。このことから、堀の中や周辺の湿润な場所には、ヨシ属をはじめとする水生植物が生育し、開けた草地を作っていたと考えられる。なお、土壤理化学分析結果では、遺構覆土中の腐植酸は、A型とB型が混在している。有機物が分解しにくい湿地や泥炭地などの環境では、基本的にB型腐植酸になると思われるが、今回の場合は、層位によってはA型もみられる。陸生珪藻が多少検出されていることからすると、堀の中は定常に水が存在していたわけではなく、好気的に有機物の分解が進むような時期もあったと考えられる。しかしながら、黒ボク土など好気的環境で生成された腐植が流入しても同様な組成になる可能性もあるため、断定はできない。

S D 880 の 11 層・10 層は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産したことで特徴付けられ、流水環境を指標する種は極少なかった。よって、これらの覆土が堆積する頃は淀んだ浅い水域であったと考えられ、S D 86 の 8 層・9 層の環境に近似する。その上位にある、8 層や灰色粘土になると、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や止水性種に加えて、中下流性河川指標種群の *Meridion circulae* var. *constrictum* が多産する。このことから、流れの影響を受けるような水域へと変化したか、あるいは近くの河川の氾濫等によって堆積物がもたらされた可能性がある。一方、花粉化石や植物珪酸体分析の結果をみると、S D 86 と組成が類似することから、S D 86 で述べた古植生と同様に周辺は開けた草地であったと推測される。なお、10 層ではブドウ属の花粉化石とイネ科の花粉化石が急に多くなる。これらは局地性を反映していると考えられ、試料採取地点付近にブドウ属やイネ科が生育していたか、あるいはこれらの花が堆積物中に偶発的に混入するなどして、花粉化石の濃度が高まったことが原因と考えられる。また、8 層や灰色粘土層ではハンノキ属が増加するが、これも、局地性を反映していると思われる。土壤理化学分析結果では、S D 86 と同様に、好気的な環境下で生成され、分解の進んだ A 型腐植酸が検出されており、堀の中が好気的に有機物の分解が進むような時期もあったと考えられる。しかしながら、S D 86 と同様に黒ボク土など好気的環境で生成された腐植が流入しても同様な組成になる可能性もある。

花粉分析と植物珪酸体分析では、S K 1166 と S E 1556 の覆土について分析を行っている。花粉化石は S K 1166 からはほとんど検出されなかつたが、植物珪酸体は両遺構から検出される。このなかで、局地性が高いと思われる種類に着目するが、花粉化石・植物珪酸体とともに、堀の埋積物と同様な組成を示している。年代測定の結果をみると、S E 1556 は中世頃を示し、花粉化石や植物珪酸体組成をみても、中世の堀の底部と組成が類似しており、調和的である。栽培植物に着目すると、植物珪酸体ではいずれの遺構からも、イネ属に由来する植物珪酸体が検出され、イネ属の葉部や穂穀に由来する珪化組織片も見られた。また、S E 1556 から検出されたワラ状の植物片は稻藁であることが確認された。このことから、当時周囲では稲作が行われていたと考えられる。また稻藁や稻穀は古くから生活資材として使われており、燃料材や建築部材などとして、遺跡内で利用されていた可能性もある。花粉化石では、ソバ属・ソラマ

周辺は草地

水生植物の生育

堤は乾燥をくり

かえす状況

黒ボク土流入の

可能性

浅く淀んだ水域

流水域へ変化

局地的な植生

黒ボク土の流入

稻藁灰の検出

**栽培植物** メ属・アズキ属等に栽培植物が含まれる。このことから、周辺でのソバやマメ類の栽培が示唆されるが、ソラマメ属とアズキ属には日本に自生する野生種も含まれるため、栽培に由来しない可能性もある。

**冷温帯落葉樹林** 周辺の森林植生についてみると、木本花粉では、下位ではブナ属が、上位ではマツ属が多い。ブナ属は隨伴するコナラ亜属とともに、冷温帯落葉広葉樹を形成する主要な構成種である。このことから、周辺の山野には、ブナやナラ類などの落葉広葉樹が分布していたと考えられる。一方、植物珪酸体では、クマザサ属を含むタケ亜科珪酸体は、後背山地に由来すると思われる。また、マツ属が増加傾向を示すが、これは人為的な植生改変に伴い、マツの二次林や植林が分布拡大したためとみられる。当社が県内で行った花粉分析結果をみると、中世以降でマツ属が増加する遺跡が多いが、南陽市の東畠 A 遺跡では古代?の堆積物からマツ属が多産する。今回は古代以前の層位を分析していないので、マツ属の増加開始時期を知ることはできないが、年代測定の結果等を考慮すれば、少なくとも古代末～中世の時点で、マツ属の分布拡大がある程度進んでいたことが推測される。

## (2) 土器内容物に関する検討

土器内容物を知る目的で、微細物分析、リン酸・カルシウム・腐植分析、植物珪酸体分析を実施した。植物珪酸体分析では、RP11 から多くの珪酸体が得られた。その組成はヨシ属が多く、中世の堀や地山の組成と同様であった。このことから、植物珪酸体組成は、周辺植生を反映していると考えられ、土器内容物の特徴を反映しているとはいえない。微細物分析では、RP60 から種実が検出されるが、イネ以外は人里などに普通にみられる雑草類であることから、周辺植生に由来する種実が土壤とともに流入したものであると思われる。またイネに関しては、破片である点や、遺構覆土中に顆粒状がみられる試料が多いことから、流入した土壌中に含まれていたと考えられる。以上のことから、種実遺体に関しては、周辺の植生は反映しているものの、土器内容物に関する情報は含んでいない。リン酸・カルシウム・腐植含量をみると、2 試料ともに類似した値を示す。これらの化学成分は、均質な方が化学的に安定なため、自然状態では試料間で類似した値をとるが、埋納などによって局所的な濃集が起こると、試料間で値にばらつきが生じると考えられる。今回は 2 試料のみなので確実にはいえないが、値が類似していることから自然状態の範囲内であると考えられ、埋納物に由来しないと思われる。

## (3) 遺構内容物に関する検討

今回、墓坑と考えられている 2 遺構（SK 607・SK 906）に関して、リン酸・カルシウム・腐植分析を実施した。これらの土坑からは骨片や炭化材料が検出されており（脆弱ではあるが）、墓の可能性が推定されている。年代測定の結果、SK 607 は現代に近く、SK 906 も近世の年代が得られており、比較的新しい遺構と考えられる。SK 607F3 では、リン酸やカルシウムが極端に高く、動物質遺体の埋納が推定される。一方、SK 906 もリン酸の値が土器内容物（RP11 や RP60）に比べてやや高いが、腐植含量も同様に高い。リン酸は植物遺体にも含まれるため、自然状態では腐植含量とリン酸量との間に正の相関関係が生じる。このこと

から、SK 906でリン酸含量が高いのは、植物遺体に由来するリン酸と考えられ、遺体埋納等の指標にはならない。

#### (4) 木材・種実利用

木材・炭化材には合計5種類の木材が確認された。いずれも現在の山形県内に自生している種類であり、遺跡周辺で木材の入手が可能であったと考えられる。複維管束亜属は、針葉樹としては比較的強度が高い部類に入り、樹脂（松脂）を多く含むために保存性もある。とくに水中等の一定条件下での保存性は高い。ハンノキ亜属とクリは比較的重硬で強度が高く、クリでは耐朽性も高い。モクレン属は日本産広葉樹の中では比較的軽い部類に入り、木理が直線で加工が容易であるが、耐朽性は低い。キハダも比較的軽い部類に入り、加工は容易であるが、強度は比較的高い。SK 539から出土した柱材にクリが利用されている背景には、クリの強度や耐朽性を考慮した木材利用が推定される。また、SP166の柱材のハンノキ亜属も強度を考慮した可能性がある。一方、SE 1556は、四隅の柱材にクリと複維管束亜属が各2点、たて杭にクリとモクレン属、横材と横材下のほぞ板にクリが認められ、少なくとも3種類の木材が利用されていたことが推定される。クリの利用は、SK 539の柱材と同じく、強度や耐朽性を利用したものと考えられる。複維管束亜属の利用も保存性や強度を考慮した木材利用が推定される。モクレン属については、耐朽性が低いことから適材とは考えにくいが、加工性が高いことから利用された可能性がある。

マツの利用

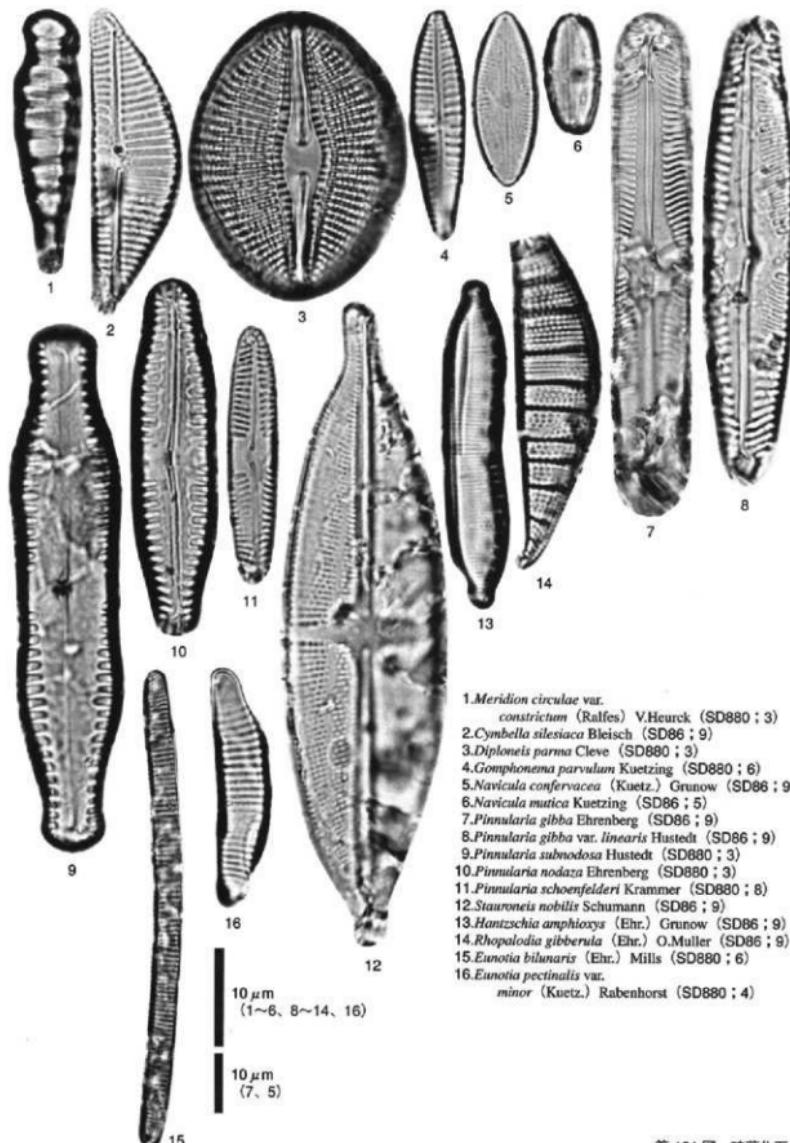
ハンノキの利用

クリの利用

SE 1556で検出されたモモは、食用、薬用、觀賞用などの目的で古くから栽培されている種類であり、当時周辺での栽培・利用が示唆される。一部小動物によるかじり跡がみられるが、これは施用された木の根にある種子（仁）を食べるため、ネズミなどが開いたと思われる。

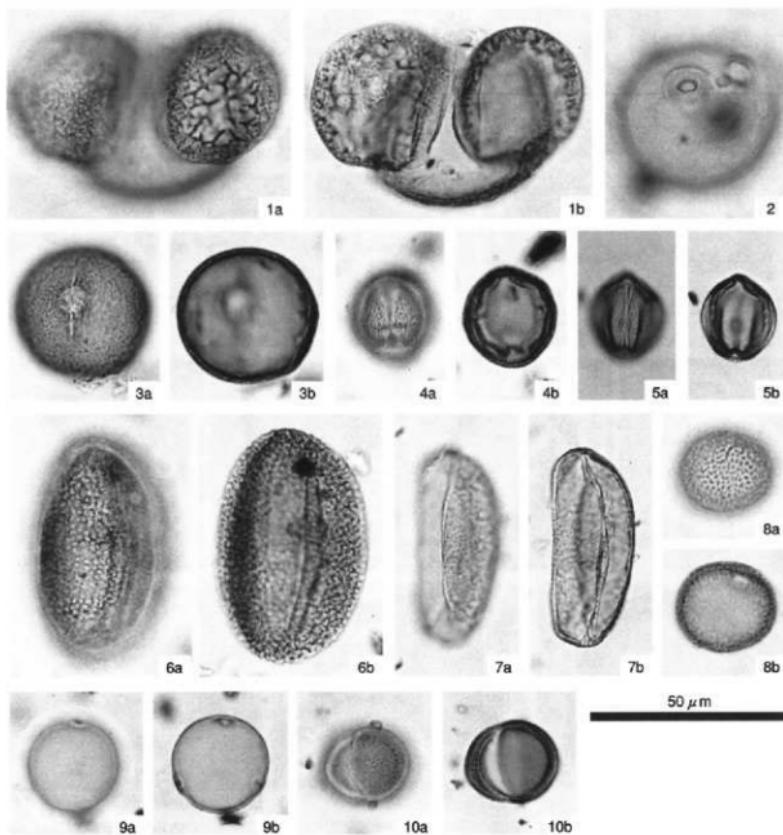
#### 引用文献

- 安藤一男  
Asai, K. & Watanabe, T.
- 土壤環境分析法編集委員会編  
原口和夫・三友清史・小林弘  
本名俊正・山本定博  
伊藤良永・堀内誠示  
石川茂雄  
小杉正人  
近藤錦三・佐瀬隆  
Krammer, K.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.  
中山至大・井口孝秀・南谷忠志  
中村純  
農林省農林水産技術会議事務局  
ペドロジスト懇談会編
- 1990 淀水産庄蔵による環境指標種群の設定と古環境復元への応用『東北地理』42 73～p.88.  
1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10 p.35～p.47.  
1997 「土壤環境分析法」427p.博友社  
1998 埼玉の藻類 珍藻類『埼玉県植物誌』p.527～600 埼玉県教育委員会  
1992 腐植の簡易分析法『十環構成成分分析法』p.7～35 博友社  
1991 除生珪藻の現在における分布と古環境解析への応用『珪藻学会誌』6 p.23～45.  
1994 「原色日本植物図鑑」232p. 石川茂雄図鑑刊行委員会  
1988 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用『第四紀研究』27 p.1～p.20  
1986 植物珪藻体分析、その特性と応用『第四紀研究』25 p.31～p.64.  
1992 PINNULARIA.einae Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMO-LOGICA BAND26. JCramer,353p.  
1986 Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswas S E rflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.  
1988 Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae. In: Suesswas S E rflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.  
1991a Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaeae,Eunotiaceae. In: Suesswas S E rflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.  
1991b Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Comphonema. In: Suesswas S E rflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.  
2000 「日本植物種子図鑑」642p. 東北大出版会  
1967 「花粉分析」232p. 古今書院  
1967 「新版標準土色鉛」  
1984 「土壤調査ハンドブック」156p. 博友社



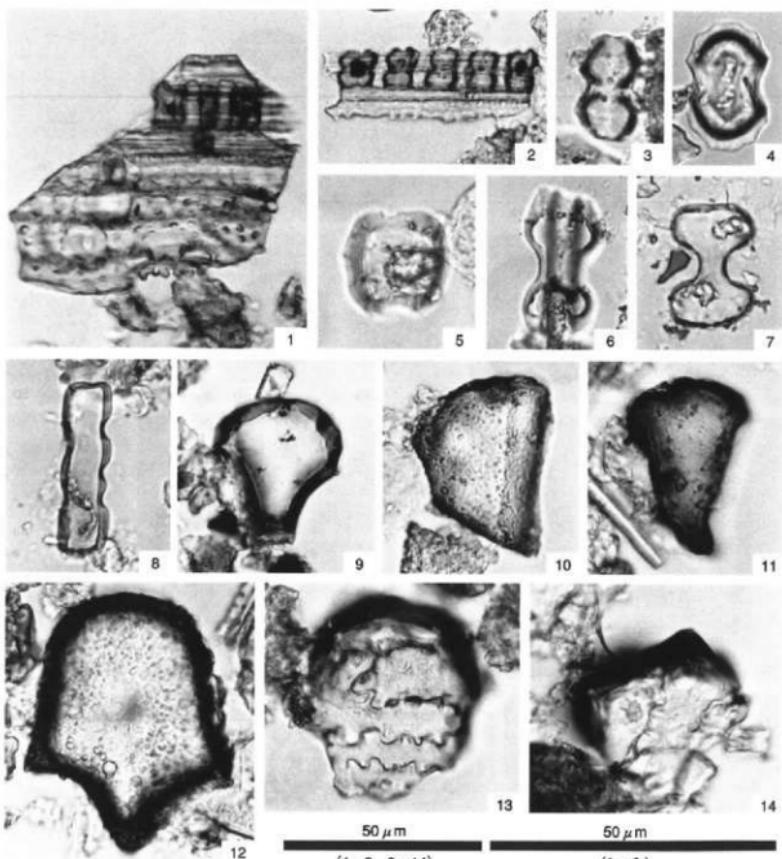
1. *Meridion circulae* var.  
*constrictum* (Ralfs) V. Heurck (SD880; 3)  
 2. *Cymbella silesiaca* Bleisch (SD86; 9)  
 3. *Diploneis parma* Cleve (SD880; 3)  
 4. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (SD880; 6)  
 5. *Navicula conservacea* (Kuetz.) Grunow (SD86; 9)  
 6. *Navicula mutica* Kuetzing (SD86; 5)  
 7. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (SD86; 9)  
 8. *Pinnularia gibba* var. *linearis* Hustedt (SD86; 9)  
 9. *Pinnularia subnodosa* Hustedt (SD880; 3)  
 10. *Pinnularia nodata* Ehrenberg (SD880; 3)  
 11. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (SD880; 8)  
 12. *Stauroneis nobilita* Schumann (SD86; 9)  
 13. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SD86; 9)  
 14. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Muller (SD86; 9)  
 15. *Eunota bilunaris* (Ehr.) Mills (SD880; 6)  
 16. *Eunota pectinalis* var.  
*minor* (Kuetz.) Rabenhorst (SD880; 4)

第 121 図 硅藻化石



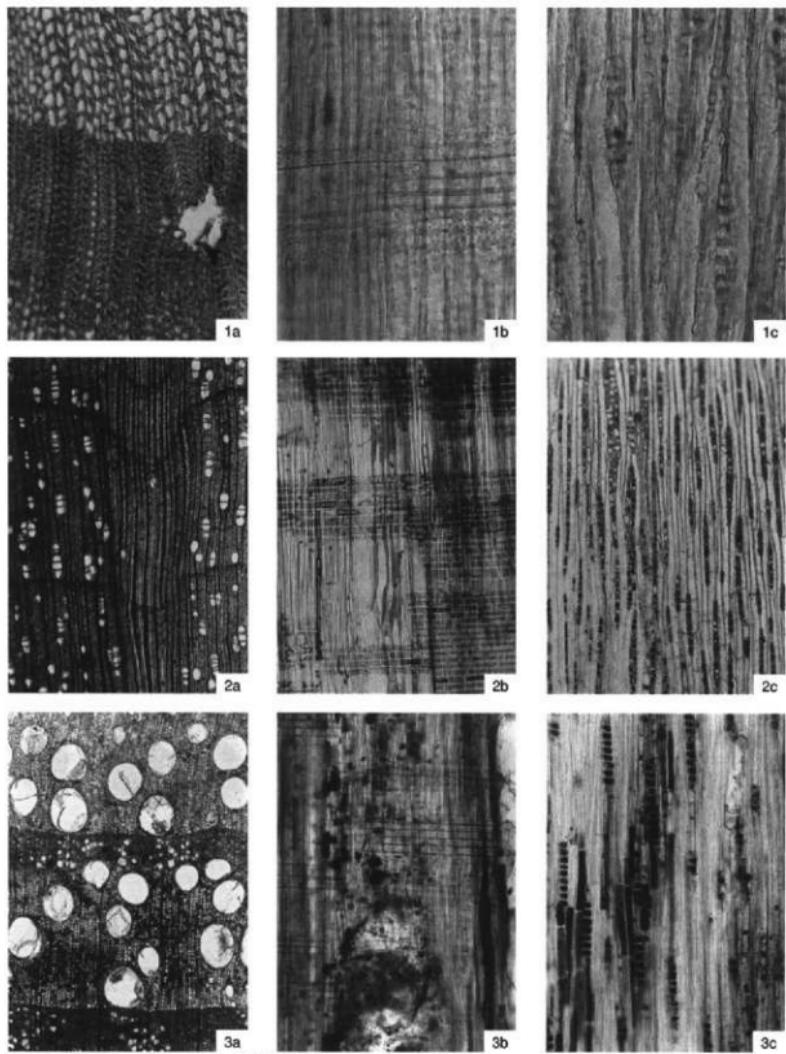
- 1.マツ属複維管束亞属 (SD86; 7)  
 2.イネ科 (SD86; 7)  
 3.ブナ属 (SD86; 7)  
 4.ウルシ属 (SD880; 6)  
 5.ブドウ属 (SD880; 5)  
 6.ソバ属 (SD86; 5)  
 7.ミズアオイ属 (SD86; 7)  
 8.ガマ属 (SD880; 6)  
 9.クワ科 (SD880; 6)  
 10.ヨモギ属 (SD880; 6)

第122図 花粉化石



- 1.イネ属短細胞列 (SE1556 RW500; ワラ状)  
 2.イネ属短細胞列 (SE1556 RW500; ワラ状)  
 3.イネ属短細胞珪酸体 (SD86; 5)  
 4.チゴササ属短細胞珪酸体 (SD86; 12)  
 5.ヨシ属短細胞珪酸体 (SD86; 9)  
 6.コブナグサ属短細胞珪酸体 (SD86; 5)  
 7.スキキ属短細胞珪酸体 (SD86; 9)  
 8.イチゴソナギ草科短細胞珪酸体 (SD86; 6)  
 9.イネ属機動細胞珪酸体 (SD86; 5)  
 10.クマザサ属機動細胞珪酸体 (SD86; 5)  
 11.ウシクサ族機動細胞珪酸体 (SD86; 9)  
 12.ヨシ属機動細胞珪酸体 (SD86; 9)  
 13.イネ属頭珪酸体 (SD86; 5)  
 14.イネ属頭珪酸体 (SD86; 7)

第123図 植物珪酸体



1.マツ属複雑管束木属 (SE1556; 東北柱材)

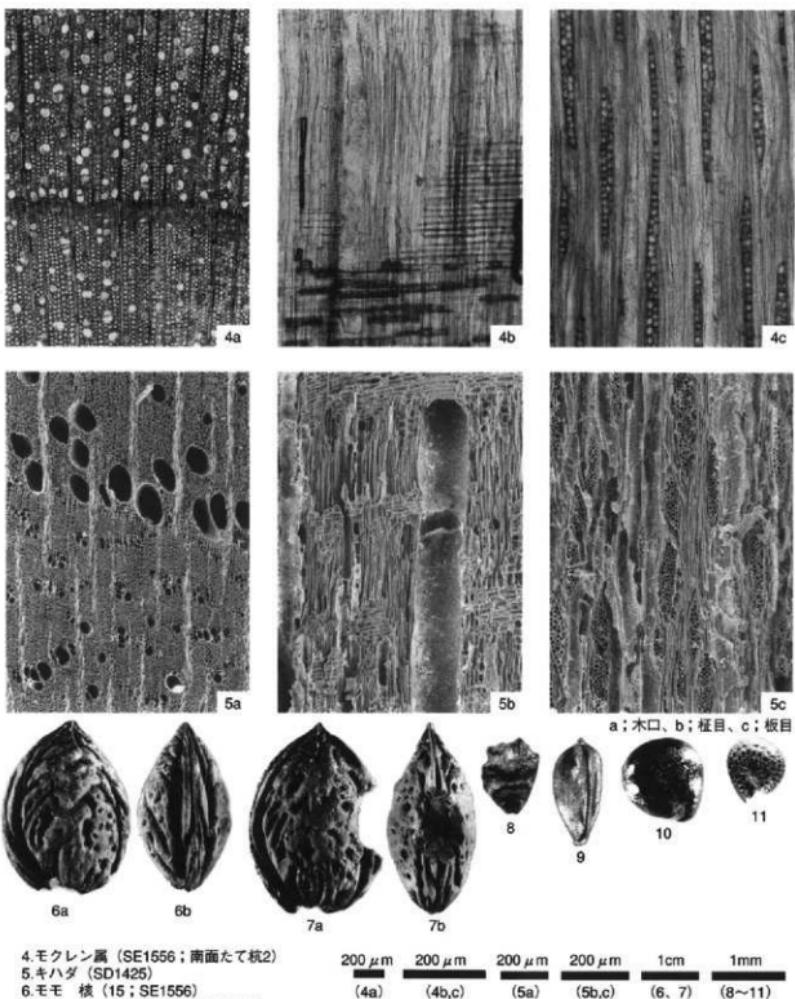
2.ハンノキ属ハシノキ木属 (SP166; RW28)

3.クリ (SE1556; 北面横材下はぞ板)

a: 木口、b: 矢目、c: 板目

— 200  $\mu\text{m}$  : 2・3a  
 — 200  $\mu\text{m}$  : 1a・2・3b,c  
 — 100  $\mu\text{m}$  : 1b,c

第124図 木材・炭化物 (1)



第125図 木材・炭化物(2)

## 5 鶴の木館跡出土木製品の樹種調査

(株) 吉田生物研究所

### (1) 試 料

試料は山形県鶴の木館跡から出土した容器 1 点 (No.1 RW500)、木材 1 点 (No.2)、用途不明品 1 点 (No.3) の合計 3 点である。

### (2) 観 察 方 法

剃刀で木口 (横断面)、柾目 (放射断面)、板目 (接線断面) の各切片を探取し、永久プレパラートを作成した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

### (3) 結 果

樹種同定結果 (針葉樹 1 種、広葉樹 2 種) の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖 樹種の 固定学的特徴を記す。(第 126・127 図)

#### カツラ科カツラ属カツラ ?

(遺物 No.1 (底板)) (写真 No.1 (底板))

散孔材である。木口と板目は不鮮明であるが、木口ではやや小さい薄壁で角張っている道管 ( $\sim 100 \mu m$ ) がおおむね単独または 2 ~ 3 個不規則に接合して平等に分布する。

道管の占有面積は大きい。放射柔組織は不顯著。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段穿孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。道管内には充填物 (チロース) がある。板目では放射組織は方形ないし直立細胞からなる単列のものと方形ないし直立細胞の単列部と平伏細胞の 2 列部からなるものがある。高さ  $\sim 900 \mu m$  からなる。

ヒノキ科クロベ属クロベ (thuja standishii Carr.)

(遺物 No.2 (側板) 2) (写真 No.2 (側板) 2)

木口では仮道管を持ち、早材から遅材への移行はやや急であった。樹脂細胞は遅材部に偏って接線状に存在する。柾目では放射組織の分野壁孔はスギ型で 1 分野に 2 ~ 6 個ある。放射柔組織の水平壁が接線壁と接する際に水平壁は山形に厚くなり、接線壁との間に溝のような構造 (インデンチャー) ができる、よく発達しているのが認められる。板目では放射組織はすべて單列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。クロベは本州・四国に分布する。

カバノキ科カバノキ属 (betula sp.) (遺物 No.3) (写真 No.3)

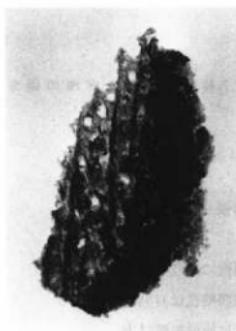
散孔材である。木口ではやや大きい道管 ( $\sim 200 \mu m$ ) が単独ないし数個放射方向に複合して分布している。軸方向柔組織は接線状が顯著である。柾目では道管は階段穿孔を有する。放射組織は平伏細胞からなる同性と直立、平伏細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は小型である。板目では放射組織は 1 ~ 4 細胞列、高さ  $\sim 550 \mu m$  であった。カバノキ属はシランカバ、マカンバ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

## 参考文献

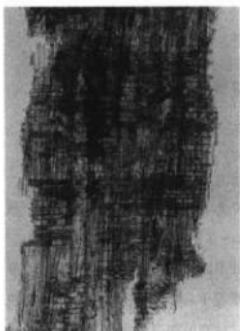
- 島地 謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品叢観」雄山閣出版  
 島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説 木材組織」地球社  
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~V」 京都大学木質科学研究所  
 北村四郎・村田 謙 1979 「原色日本植物図鑑 木 本編 I II」 保育社  
 深澤和三 1997 「樹体の解剖」海青社  
 奈良国立文化財研究所 1985 「木器集成図鑑 近畿古代篇」史料第 27 号  
 奈良国立文化財研究所 1993 「木器集成図鑑 近畿原始篇」史料第 36 号

## 仕様顕微鏡

Nikon  
 Microflex UFX-DX Type 115



木口 × 40

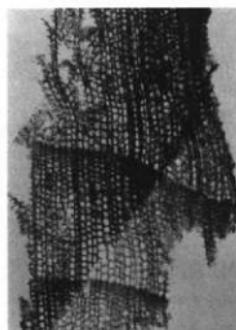


極目 × 40



板目 × 40

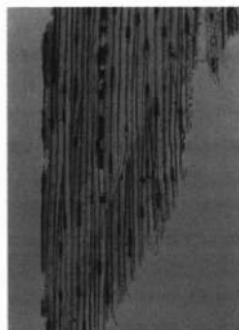
No.1 (底板) カツラ科カツラ属カツラ ?



木口 × 40



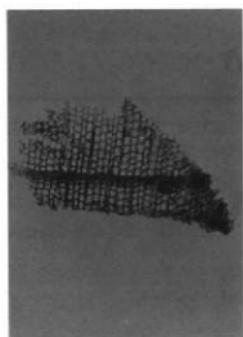
極目 × 100



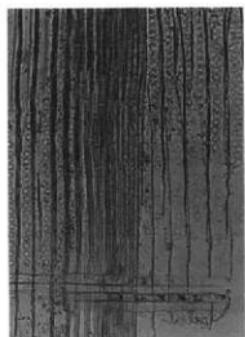
板目 × 40

No.1 (側板) ヒノキ科クロベ属クロベ

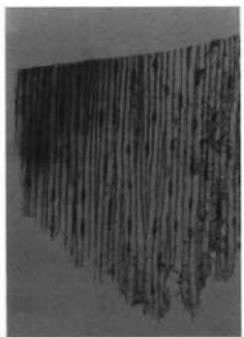
第 126 図 木材顕微鏡写真 (1)



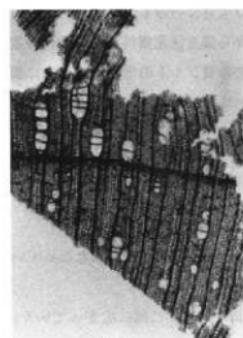
No.2 ヒノキ科クロベ属クロベ  
木口×40



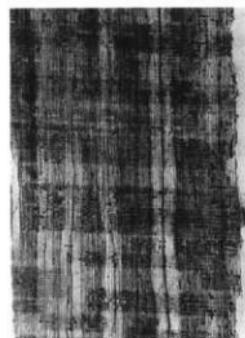
板目×100



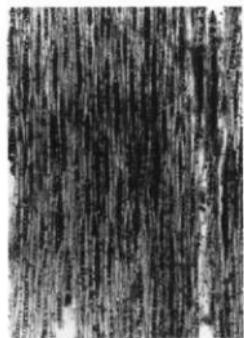
板目×40



No.3 カバノキ科カバノキ属  
木口×40



板目×40



板目×40

第 127 図 木材顯微鏡写真 (2)

## V まとめ

## 1 古墳時代の遺構と遺物について

古墳時代とした遺物には土師器がある。これらは溝跡の堆積土中や遺物包含層から出土した土器破片が中心で、まとまって出土し接合したものもある。ただ遺存状態が悪く形態や調整技法など判然としないものが多い。

## (1) 古墳時代の遺物分布

**中央区北側** 古墳時代の土器は中央区北側一帯から散在する状況で出土し、22・23-8~10グリッド付近から比較的集中して出土した。また、古代の遺構に切られている溝跡 S D 929・117・690・319からの出土がみられた。これらの溝跡は調査区の北側から伸びてきているものであり、土器も埋没しており流されて埋没したような状況である。このことから調査区北側外に古墳時代の遺構が存在する可能性が高い。これら古墳時代の遺物は茶褐色の砂質シルトの堆積土とともに調査区北側に分布していることから、一時的な水成堆積により形成されたとみることもできる。

## (2) 古墳時代の土器について

## 土 師 器

壺、高壺、輪、壙、壺、壺が認められる。

**輪・壺** 口縁が直立気味に立ち上がるものとやや外反するものがあり、底部は丸底となっている。

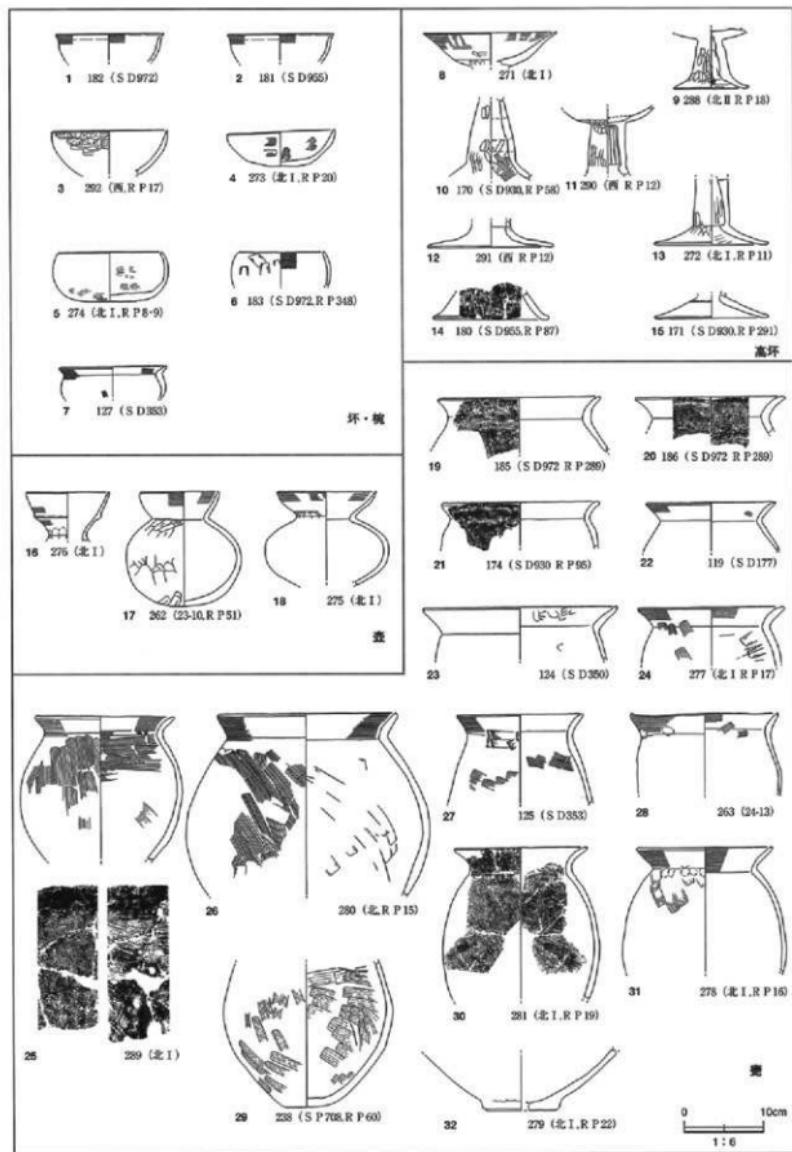
**高壺** 脚部が中空で円柱状の外形をなす。脚の裾部は緩い屈折から自然に端に広がっていく。壺部は体部が直線的に広がるものと輪状になるものがあり、中には体部中ほどに稜を持つもののがみられる。

**壙** 薄手で頸部の縮りが浅く、口縁はやや外反しながら直立する。体部は球形で丸底になる。

**壺・壺** 完形になるものはないが部分的に復元されたものや破片資料をみると、器高30cm程度の中型のもので、球形の体部に口縁はやや「く」字状に外反し、体部はハケ目調整やナデ調整が施されている。

当地域における土師器編年は塙釜式→南小泉Ⅱ式→引田式→佐平林式→舞台式→栗園式との共通理解の上、各研究者により様々な細分業や地域性が指摘されている。本遺跡出土の古墳時代の土師器を概観するに大枠として東北南半における南小泉Ⅱ式に相当する一群の内容を持つ古墳時代中期のものとみられ、5世紀中後葉の所産とみられる。器種構成や形態的な特徴から南小泉式の基本的な特徴から欠落するものもあるが中空で屈折脚の高壺、壙、壺がこの時期のものと思われ、置賜盆地では沢田遺跡6号住居跡で同時期と思われる土器群のセットが出土している。

この他に古墳時代の須恵器と思われるものが2点出土している。罐の体部片と蓋の破片であり、陶邑産の可能性がある。



第128図 古墳時代の出土遺物（土師器）

## 2 平安時代の遺構と遺物について

### (1) 平安時代の遺物について

平安時代とした遺物には土師器・須恵器などがある。これらは遺構内堆積土中や遺物包含層中から出土した破片資料が中心であり、年代的な指標となる一括資料も含まれている。そのため、ここでは遺構出土の一括資料を対象に器形や製作技法を概観するとともに、その年代的な位置についても触れてみる。

#### ① 器種分類とその特徴

##### 須 恵 器 (第129図)

壺・瓶頸・壺・壺が認められる。

**壺** 須恵器の壺は SD 168・633・1046・1175など溝跡を主に大小様々な破片資料が総数2266点出土した。器形が把握できたものが多く、その形態から体部が直線的に外傾するもの、やや丸みをもって立ち上がるものの、底部付近で丸みをもち、直線的に外傾していくものなどがある。底径/口径比は0.4～0.5程。器高/口径比は0.25～0.32になる。底部は回転糸きりによるものが主であり、ヘラ切りのものは少ない。3点ほどであるが底部に「乙」字の墨書きが認められた。

**高台付壺** 体部の形態としては壺頸に類似しているが、一部体部中位に後をもつものや皿状のも見られる。高台部はすべて貼り付け高台であり、脚部形態から裾部の屈曲が強く「L」字状となるもの、「ハ」字状に外傾するもの、垂直気味に立ち上がるものに分けられ、また台の高いものや低いもの、台の厚さにも変化がみられる。底部は糸切りのものとヘラ切りのものがあるが、大半は、台部分の成形時のナデによって消されている。

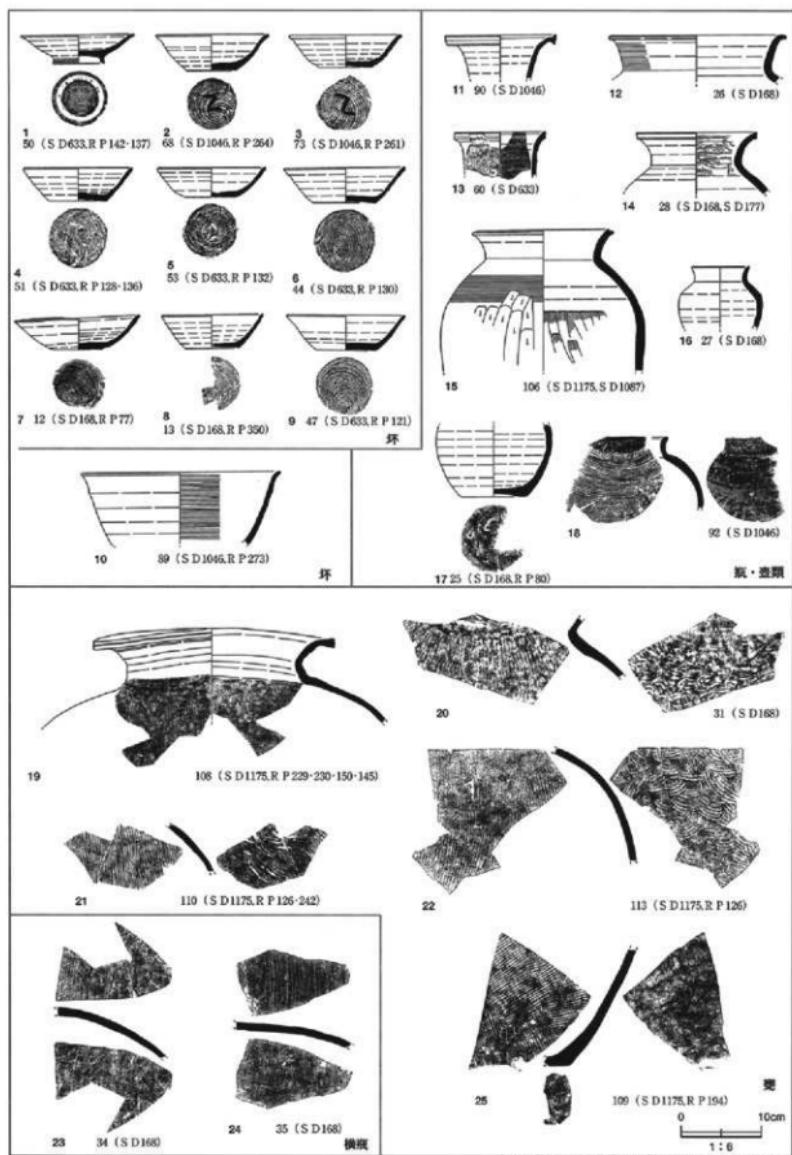
**瓶・壺** すべて破片資料であり、口頭部や副頭部・底部などの部位破片である。器形としては長頸瓶や短頸瓶・横瓶の破片資料である。長頸瓶は口縁が緩やかに広がるもので胴部形状は最大径が副頭部上半(肩側)にある胴長のものである。頭部と体部の2段接合による成形とみられ、内面から接合の痕跡を伺えるものがある。また頭部下にリング状の沈線がめぐるものもある。瓶頸の高台付部は、すべて貼り付け高台で、脚部形態は逆台形となっている。壺類は短頸壺(18)や小壺など(16)がある。

**甕** 破片資料が多く、器形等判然としないが289点出土している。甕は口縁部が「く」字状に屈曲するもの、そして波状沈線文がめぐるものがある。体部調整では、表面タキ調整のもの、格子目状になったもの、裏面で同心円状・平行・弧状の当具痕をもつものがある。SD1175溝跡から比較的甕の破片資料が多く出土したが、他の遺構からは散発的な出土であった。

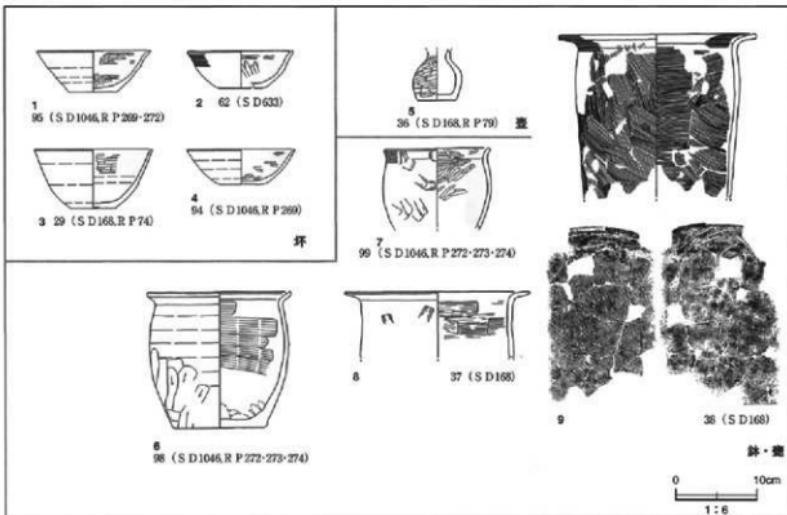
##### 土 筋 器 (第130図)

壺・高台付壺・甕・鉢が認められる。

**壺** 体部形態から直線的に外傾するもの、及び内湾するものに2分することが可能である。内面の黒色処理が認められるもの(1、2、3、4)もある。成形はすべてロクロ成形であり、製作技法については部分的な調整技法について相違が認められる。底部は回転糸きり無調整、体部下端の再調整は回転ケズリ、手持ちケズリ、再調整なしの3種に分けることができる。



第129図 平安時代の出土遺物1（須恵器）



第130図 平安時代の出土遺物2（土師器）

**高台付壺** 高台部分の遺存がほとんどで壺口縁部まで遺存するものは少ない。そのため全体の器形がわかるものは少ない。遺構内ではSD168溝跡とSD1046溝跡からの出土が多い。器形が把握できたものをみると体部が碗状になる。高台部はすべて貼り付け高台である。

**壺** 小形の表面を黒色処理した壺がある。口縁部がやや広がる形態で底部は平坦である。器体表面は丁寧にミガキが施されている。

**鉢・甕** 本遺跡から出土した甕は、ロクロ成形によるものと輪積み整形によるものがあり、溝跡を主に出土している。口頭部や胴部の破片資料がほとんどで全体の器形を把握できた資料はないが、器形的には口縁が「く」字状に屈曲し胴部が膨らむものと長胴ものがあり、これに類する小型甕がある。胴部外面に施される調整技法はロクロナデのほかに、ハケメ・カキメ、タクキ、継ぎのケズリがある。底部資料はすべて平底のものであり、回転糸切り痕や木葉痕跡が残るものがある。

## ② 年代の検討

以上、壺・甕類を中心とした特徴から分類を行い、器種ごとの特徴を概観したが本遺跡における土器群の編年的な位置づけを考えてみる。

まず、土器類がまとまって出土した溝跡（SD 168・633・1046・1175）は南北に離れているもののつながっていた形跡があり、建物の配置や切り合いからも短期間に廃棄されて埋没していくものと捉えられる。溝跡間での接合関係が認められることや、それぞれの溝跡から出土した土器類も形態や技法上の違いは少なく、ほぼ同時期に捨てられたものと捉えている。

これらの溝跡から出土した土器群を一括して検討してみる。

## —括土器群

置賜盆地では8世紀から10世紀に至るまで連続と須恵器生産が行われており、味噌根窯跡、高安窯跡、木和田窯跡、梨郷平野窯跡、壇山窯跡、大神窯跡など盆地周縁の丘陵や山腹地で窯跡の幾つかの調査事例がある。また、大浦遺跡や古志田東遺跡・道伝遺跡・太夫小屋遺跡など官衙関連遺跡や沢田遺跡・徳原遺跡など集落遺跡の調査成果がある。これらの調査成果をもとに、阿部明彦・高桑弘美(1999)は置賜地域での窯跡や集落遺跡出土の奈良・平安時代の土器変遷について整理分析しており、土器群の比較を行ううえで、この業績を参考にすることができる。阿部・高桑によれば須恵器の坏類に関して言えば、8世紀から10世紀の変遷過程の傾向として、底部切り離しの変化(糸切り→ヘラ切り)、法量的に底径の縮小化と形態の小型化傾向などがあげられ、これに器種構成や施釉陶器との対比から細分が進められた。本遺跡の溝跡群からまとめて出土した土器類は、その特徴から阿部明彦・高桑弘美編年(阿部・高桑 1999)の9世紀中葉(9世紀第3四半期を中心とする時期)に相当する一群、また置賜盆地内の一括資料をもとにⅣ期に区分しその変遷を明らかにした手塚 孝氏の編年(手塚1999)に照らせば、Ⅳ期の土器群には相当するものと考えられ、これらの土器群の実年代については9世紀中頃を中心とする年代と理解される。南陽市域においては昭和40年に山形大学によって梨郷平野窯跡の発掘調査が実施されている。梨郷平野窯跡出土の須恵器は底部ヘラ切りで底径がやや大きいものが主であることから9世紀前半に位置づけられおり、本遺跡の土器群の前段階に位置するようである。

土師器坏類についてみると、内黒の土師器坏は須恵器坏とはほぼ同じ形態で体部下端にヘラ削りによる再調整が施されるものが目立っている。形態的にも碗のように丸みをもって外傾するものが主となるようである。僅かであるが從来「あかやき土器」「須恵系土器」と呼称されてきた土器が認められている。また、煮沸具である土師器壳からみれば、本遺跡では丸底の形態は認められず、すべて平底という点で「陸奥型甕」に近いが、一部須恵器製作に起因する叩き出し技法からは、新潟や北陸方面の特色もあり、折衷的なものもあるようである。

## (2) 平安時代の遺構について

平安時代に属する遺構は掘立柱建物跡11棟の他、土壤、井戸跡、溝跡等を調査した。溝跡は南北方向に長く延び、土壤はいずれも小型で調査区全域に散在していた。一方建物跡は、中央部分に規則的に配置されており、これらの建物跡それぞれに特徴的な構造を有する。建物跡特徴を柱配置から明確にし、集落の構造や性格について若干の検討を行う。

## ① 掘立柱建物跡について(第131図)

調査区全体を概観して、平安時代の建物群は大きく2つに分けることができる。一つはSB168溝跡を中心としたSB224・980建物域で、二つ目はSB1470を中心とした南側の建物域である。この2つのエリアは掘立柱建物跡のみで竪穴式住居跡が一軒も検出されていない特徴がある。主な建物跡について柱配置や構造について概観する。

A類：SB940・1480・1540掘立柱建物跡 2間×2間の建物跡である。中柱を持つ高床倉庫と考えられる。SB1480とSB1540ともに柱間尺が、2.2mの建物規模となる。2間×3間の建

## 9世紀中頃

物に近接していることから2間×3間の建物と2間×2間の建物はセット関係を有する可能性がある。或いは母屋と倉庫といったことも考えられてくる。

**B類：SB224・1470・1505・1515掘立柱建物跡** 2間×3間の建物跡である。桁間はそれぞれ平均でSB224が1.93m、SB1470が1.83m、SB1505が1.93m、SB1515が1.86mを測り、梁間は平均でSB224が2.4m、SB1470が2.15m、SB1505が2.5m、SB1515が2.4mを測る。梁間の違いがあるが桁間はほぼ共通した計測値になっている。

柱掘り方はいずれも平面形は隅丸方形を基本とし、規模や深さともに類似している。柱痕の径も16~22cmの範囲におさまる。面積はSB224が $27.84\text{m}^2$ 、SB1470が $23.2\text{m}^2$ 、SB1505が $29.0\text{m}^2$ 、SB1515が $26.88\text{m}^2$ となる。置賜盆地では、西町田下遺跡、植木場一遺跡、沢田遺跡、上浅川遺跡、大浦B遺跡、中落合遺跡などにおいて2間×3間の掘立柱建物跡を検出している。

**C類：SB980掘立柱建物跡** 3間×6間、平面積 $59.9\text{m}^2$ となる比較的大型の建物跡である。北側梁行きが3間で柱間が1.8mで均等となるのに対して南側梁行きは3間となるものの、中央の門口が広く、入口の可能性がある。南側に比して北側の2つの柱穴は規模と掘り込みが若干浅い。SB980建物跡と類似する建物跡として山形県では川西町道伝跡SB9建物跡・米沢市西

**大型の建物** 可田下SB1233建物跡で認められる。置賜盆地の隣の会津盆地では会津若松市の屋敷遺跡SB9建物や会津塩川町麻生館SB1建物跡があげられる。梁間が非対称となる建物跡については荒木（荒木2000）によって雪壓に対応した入口施設の設置との指摘があり、会津地方に特徴的な構造とされた。また、横須賀倫達（2002）は非対称の柱穴配置は入り口空間よりも建物構築にあたっての梁材の補強といった機能も想定できるとし、雪圧を起因としたながらも構造的な捉え方に違いを持たせた。端の木館SB980建物跡は類似点があるものの中柱がみられる点、さらに構造的な差があるようである。

## ② 集落の構造

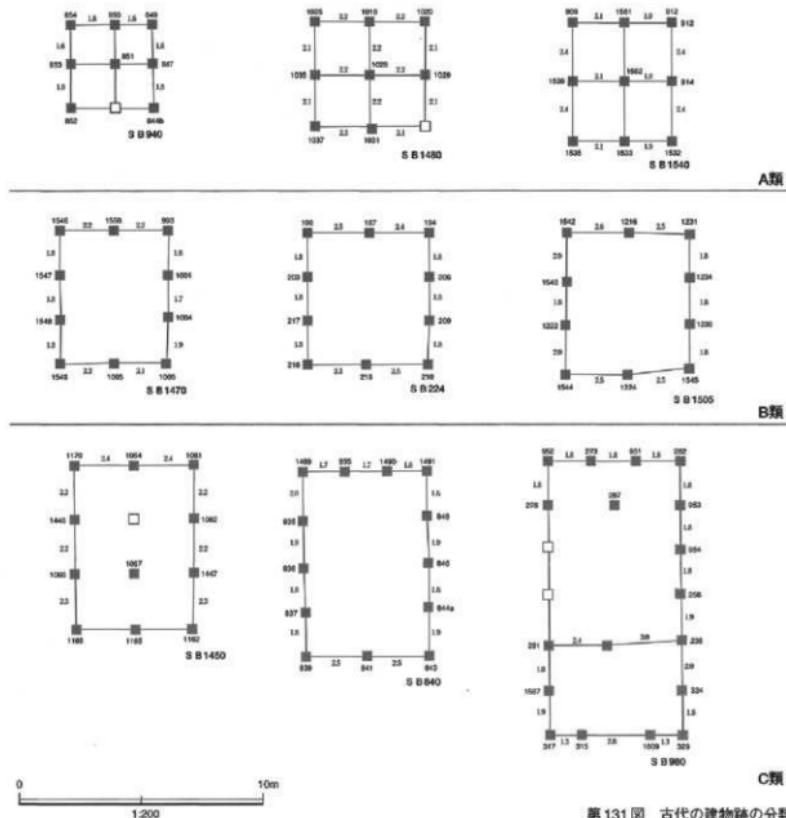
調査の結果、遺構や遺物の分布から集落の範囲は調査区の北側と南側に広がっていくことが予想される。確かに南北に配置された溝跡（SD168・633・1046・1175）がさらに南北に伸びていることを考慮すると建物群はさらに南北に連なっていると考えられよう。

**区画したエリア** 遺構全体の分布からは南北の溝によって「区画したエリア」を形成しているように見え、特にSD168から分岐した溝跡が、南進し、3つのブロックを形成しており、それぞれの溝間の距離はSD1175とSD1046の間では約15m、SD1046とSD633との間で約15mと同間隔になっている。SD633からさらに東に約35mのところにSD741が南北に伸びており、調査した区域は建物の配置を考慮に入れて、計画的に溝を通して区画したエリアとも想定される。

調査区北側にあるSD168は溝の向きをやや西よりに取り、幅や深さもある。北側に位置する建物跡SB224とSB980はいずれも棟軸を同じにし、溝を挟んで建てられ、南側の建物群とは棟軸を異にする点、特徴的である。北側建物群と南側の建物群とは30mほど離れており、異なる機能を持った建物とも考えられよう。

さらに注目されることとして、区画するように設けられている溝跡から、いずれも大量に土器類や礫が出土していることがあげられる。分布図（第51~54図）からもわかるように、いずれも溝底からまとめて須恵器や土師器が出土し、完形のものも多い。さらに建物跡のすぐ

脇に位置する部分のみの出土から、建物跡に関連して不用になったものが捨てられたとする可能性が高い。併出した礫類は加熱を受けたものもあり、竈や炉に関わる施設構造物の一部であろうか。SD 1046とSD 1175の二つの溝跡の間では大甕の接合関係があり、同時期に捨てられた土器群との見方が可能である。一方、調査区の東側や西区からは古代の遺物の出土は少なく、遺構の検出もない。東側や西側に集落の外郭施設はなく、西側のSD 1175から東側のSD 741によって区画されたエリアが集落の構成上の範囲と捉えられよう。集落の存続時期については包含層出土の遺物を含め、土器の年代から9世紀中頃には限定されると思われる。調査した建物跡には据え替えや補強・抜き取りの痕跡と捉えられる状況が認められたものの建物間の重複や建て替えではなく、土器の示す時間幅と異同はない。比較的限られた期間に営まれたと見られる。



第131図 古代の建物跡の分類

### ③ 集落の性格

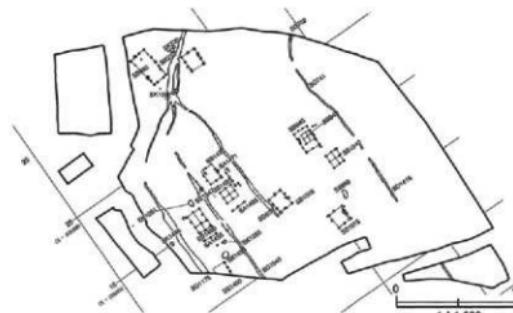
古代の建物跡11棟は軸線方向がほぼ揃い、建物配置にある程度の企画性が想定されることには先にも述べたが、さらに掘立柱建物のみの構成で、竪穴式住居が見られないことなど、一般的な集落と理解することは難しい。これまでの置賜盆地での奈良・平安時代の遺跡の調査からは竪穴式住居を主とするものと掘立柱建物を主とするものが検出されてきている。中でも掘立柱建物群が集中する状況はは公共的色彩が強く、米沢市古志田東遺跡、大浦遺跡、川西町道伝遺跡、太夫小屋遺跡、南陽市中落合遺跡など溝や甌に囲まれた大型建物が配置される事例が見られるところである。当然、木簡や硯などの出土からも官人クラスの生活の痕跡を看取できる。鶴の木館跡で検出した掘立柱建物群は一般の集落との違いが伺え、建物規模や出土遺物からは政治的な要素が認められ、一般庶民の居住域というよりもなんらかの行政的な施設の可能性がある。

## 行政的施設

このような掘立柱建物群の性格については隣の福島県中通り地域や会津盆地での事例分析が参考になる。菅原祥夫（1998）は柱筋を削除了した掘立柱建物が計画的に配置される様相を捉え、建物群が展開した期間の8世紀後半から9世紀後半は律令体制の変質期とされる時期であり、全国各地で大土地所有が行われ、私出舉と私営田に集約される富豪層の存在が見られる時期に相当するとして、官人も含めた在地有力者の居宅の可能性を示した。荒木隆（2000）は会津地域の古代建物群を検討する中で、平面積45m<sup>2</sup>以上の建物がみられる遺跡については「郷」中の区分けに対応した拠点集落と位置づけている。横須賀倫達（2002）は建物群の変化について9世紀に入り律令制を崩壊へと導いた「富豪浪人層」が力を蓄える反面、官人層は没落していくことを視野に入れ、律令体制下の有力官人の興隆と没落という歴史的な流れが背景にあると指摘している。

## 有力官人と在地有力者

掘立柱建物跡が規則的集中的に配置する状況は建物規模や建物配置から官衙的・官衙類似、官衙関連といった呼称により一般集落との区別を意図する傾向があるが、依然として曖昧で判然としなくオブレートに包まれたような印象はぬぐえない。しかし置賜盆地における平安時代の遺跡の増加は政治的な計画に沿った低湿地等を対象とした開墾開発事業を裏付けるものであ



第132図 平安時代の遺構配置

ろうし、遺跡個々の性格からは事業を進めた有力官人層の存在とともに富的な在地有力者の台頭と律令制の崩壊が見えてくる。

### 3 中世から近世にかけての建物跡について

中世から近世とした遺構は掘立柱建物跡13棟、土壙、井戸跡、溝跡（堀跡）、柱列である。この遺構群は堀跡の外側に広がる建物群で内城館、薦の木館などに問わるもののが含まれると考えられる。まず個々の建物の特徴と性格について整理する。

分類と構造

#### (1) 掘立柱建物跡の分類と構造（第134図）

A類：2間×2間の純柱建物。梁部分に入口様の柱が配置する。

B類：梁が1間或いは2間の外柱建物。

C類：3間以上の純柱建物跡。

D類：2間×4間の建物に桁方向2面に廟がつくもの。

E類：大型で浅い掘り方を持つ建物。

F類：間尺が大きい2間×2間の純柱建物。

**A類：SB 860建物跡** 南北向きの純柱建物で南側梁面に入口部分と思われる柱配置が見られる。桁行き柱間は東部分がやや広くなっている。

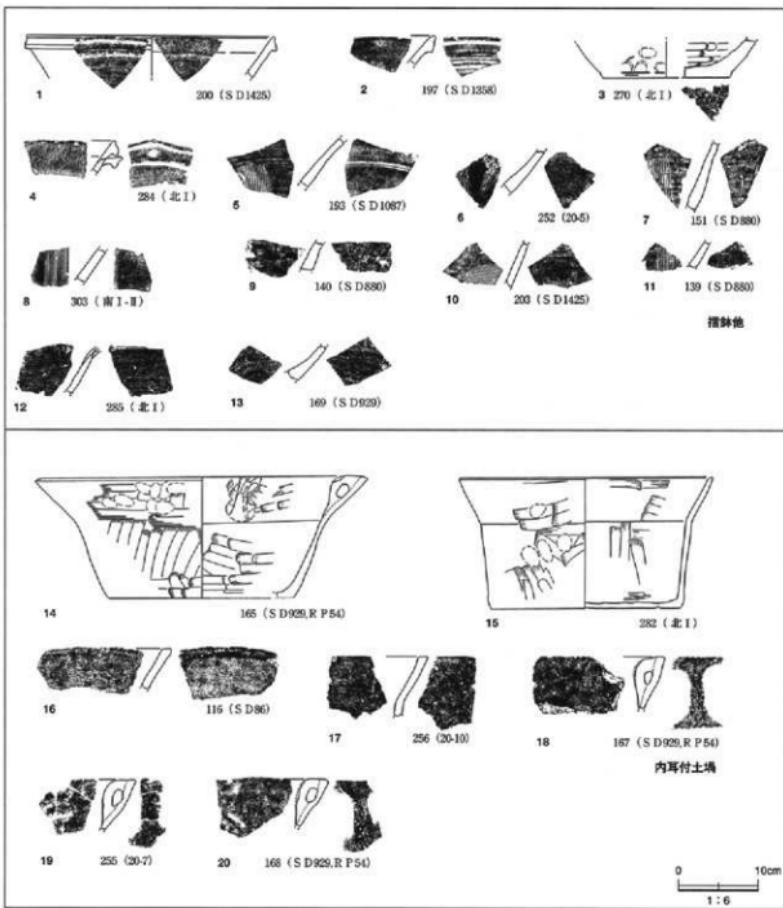
**B類：SB 1488・1602建物跡** 梁に比して桁行きの長い建物で、柱間が2.0mと共通している。梁が狭く特殊な機能を持つ建物とも考えられる。SB 1500建物やSB 1600建物に隣接しており、向きもそろっている。

**C類：SB 960・1620・1621建物跡** 3つの建物は純柱の建物で、桁行はいずれも間尺6.5尺の1.8m前後の計測値を持つ。梁間はSB 1620・1621ともに南側列の間尺が広くなる。3つの建物は、農道を挟んで配置しており、向きや間隔、柱穴の構造からほぼ同時期に營まれた建物と考えられる。SB 1621建物跡は、調査区の東西と北側にさらに広がる可能性があり、建物全体の規模やプランははっきりしていない。

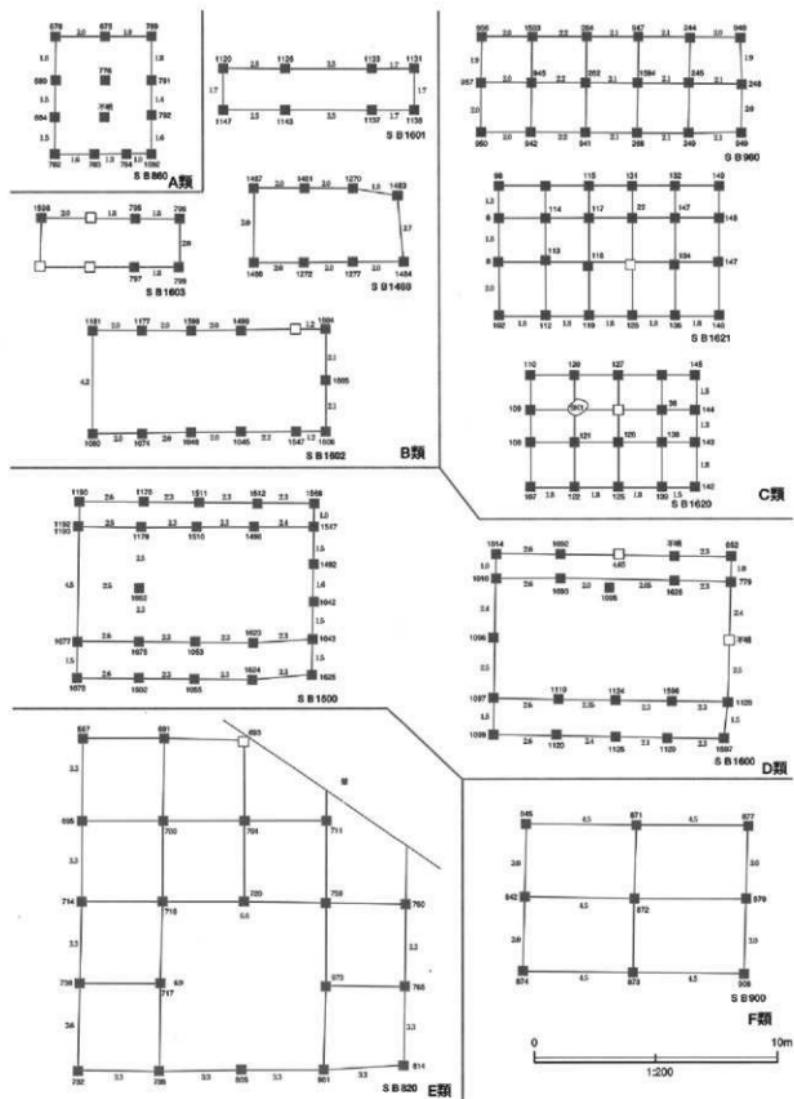
富山や新潟方面的調査成果では、純柱建物は時代が下るにしたがい減少していく。中世中頃には50%となり、近世では10%台まで減少していく。代わりに側柱の比率が上昇し、14～15世紀には同率となり、15～16世紀になると梁間一間の側柱建物に変わると報告されている（高梨清志2004）。山形県内でも12世紀以降、純柱建物跡の検出事例が多く認められてきているものの、時代ごとの様相や傾向など具体的な考察は進んでいない。SB 960やSB 1620建物跡は、柱穴などからの遺物の出土が見られずまた、柱材なども得られていないため年代的な把握は困難であるが、堆積土や切りあいから、近世以前それほど古くは遡らないとみている。

**D類：SB 1500・1600建物跡** 2つの建物は調査区のほぼ中央に位置し、向きや規模が類似する。南北面に廟を持ち、身舎部分で桁行き4間、梁2間になる。桁間はいずれも2.3mを測り、梁も2.4mを測る。SB 1500建物跡については、南面東よりの部分に二重に柱が配置される箇所がみられ、入り口部分の可能性がある。二つの建物は、その規模から母屋と考えられる。また、どちらも建物の南側に井戸を配置していることや、SD 990溝跡が引き込まれ、境目になっているなど、同時に存在し機能していた可能性が高い。SB 1600建物跡の東隣に2間×3

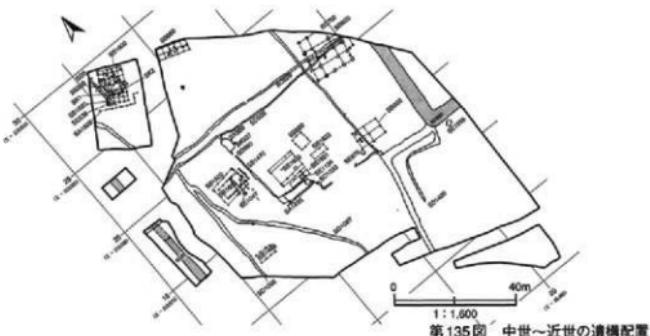
間の建物、1間×3間の建物が配置されるが、同じく構成されるものかどうかは判断できない。E類: SB 820建物跡 径80cmを超える掘り方を持つ柱が4間×4間の縦柱を構成する。柱穴はいずれも明確な柱痕跡を残さず、底面に若干の凹凸を残すのみである。礎石や礎板の建物の可能性もあるが、礎や板材の出土もなく明確でない部分がある。南面と東面に一部張り出しているような箇所がみられ、特殊な建物である。調査区内には同様な建物はない。柱掘り方からの遺物は須恵器や土師器の破片で埋め土に紛れ込んだと見られる。堆積土は、茶褐色の腐植土



第133図 中世～近世の陶器・土器



第134図 中世～近世の建物跡の分類



第135図 中世～近世の遺構配置

で、中世以降の遺構であることは間違いない。SD373やSD929溝跡を切って掘り込んでいることからも中世から近世にかけての遺構と考えられる。

#### 4 鵜の木館と内城館の復元

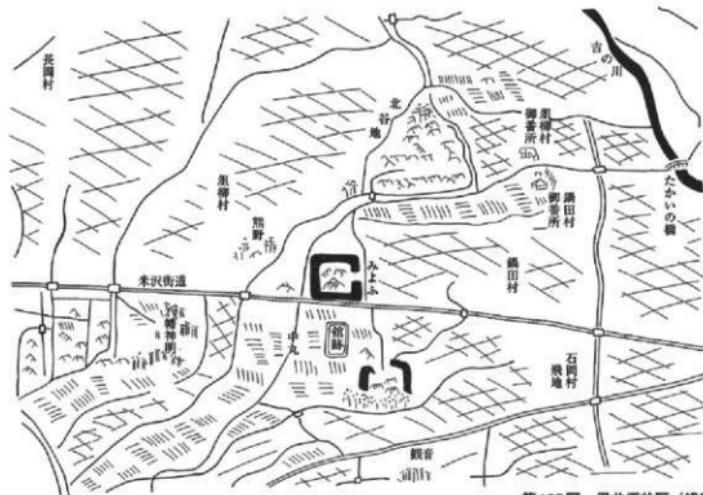
##### (1) 調査成果から

今回の鵜の木館跡の発掘調査から、字「内城」に所在する館跡の掘跡及び、館跡外側に広がる建物跡を検出した。さらに西端には掘跡あるいは水路跡と思われる中世以降の溝跡が見つかった。「中世城館跡分布調査報告書」の鵜の木館は、調査区の東区及び南側の水路により区画された区域にあたり、「中世城館跡分布報告書」内にある内城館は字「中丸」には確認できず、字「内城」に所在し西側の掘跡を部分的に調査した。「中世城館分布調査報告書」での位置の変更が必要である。調査によって内城館の西側に中世以降の建物が配置することが明らかとなり、柱の配置や間取りから数時期にわたる建物群が存在することがとらえられた。2つ館跡の正確な位置と館外の建物などの遺構の様子を捉えることができたのは一つの成果と言える。

##### (2) 絵図・地籍図にみる館跡

**黒井堰絵図** 寛政九年（1797）の「黒井堰御絵図」（米沢市立図書館蔵）に鵜の木館や内城館、熊野館の掘や土塁が描かれており、近世中期の鵜の木周辺の様子を知ることができる（第135図）。絵図を詳しく見ると米沢街道の東側に「みょう」と記された掘に囲まれた屋敷、西側に「館跡」と堀で囲まれた屋敷（鵜の木）がみえる。青く表現された堀に囲まれた屋敷跡の中には3棟ほどの建物が描かれており、置眼盆地に広く分布する屋敷堀を持つ豪族屋敷（田屋）に近い存在と考えられる。一方「館跡」と記された所はすでに施設ではなく廃墟として土塁が残されたところで、近世以前の城館の可能性が高い。「黒井堰絵図」には、このような館跡・屋敷跡が幾つか描かれている。

南陽市役所に保存されている明治22年作成の地籍図でこれらの該当する地域を調べたところ、同じく3箇所の館跡を確認することができた。黒井堰に表れた「館跡」は字「内城」に



第135図 黒井埋絵図（綿田周辺）  
〔米沢市立図書館蔵より作成〕

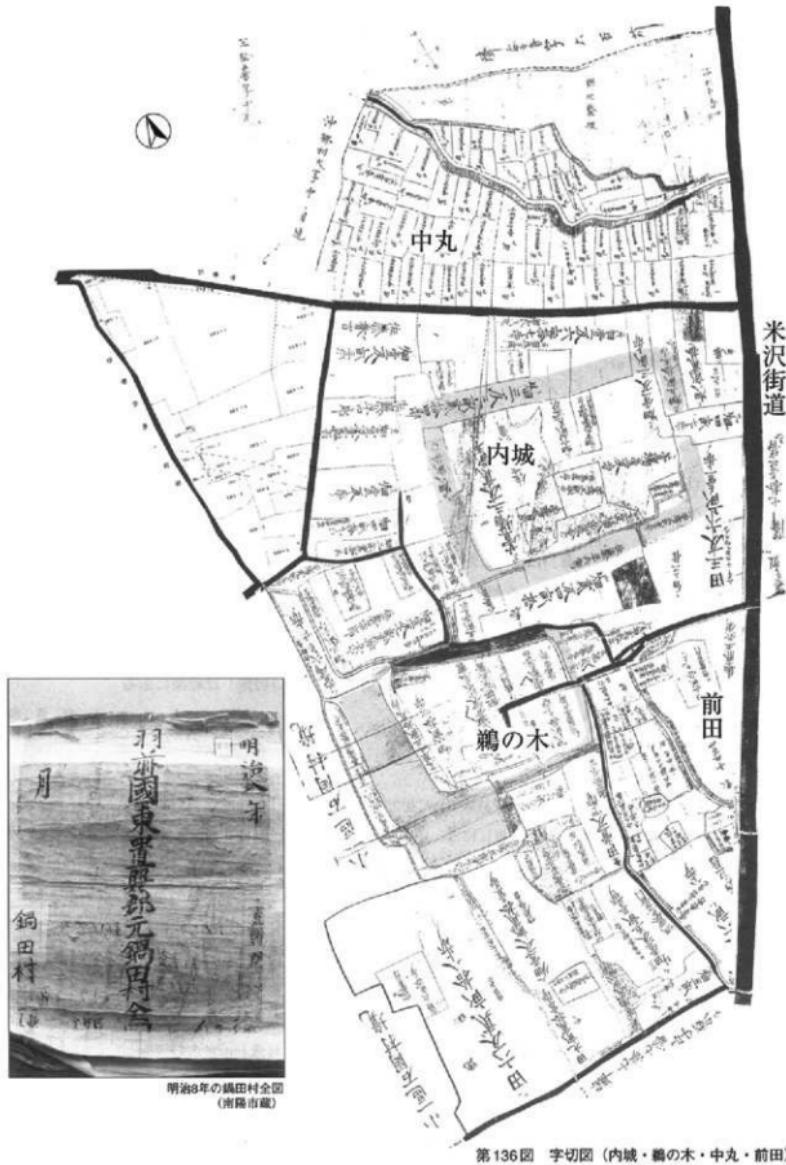
相当し、「みょう」は字「熊之前」に相当した。もう一箇所の堀に囲まれた部分は字「鶴之木」にあたる。地籍図による土地割りからも館の形状が伺え、ほぼ絵図に近い状況であることがわかった。これらの館跡は「中世城館分布調査報告書」にも記載されているが、分布図での位置がずれていると判断される部分もあり、「中世城館分布調査報告書」に載る内城館の実際の位置は字「内城」になり、鶴の木館はより南側の現集落に重なり、「熊の前館」は絵図にある「みょう」に相当すると理解した。

文献資料

### (3) 文献史料から

天文7年（1538）9月の『伊達稙宗御段錢帳』・天文22年（1553）の『伊達晴宗公采地下賜録』や天正13年（1585）の『北条段錢帳』には、中丸郷の記載があり、長岡・祖柳・中の目を含む地域を指していることが伺え、現在も字「中丸」の地名が残されている。前述した文献によれば中丸郷には、きつねさき在家・みよう在家・さい藤在家・ていまつ在家などの在が「中丸」記載されている。また、伊達家臣であった湯目氏文書（東北大學所蔵）には、中野目在家・那智阿弥陀在家・館の内在家・右京在家等が記されている。

天正18年（1590）10月、森田惣右衛門・大齊信造・大庭美濃・矢内藤兵衛の四名が「中丸おとな」に北条中丸の田錢取立について書状を出している。これら四名は伊達政宗から知行地として「中丸」を与えられた人物であろうか。文書に出てくる「おとな百姓」は名主の後進としての家格を持ち、下人や小百姓を使って經營する有力な農民であったと考えられる。在家とよばれる有力農民（おとな百姓）の中には10軒もの名子をかかえる土豪クラスのものもいたようだ、川西町大川の環濠屋敷などは、このような土豪クラスのおとな百姓の館屋敷と考えら



れる。南陽市内に残っている館・屋敷には一部塗跡が残っているものもあり、土豪クラスの有力農民の屋敷跡と捕らえられるものが多く含まれているようである。先に示した寛政年間の「黒井堀絵図」に記載されている方形に堀跡として黒く囲まれた屋敷は、中世末から近世にかけての有力農民（おとな百姓、土豪）の跡として考えられ、「鶴の木館」もその一つとして理解できよう。

「享保の村絵図」や「黒井堀絵図」に館跡と記された内城館は、在家の屋敷跡とは表記の違いがあること、字「中丸」に隣り合っていること、規模が大きいことなど、そして先述した段階帳などの中世末の文書等から天文年間前後に造られた館跡と推測しておく。館主については、天文22年（1594）の「伊達晴宗公采地下賜録」にある伊達家臣栗野弥八郎なる人物が浮かび上がってくるが、湯目七郎左衛門との知行関係もありはっきりとしない。

#### (4) 形状復元

##### ① 鶴の木館

**形状** 堀跡は、現況から北・東・西の3辺が確認される。地籍図や空中写真を参考に、堀の規模・形状の復元を試みた。その範囲を示したもののが第137図である。合わせて第136図に地籍図を掲載した。堀の一部は近年まで生活用水としても利用されていたことが分かる。

鶴の木館の推定復元の結果、北辺は推定長は80m。東辺は軸線がくい違いになりつつ、推定長は75m。南辺の推定長は72m、西辺は湿地帯だったのが明治期にため池に改築され、現在は埋め戻されている。推定長は82mとなる。よって内部の推定面積は約5800m<sup>2</sup>であり、形状は僅かに北が狭くなるがほぼ方形に近い。鶴の木館跡は東側に入り口を有する平地に存在する単郭式方形館であり、南北44間×東西46間となる形状に復元される。

##### ② 内城館

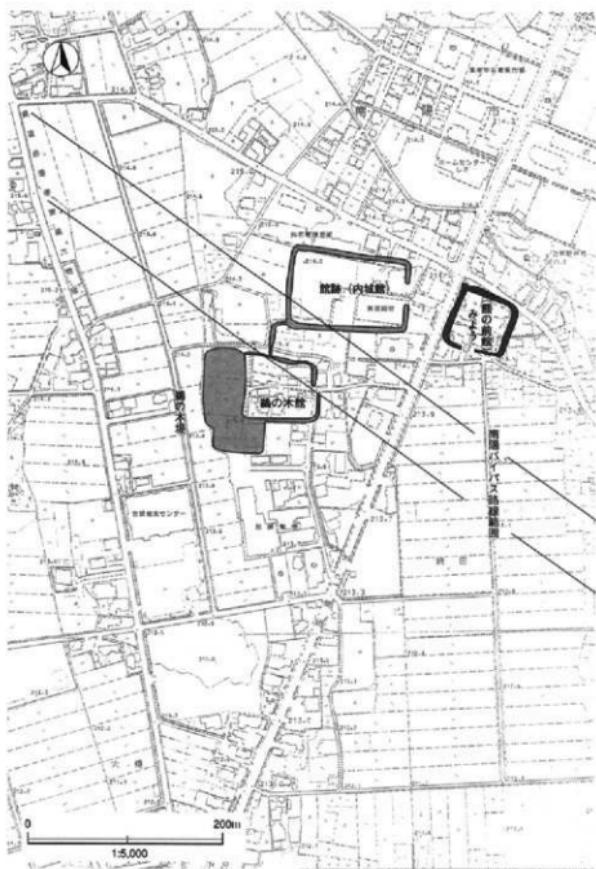
**形状** 堀跡は、現況から南・西の2辺が確認される。地籍図や空中写真を参考に、堀の規模・形状の復元を試みた。堀は埋め戻しされて耕地として整地され、南部分に関しては用水路として利用されている。

以上推定復元の結果、北辺は推定長は125m。東辺は入り口部分を含みながら、推定長は75m。南辺の推定長は125m、西辺は、一部発掘により検出できた。推定長は80mとなる。よって内部の推定面積は約9750m<sup>2</sup>であり、形状は僅かに東側が狭くなるが長方形に近い。内城館は東側に入り口を有する平地に存在する単郭式方形館であり、南北42間×東西70間となる東西に長い方形の形状に復元される。

**年代** S D 880堀跡埋土中から出土した陶磁器片は16点あるが、堆積土下層のF3～4から出土した陶器片は肥前・唐津系陶器と考えられ、16世紀後半の年代が推定される。

土器や文献からの年代観はそれほど矛盾せず、内城館は16世紀～17世紀初頭の幅で捉えられる。

16～17世紀



第137図 字切図による館跡復元図

## 第25表 邑籠等にみる中世後期の村々

▲しらの庄

○子孫井百川より前

●中丸は邑籠の小字名もある。

邑籠 文禄西岡の調査 (1595~1603)				伊達城御宿院藏古帳 天文7年9月3日 (1538)	伊達宗家公私地下附録 天文23年正月17日 (1544) (伊達宗家全集の研究 小林 実生)
村名	村番	戸数	丁目		
小丸	458.59	23	187		
裏	427.70	50	318		
金山	936.66	65	433	(金) かね山	17頁205文▲
宮内	2,763.96	349	1,456		
中山	1,700.25	72	434	中	9頁100文▲
小河原	227.62	22	127		
川原	876.01	161	622		
池原	356.46	22	171	(地原) いけぐら	6頁510文▲
蓬山	1,509.07	56	311		
羽村	531.03	11	46	(羽村) はねつき	8頁925文▲
柴原	2,911.91	128	460		
赤瀬	611.29	43	189		
一色瀬	652.58	36	131		
野瀬	623.27	29	110		
長瀬	403.87	18	95		
船瀬	325.11	13	55	■中丸	12頁500文▲
中瀬	363.38	15	49		
鍋田	516.90	26	78		
大瀬	292.64	26	105	大瀬	2頁705文▲
中瀬	418.94	12	58	(中瀬) ちあひ	9頁735文▲
西瀬	246.00	8	43		
東瀬	485.62	17	87		
南瀬	1,028.65	22	121		
北瀬	300.00	14	46		
瀬	152.33	4	14		
瀬	396.60	25	91		
瀬	753.46	26	112		
長瀬	300.36	9	62	(長瀬) ながせ	4頁175文▲
南根	649.21	29	160		

〔1981】鍋田郷土史をもとに作成〕

## 引用参考文献

- 仲田茂司 1997 「東北北海道における古墳時代中後期土器様式の編年」『日本考古学』第4号 日本考古学協会
- 古川一明・白鳥良一 1991 「2土器の編年 8東北」『古墳時代の研究』6 雄山閣
- 村田晃一 1995 「宮城県における6・7世紀の土器様相」『東國土器研究』第4号 東國土器研究会
- 菅原祥夫 1998 「陸奥国南部における富豪層居宅の倉庫群」「古代の稻倉と村落・郷里の支配」奈良文化財研究所
- 高橋信一<sup>はづか</sup> 1987 「姫館跡」母屋地区遺跡発掘調査報告書23 福島県教育委員会
- 中山雄志 2000 「クロコ土器を中心とする会津地方の土器様相 前・後」『福島考古』40・41 福島考古学会
- 吉田博行・古川利章 1992 「阿賀川地区遺跡発掘調査報告書 北進面遺跡」会津坂下町文化財調査報告書第26集 会津坂下町教育委員会
- 横須賀倫達<sup>よこすか</sup> 2002 「会津坂下道路遺跡発掘調査報告1 麻生館遺跡」福島県文化財調査報告書第404集 福島県教育委員会
- 柴田彌一郎<sup>しばた</sup> 1990 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書V 手取清水遺跡」秋田県文化財調査報告書第190集 秋田県教育委員会
- 吉田博行・古川利章<sup>はづか</sup> 1990 「若宮地区遺跡発掘調査報告書 大江古屋敷遺跡」会津坂下町文化財調査報告書第16集 会津坂下町教育委員会
- 井憲治<sup>いんじ</sup> 2003 「会津坂下道路遺跡発掘調査報告2 荒屋敷遺跡」福島県文化財調査報告書第405集 福島県教育委員会
- 井憲治<sup>いんじ</sup> 2004 「会津坂下道路遺跡発掘調査報告3 荒屋敷遺跡(2次)」福島県文化財調査報告書第415集 福島県教育委員会
- 手塚孝 1998 「大神塙跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第57集 米沢市教育委員会
- 長井政太郎 1973 「新訂 山形県地誌」中央書院
- 佐藤 銀雄<sup>さとう</sup> 1990 「南陽市史 上巻」地質・原始・古代・中世
- 佐藤 銀雄<sup>さとう</sup> 2003 「岡山「置賜の歴史」」郷土出版社
- 木本 元治<sup>きもと</sup> 1991 「東北横断自動車道遺跡発掘調査報告12 屋敷遺跡」福島県文化財調査報告書第262集 福島県教育委員会
- 阿部明彦・高桑弘美 1999 「山形県の古代土器編年」第25回 古代城櫓官衙遺跡検討会資料 古代城櫓官衙遺跡検討会
- 石井 浩幸<sup>いしい</sup> 1999 「山形県の一般聚落の様相」第25回古代城櫓官衙遺跡検討会資料 古代城櫓官衙遺跡検討会
- 佐藤銀雄・佐藤庄一<sup>さとう</sup> 1986 「南陽市史」考古資料編 南陽市
- 1981 「日本地名辞典」角川書店
- 鍋田郷土史編さん委員会 1985 鍋田郷土史
- 1938 「東置賜郡史」東置賜郡教育会

---

## 写真図版

---



調査風景





航空写真（昭和37年 国土地理院撮影）



調査区周辺の略図



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



調査区全景（北から）

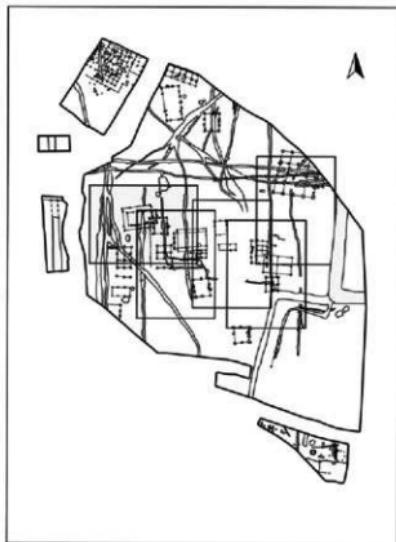


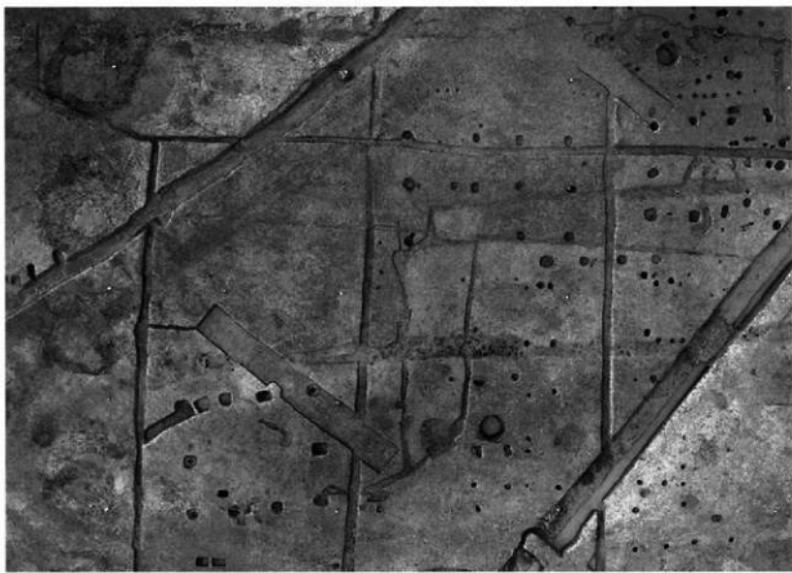
調査区全景（真上から） 上が北



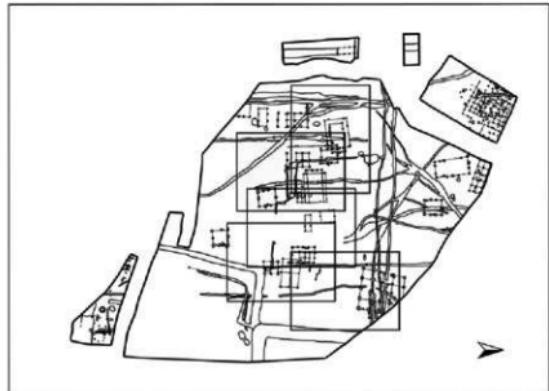


S B 1500 建物跡周辺全景（上が北）

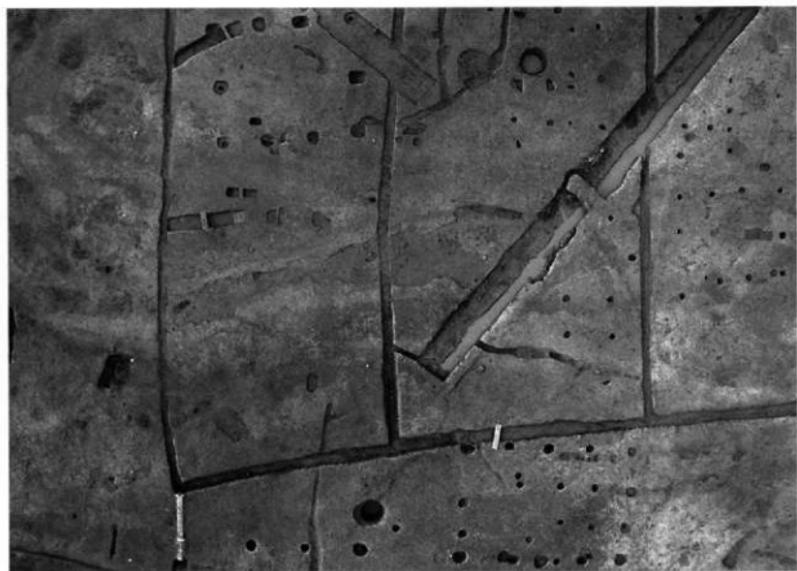




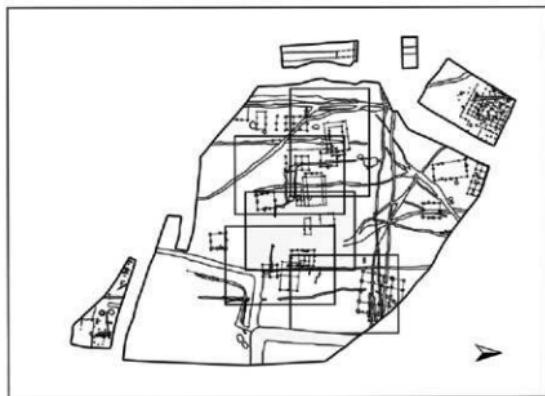
S B 1505 建物跡周辺全景（上が西）



写真図版6



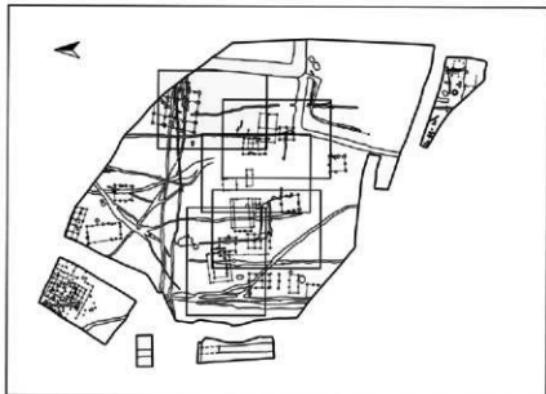
S B 840 建物跡他全景（上が西）



写真図版7



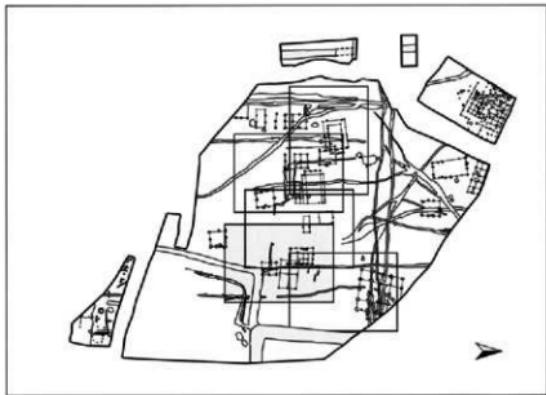
S B 820 建物跡周辺全景（上が東）



写真図版8



S B 1540 建物跡周辺全景（上が西）



写真図版9



S B 244 建物跡（南から）



E B 187 断面



E B 219 断面



E B 198 断面



E B 206 断面



S B 820 建物跡（北から）



E B 814 断面



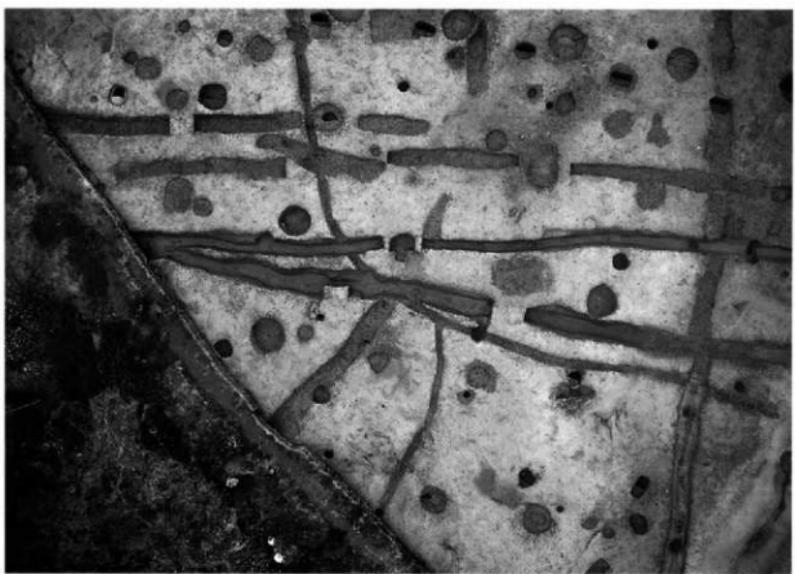
E B 738 断面



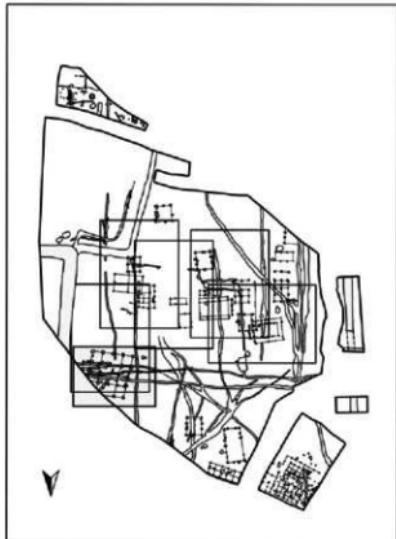
E B 749 完掘



E B 765 断面



S B 820 建物跡（上が南）





S B 840 建物跡（北から）



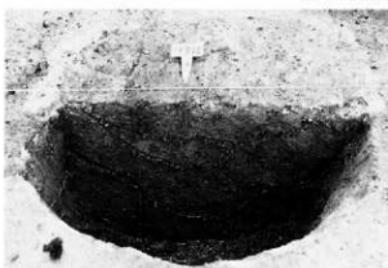
E B 844（左）E B 931（右）



E P 846断面



E B 843断面



E P 836断面



S B 900 建物跡（西から）



S B 860 建物跡（南から）



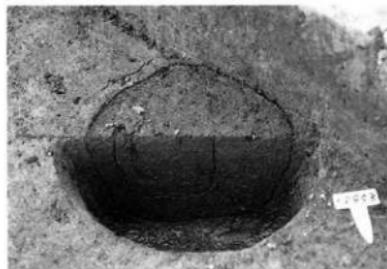
S B 980 建物跡（上が北）



E B 951 断面



E B 291 断面



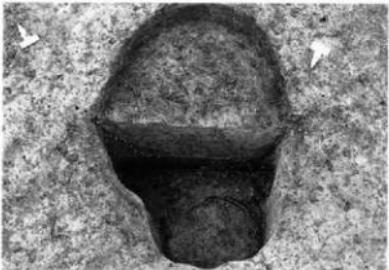
E B 953 断面



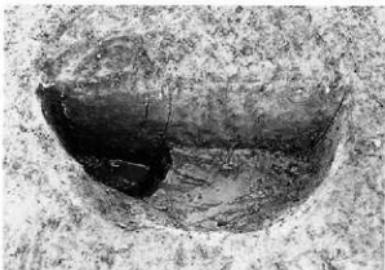
E B 953 断面



S B 1450 跡物跡（北から）



S B 1062 断面



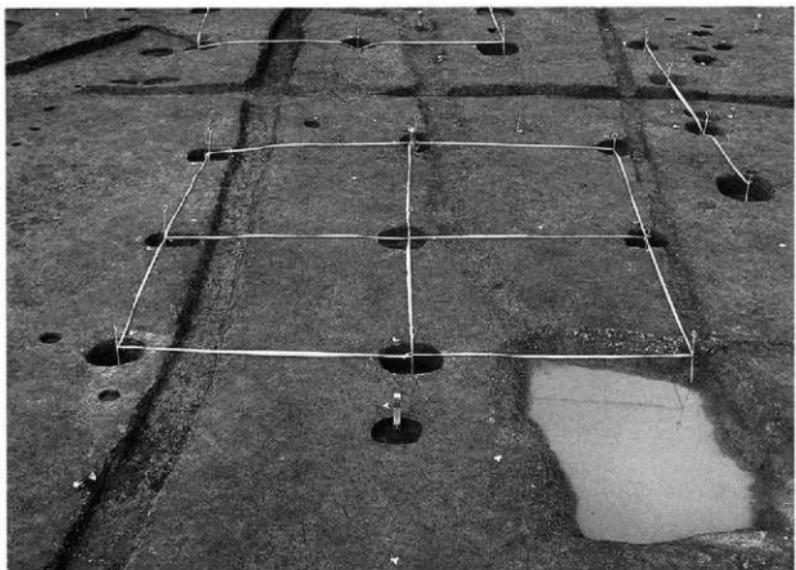
E B 909 断面



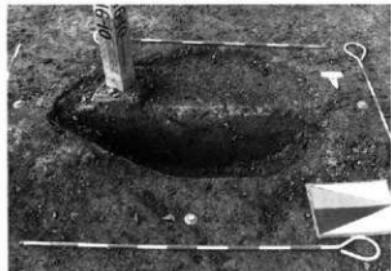
E B 1536 断面



E B 911 断面



S B 1480 建物跡（南から）



E B 1018 断面



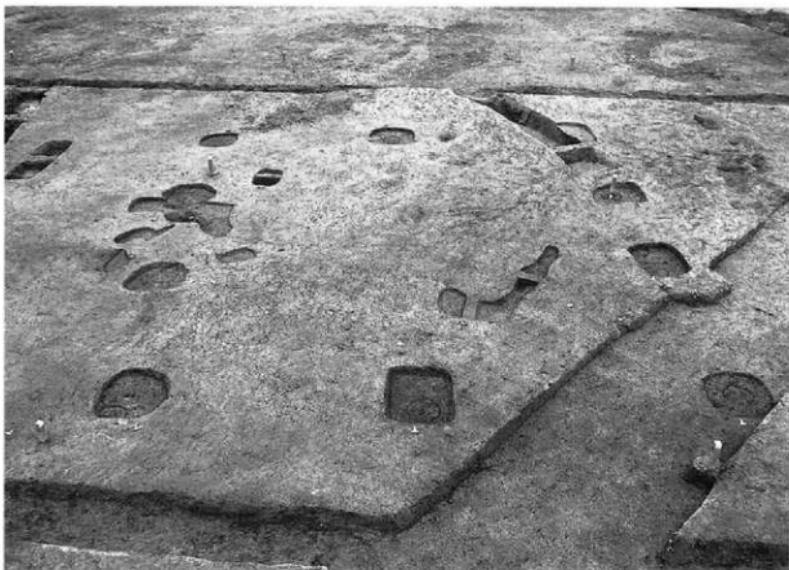
E B 1020 断面



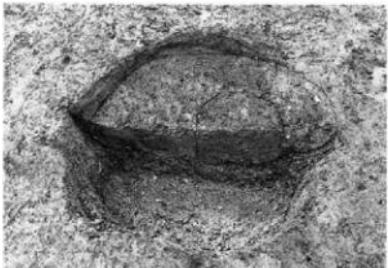
E B 1025 断面



E B 1028 断面



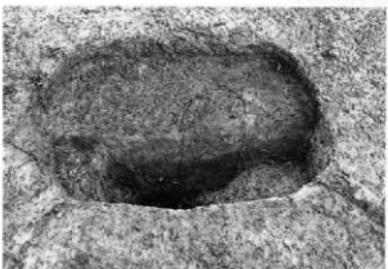
S B 1505 建物跡（北から）



E B 1236 断面



E B 1542 断面



E B 1543 断面



E B 1544 断面



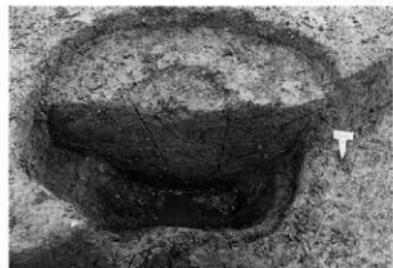
S B 1515 建物跡（南から）



E B 1321 断面



E B 1555 断面



E B 1310 断面



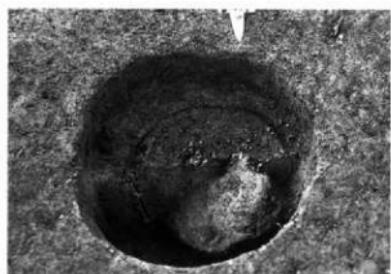
E B 1322・1323 断面



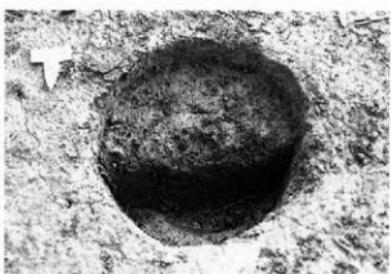
S B 1500 建物跡（南から）



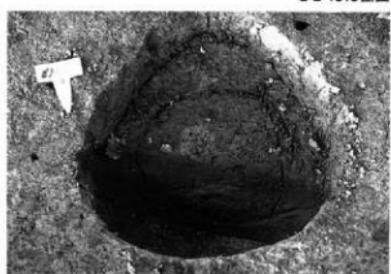
S B 1500 建物跡（北から）



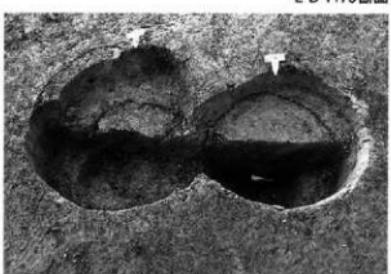
EB 1519断面



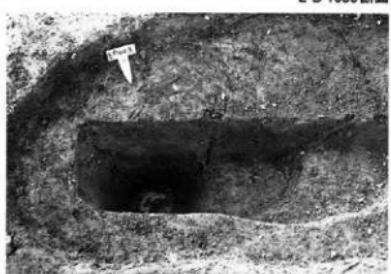
EB 1179断面



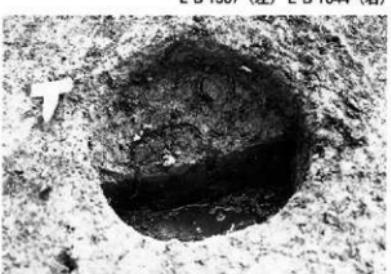
EB 1080断面



EB 1507(左) EB 1044(右)



EB 1043断面



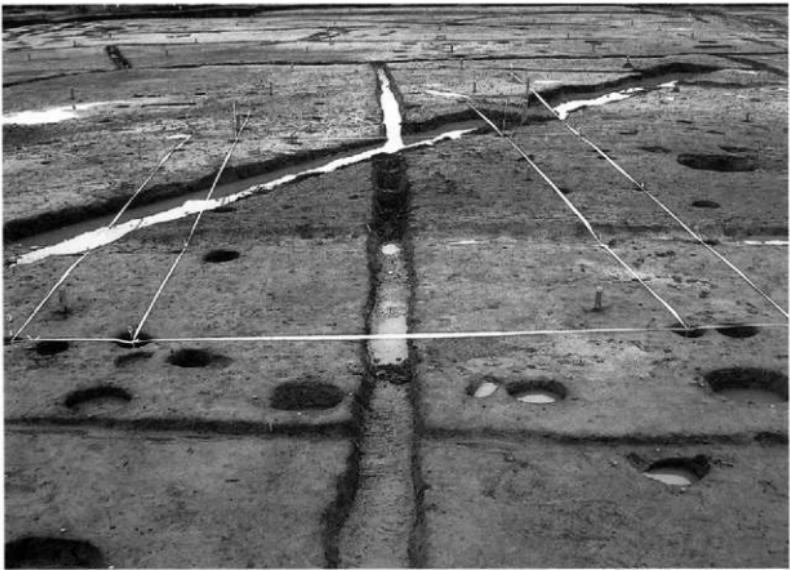
EB 1510断面



EB 1514断面



EB 1075断面



S B 1600 建物跡（西から）



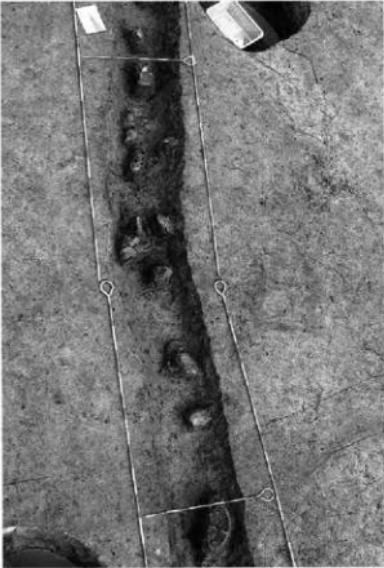
S B 1540 建物跡（北から）



S D 168 溝跡検出状況（南から）



S D 373・929・626 溝跡（西から）



S D 353 溝跡遺物出土状況



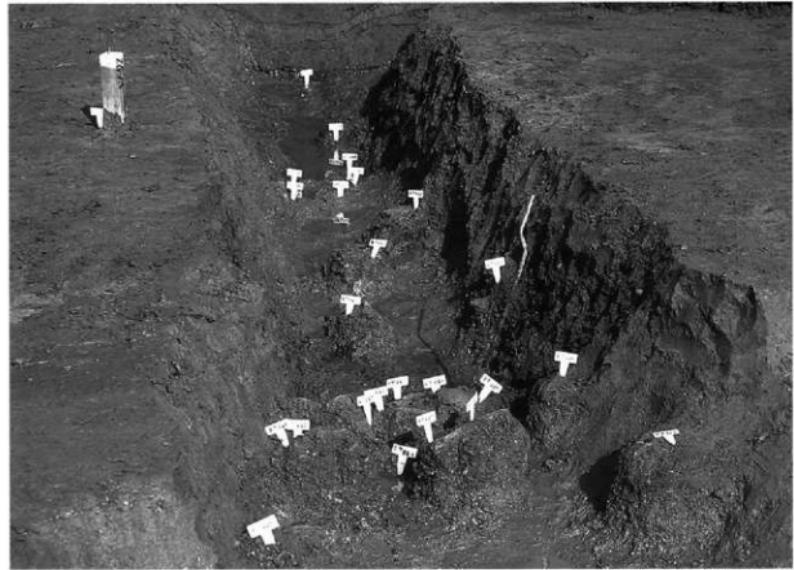
S D 633 溝跡 遺物出土状況（南から）



S D 1046 溝跡 遺物出土状況（南から）



SD 1175 溝路 遺物出土状況（南から）



SD 972 溝路 遺物出土状況（南から）



S D 880 堀跡検出状況（南から）



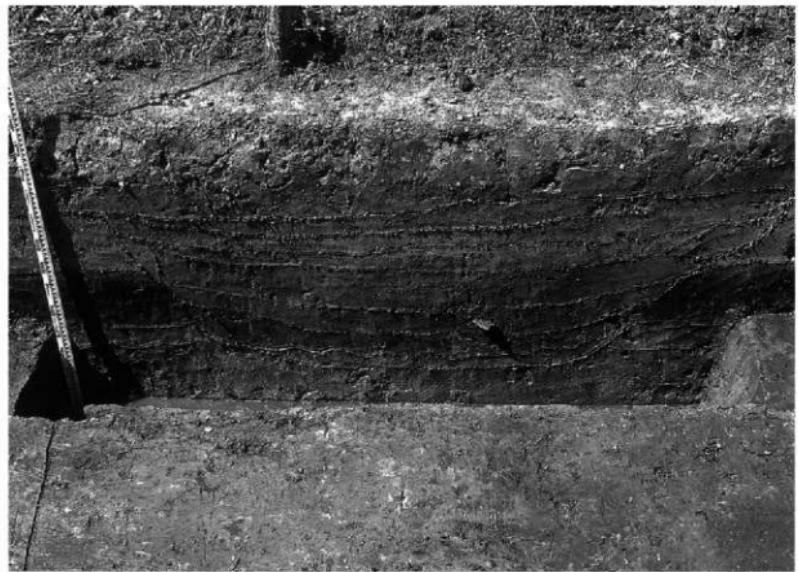
S D 880 堀跡断面（北から）



S D 880 堀跡完掘状況（北から）



S D 86 完掘状況（北から）



S D 86 北壁断面



東側調査区全景（南から）



SD 880 堀跡 東区続き（南から）



調査状況（南から）



調査状況（西から）



西区遺構検出状況（北から）



西区調査状況（南から）



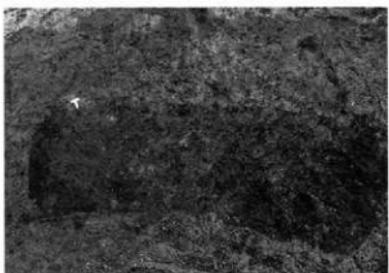
S E 539 棲出状況（南から）



西区調査状況（西から）



西区 S B 300 建物跡（北から）



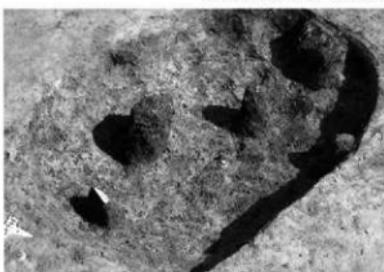
SK 607 检出状況（北から）



SK 607 完掘状況（西から）



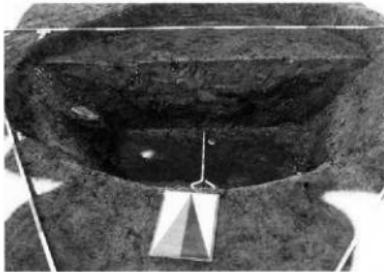
SK 906 断面（西から）



SK 906 检出状況（西から）



SX 937 + 959 完掘状況（北から）



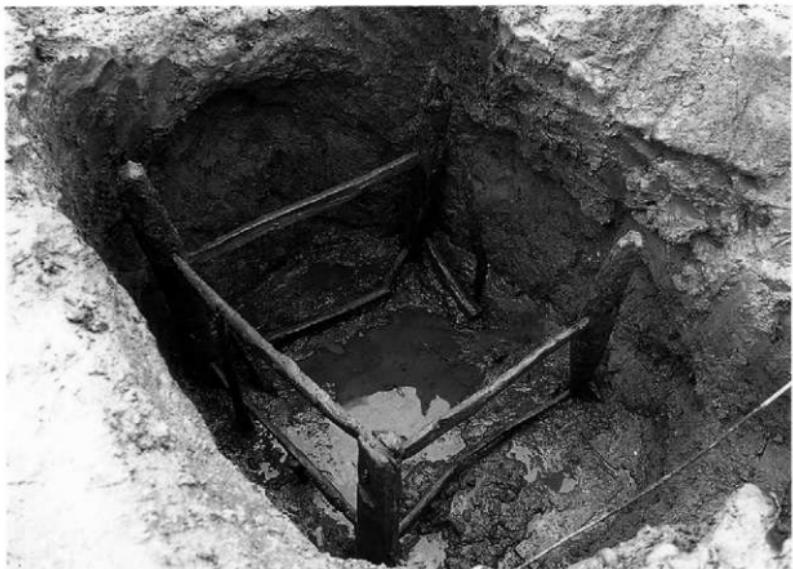
SK 1266 断面（南から）



SE 875 完掘状況



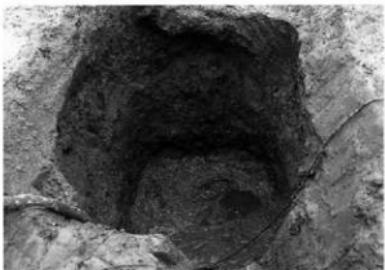
SE 1047 完掘状況



SE 1556内 木枠の検出状況（北から）



SE 1556内曲物（RW500）出土状況



SE 1556完掘状況（北から）



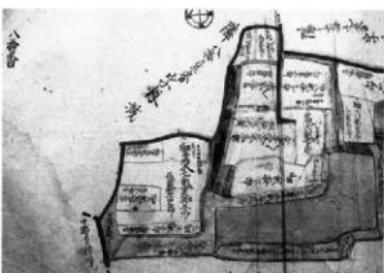
曲物（RW500）の出土状況



出土した井戸枠材



明治八年鍋田村字全國（南陽市藏）



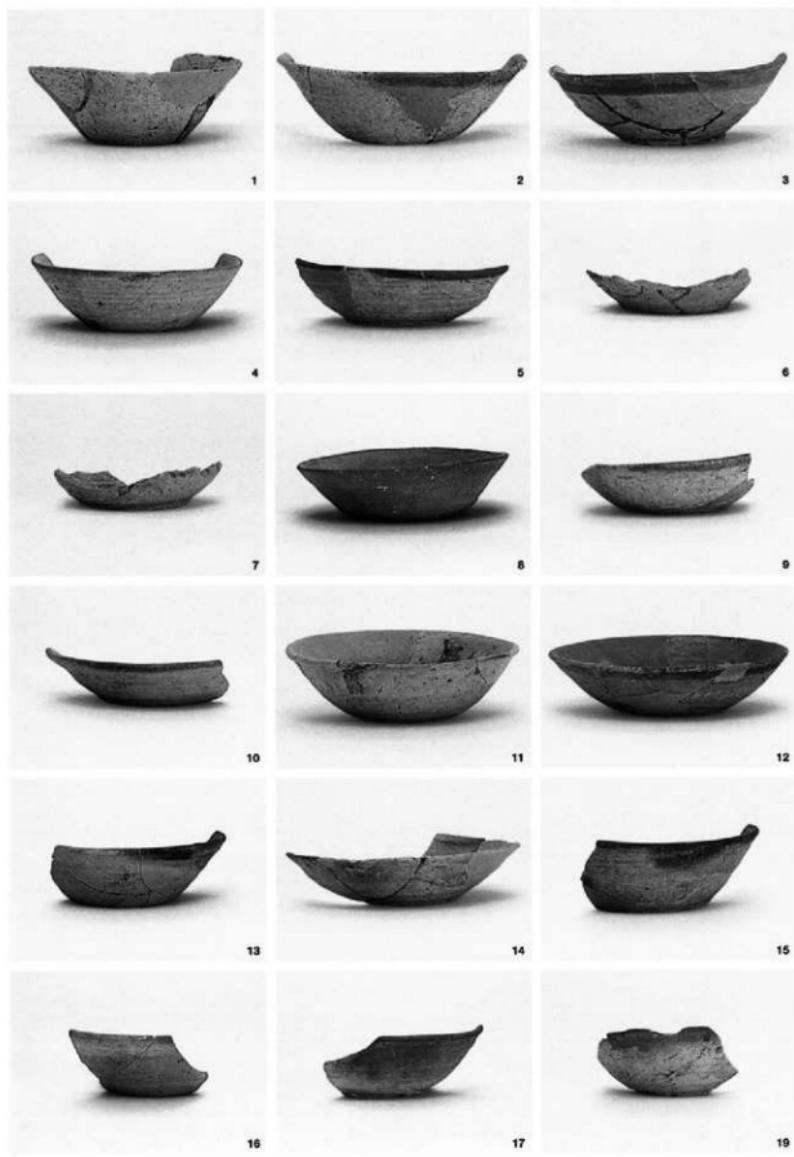
地籍図 字「鍋の木」



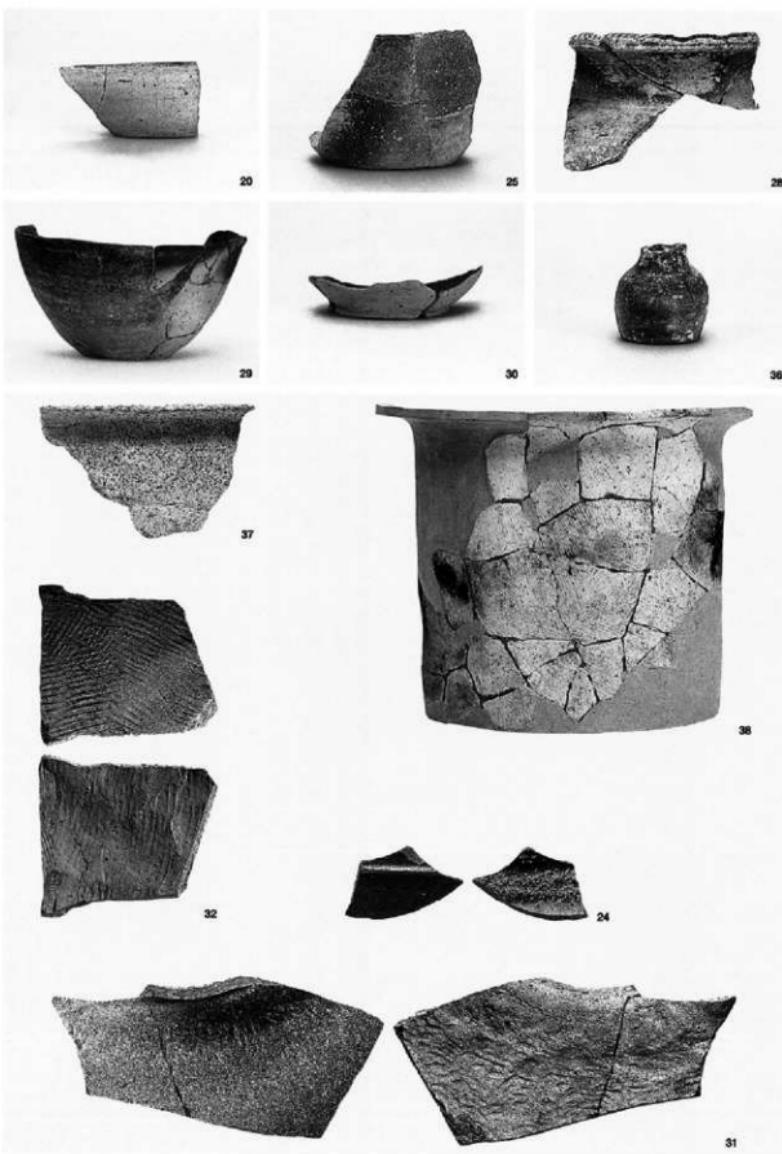
地籍図 字「内城」



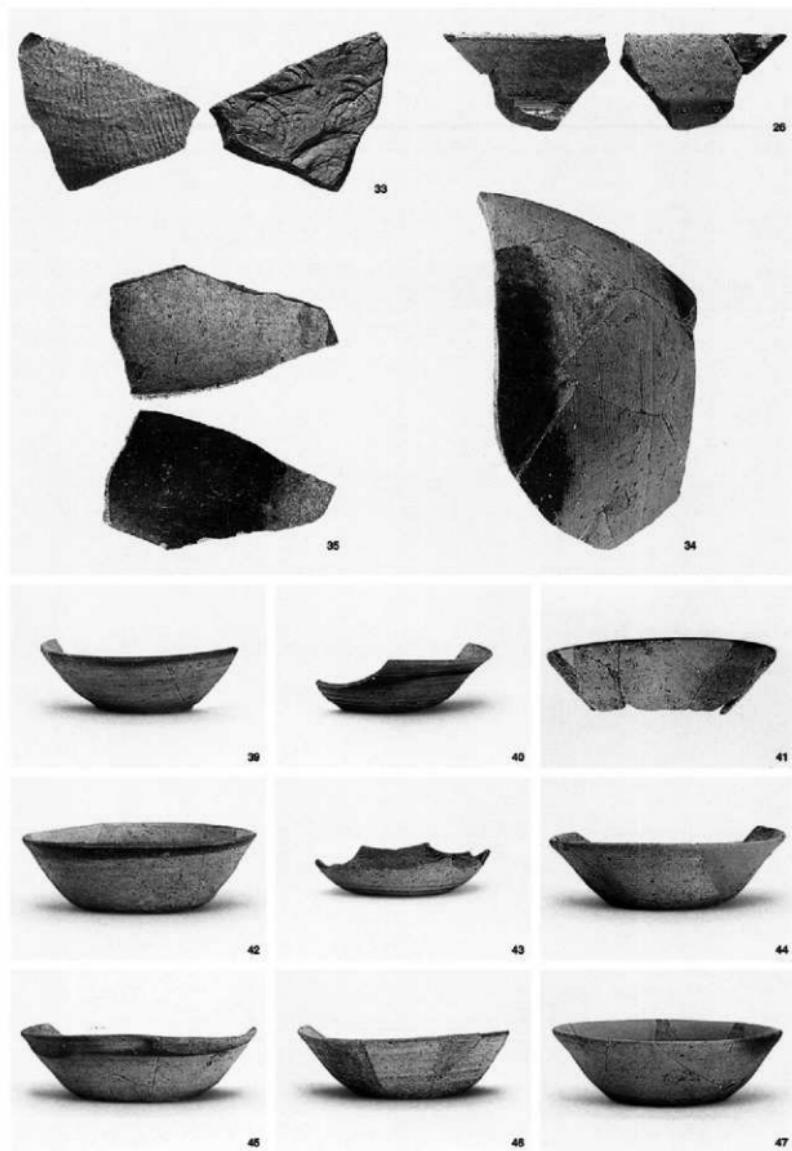
黒井塗絵図（米沢市立図書館蔵）



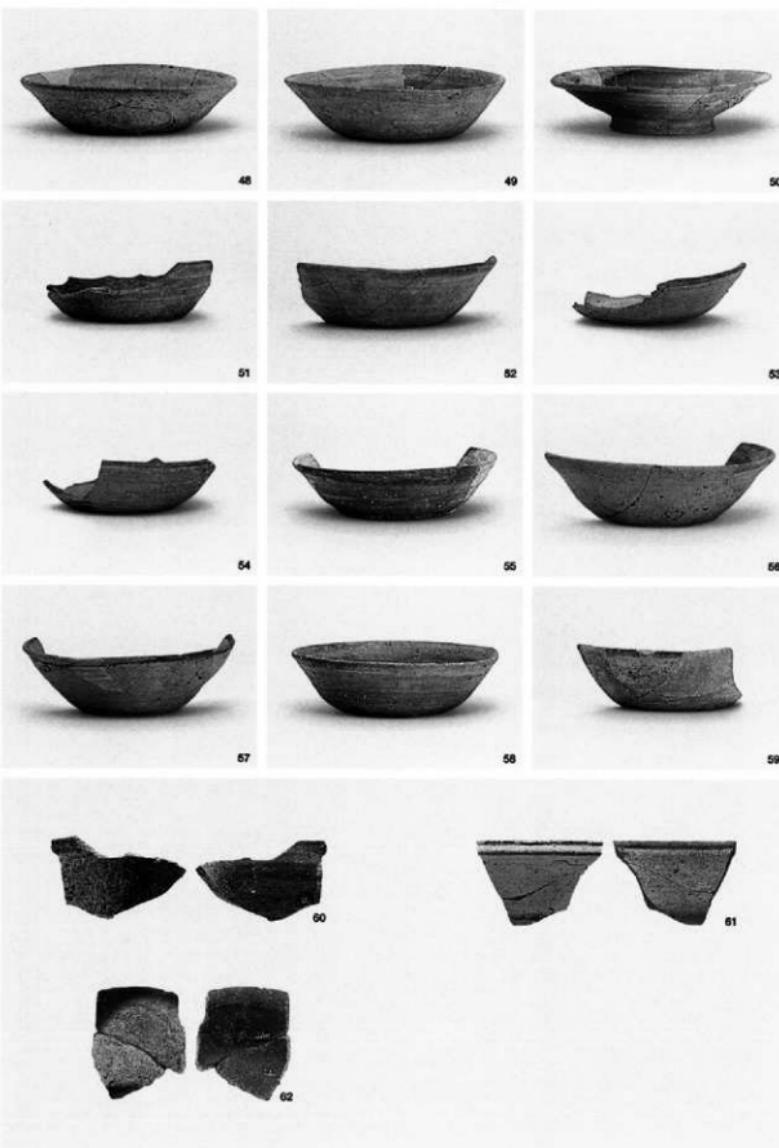
S D 168溝跡



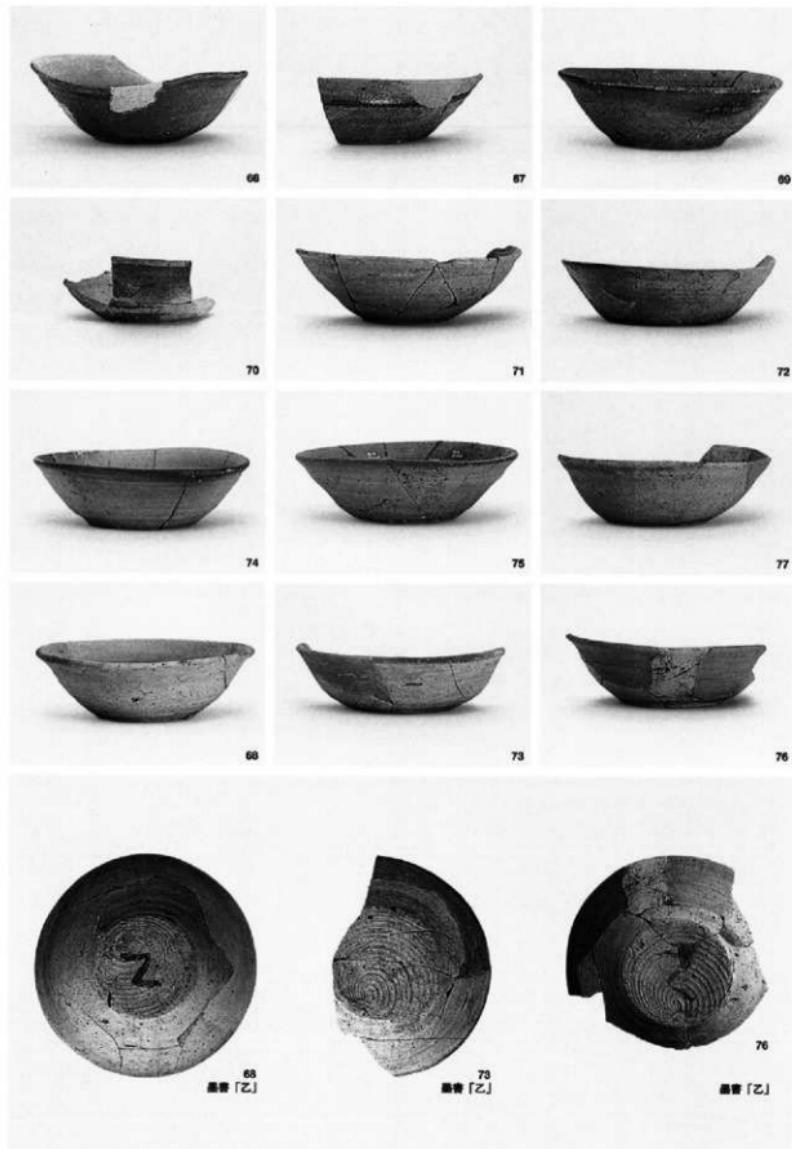
S D 166溝跡



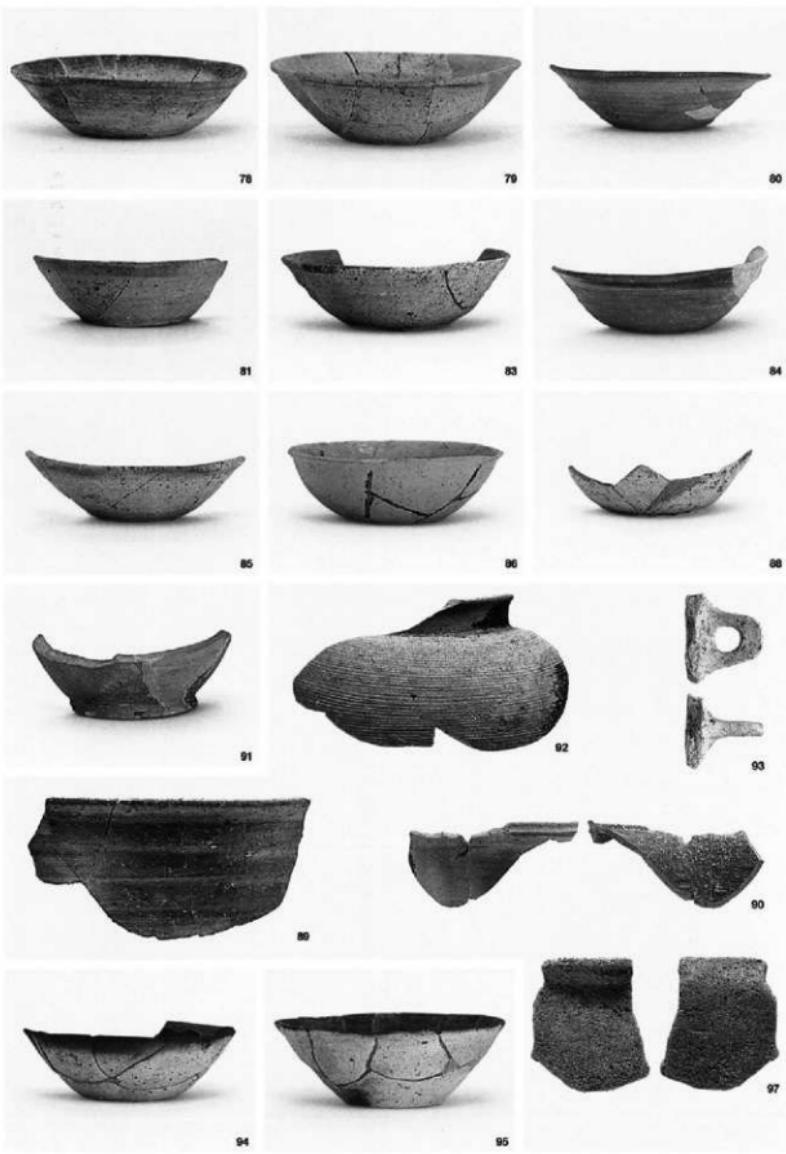
S D 168、S D 633溝跡



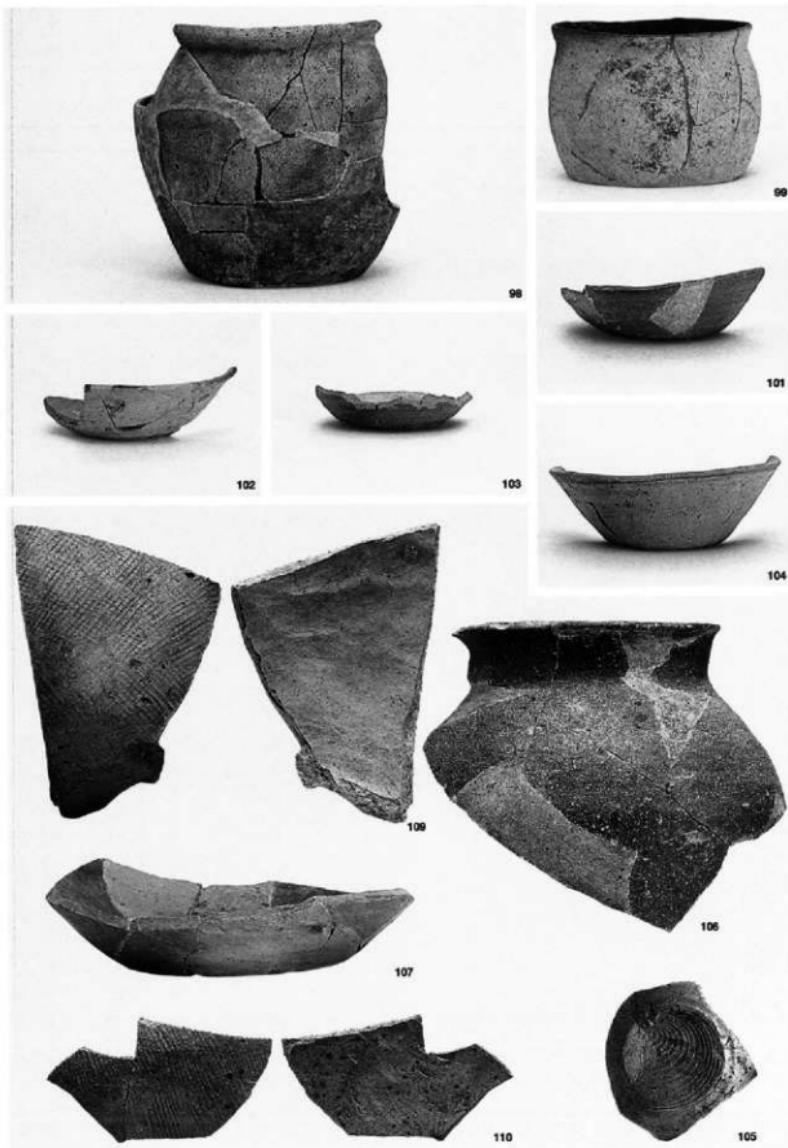
S D 633溝跡



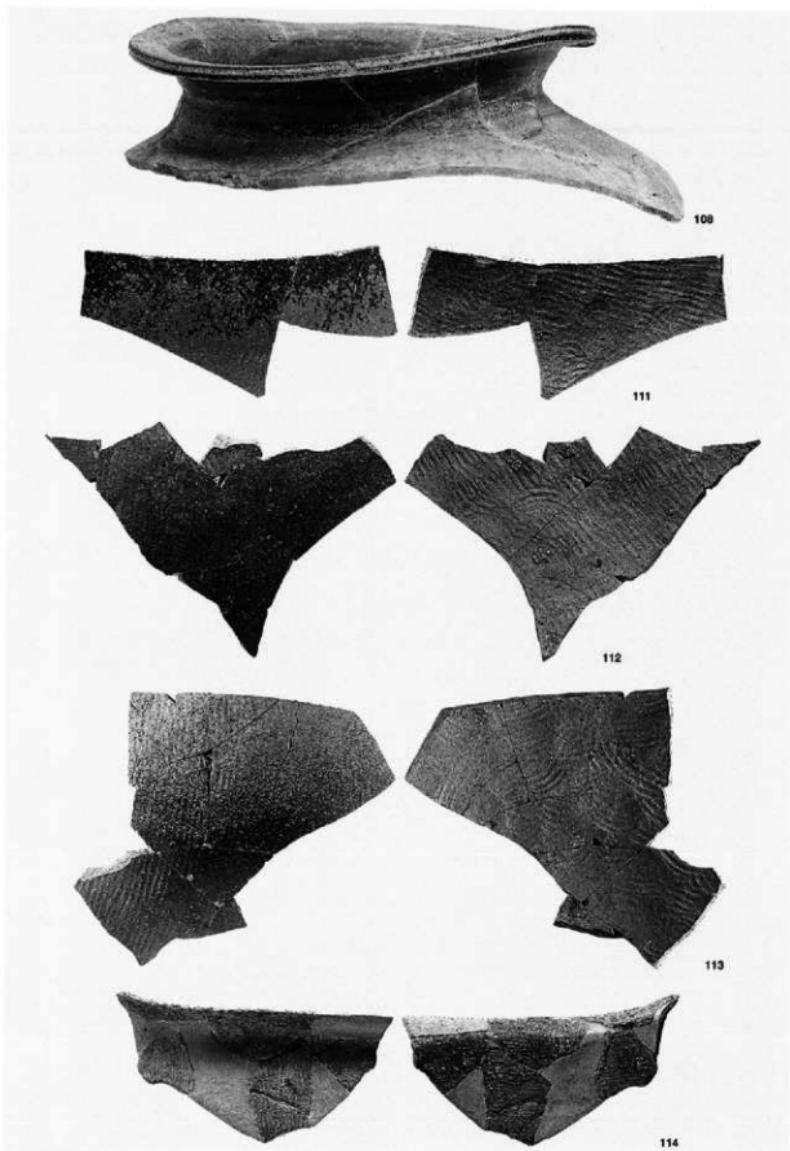
S D 1046溝跡



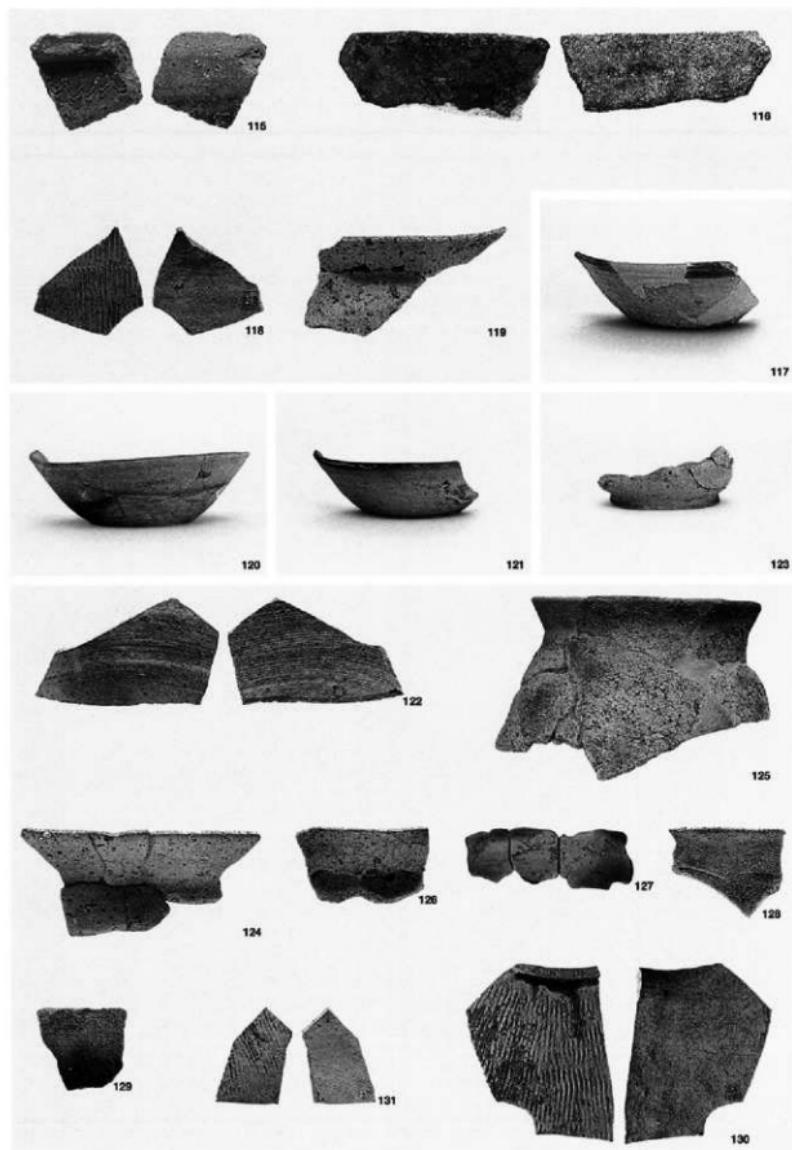
S D 1046 满跡



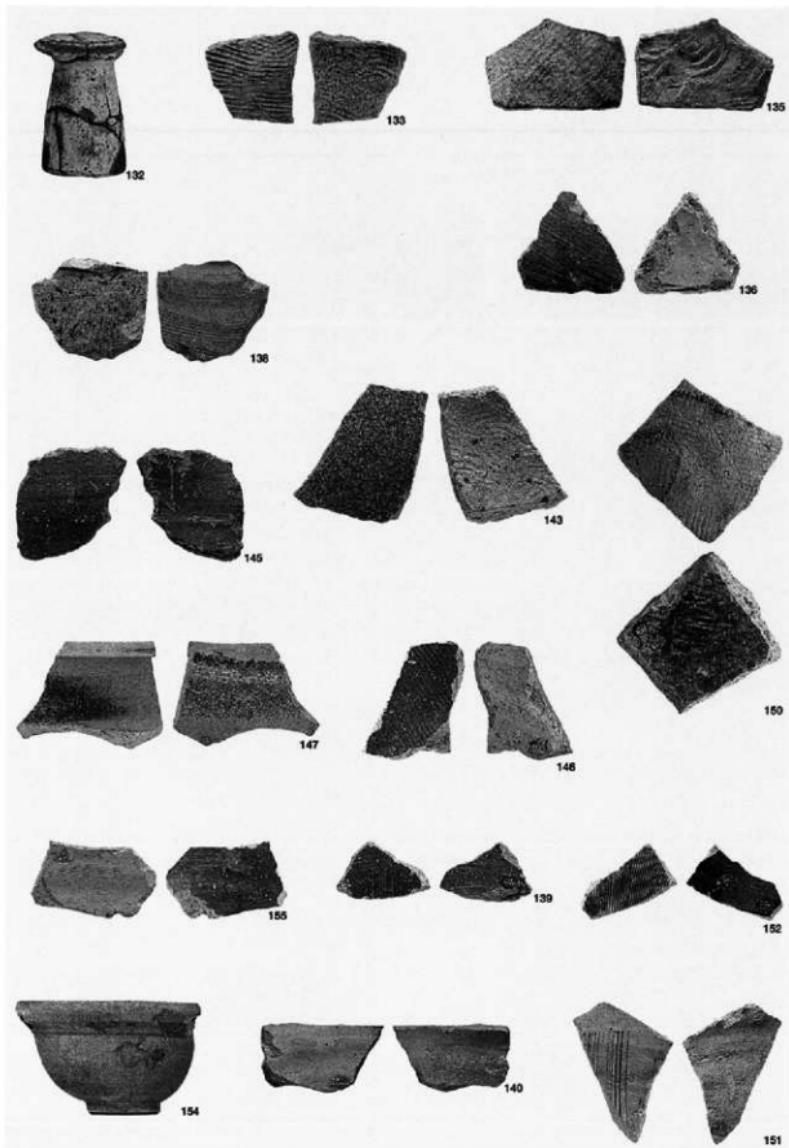
S D1046、S D1175溝跡



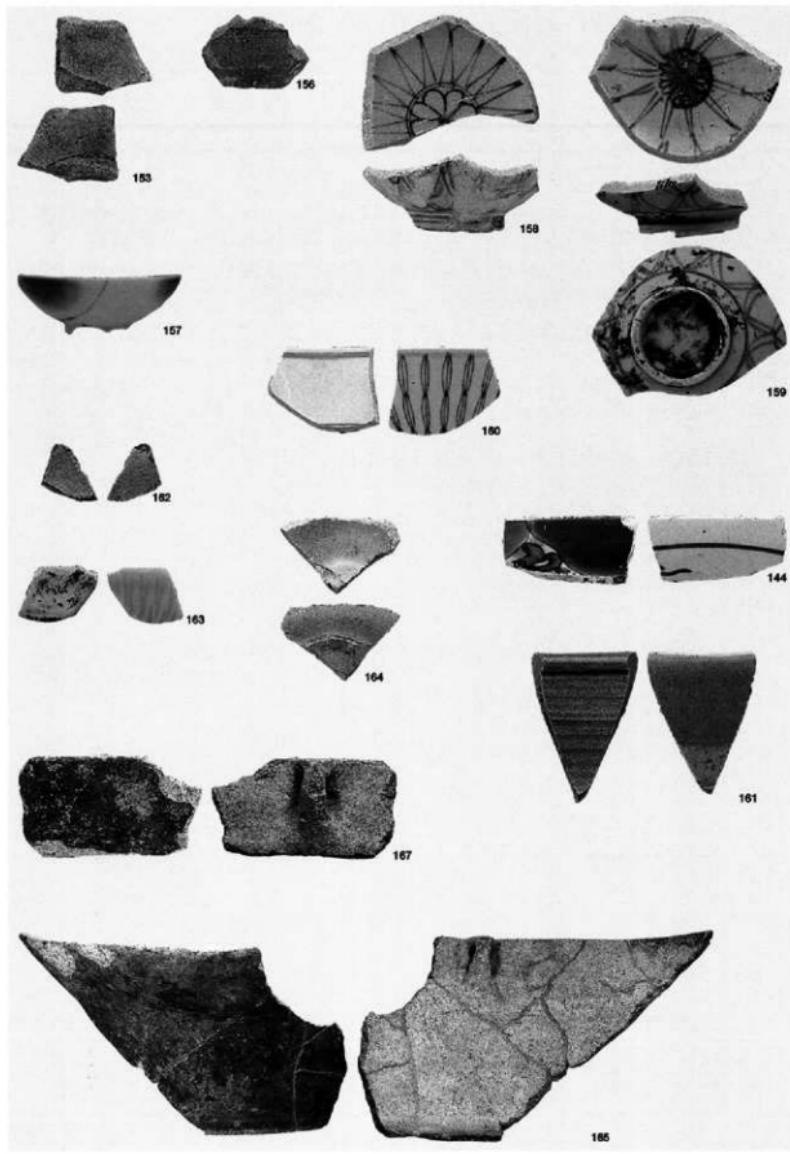
S D1175溝跡



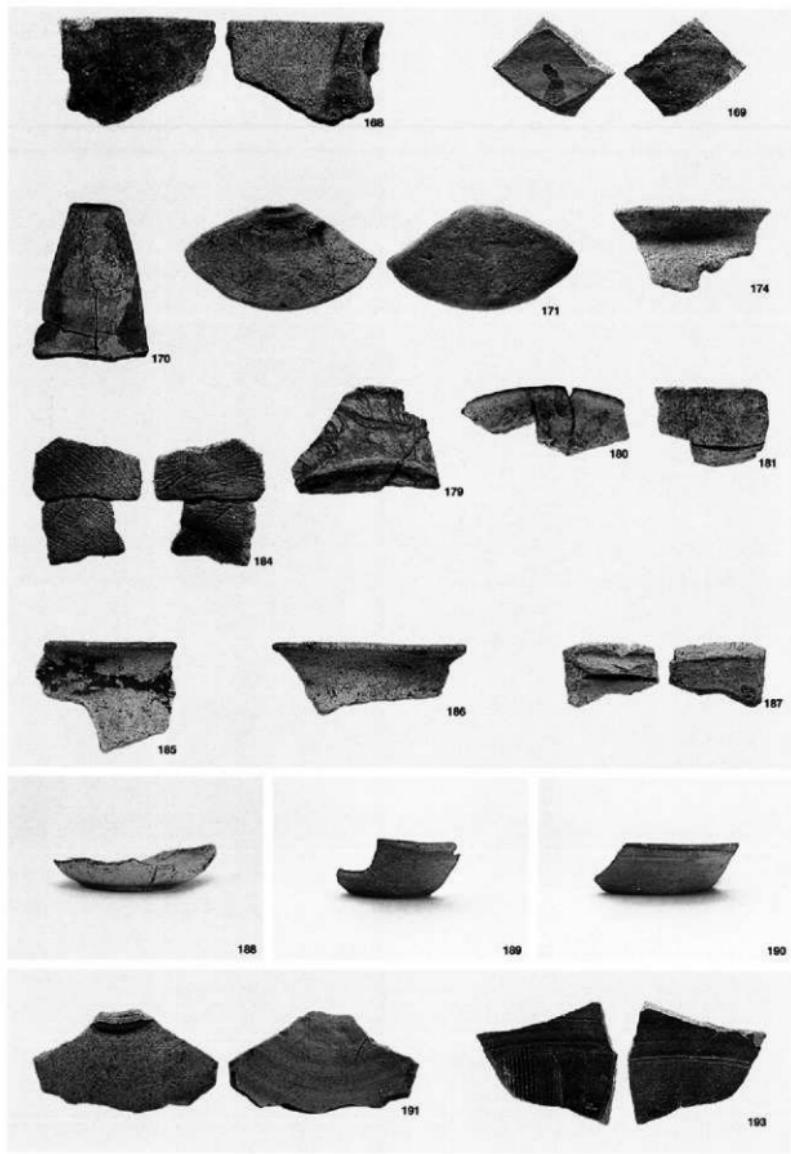
SD 82、SD 86、SD 177、SD 350、SD 353、SD 373 满路



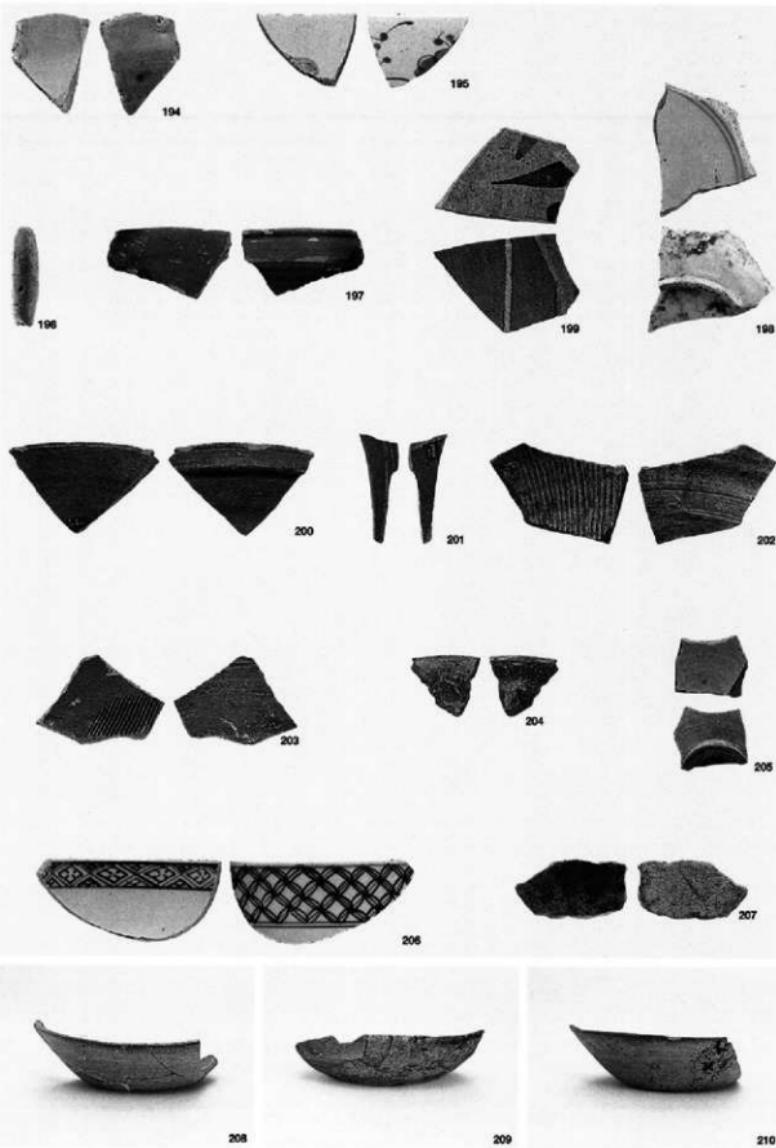
S D 535、S D 729溝跡、S D 880塗跡



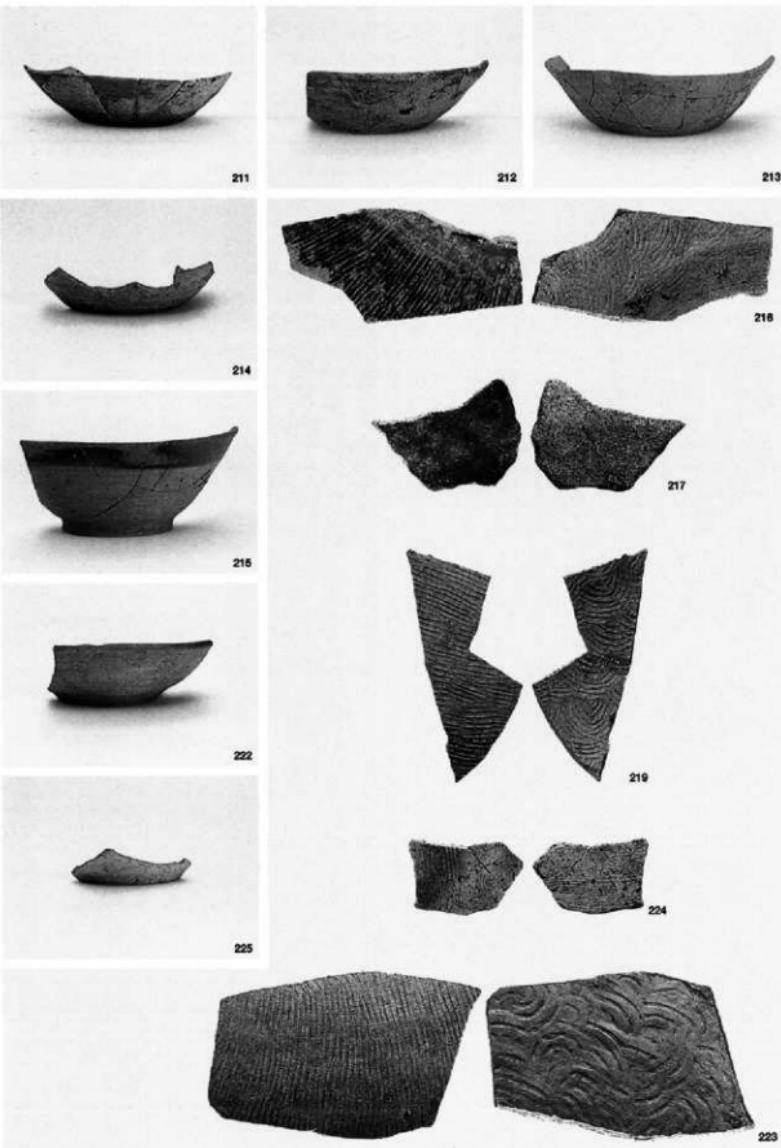
S D 880壠跡、S D 929溝跡



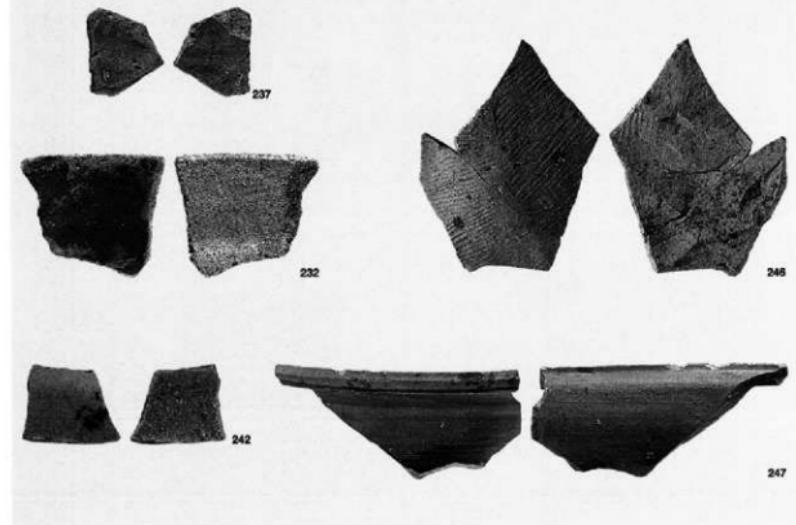
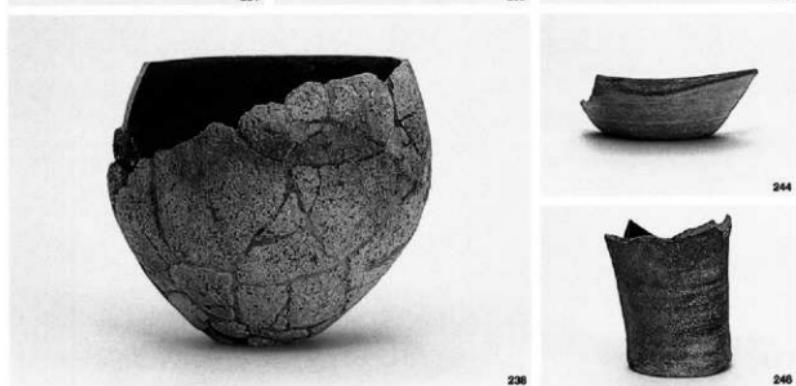
S D929、S D930、S D955、S D972、S D1033、S D1087 滅跡



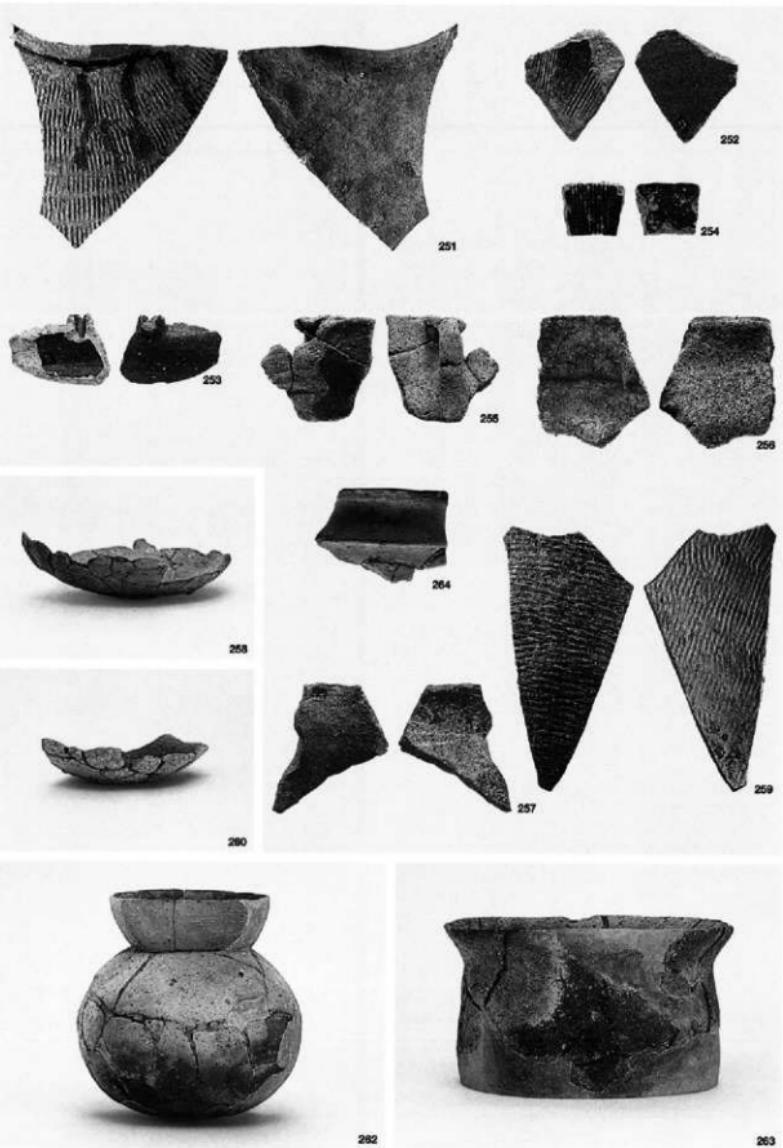
S D1087、S D1090、S D1358、S D1425、S D1559、S X956 漢他



S X958他



S E 1047、S E 1556井戸跡他



グリッド内出土



267



268



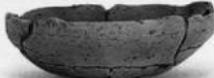
269



271



272



273



274



275



276



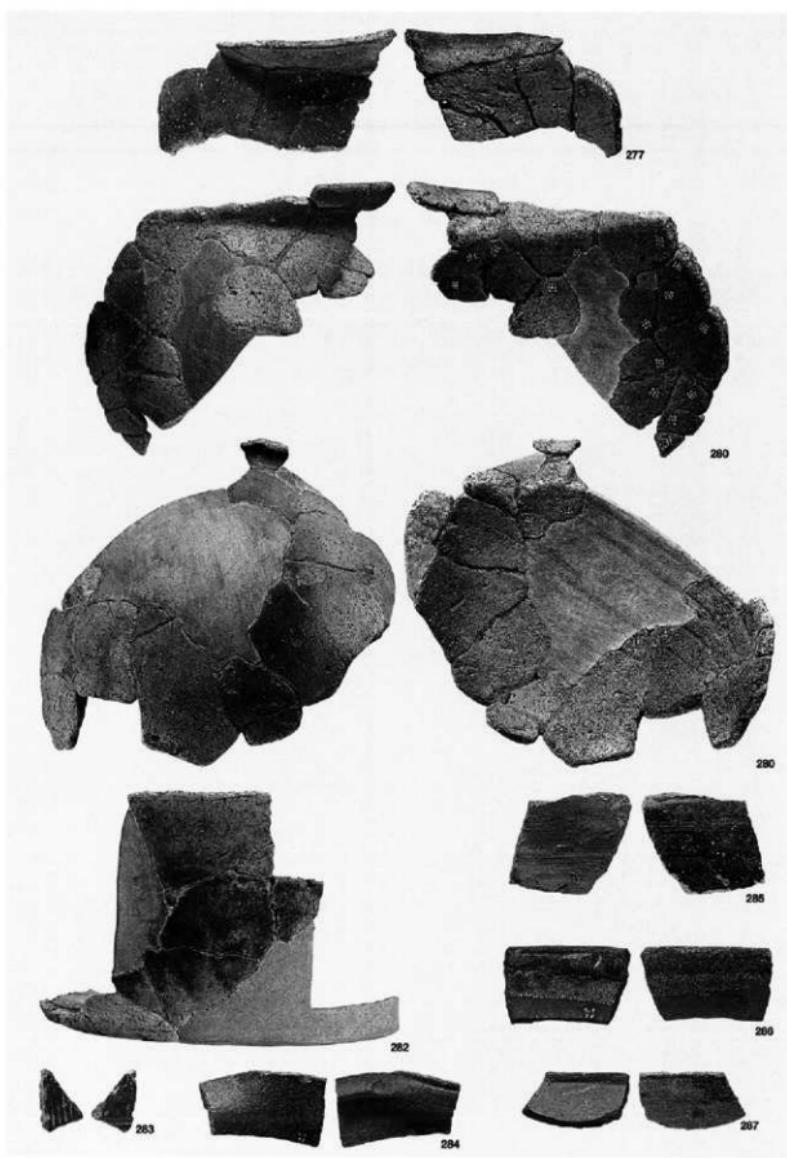
277



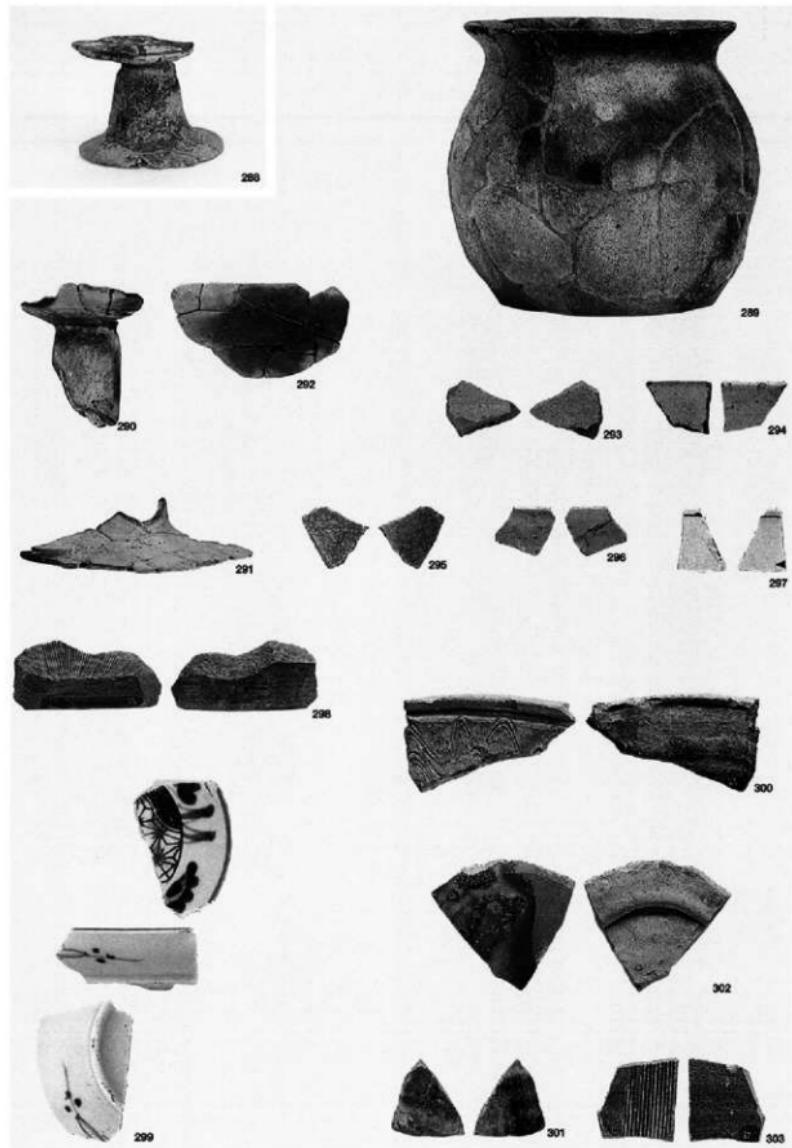
278

中央北区

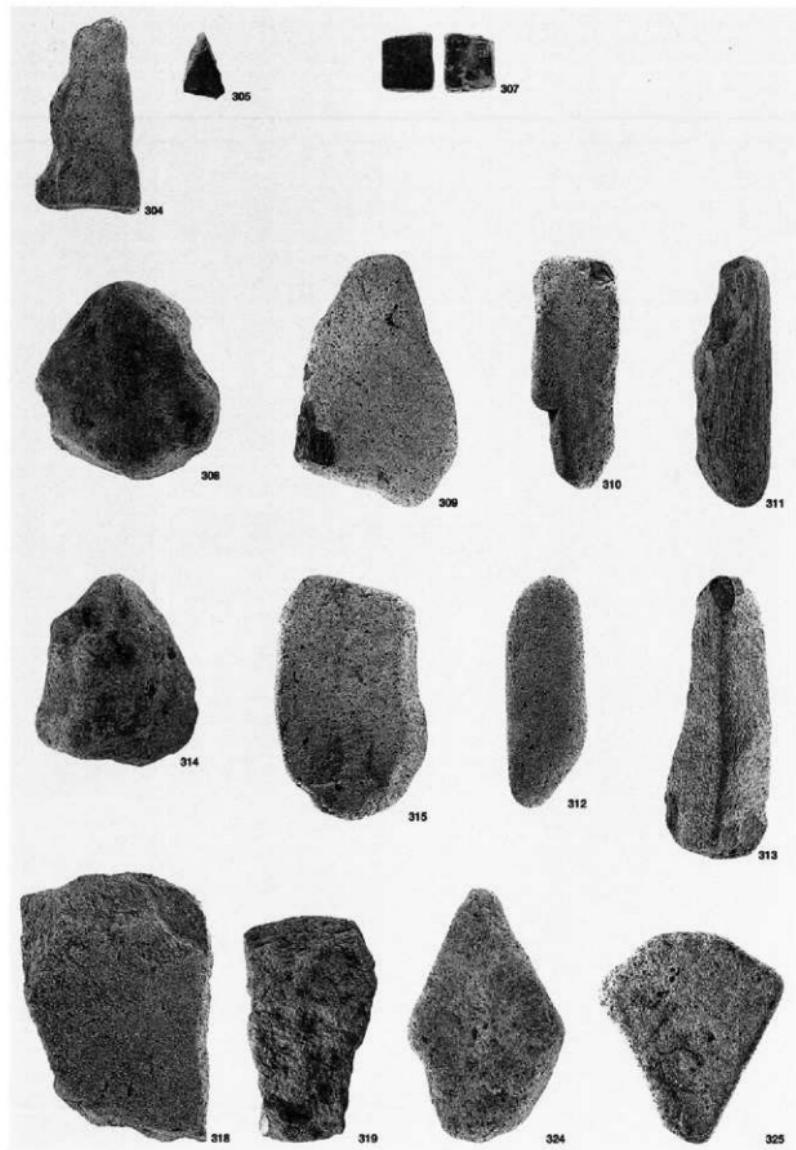
写真图版49



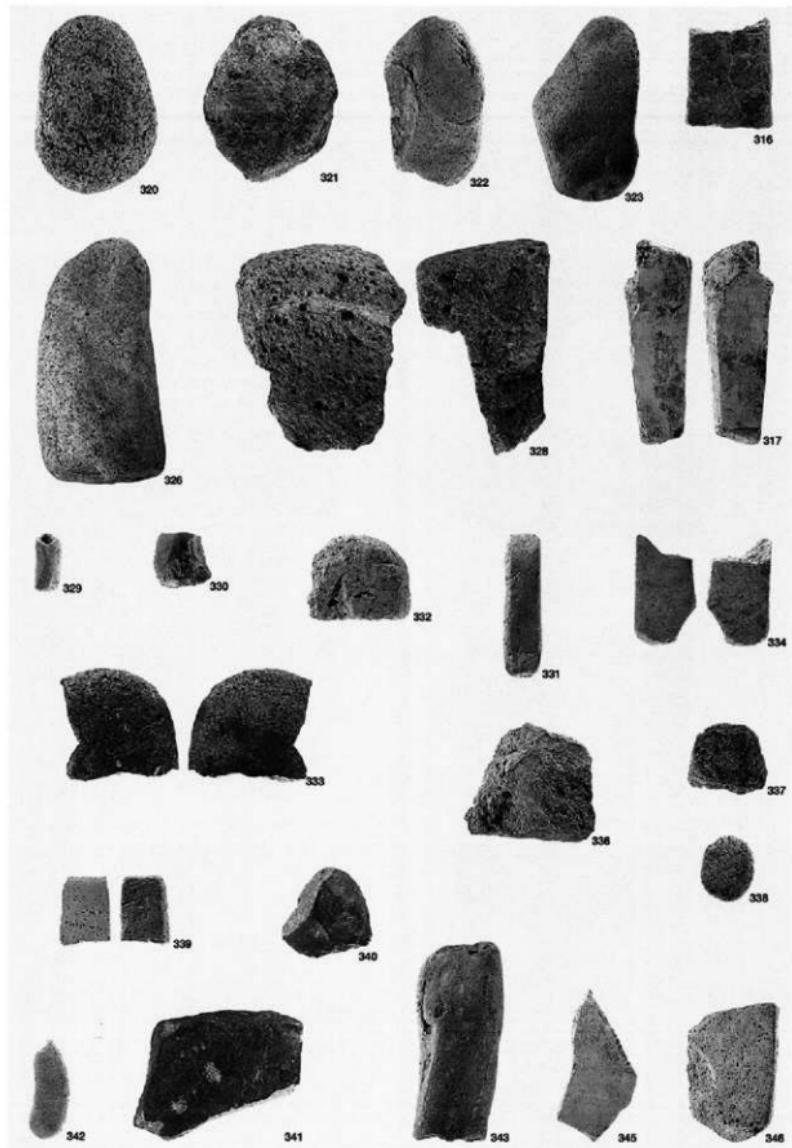
中央北区



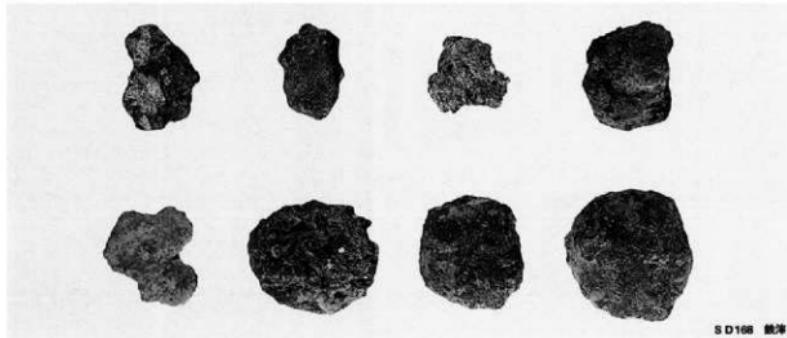
中央北区、中央南区、西区、东区



S D 168、S D 633、S D 1046溝跡出土の石製品



S D 1046、S D 1175他出土の石製品



曲物、製鉄遺物他

## 報告書抄録

ふりがな	うのきたてあとはくつちょうさほうこくしょ					
書名	鶴の木館跡発掘調査報告書					
副書名						
卷次						
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書					
シリーズ番号	第150集					
編著者名	石井浩幸 鈴木広偉					
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター					
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301					
発行年月日	2006年3月26日					

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因					
		市町村	遺跡番号										
うのきたてあとはくつちょうさほうこくしょ 鶴の木館跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 おおあがなべた 大字鶴田 あづらのあ 字鶴之木	6213	山形県中世 城館跡分布 調査報告書 213-033 (南陽市)	38度 01分 52秒	140度 09分 27秒	20040510 - 20041120	95.00 m <sup>2</sup>	一般国道 113号赤 湯バイバ ス建設工 事					
種別		主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項						
集落跡 城館跡	古墳時代	溝跡	土器			平安時代と中世～ 近世の屋敷跡であ り、館をめぐると 思われる堀が検出 された。 (総出土箱数：30)							
	平安時代	掘立柱建物跡 11 土壙 井戸跡 1 溝跡	土器 須恵器 石製品										
	中世～近世	掘立柱建物跡 13 井戸跡 5 土壙 堀跡 2 墓壙 2 溝跡	中世陶磁器 近世陶磁器 曲物 土壙										

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第150集

## 鶴の木館跡

2006年3月26日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

印刷 株式会社セビアス